若殿ばんざい 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集 37

目　次

若殿ばんざい……一
のっそりと参上……一五

若殿ばんざい

春の夢

1

松平千代三郎は、いつか一度、屋敷や家来という枷から放れて、一人で自由に街が歩いてみたい、さぞ身軽でたのしかろうと考えていた。

しかし、人間ただ考えているだけでは容易に機会はきてくれそうもない。むしろ、機会というものは自分からつかむものだと気がついたので、今日は浜町の中屋敷へ保養にきたのを幸い、断然それを実行に移してみることにした。男子たるもの、一度やろうと決心がつけば、事は案外簡単だった。

「わしは今日名吟を案じてくる。呼ぶまで、だれも茶室へ近づいてはならんぞ」

近習たちにかたく申しつけて座を立つと、

「はい。兼題は花を手折るでございますか、若殿」

いつもちゃめっけのある小林平太郎が、そう言ってにっとわらった。たぶん、腰元でもつれこんで、いたずらをするのだと考えたのだろう。

たわけめと、口まで出かかったのを、いや、そう思わせておいたほうが安心するだろうと考えたので、

「うむ、そうだ」

と、こっちもわらって答え、いまにびっくりして青くなるなよと、内心痛快だった。

庭の茶室へ入ると、すぐに紙をのべ、

「花を求めて街に出る。宵までには立ちもどるから、決して騒いではならぬ」

と、書いて文机の上へおき、裏口からふらりと外へ出た。

裏はすぐ大川端で、左へ行けば両国、右へ行けばそこに新大橋が見える。おなじ両国へ出る

にしても、新大橋をわたってあっち側を行ったほうが、追っ手につかまる心配がなかろうと考えたので、右へ歩き出した。

うららかな春の昼下がりで、大川の水は藍をたたえ、都鳥がその藍に染まらんばかり川面すれすれに飛び交い、飛び舞っている。いいながめだ。そして、一人はいいなあと思う。

——こうして一人で歩いていれば、まさか十一万石桑名の三男とはだれも気がつくまい。

まず旗本の道楽息子ぐらいのところかなと、千代三郎はのびのびとした気持ちで、颯爽と新大橋へかかる。

ここは東西に盛り場をひかえた両国橋と違って、人通りもそうきびすを接するというほどではない。

——はてな。

その橋の中程の欄干際に立って、両国橋のほうをながめている紫矢絣あざやかな腰元風の娘が二人いる。これもふらりと屋敷を抜け出してきたものか、供はだれもついていないようだ。男と違って、腰元が二人きりで屋敷を抜け出すなどということは、武家屋敷の作法にはあまりないことだ。だいいち、悪者にでもねらわれたらどうするつもりか。

——大胆な女どもだ。

千代三郎は人ごとながらちょっと心配になったので、ゆっくりそっちへ近づいていった。一言注意してやるほうがいいと考えたからである。その人の気配に、腰元たちのほうがくるりとこっちを向いた。

「あっ」

千代三郎は思わず目をみはる。すらりと背の高いほうの腰元は、十七、八にもなろうか、世にも優れた美貌の持ち主で、しかもどこか高貴の相を備えていたからだ。

「これはこれは、——美しいですな。あなたは、まるで天女のようだ」

女を冷やかすなどという悪気は毛頭ない。思

ったとおりが、自然に口に出てしまったのである。

「そなたは何者です」

天女は毅然(きぜん)として、いくぶんとがめるようにこっちをにらみかえしてきた。

「わしはこの近所に住んでいる侍です」

「旗本ですか、それとも陪臣ですか」

妙なことを聞きたがる天女である。

「どっちでもありません。浪人者です」

「正直そうですね。名はなんといいます」

「三郎といいます。ただ正直だけでなく、親切です。勇気もあります」

「その親切と勇気を見せてごらんなさい」

察するに、正直ですねとほめたのは、前の天女といわれたおかえしだったのだろう。図に乗って、親切と勇気をつけ加えたので、ちょっとからかってみたくなったらしい。

「いけませぬ、姫君さま」

もう一人の腰元が、困ったような顔をして、そっと天女のそでをひいた。

「照、姫君さまではないでしょう。鶴(つる)とお呼びなさい」

「はい。お鶴さま、もうもどりましょう。間違いがあってはなりません」

「いいえ、せっかくこうして街へ出たのですから、鶴は両国橋をわたってみます」

「それでは照が困ります。しかられます」

腰元は当惑しきっているようだ。

これはおもしろいと、千代三郎は思った。この天女もどこかの姫君育ちで、勝手に街が歩いてみたくなり、腰元一人をつれて黙って屋敷を抜け出してきたに違いない。

「お鶴さん、わしは親切で勇気があるから、両国橋を案内をいたそうか」

「なりませぬ。あなたはもうお通りください」

お照はお鶴さまより一つ二つ姉らしく、きっぱりと言ってにらみつけてきた。

「いや、お照さん、心配しなくてもいい。しか

られたら、だれにでもわしがあやまってやる。さあ、出かけよう」

若い侍と腰元二人がいつまでも橋の上で立ち話をしていては人目をひく。もうそれとなく人がたかってきそうなので、千代三郎はぶらぶらと深川のほうへ歩き出す。

「三郎は両国を存じているのですか」

お鶴さまは平気で肩をならべてくる。これもよほど変わり種にできているのだろう。

「両国なら時々出かけるから、よく知っています」

その実、家来たちの話に聞いているだけの千代三郎なのだ。

「両国にはいろいろな見せ物小屋があるそうですね」

「あります。芝居小屋、軽業小屋、ろくろっ首小屋――」

「ろくろっ首――」

「そうです。きれいな娘の首が、ひょろひょろとのびて、ぺろりと行燈の油をなめるのです」

「まあ――。絵草紙では見たことがありますけれど、本当にそのような娘がいるのですか」

「いますとも。はじめは普通の娘で、三味線をひきながら歌をうたっている。そのうちに首がひょろひょろとのび出して、歌が天井のほうへ行ってしまう。気味が悪いですぞ」

わざとおどかしてみたが、

「鶴をぜひそのろくろっ首の小屋へ案内してください。この目でその娘が見たい」

と、お鶴さまは目を輝かしている。

「よろしい。しかし、見せ物小屋は時々変わりますからな。今やっているといいが」

「三郎はそのろくろっ首を見たのですね」

「見ました」

「鶴はふしぎに思います。なにか仕掛けがあるのではありませんか」

ただの物好きではない、この天女のは、世の中のふしぎの真相をたしかめる、そういう意欲

が旺盛なのらしい。つまり、聡明なたちなのだ。これは甘く見て、うっかりしたことは言えないと、千代三郎は思った。

「偉いなあ、お鶴さまは」

「どうしてです」

「いずれお鶴さまはどこかへお嫁に行くのでしょう」

「それは女ですもの」

「そのとき下情に通じていないと、困ることがある。それで、こうして世間を見にきたというわけなのですね」

「それほどではありませんけれど、街には話に聞いただけで鶴の知らないものがたくさんありそうですから、一度見ておきたいと思ったのです」

「まずどんなものが見たいと思います」

「八百屋、お魚屋、米屋、呉服屋、いろいろあります。今日、八百屋やお魚屋は、道々見るには見てきましたが、照がとめるので、まだ買いに入ってみません。一度なにか買ってみたいと思います」

「おもしろい。天女の買い物ですな。よろしい、見せ物小屋を一通り見物したら、ひとつ買い物をしてみましょう」

千代三郎は大いに愉快になってきた。

「三郎は一人で買い物に入ったことがありますか」

「あります。わしはなんでも一人で買いつけていますからな」

「では、鶴にぜひなにか買ってみせてください」

「承知しました」

買い物ぐらいできなくてどうすると、千代三郎は思った。

道はお旅所の前へかかって、もう盛り場から笛、太鼓、三味線、鉦などのにぎやかな囃子が耳につき、次第に人通りが混雑してくるので、後にしたがうお照ははらはらしながらついていくが、千代三郎もお鶴さまも自分たちの計画に

有頂天になっていて、振りかえってもみなかった。

時々人が肩をぶつけてすれちがい、中には二人の間を割っていこうとする者さえある。はぐれては大変だから、お鶴さまはいつの間にかしっかりと千代三郎の手につかまっていた。

千代三郎は五尺八寸ほどの上背があり、白皙の美青年の上に、育ちが育ちだから、だれが見てもどこかのんびりした風丰がある。お鶴さまはまた優れた美貌の上に、人見知りをしない毅然とした鷹揚さで、二人とも一向他人の目などは気にもせず、平気で手をつないで歩くのだから、これは目立たずにはいない。

元来、両国の盛り場というのは、折助や職人、お店の不良小僧などの遊びにくるところで、あまり柄のいい場所ではない。

二人が一ツ目の橋へかかろうとすると、生酔いの折助が三人、

「よう、お軽勘平が手をつないでやがる。こいつはおもしれえ」

事あれかしと待ちかまえていたやつらだから、たちまち行く手へ立ちふさがってしまった。

「これ、無礼なことを申してはならん」

千代三郎は天女を怖がらせたくないと思ったので、そっとうしろへかばいながら、おだやかにたしなめた。

「なんだ、無礼だと。ふざけるねえ、不義はお家の御法度ときまっているんだ。どこのお軽だか勘平だか知らねえが、駆け落ち者のくせに天下の往来を真っ昼間、手をつないでいちゃついて歩いてやがる、そのほうがよっぽど無礼じゃねえか。——なあ、兄弟」

「そうだそうだ。かまわねえから、からめ取って番所へ突き出してやれ」

三人とも柄の大きい悪たれたやつらで、いまにもおもしろ半分につかみかかってきそうだ。もうあたりはいっぱいの人だかりである。

2

「お鶴さま、怖がるには及ばぬぞ」

千代三郎は振りかえって、お鶴さまにいった。にっとわらってみせて、少しも怖がってはいないお鶴さまである。そのうしろに懐剣の用意をしているお照のほうが、真っ青な顔色になっている。

「これ、下郎ども、誤解してはいかん。我々は駆け落ち者などではない。街へ買い物に出てまいったのだ。さがっておれ」

「な、なんだと、こんちくしょう、買い物だと。うそをつきやがれ。手をつないで買い物につながって歩くやつがあるか。一体、なにを買いにきたんだ、言ってみろ」

「八百屋、魚屋、米屋だ。呉服屋へも寄る」

まじめな千代三郎の返事に、気の毒なとまゆをひそめて見ていた野次馬の顔が思わずほころびる。

「やいやいやい、てめえ頭がどうかしているんじゃねえか。こいつはあきれた唐変木だ」

「もうよい。わずかな酒の勢いで、そう悪たれて歩くものではない。行きなさい」

千代三郎は少し面倒くさくなってきた。

「おんや、この野郎、御大層なことをぬかしやがる。いつおれたちがてめえなんかに酒をごちそうになったことがある。おれの銭でおれが酒をくらって、悪たれようと悪たれまいと、大きな世話じゃねえか」

「お前たちはいつもそうやって悪たれて歩いているのか」

「なにを、――悪たれて歩いたら、どうしようていうんだ」

「諸人が迷惑をする、懲らしめてやるぞ」

頭からそうのんびりと出られると、無法者どもは人前があるからかっとなって、

「野郎、ぬかしやがったな」

いきなり一人が千代三郎の胸倉を取るなり、

「これでも食らいやがれ」
と、右手のこぶしを振りあげてきた。
あいにく千代三郎は怪力の持ち主で、大名に力は無用と日ごろあまり家来たちにも力業は見せないようにしているが、一度橋の上から泉水に落ちた近習をとっさにえりを引っつかんで片手で軽々と引きあげたことがある。その千代三郎が、
「酒くさい」
と、顔をそむけながら、右手で胸倉の手首を、左手でこぶしの手首をはっしと受けて、思わずその手に力が入ると、
「わっ、いてて」
折助は悲鳴をあげて、たわいもなくのけぞり、全身の力がぬけてしまった。そこを、とんと軽く突っ放してやると、よろよろっと二間ばかりうしろざまによろめきながら、どすんとしりもちをついたきり、立つ元気もなく青い顔をしかめている。
「あっ」
連れの二人はぎょっとしたようだが、それでも一人のほうが騎虎の勢いで、
「くそっ、くたばれ」
銅輪のはまった腰の木刀を抜いて、だっと打ちかかってきた。
「たわけめ」
ひらりと体をかわして空へ流れた利き腕をとっさに取る。
「わあっ。た、助けてくれ」
そいつは木刀をからりと落として、へなへなと両ひざをつきながら悲鳴をあげた。
見ていた野次馬どもは、一瞬あっけに取られて鳴りをしずめ、残る一人の折助は木刀をだらりと手に下げたまま、そこへ立ちすくんでいる。
「これ、お前はどうする」
「う、へっ」
そいつは青くなって、みえもなく土下座をしてしまった。

「お鶴さま、まいろう」
千代三郎はわらいながら、お鶴さまの手を取って橋をわたり出す。お照がほっとしたように後を追った。
「三郎、そなたは強いのですね」
お鶴さまはまだ興奮からさめないように、美しいほおを上気させながら、心なしか声までうっとりと甘くなっている。
「いや、別に強いんじゃありません。ただ、お鶴さまに間違いがあっては大変だと思って、つい力が出てしまっただけです」
「鶴は、そなたといっしょなら、もう安心です」
「さあ、ろくろっ首の見せ物をさがしますかな」
もうそこは東両国の盛り場で、小屋の前こそのぼりや幕、花かざりで飾っているが、裏へまわればつぎはぎだらけの薄汚い大小の見せ物小屋が軒をならべ、木戸番の塩辛声も高らかに、笛太鼓の囃子は耳をろうするばかり、どこからこんなに人が集まってくるのかとあきれるばかり人を集めて、すさまじい雑踏ぶりである。おまけにひどいほこりだ。
「三郎、ひどいほこりですね。鶴は人ごみがいやになりました。もっと静かな街へ行って、買い物のほうにしましょう」
お鶴さまはいささか人に酔ってきたらしい。
「よろしい。しからば、買い物にいたそう」
が、千代三郎にも八百屋や魚屋がどっちの方角にあるのか、まったく見当がつかない。ただ人波に流されながら、あいかわらずお鶴さまの手をひきながら、九十六間の両国橋をわたった。西両国はここも東両国に劣らぬ雑踏ぶりである。ながめただけでうんざりして、見ると大川端にずらりとならぶ水茶屋のほうの道はいくらか人通りが薄い。千代三郎はそっちの道へ曲がった。
「いらっしゃいまし。お休みなすってくださいまし」
ここは、軒並みに赤い前垂れ、赤だすき、お

しろいの濃い茶くみ女が客をひいている。
「三郎、ここはなにを商う店です」
「そうですなあ。聞いてみましょう」
わからないことは聞くにかぎると、千代三郎はお鶴さまの手を取ったまま、茶くみ女の前へ立った。
「これ、ここはなにを商う店か」
どこか常人とは違う若侍が、世にもすばらしい高雅な腰元と堂々と手を取りあって、いきなり妙なことを聞くので、茶くみ女は目を丸くしながら、
「はい、ここは水茶屋でございます」
と、あっけにとられた顔だ。
「すると、水を商うのか」
「ほ、ほ、桜湯も、お茶も、お酒も商います。どうぞお入りになってお休みくださいまし」
「三郎、のどがかわきました。休んでいきましょう」
お鶴さまは大乗り気で、先に立って千代三郎の手を引っぱり、さっさとよしず張りの中へ入っていく。近所にいた茶くみ女たちが顔を見合わせてわらっているが、そんなことは一向気にもとめない両人である。
よしず張りの中は、土間に床几が二つほど並び、大川端のほうへ桟敷を作って、衝立てをおき、緋毛氈が敷いてある。
無邪気なお鶴さまは、さっさと桟敷へあがって、川端の手すりのそばへ自分で座布団を二つ並べて、
「三郎、ここへおいでなさい。いいながめですよ」
と、川のほうを向いて座る。なるほど、そこは左手に両国橋をのぞみ、目の下は満々と春の潮をたたえた大川で、猪牙、屋根船、さては帆掛け船がのんびりと行き交い、対岸は両国の家々が絵のようにながめられる。まったくすばらしいながめだ。
「なるほど、これは絶景ですな」

千代三郎も思わず目をみはってしまった。
いや、それよりもひそかに目をみはったのは茶くみ女である。まるで肩が触れあわんばかりに若い男と女が向こうむきに並んで座って、六尺ばかり離れたところに、お供の腰元がきちんと三つ指をつき、二人の背中を拝むように伏し目になって控えている。おかしいといえばおかしいが、その二人並んだ仲のいいかっこうが、少しもいやらしい感じでなく、とても普通の若い男女にはまねのできないことだ。
「何様でございます」
茶くみ女は桜湯を三つ盆にのせて運んできて、そっとお照に聞いた。
「はい、お鶴さまと申し上げます」
「殿方のほうが御家来なのでございますか」
三郎、三郎と呼びすてにしているから、そう取ったらしい。
「いいえ、御家来ではないのでございますけれど――」
「まだ御夫婦ではございませんね。いいなずけかしら。おうらやましい仲――」
茶くみ女は本当にうらやましそうである。
「あの、見ぬふりをしていてくださいませ」
お照は自分の顔が赤くなってくる。
「かしこまりました」
茶くみ女は衝立てのかげへさがっていったが、気になるとみえて、そこからそっとのぞいているようである。
お照は、桜湯がまいりましたと声をかけようとして、それができず、はっとあわてて目を伏せてしまった。
「三郎――」
お鶴さまが甘い声で呼んで、大胆にも、つと三郎のひざへ白々とした片手をおいたからである。
「なんです、お鶴さま」
千代三郎はやさしくそのお鶴さまの手の上へ自分の手を重ねてやる。

「鶴は、鶴は三郎のような強い男が好き」
「わしはお鶴さまのように美しくて勇気があるひとが大好きだ」
「本当ですか、三郎」
お鶴さまは体をねじ向けるようにして、空いた手をまた千代三郎の手へ重ねた。
「本当です。三郎は正直だから、うそはいいません」
「三郎は、正直で、親切で、勇士です。さっき三郎が自分で言ったとおりでした。ですから、鶴は三郎が大好きになりました」
「お鶴さまは天女のように美しい。なにがあっても驚かない。勇気があるからだ。自分で買い物がしてみたいと考える。賢いからだ。美しくて、勇気があって、賢い。だから、わしはお鶴さまが大好きだ」
「鶴は、胸が苦しいほど、うれしくなりました」
お鶴さまは真ん中になった千代三郎の手を両手で握って、熱くほてっている自分のほおへ持っていき、うっとりとほおずりしている。
衝立てのかげで、茶くみ女がほっとため息をついていた。
お照は三つ指をついたまま、顔をあげることができない。切ないほど、自分まで胸がどきどきしている。
「三郎、こんどは、いつ会えるのです」
「そうですな。明日また、あの橋の上で会いましょう」
「でも、明日は、鶴、出てこられますかしら」
「わしは明後日でもいい」
「三郎が、明日の夕方、屋敷へまいってくれるといいのですけれど」
「忍んでですか」
「ええ」
お鶴さまは三郎の手を、こんどははずむような胸乳の上へしっかりと押しあてている。胸乳は乙女の命だ。その命を三郎にやってもいいという気持ちになってきたにちがいない。

「それはいけません」
千代三郎がやさしく微笑しながら言った。
「勇士は他人の屋敷へ忍びこむものではない。だいいち、お鶴さまの家来たちが迷惑する。勇気があったら、お鶴さまが自分で、明日の夕方、あの橋の上まで出てくるんです」
「ごめんなさい、三郎。鶴はうっかり恥ずかしいことを口にしました。きっと、明日の夕方、鶴は勇気を出して、あの橋の上へまいります」
「偉いなあ、お鶴さまは」
こんどは千代三郎が片手でお鶴さまのふくよかな肩をしっかりと抱き寄せた。
お鶴さまはうれしそうに、三郎の肩へほおをたくして、うっとりと目をつむる。
「さあ、お鶴さま、明日のことより買い物のほうが先だった。八百屋、魚屋、米屋が待っている」
「そうでしたね。早く買い物がしたい。でも、もう少しこうしていましょう」
「眠くなったんですか」
「いいえ、鶴は、鶴は美しい夢を見ているようで、胸が切なくて――」
とろんと蜜のような甘い声音である。衝立てのかげで、また茶くみ女がほっとため息をついた。盆の上の桜湯は、もうとっくに冷めている。
しかし、春の日はまだ長い。川面の藍の上を、つがいの都鳥がもつれあいながら、滑るように飛んでいる。

小判一両

1

「三郎、もうお買い物にしましょうか」
いつまでこうして座っていてもきりがない。いや、だんだん酔ったように胸が切なくはずんでくるばかりなので、お鶴さまは桜色に上気したほおを、思いきって千代三郎の肩から放した。

それと察して、千代三郎もお鶴さまの肩へまわしていた左手を解いて、
「そうですな。八百屋、魚屋、呉服屋、買い物はたくさんある。そろそろ街へ出かけますかな」
と、にっこりしてみせる。
お鶴さまは黙ってうなずきながら、そうだ、三郎の右手を鶴は今まで自分の胸乳の上へ押さえつけていた。それで、あんなに息苦しかったのだ、と気がついて、なんとなく恥ずかしくなる。
「ああ、これはうっかりしてしまった」
千代三郎が思い出したようにいう。
「どうかしましたか、三郎」
「わしは買い物をするつもりではなかったから、紙入れを持ってこなかった。ここへ茶代というものを置いていかなくてはならんのだが」
「そのことなら、少しも気づかいありません。紙入れは鶴が用意してきました。茶代はなにほどおけばよいのですか」
お鶴さまはもう帯の間から赤い錦の紙入れを出してみせる。
「聞いてみましょう」
千代三郎は手をたたいて茶くみ女を呼び、
「これ、ここの茶代はなにほどつかわせばよいのかな」
と、聞いてみた。
「いいえ、おぼしめしでよろしいのです」
「おぼしめしな」
そのおぼしめしの見当が、千代三郎にはつかない。
「三郎、これに小判が入れてあります。足りませんか」
お鶴さまは紙入れを三郎の手にわたす。
千代三郎があけてみると、なるほど、小判がたった一枚入っていた。
「お鶴さま、これをここへおいていくと、買い物ができなくなるな」
「お買い物は、また明日でもかまいませぬ」

「しかし、せっかく買い物にきたのに、それではあまり本意ない」
まじめに相談しているのを見て、茶くみ女はわらいながら、
「お武家さま、こんなところの茶代などはたかの知れたもの、またおついでの時でよろしいんです。どうぞお嬢さまにお買い物をさせてあげてくださいまし」
と、親切に言ってくれる。
「すまんなあ。では、後できっととどけさせるぞ」
千代三郎はほっとして、紙入れをお鶴さまにかえし、
「ここはわしが後で始末をつけますから、さあ、出かけましょう」
と立ち上がった。
お鶴さまは鷹揚にうなずいて千代三郎の後につづいたが、腰元のお照はさすがに紙入れを持たなかった自分の不用意を恥じて、
「申し訳ないことをいたしました」
と、茶くみ女に手をついてわびていた。
「どういたしまして。お気をつけておいでなさいまし」
茶くみの女は愛想よく、一同を店の前まで送って出る。
表はまだ春の日が高い。往来はあいかわらずにぎやかだ。
——さて、いよいよ買い物だが、小判一枚きりで、そんなに買い物ができるかな。
千代三郎は少し不安になってきた。それにしても、どうして小判をたった一枚しか持っていないのだろうと不思議でもある。
「三郎、手をひいてください」
お鶴さまがまた大胆にも手を求めてきた。
「お鶴さまはあの小判を、だれから手に入れたのです」
千代三郎はそれとなく聞いてみる。
「あれは、もっと鶴が小さい時、乳母に、お金

というものはどんなものですと聞いたことがありました。乳母は、あなたさまには用のないものですが、これが小判というものですと、一枚おもちゃにくれました。今日はお買い物をするのだと思って、それを持ってきたのです」

「なるほど――」

千代三郎もまた金というものを自分でつかったことがないので、お鶴さまの話はよくわかるような気がした。

道は元柳橋へかかって、左手に大川がひらけてきた。右へ曲がれば薬研堀で、そっちへ行かなくては買い物をするところはない。

が、お鶴さまはもうにぎやかな街より、人目のすくない道のほうがよくなったらしく、黙って元柳橋をわたる。正面は松平丹波守の下屋敷で、ここからは新大橋まで大名屋敷がつづき、やがて千代三郎の中屋敷の裏手へ出ることになるのだ。

ここまでくると、ほとんど人通りはまばらになる。

「三郎、鶴はどうしてこんなに三郎が好きになってしまったのでしょう」

お鶴さまはまた、夢を見ているような甘い声音になっている。

「そうですな。きっと、三郎がお鶴さまを好きになったから、お鶴さまもわしが好きになったんでしょう」

千代三郎は正直に答えた。

「鶴はもう三郎と別れたくない」

「いや、別れてもまた明日、橋の上で会えます」

「どうしても今日は別れなくてはいけないのですか」

「会者定離は人の世の姿です。悲しくても我慢するのが、勇気のある賢い人間です。人は道を誤ると、もっと悲しいところへ自分をおくようになるものです」

「三郎は我慢できますか、鶴に別れて」

「別れていても、好きには変わりはないのだか

ら、我慢します」
「鶴にも我慢できますかしら」
お鶴さまはしっかりと千代三郎の手を握りながら考えている。
松平の下屋敷の南角まできて、そこからいそぎ足に出てきた立派な老武士が、
「あっ」
と、こっちを見て棒立ちになった。その後からついてきた若侍が四、五人、これもはっと息をのんで立ち止まる。
「まあ、じい――」
お鶴さまもびっくりしたようだ。
「姫君、これはなんということです」
一度は安心といった武士の顔が、たちまちきびしくなる。
「外記、しかってはいけません」
その外記は、じろりと千代三郎のほうをにらんで、
「その方はだれか。姫君の手を放しなさい。無礼な」
と、一本きめつけてくる。
「わしは三郎という者だが、手を放さないのはお鶴さまのほうです」
千代三郎はのんびりとやりかえす。
「じい、もう手は放しました。これでいいでしょう」
少し顔は赤らめたが、すなおで、みじんも悪びれたところのないお鶴さまである。
「照、その方がおつきしていながら、このありさまはなんとしたことか。なんでかような無謀なまねをおさせ申すのか」
「申し訳ございません」
お照は真っ青になっている。
「御老人、しばらくお待ち願いたい」
「なにっ」
「お照さんをしかってはいけません。街へ出て買い物がしてみたいと言い出したのはお鶴さまのほうだ。お鶴さまが自分で買い物をしてみた

いと思うのは、そういう身分の姫君として無理もない望みです。そう同情したから、わしは二人をまもって、間違いのないようにここまで供をしてきたので、悪いといえば、お鶴さまも、お照さんも、そして、こんなすきを与えたあなたがたも、みんな悪いことになる。今日のところは、どうかだれもしからずに、また一人のけが人も出さんように、穏便にお鶴さまをお引き取り願いたいが、どうであろうか」

千代三郎は誠をつくして、この場を穏便におさめようとする。

外記もとっさの興奮がややおさまると、常人とはどこか違う千代三郎の鷹揚さになにか感ずるところがあったのだろう。

「いや、老人まさに一本取られましたかな。よろしい。御意見どおり、しからば今日のところは、だれもしからぬことにして、引き取りましょう」

「さっそくの承引で、かたじけない」

「三郎さんといわれたな。後日ごあいさつにまかり出たい。お屋敷はどちらかな」

「それは御無用に願いたい。こっちも言わず、そっちも聞かず、今日はこのまま別れましょう」

のんびりとわらってみせる千代三郎だ。

「承知いたした。それもお説どおりいたそう。今日はお鶴さまがお世話にあいなり、まことにかたじけのうござった。——さ、お鶴さまもごあいさつをなさい」

「はい」

うっとりと千代三郎の取りなしに見とれていたお鶴さまは、

「三郎、それでは今日はこれで別れます。そなたの教えてくれたことは、きっと忘れません」

と、深沈たるまなざしにおもいをこめる。

「お鶴さまもごきげんよう」

「ああ、三郎は紙入れを忘れて困るでしょう。これをあげます」

お鶴さまはさっきの紙入れを帯の間から出し

て千代三郎の手にわたした。
「ありがとう。遠慮なくもらっておきます」
「三郎さま、御恩は一生忘れませぬ」
お照は一言いって、目にいっぱい涙をためていた。

2

まもなく、お鶴さまは外記たちにまもられて、新大橋のほうへ立ち去っていった。
おなじ道だから、すぐに歩いては後を追うようで具合いが悪い。千代三郎はしばらく川端に立って、大川をながめていた。
——すばらしい天女だったなあ。
お鶴さまの面差しが、まぶたに焼きついていて離れない。いや、右の手にはっきりと、天女のはずむような胸乳の感触さえ残っている。千代三郎が自分からふれたのではない。天女が自分でそこへ持っていって押さえつけていたのだ。おそらく、無邪気な天女は、たとえ衣類の上からにもせよ、男に乳房をふれさせるのは、男に身も心も許した行為になるのだとは知らなかったのだろう。知っていれば、いかに大胆な天女でも、そんな不謹慎なまねは恥ずかしくてできなかったろう。
——いや、なんにも知らずに乳房をさわらせたということは、天があの天女をわしの妻にしようときめているからだろう。
千代三郎は実にたのしくなってくる。
「また、明日会えるかな」
これはどうも難しそうだ。天女は女だから、一度こんなまねをすれば、きっと警戒が厳重になる。へたをすれば座敷牢へ入れられないともかぎらない。
「屋敷の名を聞いておけばよかったなあ」
ふっと後悔に似たものを感じて、これはいかんと思った。人の屋敷へ無断で忍びこむなどということは、武士のすることではないからである。

「まあよい。どうせわしの妻になるときまっている天女だ。きっと、また近いうちに会えるだろう」

いや、もし天女にすばらしい勇気と知恵があれば、明日もまたうまく屋敷をぬけ出して、約束どおり新大橋の上へ会いにこないともかぎらないのだ。

「これはおもしろい」

千代三郎の胸へそんなたのしい希望の夢が大きくふくらんできた。

「あっ、若さまだ。——千代三郎さま」

ばたばたと走り寄る数人の足音に、振りかえってみると、小林平太郎を先頭にした近習たちである。

「ああ、その方たちか」

「若さま、どうなされたのでございます」

みんな青くなって、食いつきそうな顔つきだ。

「どうもせぬ。川をながめていた。一同、なにをそうあわてているのだ」

「困りますなあ。お茶室とばかり存じておりましたのに、お一人で黙ってこんなことをあそばしては、我々どもの責任になります」

「心配するな。たまにはよかろう」

「それがよろしくございません。こんなことが重役がたの耳にでも入りますと、我々は軽くて閉門、重ければ切腹ものです」

「おおげさなことを申すな。とにかくもどろう」

千代三郎はわらいながら、さっさと一同の先に立って歩き出した。そして、男の自分がちょっと黙って屋敷をぬけ出してさえこの騒ぎなのだから、まして間違いのありがちな姫君をあずかっているあっち側の家来たちがあんなに青くなっていたのも無理はないと、いまさらながらいささか同情してやりたい気にもなる。

「若さま、街へ出て、御意にかなった名花がお見当たりになりましたか」

もう安心したとみえて、平太郎がそんな冗談を持ちかけてくる。

「うむ、わしはすばらしい天女を見つけたぞ」
「天女と申しますと、やはりあの羽衣をきている天女でございますか」
口から出まかせをといいたげな平太郎だ。
「その天女だ。名はお鶴さまといってな、天から街へ買い物にきたんだそうだ」
千代三郎はお鶴さまの名を口にしただけで、急に胸が甘ったるくなってくる。
「おとろきましたなあ。天女が街へなにを買い物にきたんでしょうなあ」
「八百屋、魚屋、呉服屋だ」
「それはまた、おそろしく所帯じみた天女でございますなあ」
「三郎はお買い物をしたことがありますかと聞くから、わしは毎日買い物をしていると答えた。天女は大よろこびで、ぜひ案内をしてくれという」
平太郎はもう返事をしない。春先だから頭がおかしくなったのではないかとでも、心配になってきたのだろう、真剣な顔をして、こっちの顔色をうかがっている。
「ところが、おもしろい。その天女は、紙入れの中に、小判をたった一枚しか持っておらんのだ」
かまわず話をつづけながら、千代三郎はふっと思い出した。
「平太、お前、両国の水茶屋というのを存じているか」
「はあ、あの桜湯をのませる水茶屋なら、存じております」
「そうか。わしはその天女と水茶屋でひと休みしたのだが、小判一枚ではどうにもならん、茶代を借りてきた。お前ちょっと行って払ってきてくれ。たしか、橋詰めから五軒目の店だ」
「本当でございますか、若さま」
「本当かうそか、行ってみればわかる。すぐまいってくれ。ただし、こっちの名はいうなよ」
「承知いたしました」

半信半疑の平太郎は、同輩の五十嵐富太郎をわきへ呼んで、なにかささやいてから、いそいで両国橋のほうへ走り出す。

「若さま――」

富太郎がすっと肩をならべてきた。

これもひどく真剣な顔をしている。

「富、平太はわしがあらぬことを口走るようだと耳打ちをしたのか」

「はい、どうも気になると申しまして――」

この男は平太郎と違って、律儀な性格だから、胸にあることはかくせない。

「心配いたすな。わしは正気だ。別に狂ってはおらん」

「はあ、さようでございましょうが、とかく狂人は正気だと言いはりたがるものだそうでございますから」

「捨ておけ。その方にそんな顔をされると、わしは自分でもわからなくなってくる」

千代三郎は苦笑して、口をつぐんでしまった。

こういう問題は、言い訳をすればするほど狂人あつかいにされるおそれがあるからだ。

出た時とおなじように、中屋敷の裏木戸から庭へ入ると、

「わしは茶を一服立てる」

と、千代三郎はそのままさっきの茶室へ入った。水茶屋では桜湯をのみそこなっているから、のどがかわききっているのだ。

――そうだ、天女も今ごろは茶をのんでいるかもしれんな。

自分で茶を立てながら、なんとなくほほえましくなってくる。

「若さま――」

「なんだ」

「今おわらいになりましたな」

ただ一人お相手に残った、というより、見張りにひかえている富太郎が、じっと顔色を見ている。

「わらってはいかんか」

「そういうわけではございませんが、一人でおわらいになる、思い出しわらいでございますな」
「そういうことになるかな」
「失礼ながら、なにを思い出されたのでございますか」
　これはかなわぬと、千代三郎は思った。しかし、うっかり怒ると、富太郎が余計心配するだろう。
「富、そうわしの胸の中をのぞきたがるな」
「はあ」
「わしの胸の中には、いますばらしい天女が甘えにきているのだ」
　口に出してしまってから、しまったと思った。はたして、
「その天女と申しますのは、どこの天女でございます」
と、富太郎の顔に憂色がみなぎってくる。
「困った男だな」
　千代三郎は苦笑して、
「富、お前は恋をしたことがあるか」
と、ふいに意表を突く。
「不義はお家の御法度でございます」
「不義ではない、恋だ。お前も男だから、これは好きだと思う女はあるだろう」
「さようなけがらわしい――」
「虚勢を張るな。男と生まれて、好きだと思う女が一人や二人ないことはあるまい。正直に申してみろ」
「正直に申せば、それはございます」
　うそのつけない男だから、富太郎の顔が困ったように赤くなる。
「それみろ。それは家中の娘か」
「お聞き流しを願います」
「遠慮するな。先方も富が好きだと申しているのか」
「いいえ、まだ先方にはなにも話してございません」
「そうか。それはいかんな。本当にその娘が好

きなら、わしが口をきいて、妻に申しうけてつかわそうか」
「さあ、先方がなんと申しますか、もうしばらくお捨ておき願います」
「ことわられるのがつらいからか」
「はあ。がっかりしたくはございません」
富太郎はまったく正直だった。
「富、それが恋というものだ。こっちが好きなら、向こうにも好きになってもらいたいと思う。きらわれるのはつらいが、好きだと言われればうれしい。わしもな、今日はじめて好きな天女にめぐり会った」
「それは、どちらの姫君さまでございますか」
「それはわからん。聞いてこなかった。しかし、その天女はわしの手を取って、自分の胸へ持っていき、鶴は三郎が大好きですと申した。いまその顔を思い出したから、わしは茶を立てながらわらったのだ。わかったかな」
千代三郎もまた正直な若殿である。
「しかし、それはどこの姫君でございましょうなあ」
話があまりうまくできすぎているので、富太郎にはまだ信じきれないらしい。そこへ平太郎が庭先から駆けこんできた。
「若君、ただいまもどりました」
なんとなく興奮した顔をかくしきれない。
「御苦労であった。わしが正気であることがわかったかな」
「恐れ入りました」
「茶代は小判一枚で間にあったか」
「はい、茶くみ女が、さすがは若さま育ちと感心しておりました」
くすりと平太郎がわらい出す。
「わしはそんなことは名乗ってこぬぞ」
千代三郎はけげんな顔をする。
「お名乗りにならなくても、相手は客慣れた稼業の女でございますからな、一目見ればわかってしまいます」

「そんなものかな」
「茶代に小判などは、あまりにも桁が違いすぎる。それに、小判一枚を持って、八百屋、魚屋へ行ってどんな買い物をするつもりかと、茶くみ女はたいそう心配しておりました」
「うむ、あれは親切そうな女であった」
「それで、若さまは天女をつれて、本当に買い物をなすったのでございますか」
「いや、買い物はしなかった。そちたちがわしを迎えにきたところまでまいると、ちょうど天女のほうでも家来たちが迎えにきてな、天女をしかってつれていってしまった」
「はてな――」
平太郎が思わず富太郎と顔を見あわせる。
「そういえば、平太、我々がさっき裏木戸から飛び出した時、腰元二人を中にして道をいそぐどこかの家中の一団があったな」
「それなんだ。水茶屋で聞いてみると、若殿はその一人のほうの腰元と手をつないで入ってきた、桜湯をさしあげたが、口にしようともなされず、お二人で肩をならべて、見るもうらやましいほど仲よくお語らいの御様子だったということだ。――若さまは天女の肩をお抱きになっていたそうでございますな」
平太郎が少しおどけた顔をする。
「いや、天女がわしの手をつかんで放さなかったのだ」
千代三郎はわらっている。
「すると、その天女も黙ってどこかの屋敷をぬけ出してきた姫君なのだな」
富太郎が考えるようにしていう。
「どうも、そういうことになりそうなのだ。今ごろはたぶん、あの家老にひどくしかられているんじゃないかと思う。姫君としては、少し大胆すぎるからな」
「いや、その心配はあるまい。決してしかってはならんと、わしから家老によく申し聞かせておいた」

けろりとして答える千代三郎だ。
「それで、若さま、これは一体どういうことになるのでございますな」
「そうだな。いずれ天女はわしのところへ輿入れするようになるだろう。三郎は好きですと、何度も言っていたからな」
「先方のお屋敷を聞いておかれたのでございますか」
「それは、さっきも申したとおり、わざと控えておいた。無論、こっちもただの三郎で別れてきている。それでいいのだ。大名の家柄というものをしょって生まれてきている者は、いくらたがいに好きになりあっても、道だけは踏まなくてはならぬ。まさか大道で夫婦約束もできまい。——しかし、今日はおもしろかった」
千代三郎はうっとりと春の庭へ目を遊ばせながら、明日もおもしろい日がくるだろうかと、またしても天女の美しい面影をまぶたに思いうかべている。

はだか弁天

1

翌日の夕方、千代三郎はまたしてもぶらりと裏木戸から中屋敷をぬけ出していた。
近習たちがどう用心していても、こっちにその上を行く知恵と勇気があるのだから、なんともしようがない。
その中屋敷の別殿に、千代三郎の生母清泉院さまが隠居している。
先君の正室で、当主越中守、次兄、末弟千代三郎の三人兄弟の母君だが、末っ子だから千代三郎がいちばんお気に入りで、朝は必ずこっちからあいさつに出ることにしている。
そのかわり、おやつにはきっと母君から菓子がとどくことになっているのだ。
今朝も別殿へあいさつに出ると、

「三郎どのは昨日、お一人で屋敷をぬけ出されたそうですね」
と、もうだれからか耳に入ったらしく、美しいまゆをひそめていた。
清泉院さまは美人だから、年よりもずっと若く見える。千代三郎は面立ちも気性もこの母君にそっくりだった。
「おどろきましたねえ。もうそんなことがお方さまのお耳に入ったのですか」
「近習たちにあまり心配をかけてはいけません」
「いや、そんなことをおおげさに心配する者のほうが少しおかしいのです。三郎はもう男一人前ですからな。一人で町へ出ても迷子にはなりません」
「それはそうでしょうけれど、人には不慮の災いということがあります」
そんなことを言ったら限りがない。
畳の上でころんでも、けがをする時はけがをするんだと思ったが、ここで母君にたてをつくことはないと気がついたので、
「お方さまは一人で街へ出られたことがございますか」
と、千代三郎は聞いてみた。
「ほ、ほ。あたくしは女ですから――」
この子はなにを言い出すのだろうといいたげに、母君はわらっている。
「ところが、その女の姫君が街へ一人で買い物にでてきたのです。もっとも、腰元は一人つれていましたが、勇気のあるお姫さまです」
「まあ、それはどこのお姫さまです」
清泉院さまはびっくりしたようだ。
そばにいた腰元たちも、みんな目を丸くしている。そして、みんなその話が聞きたそうな顔だ。
千代三郎はいささか得意だった。いや、この話で母君を少しでもなぐさめることができれば、子として楽しいと思ったのである。

「どこの姫君か、屋敷はわざと聞きませんでしたが、昨日新大橋の上に立っていたのです。それが天女のように美しい姫君なので、悪者にいじめられでもしてはかわいそうだと思い、そこでなにをしているのですと、わしは聞いてみました。お姫さまは恐れ気もなく、ぜひ一度自分でお米や魚を買ってみたいと思い立って出てきたが、様子がわからない。三郎、案内してくださいと、わしを家来あつかいにするのです」

「ずいぶん思いきったことをする姫君ですね」

「はあ。名前はお鶴さまだと言っていました。しかし、勇気はあっても、お姫さまはやっぱりお姫さまですな。米を買って、魚を買って、八百屋でも買い物をしたいというのに、紙入れの中にはたった小判一枚しか持っていないのです。それだけで、そんなにたくさん買い物ができるものだと思っているのだから、無邪気なものです」

そういう千代三郎のほうが、その点ではよっぽど認識不足なので、世間なれた腰元の中から、くすりとわらい声がもれた。実は、一両あれば米が一石も買えるのである。

が、母君の清泉院さまも姫君育ちだから、物の値段などにはうとい。

「それで、三郎どのは、そのお鶴さまといっしょにお買い物をして歩いたのですか」

と、ただあきれている。

「お買い物の前に、三郎、のどがかわきました、とお鶴さまがいうので、両国の水茶屋というのへ入って休みました。お方さまは御存じないでしょうが、桜湯などをのませる掛け茶屋なのです」

「三郎どのは、いつそのような下世話のことをおぼえたのです」

「いや、本当は三郎も下世話のことはあまりわかりません。しかし、わからないといっては天女が不安がるだろうと思ったので、なんでもわかるふりをしたのです」

千代三郎は正直である。

「まあ、それで失敗はしませんでしたか」

母君は母君らしい心配をする。

「ところが、大失敗をしました」

「困りましたね。どのような失敗です」

「お鶴さまは桜湯ものまず、大川の景色をよろこんでいましたが、三郎は勇気があるから大好きですと、わしをほめてくれました。わしも、お鶴さまは天女のように美しいから大好きですとおかえしをいうと、鶴はもう三郎とわかれたくありませんと、はっきりいうのです。思ったことはなんでもいう、なかなか勇気のある天女です。しかも、わしが、会者定離は人の世の姿です、悲しくても我慢するのが勇気のある賢い人間です、人は道を誤るともっと悲しいところへ自分をおくようになるものだと教えてやると、では鶴も我慢しますと、すなおに言っていました。なかなか聰明(そうめい)です」

「それは、どこの姫君なのでしょうねえ」

うっとりと母君がいう。そんなに美しくて賢い姫君なら、ぜひわが子の嫁にと考えたに違いない。それが母心というものだ。

腰元たちはなんとなくため息をついている。

「それまではよかったのですが、さて水茶屋を引きあげることになって、三郎は紙入れを持っていないことに気がつきました。茶代が払えませんから、これは大失敗です」

「まあ、——それでどうしました」

「お鶴さまが自分の紙入れを出して、これでは足りませんかというのです。あけてみると、小判がたった一枚です。これをつかってしまうと買い物ができないがというと、買い物はまた明日でもいいのですといいます。しかし、それではお鶴さまが気の毒だと思っていると、店の女中が、茶代はおついでの時でよろしゅうございますといってくれました」

「感心な女中ですね。屋敷からすぐに用人をつかわしましょう」

「いいえ、茶代はもう平太郎に申しつけて払わせました。その女中も感心なやつですが、お鶴さまはもっと感心でした」
「どうしてです」
「水茶屋を出て、大川端へかかると、お鶴さまの屋敷の家老が、若侍どもをつれて、姫君をさがしにきたのに出会いました。家老がお供の照という腰元をしかろうとしますと、照をしかってはいけません、お買い物に出ると言い出したのは鶴ですと、老人をとめた上、別れ際に、三郎は紙入れを忘れて困るでしょう、これをあげますといって、小判一枚の紙入れをわしにくれました」
「まあ、なんというお美しい心がけの姫君でしょう。この母も会ってみたい気がしてまいりました」
母君はお鶴さまがすっかり気に入ってしまったようである。
そして、今日はおやつには、別殿から桜もちが一折とどいた。
それを持ってきたのは、八重という清泉院さま気に入りの美しい腰元である。
「八重、話がある。わしについてまいれ」
千代三郎はなにげなく八重にいって廊下へ出た。
「あ、若殿、どちらへまいられますか」
平太郎があわてて聞く。
「ちょっと庭へ出るだけだ。その方たちは、せっかくお方さまがお心にかけてのおやつ、ありがたくちょうだいして待っておれ」
「いいえ、お供いたします。若さまへのおやつを家来どもが先にいただくという法はございません」
小林平太郎と五十嵐富太郎が、目でうなずきあいながら、いそいで立ってきた。
「無粋な者どもだ。なるべく離れて歩けよ」
千代三郎は庭下駄を突っかけて庭へ出る。
八重が小褄を取って、真っ赤になりながら後

につづく。なにをされるのかと、胸がふるえるのだろう。

「八重、心配には及ばぬぞ。お前をどういたそうというのではない」

大きな泉水のふちをゆっくりとまわりながら、千代三郎はふるえている八重の肩を軽く左手で抱いて、耳もとへささやくようにいった。

「はい」

「八重は、今朝のわしの話、聞いていたな」

「お鶴さまのお話でございますか」

「うむ、それだ。わしは今日もお鶴さまと会う約束になっているのだが、あれたちが目を光らせていてぬけ出すことができぬ」

「お供がいてはいけませんのでございますか」

「連れは恋路のじゃまだ。だから、お前をつれて林の茶室へ行く。あれたちは、さすがに遠慮して近くまではこられぬ。その間に、わしは裏道から屋敷をぬけ出す。お前、しばらく茶室で辛抱していてくれ」

八重は体中をかたくしながら、すぐには答えようとしない。

そうして林の道へ入っていくうしろ姿は、いかにも意味ありげだから、平太郎と富太郎とはさすがにそば近くまでは寄ってこなかった。

「いやか、八重」

「若さま、それでも八重は、やっぱり、あの、疑われます」

泣き出しそうになっている八重だ。

「そうか。なるほど、そうだったな」

二人きりで茶室へ入れば、八重はお手がついたことになる。

後で、あれは芝居だといっても、人は承知しないだろう。それでは八重がかわいそうである。

「よし、こういたそう。茶室へは入らなくてもよい。茶室の裏から二人ですぐぬけ出すことにしよう。お前にこれをあずけておく。これは今朝話したお鶴さまの紙入れだ。お前はこれを持ってお方さまのところへもどり、ありのままを

お耳に入れて、決して御心配ないようにと申し上げておいてくれ。それならよかろう」

「はい」

「そのかわり、八重が嫁入りをする時は、わしがいいものを祝ってつかわすぞ」

「いいえ、若さま。八重は、八重は一生お方さまに御奉公の心をきめております」

八重は悲しそうにうなだれてしまう。

——はてな。

と、千代三郎はひそかに目をみはったが、わざと聞き流しておくことにした。

まもなく茶室の枝折り戸の前へ出る。

そこで一度、千代三郎は二人のほうへ振りかえって、にっとわらってみせてから、戸をあけて中へ入り、その戸をしっかりとしめきる。ここから中へ入るなよという心だ。

そして、八重の肩を抱きよせるようにして、茶室のぬれ縁のほうへまわり、枝折り戸とは反対側の庭へ出る。もうここまでは二人の目はとどかない。

茶室の庭をかこっているのは三尺ばかりの竹垣だが、女が飛び越すのは無理だ。

「八重、声を出すなよ」

長身の千代三郎は、いきなり八重を軽々と抱きかかえて、

「あれえ」

八重がびっくりしている間に、ひょいと垣の外へ立たせていた。

自分はひらりとそれを飛び越えて、

「さあ、二人に見つからないように行け。たのんだぞ」

向こうの小道まで八重を送ってやって、そこから裏木戸のほうへいそいだのである。

2

——ここまで出てきてしまえば、もうしめたものである。

が、約束の夕方にはまだ少し早すぎるから、

千代三郎は昨日とは反対に、ひとまず両国橋のほうへ出ることにした。

——これでお鶴さまに会えたら、それこそすばらしいがなあ。

しかし、それは十中の八九まで無理だろうと、千代三郎も覚悟はしている。昨日の今日だから、とても自分のようなわけにはいくまい。それだけに、知恵と勇気でもしお鶴さまが会いに出てくるようなら、今日こそこっちも名乗り、向こうの屋敷の名も聞いて、場合によってはすぐにつれて帰って、先方へは母君清泉院からあらためて婚約の使者を立ててもらってもいいと考えていた。

——お鶴さまなら、きっと、お方さまの気に入るに違いない。

そう考えることも、千代三郎にはたのしい。そして、お方さまと花嫁と、三人で街へ買い物に出られたら、お方さまがどんなによろこぶことだろうと思うと、たのしい空想で千代三郎の胸はいよいよふくらんでくる。

「寄ってらっしゃいまし。お休みなすってくださいまし」

昨日の水茶屋の通りへ出てきた。茶くみ女たちが軒ごとに出て客を呼んでいる。

「あら、若さま——」

昨日の店の前までくると、女が目ざとく見つけて、にっこりしながら声をかけてきた。

「やあ、昨日はありがとう」

「どういたしまして。今日はお一人でございますか」

「うむ、これから二人になりに行くところだ」

「まあ、おたのしみでございますこと」

「それが、二人になれるかどうかまだわからないんだが、二人になれたら、また休みにくる。今日は茶代もたくさん持っているから大丈夫だ」

「どうかお二人になれますように。三郎さまは勇気がおありになりますから、きっとお鶴さま

に会えますわ」
「ほう、すっかり聞いていたんだねえ」
「ほ、ほ、さんざ当てられましたもの。ゆうべは夢にまで見てしまいました」
「それはすまなかったな。では、行ってくる」
おもしろい女だなと思いながら、次第に人足が多くなってくる広小路へ出て、両国橋へかかろうとすると、二十一、二とも見えるこいきな女が、出会い頭にとんと前からぶつかってきて、
「あら、兄さん、ごめんなさいね」
するりと身をかわしながら通り抜けようとする。
「待て、女中」
千代三郎はとっさにその女の腕をつかみとめた。
「いやですねえ、兄さん、人前で——。およしなさいよ」
女は身をくねらせながら、振り切って逃げようとする。どこか鋭いところはあるが、江戸前の水際立った女ぶりだ。
「まあ、ちょいと待ちなさい」
「いやだっていうのに、なにをするんですよう、いけ好かない」
「いや、お前がいやでもしようがない」
「なんですって——変なまねをすると、大きな声を立てますよ」
「変なまねをしたのは、お前のほうなんだがなあ」
にっとわらってみせる千代三郎だ。
「おやっ、あたしがなにをしたっていうのさ。お侍だと思って下から出ていればいい気になって、——この手をお放しったら、色魔」
「放せばお前は逃げる」
「畜生、放さないか。ばか」
女はいきなり空いた手で千代三郎のほおへ平手打ちをくれようとした。
「これ、なにをする」
その手も素早くつかみとめると、

「助けてえっ」
身もがきする女を押さえつけているかっこうになるから、ちょっと見ると千代三郎のほうが痴漢に見える。
「なんだ、なんだ、侍のくせに女をつかまえやがって」
「色気ちがいらしいぜ。かわいそうなまねをしやがる」
もういっぱいの人だかりの中から、そんな声さえ聞こえてきた。
——これはいかん。
千代三郎は形勢不利と見たので、
「まあ、こっちへきてくれ」
その女の腕をつかんだまま、今きた水茶屋のほうへ引っぱっていくことにした。
「助けてえ。この色気ちがいをどうかしてくださいよう」
女はじだんだふんでわめき出したが、千代三郎の力にはかなわない。とうとうさっきの水茶屋の前まで引っかえしてきた。
ぞろぞろと野次馬がついてくる。
「まあ、どうなすったんです、若さま」
まだそこへ出ていた茶くみ女がびっくりして聞く。
「ちょっと店を借りるぞ」
千代三郎はそうことわってから、
「これ、静かにしなさい。あんまり暴れると、お前の恥になるばかりだぞ」
と女にいい聞かせ、少し手に力を入れた。
「あ痛っ。なにをするのさ」
「いいから、こっちへ入りなさい」
「人を、人を手ごめにする気かえ」
「いまにわかる。そう悪たれるものではない」
なだめるように言いながら、とうとう店へ引っ立てて入り、桟敷へつれてあがってしまった。
ここまでは、さすがに野次馬もついてきかねるのだろう、表でわいわいいっているばかりだ。
「そこへお座り」

千代三郎は、やっと女の手を放す。
「畜生、あたしを、あたしをこんな目にあわせて――」
女は肩でせいせい息を切りながら、ぺたりとそこへ座って、つかまれた腕の上を痛そうにさすっている。
「もうここなら、だれも見ていないからいいだろう。わしの紙入れをかえしてもらいたいな」
「おや、なんですって――」
「わしの紙入れが、お前の白い手で、さっき、お前のふところへすべりこんだのだ。悪いことをしてはいかん。かえしなさい」
人の前でそれをいうのは少しかわいそうだと思ったので、千代三郎はわざわざここまでつれてきたのだ。
「じゃ、お前さんは、あたしがすりを働いたっていうんですね」
女はずぶとく千代三郎をにらみつけて、白をきろうとする。
「うむ、お前の指はなかなか器用に働くようだ」
「ばかにおしでない。もし、もし、あたしのふところにその紙入れがなかったら、どうしてくれるんです」
「そんなことは万なかろう。わしはめくらではないからな」
「言いましたね」
なんと思ったか、女はいきおいよく立ち上がったと見る間に、手早くするすると博多の帯をとき出した。
それから細ひもを解きすて、はらりと着物の前がひらくと、さっとそれを脱ぎ捨てた。
派手な腰の物一つになった年増盛りの裸身は、一瞬目もあやに、あっと息をのむばかりすばらしい玉の肌である。

仁義さばき

1

「さあ、よく見ておくれ。どこにあたしがお前さんの紙入れをかくしているっていうのさ。なんなら、これも取ってみせようか」

裸身の鉄火女は、最後に残った腰の物さえ解いてみせまじき勢いだ。まったく捨てばちな女である。

「ここはふろ場ではないよ」

「なんですって――」

「しかし、お前の肌はきれいだねえ」

千代三郎は感心したように、女の玉の肌をながめている。

「おふざけでない。あたしは肌を見ろといってるんじゃない。お前さんの紙入れがどこにあるか見てくれっていってるんだ」

さすがに女は白々と豊かな双の乳房を手でおおうようにして食ってかかる。

「紙入れなら、もういい。あった」

「どこにあったのさ」

「いつの間にか、わしのふところへ返ってきていた」

千代三郎は涼しい顔だ。

「そら、ごらんな。ちゃんと探しもしないで、よくもあたしを人中ですりあつかいにしましたね。あげくの果てに、こんなところへ引っ張りこんで、人を裸にまでして、あたしは承知できない。さあ、このおさまりはどうつけてくれるんです。お前さんも男なら、はっきり返事をしてごらんよ」

やんぱち女はまだ突っ立ったまま、まなじりを裂いて、ぽんぽんと威勢のいい啖呵をきってくる。

「承知できないといったところで、お前、裸のままじゃなんにもできないだろう。それとも、

そのかっこうで両国の盛り場をひとまわりしてくるかな」

総じてけんかは人の意表に出て、相手の度肝を抜くところに勝機がある。その点では、女はたしかに相手の意表には出たのだが、千代三郎がちっとも動じないとなると、裸ではまさかむしゃぶりついてもいけないし、まったく手も足も出ないことになる。

「ばか、——悔しいねえ。女を裸にまでしておいて、そんな言いぐさがあるか。すりのぬれぎぬはどうしてくれるんですよう」

「やせ我慢をしていないで、早く着物をきたらどうだね。風邪をひくぞ」

「いやなこった。このおさまりをつけてくれないうちは、死んだって着物なんかきるもんか」

「勇ましいんだなあ、お前は」

千代三郎はわらいながら立ち上がって、

「それ、この紙入れはお前にやる。一度お前のふところへ入ってけがれた紙入れを、まさか、わしがふところにもできぬ。こんどはお前にやったのだから、遠慮なくつかいなさい」

五十両入っている重い紙入れを女の足もとへ投げてやり、さっさと上がりかまちのほうへ出る。

「ひきょう者、逃げるのかえ、畜生」

「別に逃げはせぬから、悔しかったら追ってきなさい」

そのまま千代三郎は草履をはいたが、ふっと思い出して、

「ああ、わしは一文なしだ。お前ここの茶代だけは払っておいてくれ」

そういいおいて、びっくりしている茶くみ女ににっとわらってみせながら表へ出た。

表にはまだ野次馬がいっぱいたかって、がやがやいっている。

——世の中には暇人が多いとみえる。

千代三郎は感心しながら、その人ごみの中を通りぬけて、両国橋のほうへ歩き出した。

感心したといえば、あの女すりの敏捷な指さばきにも驚嘆させられるものがある。紙入れを抜かれたのはたしかにわかったが、それをどこでまた元のふところへもどしていたか、女が裸になるまでは少しも気がつかなかった。帯を解き出したので、はてなと思い、なにげなくふところをさわってみると、ちゃんと紙入れはもどっていた。女だてらに、まったく神技ともいうべきあざやかさである。

——惜しいなあ。

あの神技が世の中の人によろこばれるほうへ役に立つのだったら、だいいち当人の幸せだったろうにと、千代三郎は惜しい気がするのだ。しかし、あの悪たれぶりは、ちょいと思いきっていておもしろかった。いくらすごがってみたところで、女が素っ裸になったのでは、ただ見せ物になるだけの話だ。そうとも知らずに、当人はひどく悪たれたつもりでいるのが、稚気があって愉快である。

——やっぱり、街を歩いていると、おもしろいものが見られる。

それが、五十両というすばらしく高い見料についているのだとは、ついうっかりしている千代三郎なのだ。

「だんな、いいお天気ですね」

両国橋へかかると、ふっと、うしろから声をかけて、気やすく肩を並べてきた男がある。年ごろ二十七、八歳、どこかやくざっぽいきりっとした男ぶりだ。

「うむ、うららかな日和だな」

「なあるほど、五右衛門のせりふできやしたね。だんなは芝居っ気がおあんなさる」

「芝居っ気——？」

「石川五右衛門が山門で大みえを切りまさ。はあて、うららかな、ながめだなあとね」

「そうか」

「けど、だんなはいま、もっとうららかなながめを拝んできたばかりでござんしょう」

「なんのことだ」
「とぼけっこなしさ。あの女の玉の肌は、ちょいとうららかな見物でござんしたね」
　にやにやわらっているところを見ると、いまの野次馬の中にまじっていたやつらしい。
「ああ、お前はあの女の仲間か」
「御冗談でしょう。人聞きの悪いことはいいっこなしに願いやす。あっしはこれでも堅気の錺職で、浅吉っていうんでさ」
　わざわざ堅気とことわるようでは、この男もあまり当てにはなるまい。
「あの女を知っているかね」
「知っていやすよ。あれは南蛮お松っていうすごいあねごでさ」
「なにか南蛮に縁でもある女なのか」
「大ありでしてね、あのあねごは南蛮の薬をよく知ってるって話なんです。気に入らないやつや、変なまねでもしたがるやつがあると、うまくその薬を使って眠り死にをさせてしまう。だんななんかも、きれいに紙入れをやってきたからいいようなものの、もし、あの玉の肌を拝みっ放しにしてくると、あぶないところだったんでさ」
「ふうむ、それは怖い女だな」
　いつの間にか両国橋をわたって、千代三郎は新大橋のほうへ足を向けている。ちょうど昨日悪折助にけんかを吹っかけられたあたりへかかってきた。
「だんな、この辺でござんしたね」
「なにが――」
「昨日だんなが悪たれ折助を投げ飛ばしたところでさ」
「お前、あれを見ていたのか」
　千代三郎は思わず浅吉の顔を見なおす。
「見ていやしたよ。思ったよりだんなは強いんで、びっくりしちまった」
「いや、向こうのほうが弱すぎたんだ」
「御謙遜てやつですね。奥ゆかしいなあ、だん

なは。能あるたかはつめをかくすってやつだ」
「そんなにほめてもらっても、わしはいま紙入れをお松にやってきたばかりなんでね」
「いいえ、あっしはなにもそんなつもりじゃござんせん。けど、昨日だんなが手をつないで歩いていたお腰元さんは、すばらしいべっぴんでござんしたねえ」
「うむ、天女のように美しかったな」
「あれえ、人ごとのようにおっしゃるぜ。どうして今日はいっしょにつれてこなかったんでげす」
「今日はこれから会いに行くところだ」
「へえ、すると、あれはだんなとおなじ御家中のお腰元さんじゃなかったんですか」
「うむ」
「こいつはあきれたなあ。あっしはまた、おなじ御家中で、あのお腰元さんがお使いに出たのをいい折だと、だんなが後から追って出て、うれしいあいびきをやっていた、それにしちゃ、あの人ごみを臆面もなく手をつないで歩いている、お屋敷者はさすがにのんびりしたもんだと、実は感心していたんです」
「いや、あれは知らぬ屋敷の腰元だ」
「屋敷を知らないで、だんなは今日どこへ会いに行く気なんでげす」
「新大橋の上で待ちあわせることになっている」
「はあてね、昨日往来ではじめてぱったり出会ったばかりなんでげしょう」
「そうだ」
「はじめて会ったばかりの仲で、もうそんなあいびきの約束ができちまったんですかえ」
「うむ、あの腰元は、三郎が大好きになったから、ぜひ今日も夕方ごろ橋の上へきてくれるようにと、たのんで帰ったのだ」
「だんなは三郎って名なんですね。あきれたもんだなあ。はじめて往来で出会った日から、いけしゃあしゃあと手をつないで歩いたり、あい

びきの約束をしたり、あのお腰元さんよっぽど浮気っぽい女なんだな。ああ、わかった。だんな、ありゃきっと化け物に違いありません」

「そんなことはない。ちゃんと足が二本あった」

「その化け物じゃありやせんや。つまり、腰元に化けて、金のありそうなのろまなかもをつって歩く、そういう食わせものに違いありやせん。そのお腰元さんが昨日別れぎわに、明日五十両持ってきてくださいねとかなんとか、甘ったるい声を出してねだったもんだから、それでだんなは今日あんな重い紙入れを持って出てきたってわけなんですね」

「お前、わしのあの紙入れの中に五十両入っているとよくわかったな」

「そりゃだんなの歩き方を一目見りゃ、——おっと、なんの話でしたっけね、だんな」

「あは、は、なにもそうあわてるには及ばぬ。男ならいさぎよく名乗ってみなさい」

「人が悪いなあ、だんなは。じゃ、正直にいいやすがね、あっしはさっき西両国でだんなを見かけて、おや、昨日ののっぺりだんなが、今日はだいぶふところが重いぞ、ひとつはたいてみるかなと思っているうちに、お松のやつが横から出てきて、あっさりだんなに腕をつかまれちまったってわけでさ」

「浅吉、うそをつくと承知しないよ」

ふいにうしろから張りのある若い女の声がとがめだてをしてきた。

「あっ、お松」

見ると、南蛮お松が底意地の悪い目を光らせながら、闘志にあふれて颯爽とそこに突っ立っている。

やがて右手のお船蔵を出外れようとするあたりで、左手は旗本屋敷つづきだから、この辺までくると、もう人足もまばらに、ちょっと寂しいところだ。

2

「おれがなにをうそをついたっていうんだね」

一度はおどろいていた浅吉が、急にふてぶてしく立ち直って、にやりとわらった。

「ふうんだ。あたしが、このんびりだんなにあっさりつかまったのは、ごらんのとおりで文句はありませんがね。あの間抜け面のさんぴんのふところがはたけるかって、あたしをけしかけたのはだれさ」

お松は柳眉を逆立てている。

「さあ、だれだっけなあ」

「おとぼけでない。よし、見事にはたいたら、お前あたしの子分になるかといったら、なってもいい、そのかわり、しくじったらおれの女房になるかと、いやらしい目つきをしたのはお前じゃないか」

「この目は生まれつきでござんしてね」

「生まれつきべい助なのは、なにもお前にかぎったことじゃないから勘弁もしておくが、あたしがこののんびりだんなに腕をつかまれた時、なんだってお前、あたしのそばにいなかったのさ。そばにいて、品物さえうまく受け取ってくれれば、この勝負は立派にあたしの勝ちだったんだ。男のくせに、あたしがあんなところへ引っぱりこまれるまで、黙って突っ立って見てやがる。それでもお前、男か。人のしくじるのをいい気味だと見物してわらっている。仁義を知らないにも程があらあ。言い訳があるなら、ここではっきりいってごらんよ」

「おれはなにも黙って見ていたんじゃねえ。どうなるかと思って、いざとなったら飛びこむ気で、ちゃんとあの水茶屋までついていって――」

「お黙り――。じゃ、こののんびりだんなが怖くて、お前、どじを踏んだっていうのかえ」

「どじってわけじゃねえんだが、いざとなりゃおれだって――」

浅吉はどうやらしどろもどろである。

「よし、わかった。じゃ、この勝負はあたしの勝ちだと見ていいんだね」
「けど、半分だけは、お前だってたしかにしくじったんだからな」
「だから、あたしの子分にはなれないとおいいなのかえ」
「だって、勝負は半分半分じゃねえか」
「ひきょうだぞ、浅吉。よし、そんなことというなら、その半分の勝負をここでつけてやる。おい、匕首を抜け」
お松は千代三郎がそこに立って見ていることなど眼中にないらしく、雌ひょうのように挑戦していく。女だてらに無鉄砲もここまでくるとちょいと小気味がいい。
「おれが匕首を抜くと、どうするんだ」
「あたりまえじゃないか、あたしはここに切れ味のいい剃刀を持っているんだよ」
お松はぽんと帯の上を手でたたいてみせて、
「あたしの剃刀がお前の右手の指を切り落とすか、お前があたしを突き殺すか、ここで勝負をするのさ。あたしはお前の命までもとはいわない。お前を今後、職の働けないようにしてやれば気がすむんだ。さあ、遠慮なくかかっておいでよ」
と、まったく大の男一匹を頭からのんでかかっている。全身に燃えるような気魄をみなぎらせながら、五分もすきのない身のこなしが、水際立った女ぶりだけに、一段とあざやかである。
「本当にやる気か、お松」
浅吉は相手が女だけに、なんとなく当惑気味である。
「おい、人がたかると面倒だから、あたしは待ったなしにいくよ。覚悟をおし」
「よし、来い」
浅吉も仕方なくしぶしぶふところの匕首に手をかける。
それと見て、雌ひょうのお松が放言どおり待ったなしに躍りかかろうと両足を踏みひらいた

時、

「両人、待て――」

千代三郎がつかつかとその間へ進み出た。

「ぬけさん、仲間の出入りなんだから、とうしろうが口を出しちゃいけない」

「いや、わたしはとうしろうじゃない。ただの三郎さんだ。まあ待て、わしがあつかってやる」

「本当かえ」

「本当だ」

「あつかい方が気に入らないと、ついでにお前さんの指ももらうよ」

「気の強い女だな。よしよし、待っておれ」

千代三郎はいささかあきれながら、

「浅吉――」

と、浅吉のほうを向いた。

「なんです、だんな」

ほっとした顔の浅吉だ。

「今日の勝負はお前の負けだ。いまさら言を左右にするのは男らしくない。約束どおり、お松の子分になれといいたいところだが、お松は三分ほどわしに負けている。そこで、今日からお前はお松の弟分、お松を姉と立てろ。どうだ、文句があるかな」

「へえ、しようがありやせん。だんながそうおっしゃるんなら、今日からお松の弟分になりやす」

「お松と呼びすてにしてはいかん。まさか姉上ともいいにくいだろうから、お松あねごと呼べ」

「へえ、お松あねご、あねさんと呼びやす」

「あねさんに変な気をおこすと、こんどは南蛮の薬が怖いぞ。承知しているだろうな」

「かなわねえなあ。だんなはぬけさんどころか、少し頭がよすぎまさ」

浅吉は苦笑いをしている。

「お松、浅吉は自分の負けをみとめて今日からお前の弟分になると申しておる。どうだ、このあつかいでは不服か」

「いいえ、それで気がすみました。けどねえ、

三郎さん、あたしは遠慮しませんよ」
「なにをだ」
「弟分はどこまでも弟分なんですからね、今日からあごで追い使ってやります。それでいいでしょうね」
あくまでもはっきりしているお松だ。
「うむ、それはかまわぬ。しかし、いくら姉でも、人情を忘れたしうちはいかんぞ」
「そりゃ女ですもの、浅吉が弟分らしくさえすれば、情けはかけてやります。——おい、浅、わかったかえ」
お松はさっそくつんと姉らしい顔をしてみせる。
「あれえ、もうはじまりか。へえ、あねさん、お手やわらかに願いやす」
「なまいってらあ」
お松は鼻の先であしらって、
「そこで、さぶだんな、さっきはとんだ失礼をいたしました。いまお聞きのとおり、あたしはなにもだんなのお金がほしくてふところをねらったわけじゃないんです。話がきまれば、もう気はすみましたから、この紙入れはそちらへおかえしいたします。お受け取りになってくださいまし」
と、帯の間から千代三郎の紙入れを出してわたそうとする。
「そうか。しかし、わしは玉の肌を見せてもらっているんだから、それを受け取っては気がすまぬ」
「だって、これからだんなはお腰元さんに会いに行くのに、一文なしじゃ困るでしょう」
「ほう、それも聞いていたか。その心配はない。あのお腰元さんは金持ちだ。その紙入れは、やっぱりお前につかわすことにしよう」
「本当ですか。なんだかきまりが悪いけれど、じゃ、いただくことにします。まさか、このお金がないと、だんなは首をくくらなくてはならない、そんな苦しいお金じゃないんでしょうね

え」
「ああ、そういえば、お前、あの茶店へ茶代をつかわしてきてくれたろうな」
「ええ、それはおいてきました」
「それならいい」
「おい、浅――」
「なんです、あねご」
「さぶだんなからこれをちょうだいしたから、半分お前にあげるよ」
お松は紙入れの中から二十五両包みを二つ、無造作につかみ出して、その一つを浅吉にわたす。さすがにきれいなことをする女だ。
「すんません、あねさん。いただきやす」
浅吉もちょいと目を丸くして押しいただいている。
「あたしにおじぎをしないで、だんなにおしよ」
「だんな、ありがとうござんす」
「無事におさまって、めでたいな」
千代三郎はにっこりわらって、
「お松――」
と、あらためて呼んだ。
「はい」
「せっかくここはめでたくおさまっても、お前たちが人のものをねらって暮らしたのでは、決してめでたいとはいえぬ。といって、ほかに金を得る道がつかなければ、人のふところをねらうほかはあるまい。どうだ、二人とも今日から心を入れかえて、わしの家来にならぬか」
千代三郎がまじめな顔をしていい出す。
「だんなは、失礼ですが、お旗本の若だんなですか」
お松が変な顔をして聞く。
「いや、わしは浪人者だ」
「浪人さんじゃ、家来をお持ちになっても、お給金の出どころがないでしょう」
「心配するな。わしにはいい親戚がたくさんついている」
「なるほど、そうでなけりゃ、五十両なんて大

金をぽんと投げ出す気にゃなれねえでしょうからね」

横から浅吉がもっともらしい口を出す。

「せっかくだけど、あたしは窮屈な御奉公は苦手だな。行儀作法なんてのはなんにも知らないんだもの」

「いや、かまわぬ。別に屋敷へこいというのではない。お前たちの家にそのままいてもいいのだ。家来として、月々手当をつかわすから、悪いことだけはやめろ。どうだな」

「そんなうまいことにいくんですか、だんな」

お松はどうも本当にできないようである。

「それに、仕事もしねえで、お手当だけもらったんじゃ、冥利につきやすからね」

「仕事はある。わしが一人で外へ出た時だけ、供をしてくれればいいのだ」

「一体、だんなのお屋敷はどこなんです」

「それは主従の約束ができてから教えよう」

「どうしやす、あねご」

浅吉はお松の顔色をうかがう。

「どうするって、あんまりうまい話すぎて、あたしは少し気味が悪いな」

「けど、たったいま二十五両ずつもらったばかりだからね。物には義理ってことがある」

「義理で家来になってさ、いきなり手討ちにするなんていわれちゃつまらないよ。家来になるってことは、命までも差しあげますってことなんだからね」

お松はなかなか用心深い。

「では、こういたそう。わしは昨日のお腰元さまが待っているといかんから、ちょっと新大橋まで行ってみてくる。その間に、二人でここでよく相談しておくがよい。わしはすぐもどってくるからな」

すでに春の日は西に落ちて、約束の夕方になっているのだ。千代三郎は、もしやお鶴さまを待たせておいてはかわいそうだと考えたので、二人にそういうと、さっさと新大橋のほうへ歩

き出した。

怪談うなぎ

1

千代三郎は、ゆっくりと新大橋の中ほどまで行ってみた。

西の夕やけ空が赤々と橋をそめ、大川の深川河岸はあかるく、浜町河岸はすでに夕やみがただよいかけて、それは今日の一日が終わろうとする美しい夕景色を作っていた。

橋の上はそろそろ家路をいそぐ人たちの足音が、つづいては絶え、絶えてはつづき、なんとなく気ぜわしい。

——やっぱり、出てこられなかったらしいな。

千代三郎は昨日、お鶴さまと出会った欄干のあたりへ、ぼんやりと立ち止まった。お鶴さまの姿は、どこにも見えないのである。

ちょっとがっかりした気持ちではあるが、すぐに無理はないと思い直した。自分でさえ屋敷をぬけ出してくるのにあれだけ骨が折れたのだ。まして、姫君の身で、昨日はあれだけ屋敷中を騒がせているのだから、家来たちの監視の目がきびしいのは当然で、どう心はあせっても、とても抜け出すなどということは不可能だったのだろう。

——まあ、あきらめるほかはないだろうな。

しかし、さて、あきらめなければならないときまると、千代三郎はいまさらのようにお鶴さまがはっきりと恋しくなってくる。

あのずばぬけた美貌もさることながら、聰明で、勇気があって、しかもだれにも思いやりの深い心が、またとなくうれしい。おそらく、お鶴さまのような優れた姫君は、天下広しといえどもこの世に二人とはいないだろう。

——わしは絶対にあきらめないぞ。

妻にするなら、お鶴さまのほかにないと、千

代三郎は決心を新たにすると、じいんと激しい愛情が胸にたぎってきた。

「三郎、あきらめてはいけません。鶴は三郎が大好きだと言っているではありませんか」

夕潮の中から、くっきりと、お鶴さまの白い顔がうきあがってきて、にっとわらいかけてきた。

「会いたいな、お鶴さま」

「鶴だって、会いたくて、死にそうです」

「どうしても屋敷が抜け出せないかなあ。お鶴さまは知恵もあるし、勇気もあるんだけれどなあ」

「あせってはいけません。そのうちに、鶴はきっといい折を見つけます」

そうだ、あせってはいかんと、千代三郎は気がついた。お鶴さまのことだから、今日はだめでも、明日は出てこられるかもしれない。いや、明日がだめならまたあさってという希望がある。希望は捨てるべきではない。

——よし、わしは七日の間、この橋の上へ通ってみることにしよう。

しかし、その七日の間、自分もまた毎日屋敷を抜け出してくるというのは、ちょっと骨の折れる仕事だ。いっそ、このまま屋敷へはもどらず、七日の間だけ、どこかへ泊まることにする、それがいいと千代三郎の腹はきまった。

明るい顔になって、橋のたもとまで引きかえしてくると、そこにお松と浅吉が待っていた。

「だんな、お腰元さんはきていなかったようでござんすねえ」

浅吉がわらいながらさっそく聞く。

「うむ、今日はむだ足だった」

「だんなほどの殿御を振るなんて、あのお腰元さんの了見がわからねえな」

「なまお言いでない。お腰元さんは主持ちだろうし、女は男と違って、そう簡単に家が出歩けるもんかね」

お松がそばから浅吉をたしなめる。

「そりゃまあ、あねごのようなわけにゃいかねえだろうけれど、ほれた男に会いたくて家へ火をつけた娘っ子だってありやすからね」
「そんなのは気ちがいの部さ。鳴かぬほたるが身をこがすといってね、心で思ってじっと辛抱している、そういう娘心のほうがあたしはうれしいね」
「へえ、あねごにもそんなしおらしい娘の時があったのかなあ」
浅吉がわざとお松の顔をながめる。
「ぶん殴るぞ、この野郎」
「わあ、すげえ。こいつは滅法気の荒いほたるだ」
浅吉はひょいと逃げるかっこうをしてみせてから、
「ああ、そうそう、だんな、さっきの話なんですがねえ」
と、くるりと千代三郎のほうへ向き直った。
「家来のことか」
「へえ。あれからあねごともよく相談したんですが、とにかく、こんな大金をただもらったんじゃ悪かろう、正直にいえば、だんなは少し毛並みが尋常じゃなさそうなんで、うっかり気はゆるせないが、そこんところをお互いによく気をつけて、まあ二十五両分だけ家来になって、忠義をつくしてみようってことになったんですがね。それでようござんすか」
けろりとしてそんなことがいえるこの男も相当な代物である。
「お松もそうか」
「ええ。さっきもいったとおり、あたしはお侍の行儀作法なんて知らないし、窮屈なことは大きらいなたちなんですけど、それでよかったら家来になります」
「そうか。いや、それで一向さしつかえない。ただ、わしの家来になったからには、指のほうだけは絶対に使用してはならん」
それだけは、はっきりと言っておく千代三郎

だ。
「あたしはたぶん大丈夫です」
「浅吉はどうだ」
「あっしだって、食えさえすりゃ、なにも危ないおもいをして人のふところなんかねらいやしません」
「よし、それで話はきまった。今日から主従だな」
「へえ」
「さっそくだが、たのみがある」
「早いねえ、だんなは。——どんなことです」
「七日の間でいいから、わしの寝泊まりのできる家を一軒借りてもらいたいのだ。なるべくこの近くがいい」
「それはまたどういうわけなんでげす」
浅吉が変な顔をした。
「わしは、お鶴さまに会えるまで、七日の間この橋の上へ通ってみることにした。屋敷からではいろいろ面倒だから、この辺へ家を一軒借りることにしたい」
千代三郎は正直に答える。
「なあるほどねえ。つまり、鳴かぬほたるが身をこがすってやつですね。けど、いきなりこの辺で家を一軒借りてえっていわれても、困りやしたねえ」
浅吉はいささかあきれた顔をお松と見あわせる。
「まさか、殿さまがお借りになる家だから、裏長屋ってわけにもいかないだろうしね」
お松も半分はちゃかし顔だ。どこか変わっているんだからと用心していた矢先、もうこれなんだからと、ちょっと本気に考える気にはなれないのである。
「いや、寝るところさえあればよいのだ」
「じゃ、旅籠屋じゃいけないんですか」
「それでもよいが、ほかに人がいるとなにかとうるさい。なるべく三人だけでいたいな」
おや、この男、案外食わせもので、あたしが

さっき玉の肌を見せたものだから、本当はあたしの家へころがりこみたいんじゃないかしら、いやなやつと、お松はお松流に早合点をして、それならと意地になり、

「一軒いいお屋敷があるにはあるんですけれど――」

と、思わせぶりな口をきく。

「そうか。では、そこにきめよう」

千代三郎はあっさりしたものである。

「本当にそこでいいんですか」

「うむ、いい」

「あねご、そのお屋敷ってのはどこなんだね。だいいち、これから行って、右から左へ、さあお使いなさいってすぐ貸してくれる家なんかね」

浅吉がふしぎそうな顔をする。

「大丈夫――。二つ返事ですぐ貸してくれるわ」

「まさか、裏長屋じゃねえんでしょうね」

「そんなんじゃない。敷地千坪、武家門があって、前庭があって、式台つきの玄関があって、蔵があって――」

「そんな立派なお屋敷を、これから行ってすぐ貸してくれるかなあ」

「なんべんおなじことを聞くのさ。たったいま、二つ返事で貸してくれるといったばかりじゃないか」

「なあるほど――。まさか、あねご、これが出るんじゃないだろうね」

浅吉は両手を胸の前でお化けにだらりと下げてみせる。

「ことによると、出るかもしれないよ」

「なんですって――」

「なんにも出なけりゃ、そんな立派なお屋敷なんだもの、一年も二年もあいているわけがないじゃないか。ばかだねえ」

お松はいたずらっぽくにやりとわらっている。

「なあんだ、あねごのいうのは、新高橋際のお化け屋敷のことじゃないんかね」

「そうだよ。あそこなら七日の間ぐらい、黙って借りていたってだれも文句はいわないだろうと思うのさ」
「人が悪いなあ、あねごも。あそこは、あっしはごめんだ。本当に出るって話ですからね」
浅吉は真顔になってしりごみをする。
「お松、そこを借りてくれ。そういう屋敷なら、退屈しなくてよかろう」
千代三郎は本気になって涼しい目を輝かす。
「だんな、あそこはいけやせん。だんなはなんにも知らねえからそんなにあっさりいうんだが、あそこだけは本当に出るんだからおよしなさい」
「よし、とにかく、どこかで飯を食いながら話を聞くといたそう。少し空腹になってきた」
西の夕焼けはいつか消えて、あたりはすでにたそがれ作ってきている。

2

猿子橋のそばにうなぎ屋がある。お松と浅吉はそこへ千代三郎をつれていって、夕飯をとりながら、かわるがわるその化け物屋敷の話をして聞かせるのであった。
小名木川の両岸は大名の下屋敷の多いところだが、北条美濃守の下屋敷の東隣に、番町の旗本で伊勢某という人の下屋敷があった。
「たしか一昨年の夏のことなんですけど、その伊勢さまが、意にしたがわぬ腰元を、下屋敷の座敷牢へ入れておいて、責め殺してしまったんです。それがとてもむごいやり方で、三度三度塩むすびは入れてやるが、水は一口ものませない。夏のことでのどがかわくから、どうかお水を一口のませてくださいましと番人にたのむ。水がほしければ殿さまの御意にしたがえと責める。なんでも、そのお腰元には深くいいかわした若侍があって、その男に操を立て、どうして

も殿さまのいうことを聞かなかったんですね。殿さまは意地になって、その座敷牢の前でうまそうに水をのんでみせる。たまらなくなって、お腰元が、お水を一口くださいませと、泣かんばかりにたのむ。いいえ、本当に泣いていたかもしれません」

話しているうちに、気性のきかないお松は、だんだん腹が立ってきたのだろう。

「畜生、あたしなら、そんな憎い敵に、口が腐ったって、水をくださいなんてねだりゃしない。ねだったって、どうせただじゃのませちゃくれないんですからね。水をやるから、わしのいうことを聞くか。いいえ、それはおゆるしくださいませ。しからば水はやらぬと、そんな罪なまねを三十日の余もつづけたんです」

「ひどいことをいたすな」

千代三郎もさすがにまゆをひそめた。

「だれが聞いたって、ひどいまねでしょう。だから、さぶだんなも、たとえいうことを聞かないお腰元がいても、決してそんなまねをしちゃだめですよ」

「いや、わしは親切だから、決してそんなまねはしない」

「それがねえ、ふだんはだれでもそう考えているんだけど、いざ好きな女ができて、その女がどうしてもいうことをきかないとなると、男なんてけだものはどんな気になるかわかったもんじゃないんです」

「大丈夫だ。わしはほたるのほうでいく」

「おっしゃったよ、この人。そういえば、さぶ殿さまは七日の間、橋の上へ通うんでしたっけね。とにかく、お前さんは、ふつうとは少し毛並みが変わっているんだから」

酒が少しまわってきたので、お松の行儀はだいぶいけぞんざいになってきたようだ。

「あねご、かりにも御主人さまに向かって、お前さん呼ばわりはひどかろう」

そばから浅吉が苦笑する。

「かまやしないのさ。どうせ、この人は今夜は一文なしで、ここのお勘定はあたしが払うんですからね。今夜はあたしのほうが女大名で、この人のほうが家来の番さ。どうお、さぶだんな、あたしの家来になる。いやなら、さっさとお帰りになってもいいんですよ。だれも止めやしないから」

顔も肌もぼうっと桜色にうれて、粗野ながらお松の美貌もまた捨てがたいものがある。

「お前、酒の上があまりよくないようだな」

「はばかりさま、これっぽちの酒で、酒の上といわれるほど酔っちゃいません。本気で言っていますのさ」

「どうだ、水はほしくはないか」

「あれえ、すみにおけないよ、この人――。そうそう、その水ほしやの話でしたっけね。浅、あたしは少し口がくたびれちまった。お前かわって話しておやりよ。うまく話すんだよ、このぬけさんが怖がるようにね」

「心得た」

言いつけるやつも、胸をたたいて心得たというやつも、まったく人を食った悪たれどもである。

「話の先を聞こうかな、浅吉」

「話さなくってさ――」

浅吉はきちんと座り直して、舌なめずりを一つする。

「ようござんすか、だんな。そのお腰元は、水がほしい、水が一口いただきたいと、しまいには糸のようにやせ細って、とうとう狂い死にをしてしまったんでさ。さあ、それからが大騒動なんだ。ぼうんと遠寺の鐘が九ツを打ち出すと、ざわざわと風が出てきやしてね、殿さまの寝ている白い蚊帳が、ふわあっとなびき出す。草木も眠る丑満どき――」

「なんだ、たった今九ツの鐘がぼうんとなったばかりではないか」

千代三郎がわらい出す。

「黙ってお聞きなさい。その九ツの丑満どきなんだ。ひた、ひた、ひたと、廊下を素足で歩く音が近づいてきて、殿さまの寝所の前でぴたりととまる。さらさらっと髪の毛が障子に鳴ったと思うと、細おい声で、お水を一口くださいませ――」

すうっと間のふすまが音もなくあいて、

「はい、お冷や――」

女中がひょいと白い顔を出したので、

「わあっ」

話していた浅吉が思わず青くなって飛び上がってしまった。

「あれ、どうかなさいましたか」

盆の上へ水差しと茶わんをのせてきた若い女中がけげんそうな顔をする。

「ばかだねえ、静かにおしよ。ねえさん、ごめんなさい。その水はどうしたの」

お松が浅吉をたしなめて女中に聞く。

「あの、こちらさまで、お水、お水とおっしゃらなかったんでしょうか」

「ああ、それなら言いました。いま、新高橋のお化け屋敷の話をこの方にしていたもんだから」

「あら、あたしとんだ聞き違いをしてしまって――。申し訳ございません」

「いいんですよ。そのお水はおいていってくださいな。あのお屋敷、まだお水のお化けが出るようなうわさかしら」

「ええ。お客さまがた、もし、これから試しにお出かけなさるのでしたら、おやめになったほうがいいのではないでしょうか。この間もお武家さまが二人でお出かけになって、青くなっておもどりになりました」

年ごろも十七、八、なんとなく陰気な女中で、ちょいとお腰元をおもわせる年ごろ顔立ちだけに、ひやりとするような話し声なのだ。

「そのお侍さん、なにかいってましたか」

「いいえ、なんにもおっしゃいませんでしたけれど、人の執念は恐ろしいと、顔を見あわせて

おいでになりました。それに、ふしぎなことがありますの」
「どんなこと――」
「あの、本当になさらないかもしれませんけれど、お客さまがたがお水の話をなすっていますと、きっとお帳番へ、お水ですよという声が聞こえるのでございます」
「よしてくんな。もういいよ、その話は」
浅吉が身ぶるいをしながら、いそいで手をふった。
「はい、すみません」
にっとわらった女中の顔がひどく陰気で、水差しの盆をそこへおき、すうっとふすまをしめて音もなくさがっていく。
「浅、いまの女中、紫矢絣じゃなかったかえ」
お松が急に声をひそめる。
「わっ、ちげえねえ」
浅吉は真っ青になってしまった。うなぎ屋の女中が紫矢絣をきているというのも妙だし、そういえば、その女中が出ていったとたん、座敷の行燈が急にあかるくなったような気さえするのだ。
「おかしいねえ。あんな若い女中がここの家にいたかしら」
「もうたくさんだ。あねご、帰りやしょう」
「ばかだねえ、お化け屋敷がまさかここへ引っ越してきやすまいし」
そうわらったお松も、なんとなく酔いがさめてしまったような顔つきである。

3

「お松、その伊勢の化け物屋敷というのは、いまだ住み手がなく、そのままになっているらしいな」
千代三郎はあらためて聞いてみた。
「そうなんです。その秋、殿さまがお腰元のお化けにたたられて、とうとう裏の小名木川へひきずりこまれて死んじまったんですって」

「なるほど、逆にお化けに水をのまされて死んだわけだな」
「よしやしょうや、もうその話は――」
浅吉は耳をふさいでいる。
「それから、その屋敷は三度ばかり、まるでただみたいに人の手から手へわたったそうですけれど、半月と住んでいないんです。きっとお水をくださいましのお化けが出て、ただ出るだけならいいんですが、だれかが裏の小名木川へ引きずりこまれるんですってさ」
「本当かねえ」
千代三郎はどうも信じられない。
「あたしも今までは、そんなばかげた話とおなかん中でわらっていたんですがねえ。今の女中さんの話を聞いて、なんだか変な気がしてきたわ」
「あねごまでそんなことをいい出すのはおかしいな。念のために、手をたたいてみろ」
少しも怖がってなどいない千代三郎の涼しい顔なのだ。
「今の女中さんを呼んでみるんですか」
「うむ、もう一度くわしい話を聞いてみたい」
「物好きねえ、殿さまは」
お松は苦わらいをしながら、
「さわらぬ神になんとやらいいますからね」
と、なんとなく渋っている。
「怖がることはない」
「いいえ、怖かあないけど、もしあの女中がここにいなかったら、ちょっと変な気がするじゃありませんか」
「そんなことはあるまい。よし、わしが呼んでみよう」
千代三郎が軽く手をたたく。
「はあい」
と、たしかに階下から返事があった。三人の目が期せずしてそこの入り口のふすまへあつまる。
ごくりと浅吉はかたずをのんでいる。

足音が近づいて、
「お呼びでございますか」
と、外から声をかけながら静かにふすまがあいた。
「あっ」
おなじほどの年ごろの女中だが、これはここへあがったとき案内してくれた女中で、着物も木綿の縞物だし、髪形も楽屋銀杏らしい。だいいち、顔色も浅黒いほうで、目鼻立ちからして違う。
「勘定をしてもらいたいな」
「はあい」
「つかぬことを聞くが、当家にお前とおなじほどの、紫矢絣をきた女中がいるかね」
「あら――」
その女中がなぜか目を丸くした。
「どういたしたな」
「じゃ、またあの人きたのかしら」
「あの人とは――」
「それ、うちの女中じゃないんです。お水を持ってきたんでしょう」
「うむ」
お松も浅吉も息をのんでいる。
「それ、どこかのお腰元なんです。お客さま、だれにも言わないでくださいね。お店がさびれてしまうと困るんです」
「うむ、決して他言はせぬ」
「その人、自分でこいを魚籠に入れて、うちへあらいをこしらえてもらいにくるんです。お屋敷を聞いても、悲しそうにうつむいていていいません。たいてい夜になってからたのみにきて、取りにくるのはお店をしめてからです。あかりのあかるいところをきらって、台所からくることもあるんです」
「妙なお腰元だな」
「とても妙なんです。お武家さんがたも、お水のお化け屋敷の話をしていたんじゃありませんか」

「うむ、少しばかりな」
「そのお座敷へ、その人きっとお水を持っていくんです。あたしたちの少しも知らない間に――」
「ありがとう。もういいから、ねえさん、すぐにおあいそをしてくださいな」
お松が途中からいった。
「はい」
女中は静かにふすまをしめてさがっていく。
「いやだわ、さぶだんな。あたし、なんだかぞくぞくしてきた。早くここ出ましょうよ」
「あねご、今からそんなことでどうする。ここはまだ化け物屋敷の出店のようなものではないか」
「本当にそうね。あのお腰元さんが小名木川のこいを魚籠に入れて、からんころんと下駄を鳴らしながら、こいのあらいをお願いいたしますと、軒下に立って、細おい声で――」
「よしてくんな、あねご。あねごの声は耳についていけねえ」
またしても浅吉がいそいで両手で耳をふさぐ。
「浅、こんなかっこうだよ」
お松が面白半分に、中腰になって、白い両手をだらりとしてみせる。
「よしねえっていうのに」
浅吉は目までふさいでしまった。
「あねご、今夜はその屋敷へ三人で泊まってみよう」
「なんですって、殿さま」
さすがにお松が目を丸くした。
「出店だけではつまらん。本家へまいって、ゆっくりその腰元と話がしてみたい。お松はいやか」
「あたし、あたしより、浅吉、お前はどうなの」
「しっ」
浅吉はいそいでお松を制した。
だれかが、ひたっ、ひたっと階段をあがって

くるのである。

幽霊の足あと

1

お松も浅吉も階段の足音に思わず息をひそめていたが、ふすまをあけて顔を出したのは、なんのことはない、さっきの女中が勘定書きを持ってきたのだった。

「化け物の正体見たりで、お前たちのように怖い怖いと思っていると、自分の影法師まで化け物に見えてくるぞ」

千代三郎は女中が去った後で二人にいってわらった。

「おあいにくさま。あたしはちっとも怖がってなんかいやしませんからね」

負けずぎらいのお松は、悔しがって言いかえす。

「そうか。あねごは強いからな。では、これから度胸試しに、その伊勢とかの化け物屋敷へ乗りこんでみよう」

「本気なんですか、殿さま」

「うむ、わしは化け物というものに一度会ってみたい」

「あきれた人ねえ。どうして殿さまはそう物好きなんだろうな」

お松はそっとため息をつく。

「あっしはごめんだ。生まれつき化け物とこんにゃくは性にあわねえ」

「へえ、浅吉はこんにゃくがきらいなの」

「きらいですねえ。あのでれっとした死人色の面を見ただけでも身ぶるいが出るんでさ」

「おでんにしてもだめかえ」

「いけやせんねえ。あの三角にされた恨めしそうなしょうゆ面を見ると、鳥肌立ってくるんだ」

「さあ、まいろうかな」

こんにゃく問答などには興味がないらしく、

千代三郎は二人をうながして立ち上がった。
「毎度ありがとうございます」
女中に送られて店を出ながら、入る時はうっかりしていたが、なんという陰気な家だろうと思った。無論、ほかに客はないらしく、家の者もいるのかいないのか、ひっそり閑として、まるでこの女中が一人で店をやっているとしか思えないがらんとした空気だ。
「あねご、いやな家だったねえ。あっしは二度とあんな家はごめんだな」
外へ出てから、浅吉がいった。
「お水のお化けが出るうなぎ屋なんか、あたしもごめんだよ」
もう宵すぎで、空にはおぼろ月がひっそりと煙っている。千代三郎はさっさと先に立って新高橋のほうへ歩き出しているので、二人はまた顔を見あわせてしまった。
「お松――」
「なんです、殿さま」
「その辺でちょうちんを求めておくほうがよいぞ」
「お月夜だから、ちょうちんなんかいらないじゃありませんか」
「いや、空き屋敷には行燈の用意はあるまい。真っ暗ではなにをするにも不自由だからな」
どうしても千代三郎は化け物屋敷へ泊まる気でいるらしい。
「どうして、そう殿さまは強情なんでしょうねえ」
「しかし、せっかくお松が、泊まるならそこがよかろうと見つけてくれた屋敷なのだからな、親切を無にしては悪い」
千代三郎はけろりとしてそんな皮肉をいう。
そういわれてみれば、たとえ冗談にもせよ、はじめに化け物屋敷をすすめたのはお松だった。そんなぎをさされたんでは、いまさら、あたしはいやだとは意地でもいえなくなってくる。
「ようござんす。あたしも南蛮お松だ。一度殿

さまの家来になると約束したんですから、それが御意ならしようがない、火の中へでも水の中へでも、いさぎよく飛びこんでみせましょう。浅吉、覚悟おし」

「水の中はいけねえ、あねご。お水のお化けは、人をやたらに小名木川へ引きずりこみたがるって話だからね」

浅吉は声をひそめながらそわそわとあたりを見まわす。

「いいじゃないか。お前は脂ぎってるから、きっといいこいになるよ。それをあのお腰元が魚籠に入れて、あのうなぎ屋へ持っていってあいにしてもらう」

「たくさんだ、あねご、あっしはこいのあらいにゃされたくねえ」

「殿さまといっしょに行くのはいやだっていうのかえ」

「こいつばかりは気がすすまねえ」

「じゃ、さっきの二十五両おかえしよ。そんな薄情なやつを殿さまの家来にしておいたって、なんの役にも立ちゃしない」

お松がいきなり白い手を浅吉の鼻っ先へ突きつける。

「そいつはいけねえ。せっかくおれのふところへおさまっていい気持ちになっている二十五両なんだ。そいつはあんまり罪だ」

浅吉はあわてて両手でふところを押さえて、

「しようがねえ、いっしょに行くよ。あっしも男だ。そのかわり、二十五両腹ん中へのんでいるこいが小名木川からあがったと聞いたら、折れた線香の一本もあげてやっておくんなさい。今からたのんでおきまさ」

と、欲と引きかえに、これもどうやら納得したらしい。

お松は見あたった荒物屋へ入って、小田原ちょうちんを一つと、用心のためにろうそくを五本買った。

「ねえさんや、妙なことを聞くけど、お水の化

け物屋敷へ出かける気じゃないかね」
品物をわたしながら、ねこの顔そっくりな店の老婆が、いきなりまゆをひそめながら聞いた。
「いいえ。——どうして、おばあさん」
お松はどきりとせずにはいられない。
「それならいいけど、ろうそくを五本も買いなさる。あそこへ行く人は、肝試しだの、賭けをしたのと、みんな物好きでな、きっとうちでろうそくの用意をして、なあにこの御時勢に化け物なんて出るものか、もし出たら引っつかまえて両国へ持っていけばいい見せ物になるなどと元気よく出かけなさるが、朝までいた者は一人もないようでな」
「やっぱり出るんですか、お化けが」
「そんな話です。どんなお化けが出るのか、きれいな腰元を見た、まるで川から上がってきたようにぐっしょりぬれて水がしたたっていたという者もいるし、廊下をぴしゃぴしゃと歩く音がして、悲しい声でお水をくださいましという
のを聞いたとか、どこかで女のうめき声がするので、聞き耳を立てていたら、障子の外に鬼火が燃えたとか、うわさはいろいろだが、みんな青くなって逃げ出して、たいては二日ぐらい高い熱を出すんだってことだ。まあまあ、触らぬ神にたたりなしでな、物好きはおこさないがいいですぞ」
軒先に立って待っている千代三郎と浅吉を連れと見ての老婆心らしい。
「ありがとう。いいえ、あたしはそんなところへ行くんじゃないんですから」
お松はちょうちんに灯を入れてもらっていそいで店を出た。今の話を聞いていたくせに、千代三郎は知らん顔をして、先に立って歩き出す。
「あねご、やっぱり出るらしいね」
浅吉はひどく情けなさそうな声だ。
「いいじゃないか。だれもまだ小名木川へ引きずりこまれたって話はないようだから」
ちょうちんを持ったお松は、わざとからかう

ようにいう。しかし、内心はやっぱりおだやかではない。

2

まもなく、片側町の町家がつきて、そこから新高橋へ出るまで、両側が下屋敷の塀つづきになる。もう人通りはほとんど絶えていた。からころと鳴る自分の下駄の音が、お松にはなにか人のもののように耳について、だれかが自分たちをつけてくるようにも聞こえ、つい振りかえってみたくなるのを、浅吉の手前じっと我慢して歩く。

やがて右側に北条美濃守の下屋敷の黒板塀が見え出し、長いその塀を通り越すと、隣が問題の化け物屋敷だった。板塀は古びているが、さすがにしっかり出来ているらしく、傷んだところは見えない。が、塀の上からのぞいている庭木は、手入れがしてないから、伸び放題に往来へ枝を張って、いかにも陰気くさく、一目で空き屋敷とわかる。門の前へ出ると、門扉はかたくとざされ、草がいっぱいのびている。くぐりを押してみると、ここは物好きが出入りするままになっているらしく、すぐにあいた。中へ入ると、ここも玄関までの敷石を残して、一面に草が生い茂っている。

「こいつあすげえや」

浅吉は思わず息をのんだようだ。往来とは塀一重だが、ここから見るおぼろ月は、まったく人里離れた草原の一軒家へきたようで、なんとも不気味な感じである。

「ひととおり庭をまわってみようかな」

千代三郎が自分の屋敷へでも帰ってきたようなのんびりした声でいう。

「どうぞ御随意にあそばしませ」

お松はもう半分やけだ。

千代三郎は玄関前まで進んで、右手の中仕切りの木戸から内庭へ入る。どこも雨戸がかたくしまっているがらんとした家の横手をまわって

裏庭へ出る。庭木の配置、石の置き方、元は相当な庭だったろうが、ここも木も草も伸び放題だから、今は見るかげもなく、陰々としてきつねやたぬきでも住んでいそうな草深さである。

飛び石づたいにかまわず進んで、枝折り戸から外庭へ出ると、浅い雑木林を一つぬけて、裏の塀際へ出た。塀の外はすぐ小名木川になっていて、そのひとところ間口三間、奥行五間ほどの堀を作って、小名木川の水をひきこみ、船つき場ができている。水門口は出水にでも流されたか、しまりがなく、舟でなら自由に出入りができそうだ。無論、舟は一隻もつないでない。

「広くもなし、狭くもなし、手ごろな屋敷のようだねえ」

「御意にかなったら、お求めなさいまし、ただみたいなお値段だっていいますから」

「うむ、求めてもよいな。お松、住んでみるか」

「あたしはまっぴら——。この水の色をごらんなさいまし。ここからきっと人を小名木川へ引きずりこむんですよ。おお、怖い」

「あねご、行きやしょう」

浅吉がいやな顔をして、庭のほうへ引きかえし出す。

しかし、実をいえば、ここはすぐ裏が小名木川で庭が広いから、感じとしてはいちばん明るい場所なのだ。慣れるということは不思議なもので、ふたたび内庭から表玄関へ引きかえしてきた時は、さしも荒れ果てた庭もただ荒れているなと思うだけで、もうそう怖いとは感じなくなっていた。が、さて、これからいよいよ化け物屋敷へあがるのだとなると、そうはいかなくなる。

「お松、ちょうちんを貸してごらん」

一向平気なのは千代三郎で、お松の手から小田原ぢょうちんをうけとり、式台を見まわしてから、

「ひどいほこりのようだな。履物のままあがるがよい」

と、自分も庭下駄のままあがり、しまっている雨戸をあけた。一足玄関へ入ると、中は真っ暗で、重くよどんでいるかびくさい空気が冷えびえと肌にしみてくる。正面のところどころ破れているふすまをあけると、そこは十畳ほどの書院になっている。ここもひどいほこりのようだ。

「ほう、これはおもしろい」

ちょうちんをかざして座敷中を見まわしていた千代三郎は、つかつかと床の間へ進んでいった。何本かの新しいろうそくがそこにころがっていて、一本は蠟をたらしてそこへ立て、半分ほどで消えている。そのあたり蠟がいっぱい流れているのは、肝試しにきた連中がみんなここへろうそくを立てた跡なのだろう。

「ごらん、お松、あの荒物屋の老婆のいったことは、やっぱり本当なのだな」

「そうですねえ」

お松は我にもなくしっかりと千代三郎のたもとをつかんでいる。すさまじいのは、その新しいろうそくはみんなねずみの歯のあとがついて、一本も満足なのはないことだ。

「なるほど、気のきいたやつが、むしろを持ちこんでいる。このほこりでは、座敷へは座れぬからな。浅吉、それをそっと裏がえしてみろ」

「へえ」

座敷の真ん中へ敷いてある荒むしろを裏がえしにすると、裏は白々として真新しい。

「よし、それで寝床はできた」

千代三郎はお松の手から新しいろうそくを一本取って、それを床の間へ立て、ちょうちんの灯をうつした。

「わしは一通り部屋部屋をあらためてくるから、お前たちはここで待っているがいい」

「やめて、殿さま。そんなことは、明日の朝、あかるくなってからだっていいじゃありませんか」

お松は躍起になって反対して、つかんだたもとを放そうとしない。二人きりでここへ残るの

はいやだし、いっしょについてまわるのはなお不気味なのだ。
「一通り部屋部屋を見ておいたほうが、むしろ安心ではないのか」
「腰元が狂い死にをした座敷牢なんか見るのは、あたしはたくさん」
「まさか、そんなものはもう残ってはいないだろう」
「いいから、とにかく少し休みましょうよ」
お松はさっさと下駄をぬいで、むしろの上へ座ってしまった。
「そうか。では、しばらく休んでからにするか」
千代三郎は苦笑しながら、小田原ぢょうちんの灯を消した。
「つけておけばいいのに」
「あかりは一つあればたくさんだろう」
一つになった床の間のろうそくは、玄関の雨戸もそこのふすまも入ってきたままに半分あけ放しになっているので、そこから流れてくる風に時々ゆらりゆらりとゆれている。
「浅吉、あのふすまをしめるがいい。寒い」
「勘弁しておくんなさい。せめてあれだけでも開いているのが心だのみでさ。いつでも外へ飛び出せやすからね。少しぐらい寒いのなんか我慢しまさ」
浅吉はむしろの端へ腰をおろして、そっちを向きながら、しっかりとひざを抱えこんでいう。
「しようのないやつだ」
千代三郎はちょうちんをお松にわたして、まだじっと立っている。人の言葉がとぎれると、空き屋敷の空気は陰々とのしかかってくるように重苦しい。いまにも破れ障子の外の廊下へ、ひたっひたっと腰元の足音が聞こえてきそうだ。
「因果だなあ」
浅吉がうめくようにつぶやいた時、がらっがらっと天井でものすごい音がしだした。
「わあっ」

浅吉が思わず飛びあがる。
「あわててはいかん。ねずみだ」
千代三郎がわらい出す。なるほど、何匹かのねずみが騒ぎ出したらしく、天井中を駆けまわっていたが、ふっとかき消すようにどこかへ行ってしまった。
「けっ、おどかしやがる」
浅吉はまだ青い顔をして天井をにらみあげていたが、
「あっ、だんな、出たっ」
急に玄関のほうへ逃げ腰になってあえぐ。
「静かにおしな」
しかりつけたお松も、あっと顔色をかえる。どこからか、ひたっひたっと水にぬれたような足音が、たしかに耳につくのだ。
「殿さま、聞こえない？」
「うむ」
千代三郎がじっと耳をすましていると、やがてぴたりと足音がやむ。
「あっしは、あっしは、もういけねえ」
浅吉はがたがたと歯の根があわないようだ。
「畜生――」
お松もじっとりとわきの下へ冷や汗をかいていたが、それと気がつくと、我ながら妙に悔しさがこみあげてきた。
「さぶだんな、あたしはもう化け物なんかに負けやしませんからね」
人間が死んだ幽霊なんかを怖がる、そんなことってあるもんかと気がついたのである。
「一体、あたしがそのお腰元にどんな悪いことをしたっていうのさ」
「そのとおりだ。そのつもりで落ち着いていてごらん」
千代三郎は涼しい顔をしてわらっている。

3

しかし、黙っていると、やっぱりお松は背筋がぞくぞくしてくる。

「殿さまは本当に強いんですね」
まだ立ったままの千代三郎の凛とした顔を、心からたのもしく見上げずにはいられない。
「いや、別にわしがあねごより強いというわけじゃない。まあ、あねごより少し分別があるだけのことかな」
「そうかしら」
「もし、本当にその腰元がいまだに成仏できずに迷って出るとする、なにか言いたいことがあるのだろう、不幸に死んだ気の毒なその腰元の心残りを聞いてやって、できれば望みをかなえてやりたい、そう考えれば、恐ろしいことはなにもなかろう」
「そういえば、たしかにそうねえ」
「憐憫の心ある者にもし仇をする幽霊があるとすれば、それは幽霊ではなく、狐狸のたぐいか、悪知恵のある人間のいたずらだ、少しも恐れることはない」
お松ははっきりとうなずいてみせながら、この人は本当に勇気があるんだと、なにかほれぼれとしてくる。
「お願いでございます」
ちょっと言葉のとぎれた時、どこからともなく陰にこもった女の細い声が、かなりはっきりと聞こえてきた。
「わっ」
浅吉はもう一度まりのように飛びあがり、
「殿さま――」
と、お松は我にもなく中腰になって、しっかりと千代三郎のひざへすがりついている。
「お願いいたします」
たしかに幽霊の声だ。
「遠慮なく申してみなさい」
千代三郎は静かに答える。
「お水を、お水をいただかせてくださいませ」
「出たあっ」
浅吉は耳をおさえて、がばとむしろの上へ突っ伏してしまう。

「その方はどこにいるのか。水をつかわすから、姿を見せなさい」
「殿さまの前におります」
千代三郎は静かにお松の肩をおしのけ、つかつかと次の間のふすま際へ進み、がらりとふすまをあけた。
黒々としたやみが口をあけて、だれの姿も見えない。
「これ、どこにいるのか」
しかし、もう返事はなかった。
「お松、ちょうちんに灯を入れて持ってきてごらん。できるか」
落ち着き払っている千代三郎の声だ。
「できます」
立とうとしたが、ひざがしらががくがくして急には立てない。
「あわてるには及ばぬ。ゆっくりやってみなさい。落ち着いてやらぬと、灯を消すおそれがあるぞ」
「はい」
お松は床の間の裸ろうそくのそばへいざりよった。ちょうちんを持った手がひどくふるえている。
——畜生、負けるもんか。怖いと思うから怖いんじゃないか。
我と我が心をしかりつけながら、
「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
と、思わず念仏をとなえていた。
やっと小田原ぢょうちんに灯をうつし、一生懸命に立ちあがって、ふらふらと千代三郎のところへ持っていく。
「はい、殿さま」
「えらいなあ、あねご」
千代三郎はそれを受け取って、じっと前の畳を見ている。
「どうしたんです。なにかあるんですか」
ひょいとその畳へ目をやって、
「あっ」

お松はまたしても千代三郎の腕へしがみつかずにはいられなかった。畳の上がひとところぐっしょりと水にぬれているのだ。
「ここに、ここに立っていたんですね、殿さま」
「そうらしいな」
「怖いっ」
「なにをいう、あねご。幽霊には足がないはずだよ」
千代三郎はわらいながらちょうちんの光を畳へ近よせてじっと目をすえていたが、黙って、そこから廊下のほうへ歩き出す。
「お松、わしにぶらさがっては重い」
「どこへ、どこへ行くの、殿さま」
「その足あとについていってみよう」
「なんですって――」
見ると、畳の上のほこりに、たしかに人の足あとらしいものがついて、廊下のほうへ出ているようだ。
「大丈夫。殿さま、そんなまねをして」
またしてもお松はがたがたとふるえてきた。
「大丈夫だ。足のある幽霊なら、お松だって怖くはあるまい」
「そういえば、これ、人間の足あとね」
「そうだ」
「畜生、だれかのいたずらなんですね」
「たぶん、そうだろう」
「人間なら、あたしだって怖かあない」
お松は急にしゃっきりとしてきた。ふだん付き合いのない幽霊だと思うからなんとも不気味だったが、人間なら、たいていの悪党とも、平気でわたりあえるお松なのだ。
千代三郎は、その足あとをちょうちんで照らしながら、障子をあけて廊下へ出る。足あとは廊下にもつづいている。
「わあっ、出たあ。化け物だあ」
ふいに、書院のほうから、浅吉のたまげるような声がおこった。
「おや、殿さま、書院のあかりが消えてます」

「うむ、来い、お松」
すててはおけないので、千代三郎はつかつかと廊下を書院のほうへいそぎ出す。

水門口のなぞ

1

「浅吉、どうした。しっかりいたせ」
あかりの消えている書院へ引きかえした千代三郎は、むしろの上へ突っ伏している浅吉のそばへ行って、勇気をつけるように一喝した。
「出た、――殿さま、たしかに出やした」
浅吉はまだがたがたとふるえながら、顔をあげようとしない。
「なにが出たのだ。顔をあげて、はっきり話してみなさい」
「浅、しっかりおしよ。男じゃないか」
お松もそばから励ますようにいう。
「床の間、床の間を見ておくんなさい」
「床の間――？」
千代三郎は小田原ぢょうちんをかざして床の間を見たが、無論なんにもいるはずはない。
「なんにもいやあしないよ。一体どうしたのさ」
「本当ですか。あっしはたしかに見たんでさ」
浅吉はおずおずと顔をあげて、床の間のほうを見る。
「あ、消えちまやがった」
「なにが消えたのさ。ろうそくがかえ」
「違うんだ。きれいな腰元が、すうっと、そこのあいている玄関のふすまのところへ立って、お水くださいと、あっしの顔をうらめしそうに見やしてね、あっとあっしがびっくりしているうちに、つつつうっと床の間のほうへ飛んでいったんでさ。あっしの顔へ冷たい水しぶきをかけながら、その腰元は頭からずぶぬれなんです」
「本当かえ」
お松はいそいでその辺を見まわしながら、

「だって、どこにも水のこぼれた跡なんかないようだよ」

と、変な顔をする。

「そ、そこがお化けだからね。だれがなんたって、あっしはたしかに顔へ水をかけられたんでさ。すごいのなんのって――」

浅吉はまったく青ざめた顔をしている。

「それで、その腰元は、床の間のほうへ行って消えたのか」

千代三郎が聞く。

「そうなんです。あっしのそばを通っていくんで、わあっ、出たあっと、あっしはもう夢中でござんした。殿さま、ここはたしかに化け物屋敷でござんす」

「そうか」

千代三郎はちょっと考えてから、

「お前がその目で見たというなら間違いはなかろう。ここがたしかに化け物屋敷とわかれば、もうそれでいい。なにも我々はここへ化け物退治にきたわけではないのだから、これでもどるとしよう」

と、あっさり言い出すのだ。

――おや、今になって、殿さま怖くなったのかしら。

お松は疑わしそうにちらっと千代三郎の顔を見たが、なにも意地になってまで、こんな不気味な屋敷にいつまでぐずぐずしていたくもないので、黙ってうなずいておく。

よろこんだのは浅吉で、

「ありがてえ。だいいち、幽霊を退治しようったって、そいつは無理な話ですからね。さっさと帰りやしょうや。あっしはもう、こんな屋敷はたくさんだ」

と、先に立って玄関のほうへ歩き出す。

「浅吉、お前本当にその腰元を見たのかえ。夢でも見たんじゃないのかえ」

「冗談でしょう。眠ってりゃ夢ってこともあるが、正直んとこ、あんなとこで眠れるほどあっ

しにゃ度胸はねえ。そういや、殿さまだって、あねごだって、幽霊の声は聞いたはずですぜ。あっしのは、もう一つおまけに、たしかに本物を見ただけの話でさ」

「そりゃ、声だけは聞いたけど――」

二人が話しながら玄関へ出ていく後から、千代三郎は書院のふますをもとのとおりにしめ、玄関を出ると、そこの障子も雨戸もちゃんとしめて庭へおりた。

「お松――」

小声で呼んで、そばへ寄り、耳もとへ口をよせて、

「表門を見張っていてみろ。だれか出ていく者があったら、跡をつけてみてくれ。わしはしばらく水門口を見張っていてみる」

と、素早くささやく。

「は、はい」

「化け物に悟られぬようにしろよ」

あっと、お松があっけにとられている間に、千代三郎はもうさっきの玄関わきの木戸からするりと内庭へ忍びこんでしまった。

「あれえ、殿さま――」

浅吉が驚いてなにか言おうとするのを、

「しっ」

お松の制する声が聞こえて、二人の足音はそのまま表門のほうへ歩き去る。

――これでよし。

千代三郎は暗い物かげをそっと裏庭のほうへ進み出した。

浅吉はたしかに書院で腰元の幽霊を見たという。幽霊ではなくて、それは女に違いない。自分たちが廊下へ出たすきに、女はわざとおくびょうな浅吉に姿を見せ、床の間のほうへ行ったのはろうそくを消しに行ったのだ。そして、素早く元のあいているふすまから出ていって、どこかに隠れたに違いない。

なまじ広い座敷をさがしまわるより、こんな空き屋敷に女が一人で住んでいるはずはないか

ら、こっちが帰ったと見せかければ、きっと女も帰るに違いない。

千代三郎はさっきのうなぎ屋の女中が怪しいと見ているのだ。

そして、そんな女が腰元の幽霊の芝居をして人を脅すからには、なにかこの空き屋敷へ人を近づけたくない秘密があるのに違いない。

——物好きとわらう者もあるだろうが、人間の疑惑を晴らしておくことは決してむだではない。

そう腹をきめている千代三郎だった。

千代三郎はまもなく裏の水門口の近くの林の中へ身をひそめて、しばらく様子を見ることにした。この空き屋敷へひそかに出入りする者があるとすれば、舟で水門口を利用するだろうと見たからである。

当てもなく人を待つということは、相当退屈で、根気のいる仕事だった。

——お松と浅吉は、つまらなくなって帰ったかもしれんな。

それならそれでいいと思う。幽霊が表門から帰るようなら、二人がそう退屈しないうちのことだ。二人が退屈するほど表門になんにもないとすれば、いよいよこの水門口が重要な役割を持っていることになる

はたして、この千代三郎の見込みに狂いはなかった。

2

——来たらしいな。

千代三郎はじっと聞き耳を立てる。ひたひたっと、林の小道のほうから草履の地を踏む音が耳についてきたのだ。どうやら、女の足音のようである。

小道から月かげの中へ出て掘り割りの桟橋(さんばし)のそばへ立ったのは、案の定、背のすらりとした腰元姿の娘で、それはたしかにうなぎ屋の二階で、たのみもしない水を運んできた腰元のよう

だ。

——やっぱり、これがここの幽霊の正体だった。

それにしても、この腰元はなにしにここへ出てきたのだろう。一隻も舟はつないでないのだから、ここから帰るのではあるまい。あるいは、迎えの舟でもくることになっているのか。

いずれにせよ、おぼろ月にひっそりとぬれて桟橋に立つ若い腰元の姿は、場所が場所だけに、いかにも幽霊じみて見える。ふいに人がこんなところを見たら、浅吉ならずとも、出たあっと、ふるえあがらずにはいられないだろう。

と、見ているうちに、塀の外の小名木川のほうへ耳を澄ましていた腰元が、足もとの小石をひろって、ぽんと川のほうへ投げた。

——合図だな。

と思っている間に、水門口から小舟が一隻、すうっと入ってきた。顔を包んだ侍が一人、自分でたくみに棹を操っているのだ。

「亀田さん——？」

上から腰元が待ちかねていたように声をかける。

「うむ」

亀田と呼ばれる覆面の侍は、大きくうなずいてみせながら舟を桟橋へつける。

——はてな、若侍と腰元のあいびきでは、とんだ不粋なまねをすることになるが。

千代三郎は苦笑しながら息をのんでしまった。

「ずいぶん待った——？」

「うむ、少し待ったが、なにかあったのか」

舟からあがってきた亀田は、すがりつくようにする腰元の肩を抱いてやりながら低い声で聞く。いよいよあいびきの気配が濃厚になってくる。

「あったのよ。あたし、気が気じゃなかった」

「賭場の連中か」

「違うのよ。また肝試しの物好きなの」

「ふうむ。蔵のほうは大丈夫だろうな」
「そりゃ大丈夫だけれど、今夜の肝試しは変わってるのよ。若い侍が一人に、いなせな兄い、それからあだっぽいあねごの三人」
「おかしな取り合わせだな。それでどうした」
「三人で店へきて、御飯をたべながらここの話をしているから、てっきり怪しいと思って、一度おどかしといたの。後はお新にまかせて、あたしは、あのこともあるし、すぐこっちへ来たんだけれど、やっぱりその三人がやってきたのよ」
「そうか。それでどうした」
「いまやっと、いつもの手で追いかえしたとこなの」
「やっぱり、逃げ出したか」
「でも、若い侍ってのがなかなかいい度胸なんで、ちょいと骨が折れたわ」
「御苦労だったな」
「さあ、こんどはあんたの番よ。一体、あの蔵の中の腰元はだれなのさ。まさか、あんたのいいひとじゃないんでしょうねえ」
女の顔にも、声音にも、嫉妬の色がかくしきれない。
——これは聞き捨てならぬ。
林の中の千代三郎は、蔵の中の腰元という一言に、思わず緊張する。
「お米、お前はおれが信じられないのか」
「そりゃ、信じてはいるけど——」
「さっきも言っておいたじゃないか。おれはお前のために早く出世がしたいんだ。だから、危ない橋は承知の上で、こんなまねもするんだと。それがお前にわからないんなら、おれはもうこの仕事はやめる。今ならまだなんとでもなるから、いっそ故郷へ帰って百姓にでもなろう」
「怒っちゃいやだ。あたしが悪かった。きっと、あんたのいうことをきいて、どんなことでもするから、きげんを直して、ね」
「じゃ、本当に片棒かついでくれるか」
「かつぐわ。夫婦なんだもの、どんな苦労をし

たっていい。早くあんたが百石取りぐらいになってくれたら、あたしどんなにうれしいかしら」
「そりゃなれるさ。この仕事がうまくいけば、ちゃんとそういう約束になっているんだ。しかも、忠義のためなんだからな」
「すると、あの蔵の中の腰元は悪人てわけね」
「いや、悪人というわけじゃないが、敵と味方なんだからしようがないんだ。その話は、いずれくわしくする。今はおれを信用していてくれ」
「するわ。それで、あたしにたのみたいって、どんなことなの」
「ちょっと大役なんだ。しかし、お前ならきっとできる。やってくれるな」
「やります。あんたの出世のためなんだもの。どうすればいいの」
「だれも聞いちゃいないだろうな」
男は急にあたりを見まわす。
「大丈夫よ。今夜は賭場はない日だし、こんな化け物屋敷へだれがくるもんですか」
女は自信ありげにいう。
「お前、頭巾を用意してきたろうな」
「持ってるわ、そら」
お米はたもとからお高祖頭巾を出してみせる。
「まず、それをかぶってな、あの蔵の中の腰元ということになるんだ」
「それから――」
「おれがこれから案内して、屋敷の奥御殿の庭へつれていく。なあに、味方が方々にいるんだから、決してつかまる心配なんかない。そこは姫君の寝所の雨戸の外なんだ」
「どうしようっていうの」
「お前がその雨戸を、そっと指の先で三つずつ二度たたくと、姫君が頭巾をかぶってこっそりと出てくる。お照かと聞くかもしれないから、そうしたらうなずいてみせて、口をきくなと手で教えるんだ。お前は決して口をきいちゃいけない」

「ずいぶん大役なのね」
お米は息をのんだようである。
「うむ。姫君はまた、三郎はと聞くかもしれない。そしたら、黙って庭のほうを指さして、姫君の手を取って、できるだけ早く寝所を離れるんだ」
「そして、どこへつれていけばいいの」
「水門のところへ舟をつけておれが待っているから、そこまでおつれすればいいんだ」
千代三郎は愕然とせずにはいられなかった。お照はお鶴さまの腰元の名だし、三郎とは昨日自分がお鶴さまに名乗った名だ。
すると、蔵の中の腰元というのは、あのお照のことなのだろうか。
「一体、そのお姫さまをどうしようというの」
さすがにお米も少し不安になってきたらしい。
「いや、決して姫君の悪いようにはならないのだ。姫君にはさる若君との間に前から婚約がきまっていたが、それがあまり気に入らない。つまり、三郎という若殿が好きだからだ。我々は今夜姫君をその三郎という若殿のところへおつれしようと骨を折っているんだ」
「じゃ、お姫さまはよろこんで出てくるわけですね」
「そうさ。自分がいやなものなら、寝所から一人でぬけ出しはしないからね」
「それで安心したわ」
お米はようやく納得したらしい。
「よし、もうそろそろいい時刻だ。出かけよう。舟に乗ってくれ」
「ええ」
「蔵の中は見てこなくても大丈夫だろうな」
「大丈夫よ。あたしがいま見てきたばかりだから」
「そうか。それなら安心だ」
男は先に小舟へ乗ってもやいを解く。その間に女は手早くお高祖頭巾で顔をつつみ、男に手

を取ってもらって舟に乗り移った。
「出すぞ。いいか」
男は棹を取って、たくみに舟を操り、たちまち水門口から消えていく。

3

——妙なことになったものだ。
さすがの千代三郎も、まったくあっけにとられた形である。
お米の口ぶりから判断すると、この化け物屋敷は日ごろ秘密の賭場に使われていたらしい。人が近づいては都合が悪いから、わざと幽霊が出ると言いふらし、それでも物好きが入りこんでくると、あの娘がお水の腰元に化けて、うまく追いかえしていたのだろう。
化け物屋敷の正体はそれでわかった。
聞き捨てにならないのは、今の二人の密談である。
要するに、亀田という男は、この化け物屋敷を利用して、今夜姫君を寝所からここへつれ出そうとたくらんでいるようだ。しかも、すでに腰元が一人ここの蔵の中へつかまってきているらしい。それが昨日のお照だとすると、つれ出されてくる姫君はお鶴さまということになりそうだ。しかも、三郎という名まで出ているのである。
——とにかく、その蔵の中を調べてみるほうが先だ。
一刻もためらっている場合ではないので、千代三郎は即座に行動を起こした。
内庭へ取ってかえして、屋敷の西側には蔵らしいものはないとわかっているから、すぐに東側へまわってみた。はたして、台所口と思われるほうに、外蔵が一つある。
——あれだ。
戸口へ寄ってみると、ちゃんと錠がかけてある。うまくいくかなとは思ったが、試しに錠に手をかけ、力いっぱいねじあげてみた。いいあ

んばいに、錠は雨ざらしにあって半分腐っていたか、がちゃりと外れてくれた。

とびらをひらくと、中は格子戸だ。

「お照、――お照」

返事はないが、たしかに人の気配がする。

格子戸をあけて暗い中をのぞいてみると、外からの月あかりに、そこの床の上へころがされている女の姿が目についた。

「お照――」

素早く飛びこんでいって、それを引っ抱え、蔵の中にぐずぐずしていて外からしめこまれでもしては一大事だから、用心深くひらりと外へ飛び出す。

「しっかりいたせ。いま助けてつかわすぞ」

腰元は手足をがんじがらめにされ、手ぬぐいでさるぐつわまでされているのだ。差し添えを抜いてなわを切りほどき、さるぐつわを解いてみると、やっぱりお照だった。

「あっ、三郎さま――」

やっとそれとわかったらしいお照は、いきなり千代三郎のひざへしがみついてきたが、あまりの恐怖に、とっさには口もきけぬらしい。がたがたと子犬のように体中をふるわしながら、肩で息を切っている。

「もう大丈夫だ。ゆっくりと気をしずめなさい」

千代三郎はやさしくその背中をなでてやりながら、決していそいでものを聞こうとはしなかった。

「は、はい。あたくしは、照は、助かったのでございますね」

「うむ、助かったんだ。三郎は強いからな、もうだれがきたって大丈夫だ。必ず屋敷へ送りとどけてつかわす」

「うれしい。でも、どうして、どうして三郎さまは、こんなところへ――」

「わしはな、ここへ今夜化け物退治にきたんだが、お照はどうしてまたこんなひどい目にあわされたんだね」

「だまされたのでございます」
「ふうむ、だれにだまされたんだね」
自然と話を引き出していく。
「あたくし、お姫さまのお使いで、新大橋へ出かけるところでございました」
「はあてね。すると、わしに会いにくるところだったのか」
千代三郎はちょっと目をみはる。
「はい。お鶴さま、どうしても行けとおっしゃるのです」
お照もようやく落ち着いてきたようだ。
「どうしてもとねえ」
「お鶴さまは三郎さまと約束をした。三郎さまが新大橋でいつまでも待っていては気の毒です。鶴は当分屋敷がぬけられませんから、ようくそのわけを話して、鶴は三郎をいつまでも忘れずにいるとお耳に入れておいてくれと――」
「なるほど。つまり、見張りがきびしくなったわけだね」
「はい」
「しかし、そんなにきびしい見張りの中を、お照はよくぬけ出してこられたな。昨日あれから屋敷へ帰って、家老にしかられたんだろう」
「はい。でも、それはお鶴さまのほうから先におわびなされましたから、そんなにはしかられませんでした。ただ、大切なお体なのだから、今後はきっとじいに心配をかけてくれませんようにと、くれぐれも念を押されただけです」
「ふうむ、やさしい家老なんだね」
「ええ、それはもう、先殿さまからおあずかりして、子供の時からお育てしたのですから、普通とは違います。照、お前が気をつけてくれなくては困るではないかと、そうやさしくいわれますと、あたくし、しかられるよりつろうございました」
「一体、お鶴さまは少し勇気がありすぎるんだね。とてもすばらしいお姫さまだが、それだけに家老も心配が絶えないんだろう」

「そうなのでございます。今日もあたくし、新大橋へ行けと申されましても、そんなこと御家老さまには申し上げられません。かくれてお屋敷を出なくてはならないので、昨日の今日、また御家老さまに後でしかられるかと思いますと、本当に困ってしまいました」

「それはそうだろう。こんどわしがお目にかかったら、よく言っておいてあげよう。しかし、よく出てこられたなあ」

原因はあの新大橋で会う約束にあるのだから、千代三郎にも責任がある。ついそうなぐさめてやらずにはいられなかった。

「お鶴さまは、病気だといって部屋に引きこもり、裏からそっと出ていけばよい、もどってきたら寝所の雨戸をたたけ、鶴があけてやる、たとえ万一見つけられても、鶴のいいつけだと正直にいうがいい、後は鶴がなんとでもしてあげるとおっしゃるのでございます」

「なるほど――」

そのくらいのことは言いかねない姫御前だと、千代三郎はちょっとたのしくなってくる。

「あたくし、そうしますと申し上げて、日暮れ前にそっと裏口までぬけ出しました。そこで、亀田半蔵というお庭番の若い足軽に見つかってしまったのです」

「そうか。亀田にねえ」

「御存じでございますか、亀田を」

「うむ、少し知っている。あんまりいい性質の足軽ではなさそうだね」

「はい。ふだんはまじめな忠義者なので、どこへ行くのかとたずねられましたから、お姫さまのお使いです、すぐもどるから見のがしてくださいとたのむと、よくわかりました、しかし裏口ではあぶない、いっそわしが水門口から舟で隣屋敷へ送ってあげる、あそこは化け物屋敷という評判があるからだれも近よらない、あそこの門からぬけ出すがいいと教えてくれました」

「それが手だったんだな」

「そうなのでございます。それとは知らず、うっかりここの水門口まで送られてきますと、いきなり飛びかかってきまして、縛りあげ、この蔵の中へ入れられてしまったのでございます」
「しかし、お照をこんな目にあわせた亀田の目的はなんなのだろう」
「さあ、あたくしは手ごめにされるのかとそればかりが恐ろしくて、生きた空もございませんでした」
　すると、お照はまだお鶴さまが亀田につれ出されることには全然気がついていないようだ。
「お照、いまお前は隣屋敷といったねえ」
「はい」
「すると、お鶴さまは北条美濃守の先代の息女ということになるのか」
「さようでございます」
「御当主はたしか、先代のいとことかなにか、支藩から入った方だったな」
「はい、御当主さまは先代さまが亡くなられる時の御遺言で、次のお世つぎはお鶴さまに御養子を迎えてというお約束のもとに支藩から入られたお方でございます」
「なるほど――」
　どうやら、千代三郎は、そこに深いなぞがありそうだと、やっと見当がついてきた。

仮の宿

1

「お照、くわしい話はまた後で聞こう。今夜はお鶴さまの身にも大事がおこりそうだ。わしといっしょに行ってみてくれ」
　千代三郎は裏の水門口が気になってきて、急に立ち上がった。
「はい。あの、お姫さまがどうかなすったのでございますか」
「うむ、亀田がお前の偽者をこしらえて、お鶴

さまもここへ誘いこもうとしているようだ」
「まあ」
お照はびっくりしたように顔色をかえる。
「歩けるか」
「はい、歩けます」
千代三郎は先に立って庭へまわり、木戸口から外庭へ出た。そこの雑木林をぬけると、例の掘り割りの船着き場へ出る。
「ここは、しばらく口をきいてはいかぬ」
「はい」
耳を澄ましながら、足音を忍んで林の小道を半分ほど進むと、はたしてそっちから人の声が聞こえてくる。
「照、三郎はどこです」
たしかにお鶴さまの声だ。
あっと息をのむお照の手をつかんで、千代三郎は素早くそこのしげみの中へ身をかくす。
「こちらでございます」
低い声で答えているのは偽お照のお米だろう。
「林の中ですか」
「はい」
「半蔵、そなたはそこで待っていますように」
お鶴さまはまったく人を疑うということを知らないらしい。凛とした声で舟の上の亀田に言いつけてから、林の中へ進んできたようだ。
——それにしても、少し勇気がありすぎるようだな。
千代三郎がまゆをひそめていると、まもなく目の前の小道へ、お高祖頭巾のお米が先に立ち、お鶴さまは白羽二重の寝巻きの上から紫羽二重の被布を羽織っただけの天女のような姿をあらわしてきた。
と見ているうちに、お鶴さまは、ふっと立ち止まって、
「照、お待ち」
と、静かに偽お照を呼びとめる。
「はい」

「大きな声を立ててはいけません」
お鶴さまはそういって、じっとお米の頭巾の顔を見すえてから、
「そなたは照ではありませんね。そのかぶり物を取ってごらんなさい」
と、落ち着いた声で言いつける。
あっ、とお米はびっくりしたように、じりじりと後ずさりを始める。
「しかるのではありません。途中から違うと気はついたのですが、照のことが心配になるので、黙ってついてきたのです。照はいまどこにいるのです」
木の間漏る月かげに、毅然とした立ち姿が、神々しいまでに美しいお鶴さまだ。
「は、はい」
お米は、その気品に打たれて、顔があげられないようだ。
「申し訳ございません」
千代三郎のうしろで、いまの姫君の言葉に胸をつかれたのだろう、お照が身をかたくしながらつぶやいていた。
「そなたの罪はとがめません。このままなにも聞かずに許してあげますから、照の居どころだけを正直に申しなさい」
「あの、あそこの蔵の中です」
お米が内庭のほうを指さしておろおろと答える。
「縛られているのですね」
「はい」
「だれか番人はついていますか」
「いいえ、番人はいません」
「では、そこへ案内してください」
「はい」
お米は、なにかほっとしたように、歩き出そうとする。
——そうか。悪人どもはお鶴さまも蔵の中へ閉じこめる計画だったのだな。
千代三郎は大体見当がついたので、

「お鶴さま、お照はここにいる」
そう声をかけながら、すっと小道へ出ていった。
「まあ、三郎――」
お鶴さまがびっくりしている間に、それよりも驚いたお米が、あっと飛びあがらんばかりになっていきなり逃げ出そうとした。
「お米、逃げなくともよい」
千代三郎は素早くその腕をつかんで、
「お鶴さまがお前の罪は許すと約束した。だから、わしもお前はとがめないことにしよう。お前は亀田という男にだまされているだけだ。本当のことはなにも知らないのだからな」
と、おだやかに言って聞かせる。
「すみません、だんな」
「さあ、歩きながら話そう。少し忙しくなった。お鶴さまもいっしょにおいでなさい」
千代三郎は、お米の腕をつかんだまま、先に立って内庭のほうへ歩き出す。
「どこへ行くのです、三郎」
自分が手をひいてもらいたそうな顔をして、うしろからお鶴さまが聞く。
「いいところへつれていってあげます」
「昨日の水茶屋ですか」
「あそこは夜は店をやっていないでしょう」
「鶴はあそこが好きです。かもめが飛んでいましたね」
お鶴さまは昨日のたのしい夢を思い出しているらしい。甘い声音だ。
「かもめなら、お鶴さまの屋敷からだって見えるでしょう」
「でも、三郎といっしょでなければ、鶴はつまりません」
「わしもさっき新大橋の上でたくさんかもめを見てきたが、お鶴さまといっしょでないからつまらなかった」
「まあ、うれしい。では、三郎はやっぱり橋の上で鶴を待っていてくれたのですね」

木戸から内庭へ入ると、お鶴さまは我慢できなくなったように、さっさと千代三郎の左側へ肩をならべてきた。

「それは、三郎は約束を守る勇士ですからな」

「手をひいてください、三郎」

「冷たい手だなあ。お鶴さま、寒くはないのか」

「ああ、こんなかっこうで、ごめんなさい。着物を着替えている暇がなかったものですから」

「かまいません。どんなかっこうでも、わしにはお鶴さまが天女のように美しく見える」

腕をつかまれているお米も、うしろから供をするお照も、すっかり当てられてしまったらしく、黙ってうなだれて歩いていた。

まもなく、さっきの蔵の前へ出てきた。

「三郎、これは蔵のようですね」

「そうです。お照はここへ入れられていたのです」

千代三郎はそう説明してから、お鶴さまの手を放して、お米のほうを向いた。

「お米、一つだけ聞きたい。亀田は仲間を呼びに行っているんだな」

「あたし、あたし知りません」

「そうか。知らなければ無理に聞かなくてもよい。しかし、お前はお鶴さまもこの蔵の中へ閉じこめておくようにと亀田にいいつけられていたのだろう」

こんどは返事をしなかった。

「よろしい。それも聞くまい。しかしな、お米、お前は知らなくても、悪人どもはお鶴さまになにか仇をしようとたくらんでいることは事実だ。お前はその道具に使われている。いまお前をここから自由にしてやると、お前はきっと悪人どものところへ走る。それでは我々が迷惑をするから、しばらくこの蔵の中へ入れておく。いいだろうな」

「は、はい」

お米はもう反抗しようともしなかった。自分が人をだましてそんな目にあわせようとしたの

だから、自分がそうされてもしようがないと観念しているのだろう。

「三郎、こんな暗いところへ一人で入れて、ねずみにいじめられませんか」

お鶴さまが心配そうに聞く。

「いや、お照はここへ手足を縛られて投げこまれていたのです。それでもねずみに食われなかったんだから、お米は縛らないのだし、大丈夫でしょう」

「だれか助けにきてくれるのですか。だれもきてくれないとかわいそうですよ」

「その心配もなさそうです」

千代三郎が蔵の戸をあけると、お米は自分から悄然と中へ入っていった。

「お米、お前が本当に亀田を思っているなら、悪いことはやめるようにと、真心こめて意見してやるがよい」

「は、はい」

お米は急にたもとを目にあてたようだ。

千代三郎は思いきって蔵の戸をしめる。

2

「さあ、いそぎましょう。ここにぐずぐずしていては、また敵の術中に落ちそうです」

千代三郎はお鶴さまの手を取って、足早に表門のほうへまわっていった。

「三郎、鶴は本当に悪人にねらわれているのですか」

お鶴さまがふしぎそうに聞く。自分ではまだなんにも気がついていないようだ。のんびりしているというより、それだけ陰謀組のほうが狡智に立ちまわっているのだろう。

「今夜のことから見ると、そう考えるほかはありません」

「どんな悪人なのでしょう。半蔵もその一人なのですか」

「そうです。いまにわかってきます」

「では、鶴はもう屋敷へは帰れないのですか」

「よく調べてからでないと、当分は帰れません。帰らないほうが安全です」
「じいが、外記が心配しないでしょうか」
「それは心配するでしょうが、当分は仕方がないでしょう」
「鶴はどこへ行くのです。三郎の家へかくれるのですか」
「さあ――」
千代三郎はさっきからそれを迷っていた。このまま自分の屋敷へつれていくほうがいちばん安全には安全だ。
しかし、そうなると、北条家の探索は家来の手にうつさなくてはならない。事があまりおおげさになって公儀が仲へでも入るようになると、北条家の家名にかかわってこないともかぎらないのだ。とにかく、自分の手でさぐってみる、そうするには、屋敷へ帰ったのではまずい。
「三郎の家は遠いのですか」
「いや、そう遠くもありませんが、もう少し考えさせてください」
ちょうど表門のところへ出てきていた。
――お松と浅吉はどうしたかな。
くぐりをあけて往来へ出てみると、新高橋通りのほうの角にぼんやり立ってこっちを見ているのがそれらしい。待っていたかと安心しながら、お鶴さまの手をひいてそっちへ進んでいくと、
「まあ、さぶだんな――」
お松があきれて前に立ちふさがる。
「へえ、こいつは恐れ入谷だ。幽霊にしちゃ足がありやすね、だんな」
浅吉もまじまじとお鶴さまの顔をながめている。
「三郎、この二人はだれです」
「こっちはお松、こっちは浅吉、二人とも三郎の家来です」
「言葉をかけてもかまいませんか」
「かまいません。――お松、浅吉、お鶴さまだ」

「あっ、ちげえねえ。昨日のお腰元さんですね、だんな」
「そうだ」
「へえ、おかしいな」
「なにがおかしい」
「いやだぜ、だんな、このお腰元さん、あんな化け物屋敷に住んでいるとすると、本当にこれなんじゃありやせんか」
浅吉は両手を胸のところで垂らしてみせて、ぶるっと身ぶるいをしている。
「そなたは鶴が幽霊に見えますか」
お鶴さまはわらっている。
「口をききやすねえ、だんな。お水をくださいまし」
「お水って、なんのことです、三郎」
「まあよろしい。ここはまだ敵のおひざもとです。いそぎましょう」
すぐそこに問題の北条家があるのだ。千代三郎はいそいで菊川町のほうへ曲がり、横川にそって歩き出す。
「お松、どこかにしかるべき旅籠屋はないかな」
歩きながら千代三郎はお松に聞く。
「泊まるんですか、殿さま」
「うむ、みんなで泊まるんだ」
「長喰町じゃ少し遠すぎるかしら」
「そうだな、なるべく近いほうがいいな」
夜更けでほとんど人通りはないが、それだけに、こんな寝巻き姿のお姫さまをつれて歩いているのを見られると人に怪しまれる。
「たしか、松井町に一軒、あんまり立派でないのがありましたけど、そんなところでもかまわないかしら」
「どこでもかまわぬ、泊まれさえすれば」
「じゃ、そこへ行ってみましょう」
お松はどうやらもうお鶴さまの素姓をほぼのみこんだらしい。おとなしく後からついてくる。
「三郎、旅籠屋へ泊まるのですか」
お鶴さまが重そうに庭下駄を鳴らしながら聞

く。

「今夜はそのほうが安全のようです」

「三郎の家にも悪人がいるのですか」

「いや、わしの家にはそんな悪い家来はいないが」

その悪人で千代三郎はふっと思い出した。

「浅吉」

「なんです、だんな」

「お前、いまの化け物屋敷へ、もう一度一人で行くのは怖いか」

「へえ、だんなの前だが、あんまり感心したところじゃありませんね」

「しかし、お水の化け物はもうつかまえて台所口の蔵の中へ閉じこめてある。いたずらはもうしないぞ」

「本当ですか、だんな」

「本当だ。あれはな、やっぱり、さっきのうなぎ屋の娘だった」

「へえ、おどろきやしたねえ。じゃ、人間のいたずらだったんですね」

「うむ。人間のいたずらとわかってもまだ怖いかね」

「人間ならちっとも怖かああありやせんや。こう見えても、あっしだってはやぶさの浅吉でござんすからね」

いつもなら、この辺でお松がまぜっかえしに出るところだが、なにか大変なことが持ちあがっていると勘でわかるのだろう、黙ってひかえている。

「実はな、その蔵の中へ閉じこめてきたお米というあの娘を、必ず助け出しにくる人間がいる。たぶん、覆面をした侍たちだろう。つまり、その侍がお鶴さまの敵なのだ。彼らがどんな話をするか、それをそっとかくれて聞いてきてもらいたいんだが、いやかな」

「こいつはおもしろそうだ。行きやすよ、だんな」

「行ってくれるか」

「行きやすってさ。あっしは化け物は苦手だが、そういう悪い野郎どもの裏をかいてやるのは大好きなほうでしてね」
「へたをやって、もし見つかると命がないぞ」
「だからおもしろいんでさ。じゃ、ここからすぐ引っかえしやす」
「急に強くなったんだねえ、浅」
お松がわらいながら口を出す。
「だんなに弱いところばかり見られたんじゃ立つ瀬がねえものな」
「本当さ、しっかりやっといでよ。旅籠は松井町の佐倉屋にするからね」
「合点だ」
浅吉はくるりときびすをかえして走り出す。

3

松井町の佐倉屋という旅籠屋は、なるほど、そう立派な家ではなかった。どう踏んでも中の上までも行かない格で、そのかわり客の素姓もあんまり洗い立てようとはしない。
夜は更けているし、連れがまた妙な取りあわせなのだから、お松がまず一人で先へ入って、出てきた中年の亭主に、
「実は、知り合いのさるお旗本の若殿さま御夫婦が、ぜひ一度旅籠屋というものに泊まってみたいと急に相談されたもんですから、こんなに遅くおつれしたんですけれど、こちらへ一晩泊めてやっていただけませんかしら」
と、うまく持ちかけてみると、
「結構でございますとも。ごらんのとおりで、あんまり上等の座敷もありませんが、よろしかったらお泊まり願います」
と、二つ返事で承知してくれた。
無論、食事もすんでいるし、ふろもいらない。茶だけもらって、後は寝るだけだ。それでも、この家ではいちばん上等らしい奥の八畳と六畳二間つづきの座敷へ案内されて、すぐに着替えを持ってきてくれたが、これもだれも着替えよ

うとはしない。
「三郎、これが旅籠屋ですか」
お鶴さまは妙を顔をして、座敷中を見まわしている。
「さよう、これが旅籠屋といって、金を出せばだれでも泊めてくれる家です」
そう説明する千代三郎も、こんなみすぼらしい座敷へ泊まるのははじめての経験である。
「あの、鶴はお金を持っておりません。かまいませんか」
「大丈夫です。わしが用意しているから」
「どのくらいで泊めてくれるのでしょう」
「さあ、一両はかからないでしょう」
お照といっしょに次の間に遠慮していたお松が思わず吹き出す。二百五十文（二銭五厘）出せば、二の膳つきの上旅籠に泊まれる。職人の手間が一日三匁（三銭五厘）前後、一両あれば女房子を養ってひと月暮らせる。
「もう少し高いのか、お松」
銭勘定はからっきしわからない千代三郎である。
「殿さまがそんな心配をしなくたっていいんですよ。あたしが心得ていますから」
「そうか。ここで少し密談をしてもいいかなあ」
部屋があまり狭すぎる。他人に立ち聞きされるのを恐れるのだ。
「小さな声で話せば大丈夫です」
「そうか」
「あたしたちも廊下へ出ていましょうか」
「いや、それには及ばぬ。お前たちはみんな味方だ」
「ああ、そうそう、殿さまとお姫さまはさるお旗本の若夫婦という触れこみになっているんですから、ここの家の者がきたらそのつもりにしておいてくださいよ」
「ふうむ。お鶴さまどうする」
それは少し早すぎたと、千代三郎はお鶴さまに遠慮がある。

「鶴は、あの、三郎が好きですからかまいません」

さすがにみるみるほおが真っ赤になってくるお鶴さまだ。その風情が見た目にもひどく初々しい。

——憎らしいなあ。

お松はいまさらになって、大事な男をお鶴さまに取られてしまったような、なんとなくやきもちがやけてくる気持ちだった。

「お鶴さま、今夜の御寝所の宿直はだれだったな」

改まって千代三郎が切り出す。

「中老菊島と、いつもは照ですけれど、照は今夜病気ということになっていますので、桃代という腰元でした」

「その二人に、お照が今夜帰ってきて寝所の雨戸をたたくことは話してあったのですか」

「いいえ」

「では、お鶴さまが自分で寝ずにお照を待っていたのですな」

「ええ」

「お米が雨戸をたたいた時、よく菊島と桃代が目をさまさなかったものですな」

「寝入りばなですから、二人ともぐっすり眠っていたようです」

「下屋敷の家来の中でいちばん偉いのはだれです」

「じい、北崎外記です」

「その次は——」

「用人馬場三十郎です」

「働き者なんだな、その三十郎という用人は」

「才知者だと、外記がいつも感心しています」

「年はいくつぐらい——」

「今年たしか三十三」

「好男子ですね」

「三郎のほうが立派です」

お鶴さまがうれしそうにいって、またしてもぽっとなる。

「お中老さまは――？」
「菊島は二十五です」
「ずっとお鶴さまについているのですか」
「去年からです。その前はお上屋敷の中老でした」
「しっかり者で、お鶴さまにやさしいな」
「八重垣流の小太刀をよく使います」
「用人の三十郎とは仲が悪いでしょう」
千代三郎はそれとなくお照の顔を見ている。
お照の顔がなんとなく赤くなっているようだ。
「鶴のことで、時々二人は口争いをしています」
お照はちらっとお鶴さまの顔を見て、千代三郎に見られているとわかると、はっとしたように目を伏せていた。
「お鶴さまは十八でしたな」
「ええ」
「もう御養子を迎えてお上屋敷へうつるはずですな。御祝言はいつごろです」
「その話はいや――」
急に強くかぶりを振って、下を向いてしまう。
「しかし、いやだといっても、外記が承知しないでしょう」
「いいえ、外記にこんどはっきり断ります」
「どうしてです」
「三郎が、三郎が好きになったからです」
これは千代三郎もまったく不意打ちだった。
「では、その御養子が昨日から急にいやになったのですか」
「ええ。その前からどうしようかと考えていましたけれど」
「それはどういうわけです」
「お上屋敷にお跡つぎがいます。外記は亡くなったお父さまの御遺言だからといいますけれど、鶴はずっと下屋敷にいてもいいという気持ちでした。争いはいやです」
「ほう、そんな争いがあるのですか」
「あるように聞いていますけれど、鶴はいやで

すから、聞かないようにしています」
「なるほど、お鶴さまは立派ですなあ」
これはまったくすばらしい天女だと、千代三郎はいよいよ好ましくなってはくるが、しかし、その争いを解決しなければお鶴さまの命があぶないということも、はっきりわかってきた。
しかし、この争いは、実際の勢力において、外記のほうが強い。つまり、北条家一藩は、当主よりも外記を中心にして先代を慕っている家来のほうが多いということになる。だから、当主側はどうしても非常手段を取る必要に迫られてきたのだろう。
「三郎、もうその話はよしましょう。鶴は、鶴はこのまま三郎のおうちへ行ってはいけませんか」
お鶴さまがこれはまた思いきったことをいい出す。

送りおおかみ

1

うす汚い旅籠屋の一夜はあけた。
昨夜おそく化け物屋敷から帰ってきた浅吉の話で、
「だんな、覆面がらすはたしかに出やしたぜ。しかも、ぞろぞろっと六人。一人は案内役の亀田半蔵って野郎でさ」
と、その時の様子が手に取るようにわかった。
五人で蔵の前を取り巻いて、亀田がとびらをあける。中から出てきたのは、思いもかけないうなぎ屋のお米だ。
「あっ、こりゃどうしたんだ、お米」
亀田がびっくりして叫んだという。
「もうだめだわ、亀田さん。宵の口に肝試しにきた三郎って侍がどこかにかくれていて、わた

したちの話をみんな聞いてしまったんです。あたしたちがお姫さまを連れ出しに行った留守に、この蔵の中から腰元を助け出して、あの林の中にかくれていて、あたしがお姫さまを連れて通ると、いきなり飛び出してきたんです」

「その三郎ってのは、若い着流しの身分ありげな侍じゃないのか」

「ええ、どこかの若殿さまみたいな立派な人で、お姫さまはとてもうれしそうに、その三郎と水茶屋の話をしていました」

「すると、あの男ですな」

と、亀田は首領らしい覆面がらすの顔を見ていたという。

「それからどうしたんだ」

「どうもこうもありゃしません。お前はだれかにたのまれてお鶴さまもこの蔵へ押しこめる気だったんだろう。身がわりにお前がこの蔵の中へ入ってろ。命だけは助けてやるから、もう悪いことはやめろって、あたしがここへ入れられちまったんです」

それから、どうしようという相談になって、首領は亀田とお米に、お前たちは当分姿をかくしていろ、お前たちさえつかまらなければ、証拠のないことだから、後はなんとでもなるといって、金をわたしていたという。

「大将がらすのやつは、お姫さまの連れていかれたことはそう心配していなかったようですぜ」

浅吉はそういって、変な顔をしていた。

「敵はな、お鶴さまのいなくなったほうが都合がいいんだ」

千代三郎がそう説明してやると、

「それなら、ちょうどいいや。どうです、だんな、いっそこのまんま、だんながお鶴さまをお嫁さんにもらっちまったら」

と、そんなのんきなことをいっていた。

しかし、千代三郎は行儀がよかった。八畳と六畳の間のふすまはあけ放して、六畳のほうへ

お照、お松、浅吉の寝床を取らせ、こっちはお鶴さまの床はのべさせたが、自分の床は取らせなかった。床柱を背にして座って、わずかに居眠りをしながら一夜をすごしたのである。

鷹揚なのはお鶴さまで、

「三郎、寒くはありませんか」

と心配はしたが、

「でも、三郎がそうして番をしていてくれますから、鶴は安心して眠れます」

と、すぐにぐっすり寝入ってしまったようだ。

——これはまったくすばらしい天女だ。

千代三郎は、その安らかな寝顔をながめながら、心からほほえましかった。

「さぶだんな、本当に寒くありませんか」

一度だけ、お松が向こうからそっと声をかけていた。

「いや、わしは勇士だから、別に寒くはない」

千代三郎はのんびりと答えておいた。

その実、頭の中は決してのんきではなかった。明日のことを考えておかなくてはならないからである。

要するに、敵は、鶴姫に不行跡の汚名をきせ、家督の資格を奪って、その鶴姫の後見役たる家老北崎外記の責任を問い、その地位を失脚させれば目的は足りるのだ。

そして、敵の筋書きは、今夜ほぼ思うつぼにはまったことになる。

なんといっても、お鶴さまが今夜一人で寝所を抜け出したことは、姫君にあるまじき不行跡であり、しかもそれが男に会うためとあっては、いよいよ申し訳が立たない。

そういう不行跡を知らずにいた外記は、その姫君の行方さえわからぬとなると、切腹はまぬがれないのだ。

——どうすれば外記を救ってお鶴さまを幸せにしてやれるか。

いちばん簡単なのは、夜が明けたらお鶴さまをこのまま屋敷へ送って、敵の策謀をあばき、

お鶴さまのために弁解をしてやる、それで一応は敵も泣き寝入りにするだろうが、敵のうしろにはどうやら当主の意思が働いていそうだ。それだと、鶴姫がどうにかなるまで策謀はやまないだろう。悪くすれば一服盛られないともかぎらないのだ。

要するに、鶴姫が家督を辞退してしまえばいいので、お鶴さまは争いは好まぬといっている。その点を北崎外記はどう考えているのか、まずその意中をさぐってみることが先決問題ということになってくる。

――よし、明日はともかく外記に会ってみよう。

こっちから屋敷へ顔を出すことは、敵に顔を知られているだけに危険ではあるが、手紙などでは用の足りない問題なのである。

うつらうつらと、そんなことを考えているうちに、とうとう朝になってしまったのだ。

お鶴さまは寝起きもまたほがらかであった。

「照、照、着替えをします」

目をさますとすぐ次の間へ呼んでいたが、自分でもすぐに気がついたらしく、

「ああ、今日は着替えがなかったのですね」

と、困ったような顔をした。

「お被布をお召しなさいませ」

お照が被布を取って寝床の前へ進むと、

「三郎、髪を直すまでこっちを向いてはいけません」

ちゃんと言いつけておいてから、床の上へ起きあがっていた。

朝の食膳が出ると、はじめはちょっと気味悪そうだったが、こうしてみんなで膳をならべてにぎやかに食事をするのは珍しいので、それがひどく気に入ったらしく、

「三郎、鶴がお給仕をしてあげましょう」

と、しまいにはそんなまねまでしていた。

「お鶴さまはいまにきっといい世話女房におなりですよ」

お松がそばからひやかすようにいう。
「お松、あとで鶴を八百屋やお魚屋へ案内してください」
「どうなさるんです」
「世話女房のおけいこに、お買い物をしてみます」
「だって、お鶴さまはお金をお持ちではございませんでしょう」
「ああ、そうでしたね。三郎、お金を少しください」
「だめ、だめ、さぶだんなもお金はみんなあたしたちにくれてしまって、今は一文なしなんですから」
「では、お買い物のおけいこはだめですね」
お鶴さまはがっかりしながら、ふっと思い出したように、
「三郎、今日もいいお天気ですから、あの水茶屋へ連れていってください」
とねだり出す。
「ああ、あそこもやっぱりお茶代がいりますね」
「いや、お金はどうにでもなりますが、お鶴さまは今日はここを出て歩いてはいけませんな。だいいち、寝巻きで表へ出ると人にわらわれますからな」
千代三郎はおだやかにたしなめた。
「そうでした、鶴はお寝巻きでした。どうしましょう、三郎」
急に天女はしょげてしまう。
「だから、三郎がこれからお屋敷へ行って着替えを取ってきてあげます。ついでに、外記に会って、安心するように話してきましょう」
「じいはきっと心配しているでしょうね」
「それは大騒ぎをやっているでしょう」
「三郎、じいに会ったら、よく話をしてきてください。鶴は争いを好みません。鶴はもう姫君でなくともよいから、迎えは無用にしてくれるようにと――」
「では、お鶴さまはこのまま街の娘になっても

本当にいいのですな」

「かまいません。三郎やみんなとこうしていっしょに暮らせるなら。三十郎にも、亀田にも、鶴はもう屋敷へはもどらぬからみんなと仲よくするように、人をいじめないようにと、三郎から意見をしてやってください」

お照が急にたもとを顔に当てる。

「お立派なお鶴さま」

お松もひどく胸をうたれたようで、そっと指で涙をおさえていた。

「畜生、聞かせてやりてえや、ゆうべのやつらに」

浅吉がうめくようにつぶやく。

「わかった、お鶴さま。では、三郎はこれからすぐ外記に会ってきます。一同は、わしがもどるまで外へ出ないで、お鶴さまのお相手をたのむぞ」

千代三郎は、そう話がきまったからには早いほうがいいと思い、すぐに座を立ったのである。

2

――屋敷でも心配しているだろう。

実は、人のことどころではない千代三郎だ。若殿が無断で一晩屋敷へ帰らないなどということは、これもまた言語道断な不行跡で、あまり突飛なまねをすると家来たちに座敷牢へ押し込められないともかぎらない。

――いっそ、そのくらいなら、お鶴さまといっしょに、わしもこのまま屋敷へはもどらず、街の男になるか。

どうせ、大名の家に生まれた二男三男は、他へ養子にやられるか、分家するか、家来たちにとってはやっかいな者なのだから、かわいい天女と街へ浪人してしまうのもまたおもしろいと思う。

やがて、新高橋際の北条家の下屋敷へきて、くぐりから入ってみると、さすがに邸内はなんとなくざわめき立っているようである。

「あなたはどなたですな」
目ざとく見つけた門番足軽が小屋からつかつかと出てきて、詰問するように聞く。
「御家老北崎外記どのは御在邸かな」
「御家老はおります。あなたさまは――」
そこへあわただしく玄関のほうから砂利を踏んできた若侍が三、四人、そのうちの一人が、
「おお、貴殿は――」
と、千代三郎の前へきて棒立ちになる。たぶん、一昨日外記についてお鶴さまをお迎えにきた供侍の中にいた一人なのだろう。
「わしを存じているかな」
「知っています。一昨日大川端で会いました」
「それはちょうど幸い、わしは三郎という者だが、御家老に取り次いでくれぬか。ぜひ、三郎がお目にかかりたいと申してな」
「承知いたした。しばらくお待ち願いたい」
その男は連れに目くばせしておいて、いそいで玄関のほうへ引きかえしていく。
おそらく、この連中は、これから手分けをして、お鶴さまをさがしに行くところなのだろう。はたして陰謀派の者か、外記派の者か、それはわからない。
「お目にかかるそうです。御案内いたしましょう」
さっきの男がもどってきて、こんどはていねいに小腰をかがめた。丁重にしろと外記に言いつけられたのだろう。
玄関から書院へ案内されて、しばらく待っていると、外記が静かに入ってきた。がんこそうなおやじだが、胸に心痛のあるのはかくしきれない。ひどくさえない顔色だ。
「よくまいられた。たしか、一昨日大川端でお目にかかった仁だな」
「そうです。その節は失礼しました」
「失礼は御同様だが、その失礼の件についてわしをたずねてくれたのか」
じいっとこっちの顔を見ながらいう。

「御推察のとおりです。まず、御老人の耳へそれがどんな風に入っているのか聞かせていただきたい」
「すると、昨夜の姫君のことをたしかに承知しているのでござるな」
「しかとお預かりいたしています」
老人はひそかにため息をつきながら、
「そこもとが心ある侍なら、とてものことに、それを昨夜のうちに知らせてもらいたかった」
と、しみじみとした声音になる。
「お言葉をかえすようだが、今朝でもおそくはないと思います。御老人は昨夜のことをいつ耳にされましたな」
「今朝、夜が白々と明けかけてからじゃ。姫君が寝巻きのまま御寝所から忍び出ている。お照もいない。亀田半蔵と申す夜番の足軽も逃亡している。姫の家出は昨夜四ツ（十時）から九ツ（十二時）の間ではないかと推測されているのじゃ」
「出口はどこからです」
「たぶん、水門口から舟だろうと見られる」
「なぜ、姫君は家出をされたのでしょうな」
「それをわしに言えと申すのか」
外記の目にちらっと怒りの色がのぞく。
「念のためにおうかがいします」
「恋路のやみということがある。わしはそうはお育てしなかったつもりだが、今となってはやむをえぬ」
「姫君がもどると座敷牢ですか」
「場合によってはな」
「御家督はもうあきらめるほかはありませんな」
「いたしかたあるまい」
「御当家としては、それでもよろしいのでしょう」
「わしの不徳のいたすところじゃ。もうなにもいうまい。せめて、姫君をお好きなところへおかたづけ申して、先君におわび申し上げる覚悟

じゃ」

おわびとは腹を切るということだろう。

それにしても、この老人は当主側に陰謀のあることを少しも気がついていないのだろうか。それだとあまりにもうかつすぎる。

「姫君は、争いは好まぬ、自分は屋敷へもどらなくともよいから、家来たちがみんな仲よく暮らすようにといっていますが」

「なにっ」

きらっと外記の目が光って、たちまち沈痛な顔色になってくる。

「姫君はなにも御存じないからじゃ。いや、お耳に入れなかったわしが、かえって独り合点すぎたかもしれぬ、——しかし、それもこれも、もう今となってはあきらめるほかはあるまい」

なにかわけがありそうである。

「すると、姫君が御家督に立ったほうがよかったのだと御当家のため考えられる理由がなにかあるのですか」

「それはあった。しかし、もう遅い」

「もし、それがあったとすれば、御老人も少しうかつでしたな」

「なんといわれるか」

「御老人はこの下屋敷に敵は一人もいないと断言ができますか」

「なるほど——」

外記の顔にみるみる朱がそそいでくる。

「いかに恋路のやみでも、世間なれぬ姫君が夜一人で屋敷はぬけ出せないし、また、わけもなくそんな無謀をする愚かな姫君でもありますまい。もっとも、少し鷹揚には育ちすぎているようですが」

千代三郎の顔に思わず微笑がうかぶ。

外記は黙ってこっちの顔を見ているばかりだ。

「御老人、お耳を拝借したい」

外記がうなずくのを見て、千代三郎はひざをすすめ、

「姫君は子細あって、今朝早くお照一人を連れ、ひそかに先君の菩提寺へ入られた。菩提寺から知らせがあったので、御老人が腹心だけを連れてこっそり迎えに行く。一切はその節申し上げます」

と、知恵をつけてみる。

「結構、どこで腹を切るも同じじゃ」

「立派なお覚悟です」

にっと笑って、千代三郎が元の座へかえる。

「実は、ぜひほしいものがあってまいったのですが、それはほかで都合しましょう。それでは、これで失礼します」

「もう帰られるか」

「はあ、お互いに早いほうがよろしいでしょう」

どっちが先に菩提寺へ行ってもいいのだ。

「そうか。引きとめまい」

「おじゃましました」

千代三郎は会釈をして座を立った。

外記が玄関まで送って出る。

「しばらくお待ち願いたい」

その玄関先へ殺気立って立ちはだかった三十三、四の男がある。苦み走ったいい男ぶりだ。

「三十郎、どうしたのじゃ」

これが馬場三十郎という用人らしい。

「御家老、姫君をかどわかしたのはこの男に違いありません。外へ出してはお家の恥辱、召し捕りましょう」

うまい口実を考え出したものである。

「ばかなことを申せ。姫君は御無事じゃ、失礼を働いてはいかん」

外記がしかりつけるようにとめる。

「いや、たとえ御家老の仰せでも、お家の恥辱にはかえられません。それっ、このふらち者を召し捕れ」

「はっ」

たちまち玄関先の庭へ、五、六人の若侍たちが、召し捕れとは口実で、その実、切って捨てる気だろう、いずれもたすきはち巻きものもの

しく躍り出してきた。
「これ、ひけ。客人に対してなにをする」
外記がおどろいて叫んだが、耳にも入れず、
「えいっ」
玄関の衝立てのかげからも二、三人、その一人がふいにうしろから槍を突き出してきた。
ひらりと身をかわした千代三郎は、空を突いて流れる槍の千段巻きのあたりをぐいと引っつかんで、
「御老体、あぶない、お引き取りください」
外記に声をかけておいて、その槍をひったくるなり、びゅんびゅんと振りまわしながら庭の敵の中へ躍りこんでいった。
「わあっ」
人一倍腕力のある千代三郎が振りまわす槍だから、一つ当たれば骨がくだけてしまう。その勢いに恐れをなして、若侍たちはぱっと両わきへいなごのように飛び散る。
その間をすっと向こうへ通りぬけた千代三郎は、そこで一同のほうへ向きなおり、
「乱暴をしてはいかんな。あまりつまらぬまねをすると、かえって北条家五万石に傷がつくぞ」
と、おだやかに言って聞かせる。
もうだれもちょっと切って出ようという勇気のある者は一人もなさそうだ。
折も折、門のほうから三、四人の供をつれた六十あまりの立派な武士がゆっくりと進んできて、これは何事というように立ち止まった。
供侍たちは、とっさに刀の柄へ手をかけて、くせ者が主人に向かってくるようならひと打ちと身がまえている。
その老武士の顔をちらっと振りかえった千代三郎は、あっと息をのんでしまった。自分の家でいちばん怖い上席家老の丹羽内蔵介である。
内蔵介もびっくりしたらしく、じっとこっちの顔を見ている。さすが器量人といわれる老人だから、決してうかつには声をかけない。
供侍たちもあきれたらしく、みんな刀の柄か

ら手を放してしまった。
千代三郎はなんとも間が悪いので、そっとそこへ槍を投げ出し、
「失礼――」
だれにともなくいって、門のほうへ歩き出そうとした。
「あいや、しばらく――」
内蔵介が声をかけてきた。
「はあ」
しかたがないから千代三郎は立ち止まる。
「これ、お草履を――」
老人は若党に小声で言いつける。千代三郎は足袋はだしなのだ。
「はっ」
若党はその草履をどこから持ってきたものかと老人の顔を見ると、内蔵介は目で玄関先を教えている。
北条家の若侍たちはいつか姿を消し、玄関式台に立って、啞然としたようにこっちを見ているのは外記一人だ。
若党が走っていって、玄関先から草履を取ってきて、うやうやしく千代三郎の前へそろえる。
「ありがとう」
千代三郎は礼をいってそれを履くと、さっさと門のほうへ歩き、くぐりから表へのがれ出た。
――やれ、助かった。
ほっと胸をなでおろす。内蔵介は上屋敷だから、まだ中屋敷から自分の昨日の家出は知らせてないのだろう。もっとも、うっかりそんなことを知らせれば、中屋敷中の責任になるので、母君が一存で知らせをのばし、家来たちが大騒ぎをやって探しまわっているのだろう。
――帰りに寄って、みんな大目玉を食いはしないかな。
いや、それより供の家来が追いかけてくると大変だ。いまつかまっては菩提寺行きの計略がお流れになるし、だいいちお鶴さまがかわいそうである。

千代三郎は足にまかせて松井町のほうへいそぎ出した。

それにしても、内蔵介は今時分、なんの用で北条家の、しかも下屋敷などをたずねてきたのだろう。どうも見当がつかない。

——まあよかろう。今日一日でなんとかお鶴さまのほうも片がつくだろうし、そっちさえうまくいけば、当分座敷牢入りを覚悟していればいいのだ。

堅川筋へ出てから、千代三郎はだれも追ってこないのをそれとなく見さだめて、やっとほっとした。

——ああ、こりゃいかん。

お鶴さまの着物をもらってくるのを忘れている。いや、あの場合、そんなまねをしては敵に怪しまれると思ったから、わざと言い出さずにきたのだが、まさか寝巻きのままでどこへ連れていくこともできない。

——しようがない。お松にでも都合させよう。

少しいそいで歩くとじっとりと汗ばむような春日和だ。

「若さま——」

ふいにうしろから呼んで、肩をならべてきた者がある。

「わしか」

見ると、さっき草履を取ってきてくれた内蔵介の若党だ。やっぱり、ちゃんと尾行があったのである。

なまじ器量人の家老などというものはやっかいなものだなと苦笑していると、

「あなたさまはだれかに跡をつけられています。若い侍が二人です」

と若党は知らせておいて、さっさと前へ通りすぎていく。

——そうか。敵も尾行をつけたか。なるほど、抜け目のないやつならそのくらいのことはするだろうな。

うっかりしていた自分のほうがよっぽど間が

抜けていたのだ。

それにしても、どうして敵の尾行をまいたものか、千代三郎はちょっと当惑せざるをえない。

哀別

1

——よし、悪人どもの手先を働くやつ、思い知らせてくれよう。

千代三郎は断然そう腹をきめると、くるりときびすをかえした。すぐうしろを歩いていた六部と、その後から荷をしょって歩いてくる番頭風の男がおどろいたようにこっちの顔を見ていた。

なるほど、その二人から三間ばかりおくれたところを、二人づれの若侍が緊張した顔つきで歩いていたが、いきなり千代三郎の視線にぶつかると、どぎまぎしたようにそっぽを向いた。

千代三郎はかまわずつかつかとその前へ行って、

「これ、お前がたは北条家の侍どもだな」

と、詰問するように聞いた。

「そうだったらどうだというのだ」

「なんでわしの跡をつける」

真っ向からたたみこまれると、人間はとっさにはうそがつけないものらしく、

「なにっ、こやつ——」

と、目を血走らせながら、刀の柄に手をかけてきた。

「たわけ者」

こっちははじめからその気なのだから、だっと一人を川のほうへ突き飛ばし、

「あっ」

「おのれっ」

連れの一人があわてて抜刀しようとする利き腕を素早くつかみとめ、

「えいっ」

腰車にかけて、ものの見事に、二人とも川の中へ投げこんでいた。それけんかだと、野次馬どもがたかってこようとした時には、もう勝負がついていたのだ。あっけに取られた野次馬どもは、みんなぽかんと川の中へ水しぶきをあげた二人のほうをながめている。

その間にさっさと歩き出した千代三郎は、やがてするりと佐倉屋の店の中へ姿を消してしまった。

「あ、お帰んなさいまし」

奥座敷へ入っていくと、浅吉がいそいで出迎える。

「三郎、もどりましたね」

お照とお松に相手をされていたお鶴さまが、にっこりとうれしそうにこっちを向く。

「ただいまもどりました」

千代三郎は姫君にあいさつをしてから、

「さっそくですが、お鶴さまの母君のお墓はどこなのです」

と聞いてみた。

「浅草の総泉寺というところです」

なぜといいたげな姫君の顔である。

「浅吉、屋根船を一隻雇って、前の桟橋へつけてくれ。いそぎだ」

「へえ、お花見ですか、だんな」

「いや、お寺まいりだ」

「橋場の総泉寺なら、どうせ向島を通るんでさ。お寺まいりがすんだら、ついでだからそっちへまわりやしょうや」

浅吉はそんなのんきなことを言いながら座敷を飛び出していく。

「お松、お姫さまがお寝巻き姿でお墓まいりというわけにもいくまい。なんとかお着替えの都合はつかぬか」

「さあ、急にお姫さまの衣装といわれてもねえ」

「いや、姫君の衣装には及ばぬ。腰元のでよい」

「それなら古着屋へ行けばなんとかなるでしょうけど、一体お屋敷のほうの話はどうだったん

です」
さすがにお松は、子細を聞かぬうちはおいそれと軽くは立たぬ。
「うむ、では一通り話しておこう。屋敷へまいって北崎外記に会うと、家老もこんどばかりはさすがに心痛していたようだ」
「じいはなんと申していました、三郎」
お鶴さまは申し訳なさそうな顔である。
「お寝巻きのまま寝所をぬけ出すような姫君にお育て申し上げたおぼえはないと悲しい顔だったが、この上はやむをえぬ、姫君のお好きなところへおかたづけ申し、わしは先君におわびしようと覚悟はきまっていたようだ。そこで、わしが、御家老は当家にいる家来がみんな忠義者ばかりと信じているのかと聞くと、びっくりして、ちょっと返事ができない」
「なんにも知らなかったんでしょうかねえ、御家老さまは」
と、お松が不服そうな顔をする。
「いや、薄々は知っているようだ。ただ、こんどのことは、お鶴さまのわがままからだとばかり思いこんでいたんだな。しかし、あの屋敷ではわしもうっかりした話はできぬ。だから、姫君は昨夜急に母上の墓参を思いたたれ、お照一人をつれて菩提寺へ入られた、御家老が今日それをお迎えに行く、これならどうかと耳うちをしてみた」
「つまり、お寺で話しあおうってわけなんですね」
「うむ、おなじことでも、それならお鶴さまが屋敷をあけた申し訳も立つ」
「やっぱり、さぶだんなは頭がいいわ。ほめてあげる」
「そうか。では、さっそく着物の用意してくれ」
「かしこまりました」
お松はやっと納得して立っていく。
「三郎、ここへ来てください」
手あぶりの前のお鶴さまは、おおらかに自分

のそばを指さす。並んで座れというのである。お照は心得て次の間にさがっていった。

「どうしたのです、お鶴さま」

「あの、じいは鶴の好きなところへかたづいてもよいと申したのですね」

お鶴さまはもう両手で三郎の手を取って胸へ抱いている。

「そのつもりはそのつもりのようですが、しかし、本心をいえば、やっぱりお鶴さまに家督をついでもらいたいわけがなにかありそうですな」

「でも、それでは三郎をだんなさまにできないでしょう」

「無論、それは無論でしょうな」

「では、鶴は菩提寺へ行きたくありません」

「そんなわがままをいってはいけませんな。大名の家へ生まれた者には、大名の家へ生まれた者のつとめがあるのです。ともかくも、今日は家老に会って、よく話を聞いた上で、お鶴さまの身の立つように考えてあげます」

「きっとですか、三郎」

「大丈夫です。三郎は知恵がありますからな」

「三郎は勇士でしたね」

「そうです、勇気もあります」

「鶴を一度抱いてください。鶴は心配です」

本当に愛情があるのかどうか、それを知りたいというのだろう。天女はまことに無邪気そのものである。

「困ったなあ。わしがお鶴さまを抱いてしまうと、お鶴さまはもうわしの妻になったもおなじで、屋敷へは帰れなくなりますぞ」

「かまいません。三郎は鶴のだんなさまです」

お鶴さまはちゃんとそうきめてしまっているらしい。そこまで思いつめているものを、できれば千代三郎もまたこの天女を自分の妻にしたいと望んでいるのだから、もうすげなくはできなかった。

「よし。では、三郎はお鶴さまのだんなさまになるときめよう」

万一、事情が許さなければ、二人で屋敷をすてるばかりだと思った。自分はきっとこの天女をだれよりも幸せにしてやれるという自信もある。千代三郎はお鶴さまを人形のように抱きあげると静かに立ち上がった。

「あ、三郎――」

さすがにお鶴さまはびっくりして、いそいで両手を千代三郎の首にまきつける。千代三郎はお照のほうへ背を向けると、思いきって天女の赤いかわいいくちびるの上へ自分のくちびるをかさねていった。天女は切なげに胸をはずませながら、うっとり目をつむっている。

「三郎はお鶴さまをもらってしまった」

千代三郎はじっと天女を抱きしめながらうれしそうにいう。

「鶴は三郎のもの――」

天女の赤いくちびるが幸福そうにつぶやく。

「さあ、もうおりるか、お鶴さま」

天女はいやいやをしながら、

「重いの、三郎」

と、それでも遠慮そうに聞く。

「いや、三郎は勇士だから少しも重くはない」

ありあまる力だから、ゆったりと天女を抱いている千代三郎だ。

「三郎さま、だれかまいるようでございます」

お照がそっちを見ないようにしていそいで注意した。

「お鶴さま、また後で抱いてあげような」

千代三郎はそっとお鶴さまを元の布団の上へ座らせてやる。

「三郎もここへ座って――」

お鶴さまはまだ甘え足りないようにほおを桜色にしている。

「さぶだんな、たいへん――」

がらりと障子をあけて、ふろしき包みをかかえお松が飛びこんできた。

「どうした。なにがたいへんなのだ」

「いま、ここの店へ、たしかお鶴さまのとこの

御家老さまだと思うんだけど、立派な年寄りの侍が家来をつれてきて、お鶴さまに会いたいって、ここの主人に取り次ぎをたのんでいたわ」

「ふうむ」

さては内蔵介の若党からでもここが知れたかと思っているところへ、もう宿の亭主がせかせかと廊下を走ってきたようだ。

「ごめんくださいまし」

廊下へひざまずいて、おそるおそる障子をあける。

「あの、こちらさまはお鶴さまでございましょうか」

「うむ、だれかたずねてまいったそうだな」

千代三郎がかわって聞く。

「はい、ただいま桑名の松平家の家老丹羽内蔵介さまとおっしゃる御老人が見えまして、ぜひお鶴さまにお目にかかりたいと申していますが、どういたしましょう」

あっと千代三郎は目をみはる。

「三郎、どうしましょう。鶴は松平家の家老など知りません」

お鶴さまは当惑したような顔をして相談する。

「そうですな。しかし、お鶴さまと名ざしでここをたずねてくるようでは、なにか子細があってまいったのでしょう。とにかく、会って話を聞いてみてはどうです」

「でも、鶴はお寝巻きのままですから」

「いや、あるいはそれも承知してきているかもしれません」

内蔵介はすでに北崎外記に会ってきているのだ。外記と内蔵介がどういう間柄かは知らぬが、わざわざお鶴さまに会いにきたとすれば、なにか二人の間に話し合いがあってのことに違いない。

「三郎がそういうのでしたら会います。ここへ通してください」

お鶴さまはもう何事も千代三郎次第であっ

た。

2

いかになんでも、千代三郎はお鶴さまと並んで座っているところを内蔵介に見られるのはうしろめたい気がするので、座をさがろうとすると、

「いけません、三郎、ここにいてください」

お鶴さまがひざをおさえて許さない。

「では、そうしますかな」

無理に座をさがっては、たった今だんなさまになると約束した言葉がうそになる。よし、覚悟しようと、千代三郎は度胸をすえた。

「御無礼つかまつります」

内蔵介は供の者を店先へ残してきたらしく、一人で入ってきて座についた。桑名十一万石の名家老といわれて、兄、越中守も一目置いている器量人だから、さすがにそれだけの貫祿は備えているようだ。次の間にいたお照もお松も、はっとそこへ両手をつかえている。

「小名木川のお鶴さまでございましょうな」

内蔵介は千代三郎のほうは見ようともせず、まずお鶴さまに聞く。柔和な目はしているが、一目でお鶴さまの人柄を見ぬこうと、内心油断はないようである。

「はい、鶴ですが、鶴はそなたを存じません」

天女はだれに対しても実におおらかで、無邪気である。

「手前は松平越中守の老職をつとめます丹羽内蔵介と申します者、お見知りおきを願います」

内蔵介ははじめて丁重におじぎをする。

「鶴は子細あってお寝巻きです。このままで失礼でなければ御用を申してみてください」

「いや、先刻外記どのをおたずねして、子細はあらまし承知しております」

「まあ、じいに会ってきたのですか」

「はい、お目にかかってまいりました」

「ああ、これは昨夜鶴を助けてくれました三郎

という者です。いっしょにここでお話を聞いてもかまいませぬね」

「さあ、そのよい悪いは後のことにして、一通り子細をお耳に入れましょう」

内蔵介はまだ決して千代三郎のほうは見ようとしない。まったく大した底意地だが、その内蔵介を向こうにまわして、お鶴さまもまた堂々たるものである。

「実は、今日手前が小名木川をたずねましたのは、用人馬場三十郎より、お鶴さま一大事について至急申し上げたいことがある、ぜひ内々にてお運びが願いたいと使いがまいったので、出てまいりました。と申すのは、これは外記どのと手前の茶のみ話に、松平家から若君をお一人、お鶴さまの御養子にきてもらえまいか、よろしい、その儀ならお一人さしあげるように取り計らってみようと、内約があったからでございます」

「まあ」

お鶴さまは浮かぬ顔をしたが、千代三郎ははてなと思った。

「しかし、今日の使いが用人馬場三十郎からまいるのは少しおかしいがと思い、外記どのをたずねてみると、これは用人がお鶴さまの不始末をことさらに申し立てて外記どのをおとしいれる策に出たものと、ほぼ見当がつきました」

「それで、外記はなんと申していました」

「こういう事情になってはもういたし方ない、一切をお手前にまかせるから、どのようにもいたしてくれるようにということで、よろしい、それではわしが一存に取り計らってみるからと、さように話がつきました」

「あの、じいは切腹しなければなりませんか」

お鶴さまの顔色がみるみる曇ってくる。

「さよう、場合によりましてはな」

「それはいけませぬ。内蔵介、鶴にもたのみがあります」

「たのみとは、どういうことでございましょう

な」

「鶴は家来たちの争いを好みませぬ。鶴さえ御家督を辞退すればよろしいのですから、外記の切腹だけは、そなたから御当主さまによきようにとりなしてやってください。たのみます」

「さあ、そううまくいきますかな。あなたさまは御自分の昨夜なされましたことをよいことと考えていられるのですか」

「いいえ、よいことだとは思っておりませぬ。本当はこのようなことになるとは少しも考えていませんでした。けれど、三郎からわけを聞かされまして、それなれば鶴が屋敷にいてはかえってじゃまになる、鶴はもう屋敷へかえらなくともよい、街で三郎といっしょに暮らそうと、昨夜心をきめました。いけませんか、内蔵介」

「なるほど、お鶴さまはそれでよいかもしれぬ。しかし、外記どのはやはりそれではすみますまい」

「ですから、鶴は今日、外記と菩提寺で会いまして、三郎にもいっしょに行ってもらって、もし外記がどうしても切腹しなければならないのでしたら、三郎と相談して、鶴も自害してもかまいませぬ。鶴は、じいや家来たちに迷惑をかけてまで、一人で生きていようとは思いませぬ」

きっぱり言いきるお鶴さまだ。

立派だなあと、千代三郎はほめてやりたい。そして、そんな不幸な目にお鶴さまをあわせているのはだれだと、むしろ無能な家来たちを責めてやりたい。お照とお松は黙って目頭をおさえていた。

「よろしい、よくわかりました」

内蔵介は静かにうなずいて、

「あなたさまが御自分のなされたこともいくぶん悪かったとお気がついておられるのでしたら、この度のところは内蔵介がなんとか取り計らってみましょう」

「本当ですか、内蔵介」

「そのかわり、あなたさまは何事も内蔵介の申

すことをお聞き入れにならなければいけません。約束ができましょうかな」
「はい、外記の命にはかえられません」
「きっとでございますな」
「ただ一つ、たのみがあるのですけれど」
お鶴さまがちらっと三郎を見て遠慮そうにいう。
「それをここでお口になされてはいけません」
内蔵介が頭からおさえつけるようにいって口をきかせぬ。
「はい」
お鶴さまはがくりとうなだれてしまった。
「そこの三郎と申す仁――」
内蔵介ははじめて千代三郎のほうを向く。来たなと千代三郎は思い、
「はあ」
わざとぽかんと返事をする。
「お鶴さまは内蔵介がしかとおあずかりして、これから菩提寺へおつれいたす。お手前はここからすぐに家へもどりなさい」
「はあ」
「見うけるところ、お手前もただの素浪人ではござるまい。屋敷もあれば家来もいよう。お鶴さまでさえ御自分のなされたことを悪かったと後悔されておられる。それはだれにも申し分はあろうが、ここは黙っておもどりなさい。よいことにはまたよい報いがある。おわかりであろうな」
言外に、後のことは自分が引きうけるといっているのだ。内蔵介なら大丈夫だろうし、もうこうなっては強情も張れない。
「では、御老人になにぶんたのむ」
「三郎、行くのですか」
お鶴さまがはっとして、人前もなくひざをおさえてきた。悲しそうな顔である。
「お鶴さま、わしが一昨日大川端でいいましたね」
「はい」

「悲しくても我慢するのが勇気のある賢い人間です。人は道を誤るともっと悲しいところへ自分をおくようになるものだと――」
「でも、三郎、さっきのことを忘れてはいやです」
「忘れるものですか、三郎は侍です」
「あのことですよ、三郎。三郎はきっと鶴の、あの、鶴の――」
とまではいったが、だんなさまになってくれられるかと、さすがに人の前では言いかねるらしい。
「わかっています。お鶴さまは来世というものがあるのを知っているでしょう」
「来世なのですか。この世ではだめなのですか」
必死なまなざしである。
「ですから、この世で一生懸命にやってみて、だめならということです。外記が切腹せずにすみさえすれば、この世でもいいんですからな」
「わかりました。鶴は、鶴はきっと、今日外記とよく相談してみます」
「そうだ、それでいいのです」
「もしだめだったら、来世なのですね」
「悲しいけれど、それで我慢しましょう」
「あの、あの、こんどはいつ会えますの。だめなら、もう会えないのですか」
「そんなことはない。だめでも一度は必ず会えると思います」
「きっと、きっとそうしてください」
お鶴さまはそばに人のいるのを忘れてしまったように、千代三郎の手を取ってほおずりしながらいう。
「よろしい。きっとそうします」
「鶴は、鶴は新大橋の上で待っていることにします。たとえ人魂になっても――」
おもしろいことをいうお鶴さまである。
「いや、めったに人魂になってはいけません」
千代三郎は思わずわらってしまった。
「えへん」

と、内蔵介が見かねてせき払いをする。
「内蔵介、見ていてはいけません」
恋は姫君を強くするのだろう、お鶴さまは勇ましく一本内蔵介をきめつける。
「お鶴さま、人魂になる約束まですればもうよろしいでしょう。賢くて勇気のある人というものは、あまり女々しくなさるものではない。女女しい人は、いくら約束をしてもたのみにならぬものですぞ」
内蔵介がわらいながら、さすがにうまいことをいう。
「そうでした。鶴は女々しくはありません。三郎は鶴を信じてくれますね」
正直にしゃっきりとなってみせる無邪気なお鶴さまである。
「信じますとも。お鶴さまはこの世でも来世でも、三郎のたった一人の天女ですからな」
「うれしいと思います」
「では、三郎はもう行きます」
千代三郎は思いきって立ち上がった。
「もう行くのですか、三郎」
「行きます」
「女々しくしてはいけないのですね」
お鶴さまは悲しそうにいって、はじめてそっと涙をふいた。千代三郎もなにか目頭が熱くなってきそうになったので、のがれるように座敷を出る。
——かわいいわしの天使。
玄関へ出てくるまでは、さすがに千代三郎も夢中だった。
「さぶだんな、——さぶだんな」
お松が後から追ってくる。
「やあ、あねごか」
「ふうんだ、いいところ見せつけるのね、憎らしい」
「まあ、許せ」
「そりゃ許さないこともないけれど、一体あたしはどうすればいいの」

「ああ、そうだったなあ」
千代三郎はちょいと考えてから、
「あねご、お鶴さまについていてくれ、陰ながらでもな」
と、少し無理かなとは思ったが、たのんでみる。
「承知したわ」
お松はあっさり引きうけて、大丈夫よというように、不敵な微笑をうかべていた。

顔の傷

1

千代三郎が佐倉屋を出ると、一方へ片寄せて立派な女乗り物がおりていて、内蔵介についてきた家来たちが四、五人、こっちを見ると黙っておじぎをしていた。
「さすがに手まわしがいいなあ」
これに乗せてお鶴さまを総泉寺へ運ぶのだろうと思いながら、軽く家来たちへ会釈をかえして、往来へ出たとたん、
「だんな、――さぶだんな」
と、前の桟橋から呼んで浅吉が駆けよってきた。
「おお、浅吉か」
「おそくなってすんません。なにしろ、この花見どきでね、どこへ行っても屋根船はみんな出払っているんでさ。やっと一隻だけつかまえてきやした」
「そうか」
実はもうその屋根船は不用になったのだが、ここでふっと千代三郎の気が変わった。
「御苦労だったな、浅吉。すぐに乗る、どれだ」
「あれでさ」
浅吉の指さす下に屋根船が着いていて、若い船頭が棹を取りながら待っている。
「よし」

千代三郎はつかつかと桟橋をおりていく。
「あれえ、だんな、後の者はどうしたんです。まだ出てきやせんぜ」
「後の者はいいんだ。浅吉、早く乗れ」
千代三郎はさっさと船房へかくれてしまう。
「なんですって――。おかしいな、だんな、いまなんといったんです」
浅吉がぽかんと船を見おろしながら障子を立てた船房のほうへ聞いていると、うしろからその浅吉をかきのけるようにして若侍が二人、どかどかと桟橋を駆けおり、いきなりその船へ乗りこんでいく。
「あっ、いけやせんや、だんながた。その船はあっしがやっと見つけてきたんでさ。横取りしちゃいけやせん」
あわてて浅吉がどなったが、振り向きもせず、もう船房へ押しこんでいく。
――いけねえ、さては北条家のまわし者かな。いまにも中で切り合いがはじまりはしないかと、浅吉はぎょっと顔色を変えた。が、この二人は敵ではなく、千代三郎の近習小林平太郎と五十嵐富太郎だったのである。
「なんだ、平太と富ではないか」
千代三郎も意外な顔をする。
「若さま、あなたさまはいけません」
平太郎はなじるようにいって、青ざめた顔をしている。
「ああ、そうか。その方たち、内蔵介からなにか知らせをうけたんだな」
「はい。ともかくも若さまは御無事でなによりでございましたが、我ら両人はたぶん切腹でございましょう」
「心配いたすな、無断で屋敷を飛び出したのはわしが悪いので、その方たちの落ち度ではない。内蔵もそれは十分承知している。いま、わしは内蔵にしかられてきたばかりだ」
「お方さまもたいそう御心配あそばされ、すぐに若さまをおつれするようにとのことでござい

ました。我々両人の責任などはともかくとして、なにとぞこのままお屋敷へおもどりを願います」

そばから富太郎も必死の顔をする。

「うむ、必ずもどる。しかし、今はいかん」

「な、なんと申されます」

「内蔵の命があぶないのだ。いまそのわけを話してつかわす」

千代三郎はそういってから、

「浅吉、この船を出してな、佐倉屋の表がよく見られる向こう岸のあたりへなんとなく遊ばしておいてくれ」

と、艫へきて心配している浅吉にいいつけた。

「へえ。じゃ、だんな、本当に後の者は待たなくていいんですか」

「うむ、待たなくてもよくなったのだ。そのかわり、お前、そこから佐倉屋のあたりをよく見張っていてくれ。たぶん、怪しいやつがうろうろしているかもしれぬからな」

「かしこまりやした」

昨夜からの事情をよく知っている浅吉だから、そこはのみこみが早い。船はたちまち岸放れをして、花見船の往来でにぎわう竪川を対岸のほうへゆっくりとこぎ出した。

「若さま、どうして内蔵介さまの命があぶないのでございます」

今は平太郎も富太郎もいくらか落ち着きを取りもどしながら不審そうに聞く。

船房は主従三人きりで、ほかの者に聞かれる心配はないから、千代三郎は昨夜からの北条家のいきさつをざっと話して聞かせる。

「内蔵はな、そんなわけで、これからわしにかわってお鶴さまを総泉寺へつれていかなければならんのだ。しかし、ゆうべあれだけ思いきったまねをしている敵が、それを黙って見ているとはどうも考えられぬ。わしはこの船で、よそながら内蔵と天女を総泉寺まで送ってやるのだ。どうだ、その方どもは反対か」

事情を聞いてみると、平太郎も富太郎も血気純情の士だから後へひけなくなってくる。

「富、どうする」

「どうするといって、我々二人は若さまの子供の時からのお相手役なんだからな、悪いことならともかく、御家老と天女を悪人の手からまもってやろうといわれるのだ。どうせ我々は屋敷へ帰ればしかられるときまっているんだし、おなじしかられるんなら、少しでも人のために働いておくほうが後味がいい。わしは若さまと行動を共にしようと思う」

「よし、わしも賛成だ——。若さま、両人お供することにします」

「そうか。そちたちはまことの勇士だ、過分に思うぞ」

「おだてではいけません。そのかわり、こんどこそ我々を決してまかないと約束していただきます」

「うむ、必ず約束する」

話はたちまちきまってしまった。

「だんな、さぶだんな、駕籠が佐倉屋の門口へ横づけになりやしたよ」

艫から浅吉が知らせてきた。

「よし、わかった」

そっちの障子を細目にあけてみると、なるほど、お高祖頭巾で顔をかくした被布姿のお鶴さまがいま駕籠に乗るところだ。

その前後へ素早く目を走らせてみたが、ここからでは別に怪しく思われるやつの姿も見あたらぬ。

まもなく駕籠があがり、先頭に若侍二人、駕籠わきにこれもお高祖頭巾をかぶった腰元お照、駕籠のうしろを丹羽内蔵介が供侍二人若党中間をしたがえてつきそい、一行は一ツ目の橋のほうへ進み出す。

「浅吉、あの駕籠の跡をつけさせろ」

「へえ」

船はすぐぐんぐんこぎ出した。

2

駕籠は橋場の総泉寺へ向かうのである。たぶん、両国橋はわたらず、本所河岸を通って吾妻橋へ出るだろうと見当をつけていくと、案の定、本所河岸へ出た。

花見どきで、往来はどこもにぎやかである。いくら敵が大胆でも、真っ昼間町中ではまさか襲撃もかけられまい。もし、なにかやるとすれば、橋場から浅茅ガ原へ出て、総泉寺へ着くまでの間だ。それとも、帰途をねらう気か——。

千代三郎は途中で浅吉を陸へあげ、深編み笠の用意をして、今戸橋で待っているようにいいつけておいた。なにがあっても、こっちを桑名藩の者と敵に顔を見おぼえられては後が面倒だからである。

「若さま、これでなんにもなかったとすると、まさか陰供をしていたとはいえませんし、今までどこを遊んで歩いていたんだと、我々はお小言が一つふえるだけのことですな」

今戸橋で船を捨て、陸の尾行に移ってから、平太郎はそんな冗談をいった。

「無事にすめば、こんなめでたいことはない。勇士は小言ぐらい我慢するものだ」

「それは我慢はしますが、しかし、敵がねらうとすれば御家老のほうでしょうか、天女のほうでしょうか」

「無論、天女をさらっていくつもりだろう。内蔵をねらっても、敵の得にはならんからな」

「すると、どっちみち残るのはお小言ということになりますな」

「心配するな。いちばんしかられるのはわしだ。座敷牢へぐらいは入れられるかもしれぬな」

「おどかしてはいけません。若さまが座敷牢なら、家来たる我々はとても切腹はまぬがれないことになります」

「勇士は切腹ぐらい我慢するものだ。人間一度死ねば、二度死ぬ世話がなくなる」

「やれやれ、勇士とはあまりありがたくないものでございますなあ」

心おきない主従だから、むだ口を言いあいながら、やがてお鶴さまの駕籠は橋場通りを左へ切れて、広々とした浅茅ガ原へかかってきた。この辺は近所の子供たちが摘み草をしているくらいのもので、なんにもない草っ原だから、花見客も入りこんでいない。この草っ原の北に、総泉寺の山門が見える。寂しい草っ原には違いないが、来てみると物かげというものがあまりないところだから、襲撃しようにも敵のかくれ場所がないわけだ。駕籠はとうとう無事に山門へ入ってしまった。

「すると、帰りだな」

むだ骨だなどとは少しも考えない千代三郎だ。天女のために、ほっとしたとたん、その山門の中からだあんと一発銃声がおこった。

「わあっ」

異様に殺気立った喚声があがる。

「来い、両人」

千代三郎は一気に山門へ走った。走りながら、南無三と思った。飛び道具を使ったからには、敵はお鶴さまの駕籠をねらったに違いない。事面倒と見て、命を断つ手段に出たのだろう。

——もう許さん。

なるべく人は切りたくない千代三郎だが、敵がそこまで残忍非道に出る以上、情けは無用である。山門の石段を一気に駆け上がって躍りこんでいくと、内蔵介をはじめ味方は若党中間までそこにおりたお鶴さまの駕籠をかこんで抜刀し、白昼大胆にも覆面をしたくせ者が十数人、手に手に白刃をかざして、いまや駕籠へ殺到しようとするところだ。右手に鐘楼がある。おそらく、敵はそこから駕籠を目がけて発砲したのだろう。

「平太、鐘楼だ」

とっさに千代三郎は平太郎に叫んでおいて、

「狼藉者、なにをするか」

一喝するなり、覆面どもの横合いからまっしぐらに切りこんでいった。

「それ、じゃまが入った」

「切れ、切れっ」

覆面どもは口々に叫んだが、まさか外からこんな助勢が飛びこんでくるとは思いもかけなかったのだろう。しかも、その深編み笠の三人は、少しも恐れということを知らないように、面もふらず切り立ててくる。

「えいっ」

「とうっ」

先頭の千代三郎は、右を切って左へかえす、ただそれだけの刀法だが、こっちから踏みこみ踏みこみ、いささかもひるみのない敏捷無類の太刀さばきだから、瞬く間に四人五人と切り倒して、文字どおり、当たるを幸いという猛然たる勢いである。

「わあっ」

覆面どもは、たちまち朱に染まって倒れていく味方の流血を見ると、すっかり浮き足立ち、たった三人に切りまくられてばらばらっとだれからともなく一度に山門の外へ逃げ出した。その間、ほんの一分とはかからなかったろう。

——これでよし。

もう踏みとまっている敵は一人もない。内蔵介たちは駕籠を取りかこんだまま、あっけに取られた形でこっちを見ている。そこにころがっている死骸七つ、総泉寺の内玄関へ押っ取り刀で出てきたのは外記たちだと見て、

「くせ者、待てえ」

千代三郎はわざと叫びながら、血刀をかざして門外へ逃げる敵を追って走り出した。平太郎と富太郎が心得て、ちゃんと後についてくる。くせ者たちは原を突っ切らず、みんな総泉寺の横手へ逃げこんでしまったようである。

「もうよかろう」

その土塀がつきて百姓地へ出たところで、千代三郎はちょっと立ち止まり、血刀をぬぐって

鞘におさめた。
「若さま、やっぱり出ましたなあ」
富太郎がまだ興奮している声でいう。
「うむ、血をきらう寺の門内で待ち伏せしているとは、敵も考えたな」
「しまった」
平太郎が舌打ちをする。
「平太、いかがした」
「鐘楼を見てくるのを忘れました。ちょっと行って見てまいります」
「待て、——もうよい。そういつまで敵もまごまごしてはおらん」
「申し訳ございません。鐘楼だというお言葉はたしかに耳に入ったのですが、そっちへ走っていく暇がなくて、夢中で刀を振りまわしているうちに、もう若さまが門の外へお駆けになりましたので——いま考えてみると、あの裏に発砲した敵の大将がかくれていたかもしれませんな」
「わしも一度はそう考えたが、思いすごしだったかもしれぬ」
そういっておかぬと、一本気な平太郎だから、それこそ腹も切りかねないのだ。
「若さま、わしはどうも勇士ではなさそうです」
「遠慮するな。お前の刀にも血がついていた。立派なものだ」
普通の勇気でも、あの乱刃の中へちょいと飛びこんでいけるものではない。その点、平太郎も富太郎も立派なものだと、千代三郎は心から信頼できる。
「若さま、天女は大丈夫ですかな」
富太郎が思い出したように心配する。
「うむ。たぶん、けがはあるまい。内蔵が落ち着いていたからな」
「だんな、——さぶだんな」
山門のほうから浅吉が一散に駆け出してくる。
「浅吉、どうした」

「おどろいちまった、あっしは。強いねえ、だんなは。いちばん後から山門へ飛びこんで、あっとあっしは腰が抜けそうになっちまった。ぎらぎらっと刀の林だ。えいっ、とうっ、きゃあっ、ばさっ、ばさっ、あっしの歯ががつがつがつ、だらしがねえってありやせん」
「そうか、見ていたのか」
「見ていやしたとも。けど、あっしを置いて逃げ出しちゃひでえや、だんな」
「お前どこにいたのだ」
「門のとびらのうしろにしがみついていたんです」
「駕籠の中はどうだったようだな」
千代三郎は念のために聞いてみる。
「すぐ玄関へ横づけにしやしてね、みんなで抱えるように奥へつれて入りやしたが、大したことはねえようでした」
「倒れていたくせ者は七人だったろう」
「へえ、七人とも即死で、みんな浪人者だって、玄関から出てきた侍たちが調べて話していやした」
「そうか、よくそこまで見てきてくれた」
「なあに、だんなの後を追いかけたくても、足がへなへなでね」
「しかし、ちゃんと見るだけは見ていられたのだから、お前も勇士のうちだ。この次からは、きっとしゃっきりしていられるぞ」
千代三郎はなぐさめるようにいう。
「ありがてえ。だんながそういってくれりゃ、あっしも勇気が出やす」
「そこでな、浅勇士、我々はこれでここを引きあげるが、お前はここに残っていて、お鶴さまの駕籠がどこへ帰るか、行く先をよく見とどけて教えてくれ」
「承知しやした。で、どこへ知らせに行けばいいんです」
「浜町河岸に桑名の中屋敷がある。そこへきて、門番に名前をいって、さぶだんなに会いたいと

いえば話のわかるようにしておく」
「へえ、さぶだんなは桑名の家来だったのか」
「うむ。たのんだぞ」
千代三郎はそういいおいて、平太郎と富太郎をつれ、そこから浜町の屋敷へ帰った。

3

屋敷へ着いたのはもう夕方に近かった。千代三郎はすぐに生母清泉院の別殿へ心配をかけたわびをいいに行った。
「これからは必ず気をつけてくれますように」
母君はやさしい。無論、心配はしていたろうが、少しもしかろうとはしなかった。一つには、どこへ行っても決して間違ったことはしない雄雄しいわが子と、心から信じているからだろう。
母君はお鶴さまの話に興味を持っている。その話をしようかと思ったが、それを話すとなると、いきおい北条家のおもしろからぬ内情まで耳に入れなければならない。かえって母君を心配させるようなものだと思ったので、千代三郎はやめることにした。
その夜、丹羽内蔵介がしかりに寄るかなと千代三郎は心待ちにしていたが、ついに内蔵介は姿を見せなかった。しかられるのはありがたくないが、総泉寺での外記との話はどうきまったか、お鶴さまの身の振り方はどうなったか、それが早く聞きたいのである。
翌朝——。
朝食をすませるとまもなく、小林平太郎がきて、
「若さま、浅吉が門番小屋へまいっているそうですが、お会いになりますか」
と、そっとつげた。
「うむ、四阿で会う。つれてきてくれ」
「かしこまりました」
名もなき下郎を座敷へあげるわけにはいかないので、そう平太郎にいいつけ、一足先に泉水の向こうの四阿へ行って待っていると、まもな

く平太郎につれられて、きょろきょろあたりを見まわしながら浅吉がやってきた。
「浅吉、早いな」
「ああ、さぶだんな、じゃねえ、だんなはここの若さまなんですねえ」
浅吉はおずおずとそこへ土下座しようとする。
「それには及ばん。ここはだれも見ていないから、そこへ掛けろ」
千代三郎は自分の前の床几を指さしたが、
「いいえ、このほうが勝手でさ。無礼者ってんで、気の早い御家来さんにいきなりばっさりやられた日にゃそれっきりの話だ」
「そうか。では、好きにして話すがよい。しかし、よくたずねてきてくれたな」
「あっしはこれで約束は堅いほうなんで」
「昨日の報告にきてくれたのか」
「そうなんです」
「実は、わしもそれが早く聞きたいと思っていたところだ。お鶴さまの駕籠はどこへ帰ったな」
「そいつがおかしいんだ、だんな」
浅吉は話に気を取られてくると、ここが屋敷内だということをうっかり忘れてしまったらしく、ひょいと立って前の床几へ腰をおろし、
「あれからずいぶんしばらくたって、北条家の家来なんでしょうねえ、立派な女乗り物を担いだ行列が総泉寺へつきやしてね、その駕籠へお鶴さまが乗ったんでさ、やっぱり種ガ島の弾が顔のどこかをかすったんですね、目と口だけを出して、後はさらしをぐるぐるまきにされて、あっしはびっくりしちまった。どこをやられたんか、なにしろ顔ですからねえ、心配でさ」
「自分で歩くには歩いていたのだな」
千代三郎も内心おだやかでない。
「へえ、お照さんが手を取っていましたが、歩けるには歩けるんです。だんな、もしお鶴さまの顔に大きな傷でもできたら、だんなはもう嫁にするなあやめやすか」

挑戦するような浅吉の目の色だ。
「いや、やめはせぬ。そんな薄情なさぶだんなではないから、安心しろ」
「えらいっ。そうこなくちゃだんなじゃねえや。顔がなんだってんだ。ねえ、だんな。顔より命のほうが大切だ。あんなやさしい天女のような人を、少しぐらい顔に傷ができたからってあっさりと捨てちまうようじゃ、あっしはもうだんなとは付き合わねえ」
「それで、まさか、お鶴さまは小名木川の屋敷へ帰ったのではあるまいな」
「いいえ、そいつが小名木川へ帰ったんでさ、あの化け物屋敷の隣のね」
「ふうむ」
千代三郎は思わず目をみはる。
悪人は下屋敷用人馬場三十郎一味と今ははっきりわかっているのだから、それらさえ上屋敷へ遠ざけてしまえば、無論、小名木川へ帰っても悪いということはない。しかし、この騒動の根本、お鶴さまがじゃまになる張本人は、北条家の当主その人なのだ。はたして、その圧迫が外記一人の力で防ぎきれるだろうか。
器量人といわれた丹羽内蔵介がついていて、あの老人たちはどんな策を思いついてのことだろう。
「浅吉、昨日佐倉屋へきた老人な、あの駕籠についていった老人はどうしたか見ていなかったか」
「あの御家老さんは、ずっと早く先に寺を出やした。あっしはお鶴さまのほうを待っていたんで、そっちはつけやせんでしたがね」
「そうか、先に帰ったか」
すると、内蔵介はそのまま上屋敷へ帰ったのだろう。
「お松はどうしたか、その後会ったか」
できれば、お鶴さまについているようにと言いつけておいたのだ。
「あっしもあねごをさがしているんですがね、

佐倉屋へ行って聞いてみたら、あねごはお鶴さまが立つとまもなく、一人でどこかへ出ていったというんです」

　すると、これは内蔵介がお鶴さまについていくことを許さなかったのだろう。

「御苦労だった。それでよく話はわかった」

「ただわかっただけなんですか、だんな。お鶴さまを助けにゃいってやらねえんですか」

「いや、助けには行く。よく考えてみよう。お前も小名木川の屋敷を見張っていて、なにかあったらまた知らせてくれ」

「うれしいねえ。そうこなくっちゃだんなじゃねえ。あっ、いけねえ、だんなはここの若さまでしたっけね」

　浅吉はあわてて床几をすべり下り、また土下座になって、

「で、だんな、今夜いつごろここを抜け出してくれやすね」

と、声をひそめて聞く。

が、これだけはなんとも返事のしようがない千代三郎なのだ。

見合いの段取り

1

　平太郎が裏門口まで浅吉を送り出してもどってくるとまもなく、五十嵐富太郎が四阿（あずまや）へ駆けつけてきて、

「申し上げます。ただいま上屋敷より御家老丹羽内蔵介さま、ごきげんうかがいにまかり出ましてございます」

と取り次いだ。

「さようか、すぐ会おう」

　千代三郎は思わず平太郎と顔を見あわせる。いよいよ昨日の小言をいいに出向いてきたに違いないからだ。

「平太も富も、覚悟いたせよ」

「はあ、覚悟はできておりますが、軽くて閉門、重ければ切腹でございますからな」
平太郎はそんな冗談口をたたきながら、しかしあまり気持ちはよくない。
「勇士は終わりをいさぎよくするものだぞ」
「若さま、勇士というものは、本当にわらって切腹するものでございましょうかな」
富太郎もなんとなく浮かない顔だ。
「さよう、泣きながら切腹した勇士の話というのは、物語にも聞いたことがないでな」
「ことによると、手前はその泣きながらのほうの勇士の初物になるかもしれません」
「まあよい、小言は早く聞いてしまったほうが安心だ」
千代三郎はわらいながら一応居間へ引きあげ、身支度をなおして書院の間へ出た。
内蔵介は今日はちゃんと麻裃を着用して出向いてきている。正式だとすると、なにか当主の内意ぐらいは持ってきているかもしれないから、ちょっと穏やかでない。
「内蔵、わざわざの来駕大儀」
千代三郎は正面の褥に着座すると、まず鷹揚に声をかけた。
「千代三郎さまにはいつもながらごきげんの体にて、内蔵介大慶に存じます」
内蔵介も神妙に両手をつかえる。
「御当主さまにもお変わりはないか」
「はい、ごきげんよくいらせられます」
ここまでは無事だ。これからが問題である。
「今日はなにか用か」
「突然ではございますが、殿さま御内意により、内蔵介ただいまからすぐ北条美濃守さまの小名木川の下屋敷までお供いたします」
これは意外だ。お鶴さまのところへつれていくというのである。
「北条家の下屋敷へ、なにしにまいるのだ」
「小名木川に北条家御先代の姫君、鶴姫さまとおっしゃるお方さまがお住まいでございまして

な、北条家五万石はこのお鶴さまが御養子を迎えてつぐことになっております。つまり、今日は下世話に申すお見合い、お庭拝見かたがたお茶を一服所望しにまいるのでございます」

「ふうむ。すると、わしが北条家へ養子に行くことになるのか」

昨日の内蔵介の口ぶりで、これはほぼ察しがついている千代三郎だ。

「話がまとまれば、そういうことになります。お出かけくださいますように――」

「すぐにまいるのか」

「はい、今日のことはほんの略儀、ただ御当人同士がそれとなくお顔を合わせればよろしいので、すでに供ぞろいはできております」

昨日のことには一言もふれず、澄ましてそんなことをいう。無論、なにか考えがあってのことだろうし、先方の北崎外記と打ち合わせもすんでいるに違いない。

こっちはお鶴さまのけがを心配しているとこ ろなのだから、

「さようか、まいるであろう」

と、千代三郎は承知してすぐに立ち上がった。

正直にいえば、昨日の今日で、北条家の内情には疑問があるし、たとえこっちが縁組みを承知したところで、お鶴さまの身が立つかどうか、内蔵介に聞いてみたいことはたくさんあるが、内蔵介のほうでそれを口にしない以上、こっちからうっかり切り出すわけにいかない。余計なことをいうと、せっかく老臣どもが苦労してこしらえあげた膳立てをぶちこわしてしまうおそれがあるのだ。

こういう場合、大名のせがれというものは、家来たちがこしらえてくれた筋書きどおりに動いていれば、大抵間違いのないものなのである。

「若さま、どうやら切腹はしないですみそうですが、妙なことになりましたな」

すきを見て平太郎が耳打ちをする。

「うむ、内蔵になにか考えがあるのだろう、当

分おとなしくしていよう」
「しかし、悪人どものいる屋敷へ乗りこんでいって、大丈夫でしょうか」
富太郎が当然な心配を持ち出す。
「その時のためにこそ、その方たちのような勇士が供をしていくのではないのか」
「赤面の至り、——失言でございました」
浜町から小名木川へは、新大橋をわたればすぐ目と鼻の間である。千代三郎と内蔵介の駕籠をまもったしのびの行列は、いくほどもなく新高橋際の北条家の下屋敷へ到着した。
内蔵介が駕籠から出て、玄関まで出迎えた北崎外記に、
「昨日は失礼つかまつった。その折、話に出ましたお庭拝見の儀、さっそく千代三郎さまに申し上げましたところ、ぜひ見たいとの御所望でしてな、突然お供した次第でござる」
と、何食わぬ顔をして来意を告げる。
「それはそれは、せっかくの御来訪、さぞ姫君にもおよろこびのことと存ずるが、あいにく今日はお顔にお腫物が出まして、やすんでいるという程ではございませんが、お顔をつつんでおります。御遠慮いたしたほうがよろしくはございまいか」
外記が当惑したようにいう。
「いや、その儀なれば、ともかく姫君さまをお見舞い申し上げずばなりますまい。御案内くださるまいか」
「御丁重なるお言葉にて恐れ入る。しからば、まずお通りくだされたい」
老人たちの間で昨日ちゃんと打ち合わせができているとみえて、千代三郎の乗り物はまもなく玄関式台へ横づけになる。
今日は羽織はかまの千代三郎がすっと駕籠から式台へおり立つのを、外記のうしろに控えていた用人馬場三十郎がそれとなくじろりと一目見て、あっと目をみはっている。まさか昨日たずねてきた浪人者が桑名の三男とは夢にも思い

がけなかったのだろう。

「これはこれは、千代三郎君にはようこそ御来駕くだされました。手前は当家の家老北崎外記、またこれなるは当下屋敷用人馬場三十郎、お見知りおきくだされればありがたき幸せにござります」

ひとまず書院の間へ通されて着座すると、外記が昨日のことは素知らぬ顔をして、恭しく名乗りをあげる。その尾について三十郎も丁寧に両手をつかえた。

「さようか。余は松平千代三郎である。見知りおいてくれ」

千代三郎は鷹揚に答えてから、

「外記、まず姫君を見舞いたい。さしつかえなくば、さっそく案内いたすように」

と、こっちは本当にそれが気になっているのだからかまわず切り出す。

「お言葉かたじけのうござります。御案内つかまつります」

「さようか。病間へおおぜいでもあるまい、内蔵だけまいれ」

つれてきた近習たちは書院に残し、内蔵介だけをしたがえ、廊下を進んで二つ三つ曲がると、どうやら姫君の居間の前へ出たようだ。

――お鶴さまびっくりするだろうな。

内心それをたのしみにしてきたが、敷居ぎわまで出迎えた掻取り姿のお鶴さまを見て、あっと千代三郎のほうが思わず息をのんでしまった。浅吉から話は聞いていたが、わずかに目と口だけを出して顔中白布でまかれた姿は、のっぺらぼうの雪達磨を見るようで、なにか不気味でさえある。しかも、そののっぺらぼうの顔がびっくりしたようにじっとこっちを見ているのは、三郎が松平千代三郎だったとわかって、お鶴さまも唖然としているのだろう。腰元のお照の顔もあきれたようにぽかんとしている。

が、千代三郎もお鶴さまも、ここではうかつな口はきけないのだ。

千代三郎を上座にして、こっち側は内蔵介一人、姫君側は中老菊島とお照以下腰元が三人、それぞれに席がきまると、外記があらためて千代三郎を披露し、鶴姫を引きあわせ、菊島以下のあいさつがあった。

「姫君はお腫物だそうですな」

千代三郎が気軽に話しかける。

「はい」

「気分はどうです」

「はい」

菊島をはばかってか、ただ、はいと低い声で答えるだけで、昨日までのはきはきしたお鶴さまとはまるきり人が違うようだ。千代三郎はどうもおもしろくない。

それに、こっちには言っておきたいことも、聞いておきたいこともたくさんあるのだ。菊島だけはどうしてもじゃまになる。

「姫君、こういうおだやかな日は、少し庭へ出られたほうがかえって気分が晴れます。お腫物にもよろしい。わしをお庭へ案内してくださるまいか」

千代三郎はかまわず注文を出してみた。

「はい」

お鶴さまもそれを待っていたとみえて、すぐ立とうとしたが、

「あ、姫君さま、それはちとお軽はずみかと存じます」

中老菊島が意地の悪い顔をしてあわてて引きとめる。

そんなことで黙って引っこむ千代三郎ではないから、

「菊島、苦しゅうない。お庭うちではあるし、千代三郎がそばについておる。そちたちは立つには及ばぬ」

強引にずばりと言ってのけて、

「姫君、まいられい」

と、さっさと立ち上がって廊下へ出てしまった。

「かえってお気がまぎれましょうかな」

老人たちは顔を見あわせてうなずきあっている。すると、これも昨日の打ち合わせの中に、たぶんこうなるだろうと予想してあったことか、それだと老人たちにうまく踊らせられているようであんまりうれしくないが、なまじじゃまをされるよりは、まあましである。

その間に沓脱ぎの上へ庭下駄が二足用意され、姫君は腰元どもに掻取りの上からしごきで腰あげを取られ、いそいそと廊下へ出てきた。

先へ下駄をはいた千代三郎は、黙ってお鶴さまのほうへ手をさし出す。お鶴さまはさすがに悪びれた様子もなく、その手につかまって下駄をはき、庭へおりる。千代三郎は泉水の向こうに見える四阿まで行くつもりで、手を取ったまま歩き出した。後から少し離れて供をしてくるのは、庭下駄を運んでくれたお照だけである。

——はてな。

うららかな春の日をあびて泉水のほとりまで足を運んだ千代三郎は、なにかふしぎなものを感じてきた。

握っているお鶴さまの手が、昨日より硬いようだ。そういえば、時折ふっと春風にただよってくる肌の香も、昨日抱きあげて鼻に残っているものとはまったく違う。

——お鶴さまより体つきもいくぶん細いようだ。

そうか、これは身代わりだな。それで、こんな顔をつつんでいるのだ。本当にこれだけ顔を巻くほどのけがなら、こうして歩けるはずはない。身代わりだとすると、これはだれだろう。ひょっとするとお松ではないかと思った時、

「あの、三郎も今日は千代三郎さまの替え玉に雇われたのかえ」

と、お松の声がお鶴さまの口まねをしてきた。泉水にかかった土橋をわたりかけているので、もうここまでくれば人に聞かれる心配はないのだ。

2

「やっぱりお松か」
「いいえ、わらわはお鶴さまです。かわいがってたも」
お松はどうやらこっちも千代三郎の替え玉だと思いこんでいるらしい。
「どこでお鶴さまにかわったのだね。お鶴さまはどこにいるんだね」
「いやになっちまうな、だんなは。もう少しあたしをお鶴さまにしておいてくれたっていいじゃないか」
「よろしい。もう少しどころか、ここはどうしてもしばらくあねごをお鶴さまにしておかないと、えらいことになりそうだ。さあ、ここへお掛けなさい」
やがて四阿へたどりついたので、千代三郎はまず姫君を静かに掛けさせる。
「三郎、あの林の中に茶室があります。二人でそこへまいりましょう。いやですか」
お松はからかうように、まだしっかりと千代三郎の手をつかんだまま放そうとしない。
「お松、これは真剣勝負なのだ。まず用件のほうから片付けよう。場合によっては、わしはこんな危ないまねをあねごにさせておくのは賛成できない。命にもかかわることだからな」
少しでも偽姫のにおいをかぎつけられたら、それこそ生きてこの屋敷は出られないことになるのだ。千代三郎は真剣にならざるをえないのである。
「さぶだんなだって、偽者とわかれば命がないんでしょう」
「わしの場合は、どっちみち命をねらわれている。あねごがお鶴さまとかわったのは、昨日佐倉屋からだな」
「そうよ」
「それで、顔の傷はどうだ。大丈夫か」
千代三郎はお松の肩に両手をかけて、白布の

上からでは見えないとわかっていながら、つい顔をのぞきこまずにはいられない。
「うれしいなあ、さぶだんなは。そんなに心配してくれるの」
「心配する。どんなことがあっても、人を身代わりなどにしてはならんのだ」
「いいのよ、幸い弾はそれて、本当は傷なんかないんです」
お松も千代三郎の真剣な顔つきに引きずられて、やっとまじめになってきたようだ。
「外記と内蔵介は、なんの目的であねごをここまでつれてきたのだ」
「悪人どもがもう一度あたしを、いいえ、お鶴さまを誘い出すに違いない。その時、悪人どもをつかまえて、頭巾をはいでやろうという腹らしいんです」
「あぶないなあ、毒でも盛られたらどうする気か」
「あたしは大丈夫。けが人で、お照がこしらえてくれるおかゆのほかは口にしないんだから。あんたこそ、ここでおひるが出ても口にしちゃだめよ」
「いや、わしはもうすぐ帰るから、たぶんひるまではおらん」
「あら、そんなにすぐ帰っちまうの」
がっかりしたようなお松の声だ。
「うむ、早く帰って、なるべくこんなあぶない身代わりはやめるように取り計らってやる」
「いいのよ。それは御家老さまたちがちゃんと考えているんだから」
「いや、外記や内蔵介は、主家のためにはあねごの命など万一どうなってもしようがないと考えているかもしれぬ。これだけはしかっておこう」
「あら、替え玉に御家老さまがしかられるの。あんた昨日散々内蔵介さまのほうに油をしぼられていたじゃないか」
「そうだったなあ。しかし、こうして千代三郎

になっている間なら大丈夫だ。どうだ、あねごのほうはまだ替え玉とばれたような風は少しも見えないか」

「大丈夫そうよ。あたしはけが人で口をきかなくてもいいし、お照さんがうまくやってくれるんです。けど、驚いたわ。寝てから起きるまで、お姫さまって窮屈なもんなんですね。一度でいいから大名の姫君になってみたいと前にはよく考えていたけど、一度で懲りごりしちまった。そっちはどうなの」

「こっちも街のほうがおもしろい。お鶴さまどこへつれていかれたか、あねごに聞いてもわからんだろうな」

「わかりません。内蔵介さまがうまく隠しているんでしょ。気の毒だけど、あんたはもうあきらめたほうがいいんじゃないかしら。お鶴さまはどうしても松平千代三郎さまって方を御養子にしなけりゃいけないんですってさ。三郎といっしょにはなれないんですかってお鶴さまが聞いたら、あの内蔵介ってじい、それはなりませんとしかっていたもの」

「そうか。じゃ、あきらめるほかはないかもしれんな。あねご、菊島という女は敵だ。十分に気をつけるがいい」

「わかってます。あの御中老さま、用人の馬場とあやしいようよ。夜中にそっと寝所を出ていって、なかなか帰ってこないもの」

「よろしい、姫君がそう申していたと、外記の耳にそっと入れておこう」

「ほうっておきなさいよ。人の恋路のじゃまなんかするもんじゃないわ」

「なるほど、そうだったな。では、黙っていよう。それから、あねご、浅吉がこの屋敷のまわりにいつも張りこんでいる。わしに用があったら、そっとことづてをたのめ。すぐわしのところへ通じるから」

「そうなの――。それだと心丈夫ね」

「では、そろそろ座敷へもどるといたそう。あ

まり待たせても怪しまれる」
「ねえ、いまはまだあたしは鶴姫さまで、さぶだんなは千代三郎さまなんでしょ」
「それがどうした」
「三郎、一度鶴を抱いてください」
「そうはいかぬ。みろ、あねご、向こうから菊島がこっちへ迎えにくる」
菊島は腰元どもといっしょに泉水の向こうまで出てきて、それとなくこっちを見張っているのである。無論、どこからか馬場三十郎の目も光っていることだろう。長居は無用だ。
「つまんないの。あのおひきずりめ、自分は用人のところへ毎晩忍んでいくくせに、やきもちやきってありゃしない」
お松がぷっとふくれる。
「そのかわり、また手を取ってつかわす。それにて我慢いたせ」
「ふ、ふ、だんなの若さま、板についてんのね」
「そう見えるか。さあ、立ちなさい」
千代三郎はわらいながら手を出す。
「あい」
その手につかまって、わざとなよなよと立ち上がってみせるお松だ。
内蔵介や外記は、この芝居でどんな効果をねらっているのだろう。
馬場三十郎が昨日わざわざ内蔵介をここへ呼んだのは、鶴姫の不行跡を知らせてこの縁組みを破談にさせる腹だった。
その内蔵介が今日わざわざ千代三郎をここへつれてきたのは、あくまでもこの縁組みをまとめるという腹を敵に知らせることになる。
しかも、三十郎は昨日の素浪人が実は千代三郎だったと知る。
その千代三郎がお鶴さまに会えば、こういう仲のいいところを当然見せつけることになる。
——そうか、一つの目的は、あくまでこの替え玉を本物に見せるためだろう。それなら、もっと仲のいいところを見せつけておく必要があ

る。

そして、次に当然おこることは、敵はどうしてもこの縁組みをぶちこわすために非常手段をとるということだ。今夜あたり、姫君をいずれかへ誘拐してまう。おそらく、敵の手はそれだろう。

内蔵介たちはそのまた裏をかこうという腹に違いない。

「姫君、橋は足もとがあぶない。こうしておわたし申そう」

土橋のたもとまできた千代三郎は、いきなり軽々と姫君を両手で胸へ抱きあげた。

「あれ、怖い」

「しばらくの辛抱です」

千代三郎はゆうゆうと泉水の土橋をわたり出す。

「うれしいわ、三郎。抱いてくれたのね」

お松はいい気になって、両手で胸へしがみついてくる。

向こう岸で、菊島があっけに取られた顔をしていた。腰元どもはみんな下を向いている。

「さ、無事にわたりましたぞ」

千代三郎はわざと菊島の前へ行って姫君をそっと立たせ、

「出迎え大儀。めまいをおこされたようだから、抱いておわたしした。そっとお居間へおつれいたすがよい」

と、鷹揚にわらってみせる。

「それはそれは、恐れ入りましてございます」

「いや、わしは姫君にはやさしくするつもりだ。姫君は肉親の愛情を知らぬそうだから、そちたちも特に心をつけてくれ」

悪びれずにきっとそう言いおくと、千代三郎は颯爽と廊下のほうへ歩き出す。

千代三郎が小名木川の鶴姫屋敷を辞したのはそれからまもなくであったが、三十郎の目が始終じっと千代三郎の一挙一動を見まもっていたのは、心のどこかにこれが本物かという疑問が

あったからだろう。

「内蔵、鶴姫はな、家中の争いは好まぬと申しておる。どうしても北条家をつがねばならん理由があるのか」

浜町の屋敷へ帰ってから、人払いをして、千代三郎は聞いてみた。三男坊の自分を北条家へ押しつけるために、たってこの縁組みをまとめようという内蔵介の親心なら、千代三郎もまたこの縁組みはことわるべきだと決心したからである。

「若さまのお心はよくわかっております。内蔵介もその点熟考の上、外記と話し合い、また別にそれとなく北条家の内情をさぐらせてもみました。他家の悪口は慎むべきでございますが、当主美濃守さま、御嫡男、共に酒乱にて素行おさまらず、一家中のほとんどが先君をしたい、鶴姫の御聡明をおしたいしております。なお捨ておきがたいのは、御嫡男紀五郎さまはたって鶴姫さまを所望いたしており、それがこの度の騒動の根本になっているようでございます。御他言は無用ですが、この儀お含みの上、天女を救ってやるは勇士のつとめと存じます」

内蔵介はそんな味なことをいう。

「さようか。そう聞いては捨てておくわけにいかぬな」

「しかし、お軽はずみはいけません。万事内蔵介におまかせおき願います。昨日の総泉寺の儀など、まったく御無用にございます」

「駕籠の主が替え玉だから、どうなってもよいと申すのか」

「いや、備えは外記がいたしておりました。寺の門をしめて張本人をつかまえる腹だったようでございます」

横から余計な手出しをしたばかりに、張本人を逃がしてしまったといわぬばかりの口ぶりである。それが事実だとすれば一言もない。

千代三郎はお鶴さまをどこへかくしたのか、それを聞いてみたかったが、ついに口に出しかね

てしまった。教えてよければ自分のほうから口にするだろうし、なまじこっちから聞いて、「若さまはそんなに天女のもとへお忍びになりたいのですか」などとやられては、それこそ男の恥だからである。

——なに、会いたければ自分でかくれ家をさがすまでだ。

千代三郎はそう腹をきめて、日の暮れるのを待っていた。どうも、いくらいわれてもおとなしくはしていられない性分に生まれついているのだからしようがない。

裏の裏

1

「姫君さま、菊島はこれからお顔のお手当のことについて御用人と打ち合わせに行ってまいります」

その日、夕飯がすむとまもなく、菊島は鶴姫にそうことわって、腰元一人をつれ、馬場三十郎の用人部屋へ出向いた。

用人部屋は下役はもうみんなさがってしまい、奥の間に三十郎が一人残っているだけである。

つれてきた腰元を廊下へ見張りに残して、菊島は掻取りさばきもあざやかに、がらんと片付いた下役の間を通りぬけ、ひざまずいて奥のふすまをあける。

「おお、お菊か」

手あぶりの前へつくねんと座ってなにか思案をしていた三十郎は、濃化粧の年増盛りの菊島の顔を見ると、にっと顔色をやわらげる。

するりと中へ入って、後ろのふすまをしめきった菊島も、たちまち権高な顔をすて、まなざしに一杯の媚をたたえながら、静かに三十郎のひざの横へ行って、しなだれかかるように座る。

今夜もなんとなくねっとりとやわらかい大気が肌にまつわるような春の宵だった。
「待っていたぞ、お菊」
「あたくしも――」
三十郎は右手で菊島の肩を抱き、その手はそっと内ふところへ滑っていく。かっと全身の血が甘く燃えてくる菊島だ。
「不義も忠義のため」
その耳へ三十郎がわらいながらささやく。
「忠義がすんだら、きっと女夫ですぞえ」
「うむ、菊はわしのかわいい妻」
「うれしい、あたくし」
「しかしな、一つ間違うと二人とも命がない」
二人の不義は、外記も今は見て見ぬふりをしているとわかっているから、鶴姫の代になれば当然成敗されなければならない二人なのだ。
「たとえお手討ちになっても二人でなら」
「いや、死んではならぬ。ぜひ勝つのだ。御当主さまのためにもな」
「それで、今夜の手はずはどうなのでございます」
「菊、そちは今日の松平家の若君、千代三郎をどう思うな」
ふっと三十郎の顔が曇った。
「どうと申しますと――」
「わしはあれはたしかに一昨日姫君をさらった三郎という浪人者だと見た」
「あたくしはその三郎という者を見ておりませんからわかりませんが、姫君は三郎に熱いおもいを寄せております。今日はじめて会った若君なら、あのように抱かれておとなしくはしていませんでしょう。あれはもうちゃんと許しあっている仲です」
「すると、千代三郎は三郎と見ていいな」
「よろしいと思います」
「内蔵介と外記が相談して偽若殿を作ったか、それとも三郎は本当に千代三郎なのか」
「たぶん、偽若殿のほうでございましょう」

きっぱりと言いきる菊島だ。
「その偽若殿を、なんで今日ここへつれてきたのだ」
「お前たちのたくらみはもうみんな知っているぞと、暗にあたくしどもに見せつけ、あたくしどもに手を引かせようとしたのです」
中老としてわざわざ下屋敷へ送られるだけあって、菊島はさすがにそのくらいの目端はきく女だった。
「うむ、まずその辺だろうな」
満足そうな三十郎だ。
「偽物にもせよ、本物にもせよ、三郎が敵の味方になったからには、もうこちらのたくらみは隠しようがございません。早く最後の勝負をなさらなくては」
「それはやる。だからこそ、今夜こうしてそなたをここへ呼びつけたのだ」
「本当でございますか」
「本当だ。そなたがわしとこうしてゆっくり姫君の顔の手当を相談しているうちに、中間が一人そっとお居間の庭へ忍んでな、三郎の手紙をお照にわたす」
「まあ」
「今夜四ツ（十時）隣の化け物屋敷でもう一度会いたいという呼び出しの恋文だ」
「その手に乗りましょうか、姫君が」
「雄々しい気性でいらせられるから、きっと乗る。姫君にしても、ぜひもう一度本当の三郎に会って今日の真相をたしかめなくては安心できまい」
「そういえばそうでございますね」
「今夜こそ姫君をいやおうなしに築地の中屋敷へ船で運んでいく。そこに若殿紀五郎さまが手ぐすねひいてお待ちになっているという筋書きなのだ」
「でも、お顔のおけがは大丈夫でございましょうか」
「あれは、たぶん偽傷だ」

「えっ」
「こっちの昨日の襲撃をいいことに、とんでもないけがをしたと見せかけて、当分若殿の野心からのがれようと、外記が小細工をしているのだ」
「まあ、どうも少し変だと思いました。おけがのわりに立ち居が楽そうで、あまりお横になりたがりません」
「こっちもそれに乗ったと見せてその裏をかく。なあに、老人どもがいくらもがいても、姫君が一度紀五郎さまのお情けをうけてしまえば、そこは女だ、三郎のことなどけろりと忘れてしまうだろう」
三十郎はそんな不敵な計算を立てている。
「では、この打ち合わせはなるべくゆっくりしていたほうがよろしいのでございましょう」
「うむ、なにぶん大切なお顔のお手当の打ち合わせだでな、そう簡単にはすまぬ」
「切ない、三十郎さま」
菊島はいつか身も心もとけゆるんできて、掻取りが半分肩からすべり落ち、えりもともひざ前もしどけなく乱れくずれていた。

2

その夜、四ツ（十時）の鐘を聞くと、お松のお鶴さまはそっと床の上へ起きあがった。
——さあ、勝負だ。
さすがにじいんと胸が引きしまってくる。
宵の口に、菊島が用人部屋へ打ち合わせに出ていくとまもなく、お照が庭番の中間からわたされたといって、結び文を持ってきた。
「今夜四ツ隣の空き屋敷にて待つ。寝所を忍び出れば手配あり、三郎」
そういう文面である。
三郎がわざわざ偽姫を呼び出すはずはないから、無論、馬場三十郎のたくらみに違いない。その結び文は、まもなく脈を取りにきた典医石野研斎の手からひそかに外記にわたしてある。

「お照さん、表に浅吉が待っているんだけど、今のとおなじ手紙を書いてわたしてもらえないかしら」

後でそっとお松はお照に相談してみた。そんなことをしなくても、手配はちゃんと外記がしてくれる約束になっているのだから少しも心配はないが、今朝さぶだんなが特にそう言いおいていってくれたのだ。どうせ助けてもらうなら、外記の手の者よりさぶだんなにもう一度抱いてもらいたいし、外記だけではなにか不安でもある。しかし、お照は意外にも、

「あの、できるだけはやってみますけれど」

と、当惑したような顔つきなのだ。

「そんな難しいことかしら」

「だれにも見つからずに照が門を出られるといいのですけれど、あたくしはもうきっと用心されていると思います」

そういわれてみると、なるほどそうに違いない。こっちが少しでも変なまねをすると、敵は偽手紙と感づいたなと見て、今夜の計画を中止してしまうかもしれない。ここはあくまでも敵の手に乗ったと見せかけておかなければならないところなのだ。

「それに、三郎さまのほうへは、御家老さまから知らせてくれるようになっているかもしれませんし」

お照はそうもいう。

「そういえばそうね」

さぶだんなが本当の若君ならともかく、洗ってみれば三郎浪人なのだから、強いとわかってはいるのだし、こんなとき外記が遊ばせておくはずはないと、お松もそんな気がしてきた。

「けれど、できるだけはやってみます」

「無理をしないようにたのむわ」

そんな相談をしているうちに、やがて菊島が帰ってきてしまった。

——ふん、散々いいことをしてきたな。

お松はその取り澄ました権高な顔を見るとな

んだかおかしい。

が、菊島が帰ってきてしまっては、もうお照もうっかり座を外すことさえできない。

こうして、表の浅吉とはついに連絡が取れず、お松の鶴姫はお照の手で白羽二重の寝巻きに着替えさせられ、寝所へ入るようになってしまったのだ。

寝所の前には、お照が着のみ着のままで宿直をしている。次の間に菊島が寝ているが、今夜はこれに遠慮することはない。

お松は起きあがるとすぐ、手早くお照が用意しておいてくれたお高祖頭巾をかぶり、懐剣をしごきの間へさしこみ、被布を羽織った。

——この姿が、お鶴さまの時はとても気品高く見えたけれど、あたしもそう見えるかしら。

すばらしい芝居でもしているような気持ちで、お松はちょっとたのしくなってくる。

そういえば、今朝は本当にびっくりしてしまった。まさか、さぶだんなが若君に化けてふいにたずねてくれようとは思いもかけなかったし、しかも、そのさぶだんなが自分を庭の四阿へ誘い出して、二人きりでゆっくり話をした上、泉水の橋を抱いてわたってくれたのである。

菊島たちが見ている前だけに、これは大芝居だった。

——憎いなあ、あの人。若殿ぶりがすっかり板についているんだから、度胸がいいってありゃしない。

内蔵介にお鶴さまの替え玉をたのまれた時は、気の毒な姫君のためにひとはだぬいでやろうという気持ちだったが、さぶだんなといっしょに芝居ができるなら、少し窮屈ではあるけれど、偽姫君もそう悪い役まわりじゃないと思う。

——さあ、今夜はどんな芝居になるか。

そっと御簾をくぐって寝所をぬけ出ると、お照がうなずいて先に立ち、音のしないように障子をあけて廊下へ出た。

そこの廊下を一つ曲がって、戸袋口へ行き、素早く雨戸を一枚あけてくれる。外は今夜もおぼろ月夜で、それと見た覆面の中間が、袖垣のかげからすっと出てきて、おじぎをしながら庭下駄をそろえてくれた。

——うまくできてるなあ。

お松は感心して、鷹揚に庭へおり、お照に目くばせすると、

「お気をつけあそばして——」

お照は小声でいって、じっと目に思いやりをこめてから、静かに雨戸をしめてしまう。

——一つ間違うと、これがこの世での主従の別れになる。

ふっとそんなことを考えて、お松は目頭が熱くなってきた。

「御案内つかまつります」

下郎はおそるおそるいって先に立つ。泉水のまわりをまわって、そこの木戸から外庭へ出る間中、夜番の者にも出会わない。敵にも味方にもたくらみがあるのだから、当然のこととはいえ、一体どっちがうまく敵をだましきれるのか、考えてみるとちょっと不安な気がしないでもない。

船着き場まで出てくると、そこにちゃんと小舟が用意してあった。

「これ、三郎はもうまいっているのですか」

わざとお鶴さまらしく小声で聞いてみる。

「はい、まいっておられます。どうぞお乗りくださいますよう」

うそをつけと思いながら、

「お前は舟がこげますか」

と、ついからかってみたくなる。

「はい、手前めは房州育ちでございます」

下郎はこっちを本物の姫君と思いこんでいるのだろうから、決して顔をあげようとしない。

お松が庭下駄をぬいで小舟にうつり、褥の上へゆったりと座ると、なるほど、下郎はあざやかに棹を使って、舟は水門口からすっと小名木

川へすべり出る。そこから石崖づたいに三十間ばかり下ると、化け物屋敷の水門口になるのだ。が、下郎は棹を艪にかえて、黙って舳を逆に大川のほうへ向けている。

「隣の空き屋敷へまいるのではないのですか」

お松はどきりとして聞いてみた。

「はい、お隣には敵の目がございますそうで、三郎さまは船で大川にお待ちでございます」

しまったとお松は思った。敵は万一の場合のことを用心して、あらかじめ場所を偽っておいたらしい。おそらく、外記はそんなことは知らないだろうから、化け物屋敷のほうへ手配をしているに違いない。

——どうしたらいいかしら。

逃げるとすれば水に飛びこむ以外はないが、それならいつでも飛びこめる。

——よし、行くところまで行ってみよう。

敵はどんなまねをしようというのか、それを見ておくのもむだではないし、たとえどたん場でこっちの化けの皮をはがれたとしても、まさか命まで取ろうとはいうまい。お松はとっさにそう度胸をすえた。

下郎はたしかにこぎ手らしく、舟はすべるようにぐんぐん小名木川をのぼっていく。それとなくあたりを見まわしていたが、別にほかにはこいでいる舟もなさそうだ。敵は、連れ出してしまいさえすれば、たとえだだをこねても水の上だから逃げられまいと、たかをくくっているのだろう。やがて、高橋の下をくぐり、万年橋の下をくぐると、舟は広々とした大川へ出て、右手に新大橋が黒々とそびえて見える。その川の中ほどに屋根船が一隻いて、こっちを見かけると急にこぎ寄せてくるようだ。

「これ、三郎はあの船に乗っているのですか」

「さようでございます」

下郎の声は低い。姫君をだましているのだから、さすがに良心はとがめるのだろう。

船はたちまち川の中で出会い、ぴたりと舷を

寄せると、
「お待ちかねでございます。どうぞこちらへおうつりくださいますように」
と、屋根船の船頭がいった。これも屋敷の小者らしく、ちゃんと覆面をしている。いまさらじたばたしてもしようがないので、お松はいわれるままにおとなしく屋根船へうつった。見ると、いつの間にかおなじような屋根船が二隻、少し離れてこっちの船を護衛しているようだ。
「どうぞ――」
船頭が船房の戸をあけてくれる。中に宗十郎頭巾で顔をかくした立派な侍が一人座っていた。
馬場三十郎に違いない。お松はすっとひざから船房へ入って、恐れげもなくそこへ座り、じっと三十郎の顔を正面から見すえてやる。
「もうお気づきのようでございますな」
三十郎はそこへ両手をつかえていう。お松は黙ってうなずいてみせた。
「失礼の段は、三十郎、幾重におわび申し上げます。かようなことをいたしますのも、みなお家を無事におさめたいからでございまして、願わくば我々どもの微意をおくみ取りくださいますればありがたき幸せにござります」
「どうくみ取れと申すのか」
お松が低い声で聞く。
「姫君さまが三郎なる浪人者と町にてお気まぐれに一夜をすごしました儀、表ざたにあいなりましてはお身が相立たなくなります。なにとぞ、さようなる儀はお忘れあそばして、若殿紀五郎さまとお縁組みあそばされ、めでたく御家督をおつぎくださいますよう切に願わしゅう存じます」
つまり、おとといの晩の不身持ちは忘れてやるから、黙って紀五郎といっしょになれというのである。
「ならぬと申したら――」
お松は三十郎があくまでも自分を姫君あつか

いにしているのがおもしろくなって、ついからかってやれという気になる。
「そこをまげて御納得願いあげます」
言葉はていねいだが、三十郎のほうでももうこっちのものだという腹があるから、だんだん強引になってくる。
「松平家のほうはどうなります」
「姫君のお心さえきまりますれば、明日にも三十郎がおことわり申し上げてまいります」
「千代三郎さまが承知しませんでしょう。姫はもう三郎とちぎりを結んでいます」
あっというように三十郎は姫君を見つめた。どこか声が違うようだし、姫君がそんなことを平気でいえるものではないからだ。
「姫君、かぶり物をお取り願います」
「なぜです」
「世の中には替え玉ということもございますからな」
「そなたもかぶり物を取りますか」
「よろしい。手前も頭巾を取ります」
三十郎は手早く宗十郎頭巾を取る。
お松もお高祖頭巾をぬいだ。が、まだ白布で顔をおおわれている。
「その布もお取りください」
「そなたのつけた顔の傷が見たいのですか」
「拝見いたします」
いやだといえば躍りかかっても取りのぞきそうな面魂なので、お松は自分でするするとそれを解きすてはじめた。
「あっ、貴様、お松というやつだな」
それでも半信半疑だった三十郎は、むき出しになったお松の顔を見ると、かっと激怒したようだ。
「そんな怖い顔をしないでくださいな、馬場さん、あたしは気が小さいんですから」
いけしゃあしゃあとお松がいう。
「お前、どこで姫君と代わったのだ」
さすがに三十郎も策士だけあって、ぐっと怒

りをのみこんでしまったようだ。
「昨日、お寺でかわったんです」
「すると、姫君はあの時――」
「死んだらしいわ」
とっさにけろりとしてそんなうそが出るお松だ。
「本当か、それは」
「お寺へ行って聞けばわかると思うけれど、あたし外記さんに泣きつかれて、仕方なしに替え玉になっていたんです」
「ふうむ」
三十郎はまじまじとお松の顔をながめている。
「あんた、あたしを連れ出してどうするつもりだったの」
が、その手には乗らず、
「おい、本当のことをいうんだぞ。今朝きた松平家の千代三郎というのは、おととの三郎というやつだな」
と、自分の聞きたいことを聞き出そうとする。
「そうよ。ほかの人になら、あたしが抱かれるはずはないもの」
「千代三郎と三郎は同一人なのか」
「いいえ、あっちもたぶん替え玉でしょ」
「しかし、なんの必要があって替え玉が替え玉をさぐりにきたんだ」
「さぐりにきたんじゃありません。当分、替え玉を本物に見せておくために、外記さんがあっちの御家老さんにたのんだんでしょうよ」
「お前はお寺でたしかに姫君を見たんだな」
「いいえ、見やしません。けれど、重いけがだっていってました」
「お前は今夜三郎の手紙を見て、どうして出てくる気になったんだ」
「だって、あたしだってさぶだんなには会いたいもの」
「お前はおととの晩、姫君とお照と、三郎というやつも、みんないっしょに佐倉屋へ泊まっ

たんだな」
「泊まりました」
あぶないとお松は思う。そこを深く突っこまれると、そこで替え玉になったことを感づかれるおそれがあるのだ。
「あの晩、あたしはまったく顔負けしちまいました。お姫さまどうしてもさぶだんなと寝るんだってだだをこねるんだもの。お姫さまって案外そんなことを恥ずかしがらないもんですね」
「それで、いっしょに寝たのか」
「まさか。――さぶだんながいろいろなだめて、お姫さまとお照さんとを寝かし、あたしたちは夜通し起きていて話しあかしたんです」
「翌日、つまり昨日、あっちの家老がたずねていったな」
「ええ。そこで、あたしたちはお払い箱になっちまったんで、それじゃ一文にもならない、総泉寺まで押しかけようってんで、みんなでついていったんです」
「よし、そのとおりに真にうけておこう」
三十郎は冷たい薄わらいをうかべてそういってから、
「船頭、船頭」
と、艫のほうへ呼んだ。
「へえ、お呼びでござんすか」
「うむ、船を下屋敷へもどしてくれ」
「小名木川へもどしやすんで」
「そうだ。あっちの船へもそういいつけろ」
「かしこまりやした」
船頭は供船のほうへ声をかけて、すぐに舳をまわしにかかる。
あたしはどうなるんですとお松は口まで出かかったが、たぶん満足な返事はしないだろうと思いなおし、わざと黙っていた。三十郎は一度ぬいだ宗十郎頭巾をまたかぶりなおして、なにかじっと思案している。
――ことによると、ばっさりやる気じゃないかしら。

お松はなんとなく薄気味が悪くなってきて、それとなく三十郎のほうを見ていた。

「お松――」

急に三十郎が鋭い目を向けてきた。

「なんです」

「お前、その白布で顔をもとのように包み、頭巾をかぶれ」

「はい」

そんなことを言いつけるようなら、今は切る気はない。なにかこっちを利用する気だと読んだので、お松はゆっくりと顔をもとのように白布でつつみ、お高祖頭巾をかぶる。

「これでようございますか」

「うむ」

三十郎はそれっきりまた黙りこんで、時々鋭い目をじろりと向けてくる。

分に生きる

1

翌朝――。

馬場三十郎はいつもより少しおそめに用人部屋へ出仕した。

実は、今朝は早くから起き出して、いまに家老北崎外記から迎えの者が青くなって駆けつけるだろうとお長屋で心待ちにしていたのだが、案に相違して、今まで待ってもなんの音さたもない。

そんなはずはないのだ。昨夜はうまく一杯食って、せっかくうまく連れ出した鶴姫は替え玉のお松だった。外記のほうにそんなたくらみがあるようでは、ひょっとするとお松の手から宵の呼び出し状が外記の手へわたっている。

とすれば、隣の化け物屋敷に手配りがあるは

ずだ。よし、場合によっては決戦に出てやろうと、さっそく様子をさぐらせてみると、やがてもどってきた忍びの者の返事では、別にそんな様子もないようだという。

すると、お松が自分でいうとおり、お松もまた三郎というやつに会いたくて、こっちの偽手紙に引っかかったことになる。

それならなおおもしろいと思った三十郎は、偽姫のお松を例の化け物屋敷の外蔵へ監禁して、浪人ども五人に見張りをさせておいた。

つまり、今朝は寝所に姫君がいないはずである。当然外記がうろたえるはずだのに、今もってなんのさたもない。

——またなにか小細工をしているのかな。

こんどこそどんな手も食うもんかと、内心勝ち誇りたいような気持ちで三十郎は出てきたのだった。

「別に変わったことはないか」

用人部屋へ入って下役の者に聞くと、

「はあ、至極無事のようでございます」

その男も一味の者で、昨夜のことを知っているから、どうしたんでしょうなといいたげな顔である。そこへ中老菊島の女中が、

「御用人さま御出仕でございましたら、菊島がお目にかかりたいと申しておりますが」

と、都合を聞きにきた。

「さようか。ただいま当方からうかがうと申しておいてくれ」

来たなと思ったので、三十郎はそういって、先に女中をかえし、すぐ奥の間へ行ってみた。奥は気のせいか、まだひっそりとしている。

「なにか御用だそうですな」

対面の座敷だから、三十郎も行儀よくいって菊島と対座する。

「お役目御苦労にございます」

掻取り姿の菊島も一応表向きなあいさつをしてから、そっとあたりを見まわし、

「御用人さま、今朝は姫君さま御不快の御様子

にて、いまだにお目ざめがございません。これからどうすればよろしいのか、お指図くださいませ」

と、目に媚はふくんでいるが、さすが緊張した面持ちだ。

「まだ御家老はごきげんうかがいに出ぬのか」

「はい」

「おかしいな」

それでは外記はまだなにも知らないことになるから、騒がぬはずである。

しかし、外記は朝起きると朝食の前に必ず一度姫君の顔を見にくる例になっている。今朝にかぎってそれがないというのは少しおかしい。

「おいぼれ、風邪でもひいて寝ているのかな」

三十郎はつい乱暴な口ぶりになる。

「それならそれで、いつもはちゃんとあいさつがございます」

「寝所は無論からなのだろう」

菊島はうなずいてみせてから、

「いま姫君さまは築地ですか」

と、一層声をひそめて乗り出すようにする。

「いや、それがな、あれは替え玉だった」

「えっ」

「本物は総泉寺で寝ているか、死んだか、——待てよ、外記はそっちへ出向いていて留守なのかもしれんぞ」

姫君の容態が急変したとすれば、もう偽姫どころではないから、当然外記は総泉寺へひそかに駆けつけることになる。

「あたくしにはのみこめません。あれが替え玉——」

「うむ、あれはお松という町の女でな、外記め、苦しまぎれにとんだ小細工をやりおったのだ」

三十郎は昨夜のあらましを菊島に話してやる。

「まあ、恐ろしいことを——。そういえば、先ほどからお照の姿も見えません」

「よし、とにかく外記の居間へ押しかけてみよ

う。来い、お菊」

三十郎はいきおいこんで立ち上がった。鶴姫の落命は、若殿紀五郎こそ多少失望はするだろうが、それで跡目問題も外記失脚も一挙にかたづく。こっちにとっては願ってもない幸運ということになるのだ。

「お菊、これが思うつぼならわしは明日からでも上屋敷の側用人。そなたは晴れてわしの女房」

座敷を出ようとした三十郎は、急に振りかえって菊島の肩を抱き寄せる。おれの目に狂いはないという自信があるし、外記さえいなければこの屋敷に怖い者はないという安心もあったからだ。

「あれ、髪がこわれます」

「うむ、その髪、後でゆっくりこわしてみしょう」

そんなたわむれに興じながら、まもなく二人は連れ立って別棟の外記の居間へ押しかけてみた。

が、てっきり留守だと思った外記が、意外にも、そこに羽織はかまの改まった姿で、のんびりと茶を喫していたのだ。

「連れ立って両人、どうかしたかな」

外記はおだやかに二人を迎えて聞く。

いささか当ては外れたが、それならそれでちゃんと奥の手を用意している三十郎だ。

「御家老、ほかでもございませんが、昨夜姫君にはまた御寝所をおぬけあそばされ、いまだにおもどりがないそうでございます。いかがいたしたものでしょうな」

「なに、姫君が――」

外記は思いがけないというような顔をして、

「菊島、それは本当か」

と、菊島のほうを向く。

「はい、今朝なかなかお目ざめがございませんので、御寝所を見ますと、姫君さまのお姿がございません。先日の例もございますので、女中どもにはまだ御不快にておやすみのように申し

おき、いかがいたしたものかとおうかがいにまかり出ました」
菊島がまことしやかに申しのべる。
「そちは夜分よほど眠りが深いとみえるな」
外記は揶揄するようにいってから、
「三十郎、これを見なさい」
と、たもとから結び文を出して三十郎にわたした。
見ると、「今夜四ツ隣の空き屋敷にて待つ、寝所を忍び出れば手配あり、三郎」と書いた昨夜の結び文で、無論、三十郎が自分の手でこしらえたものだ。これが外記の手にわたっていながら、どうしてなんの手配りもしなかったのだろうと、ちょっと不審ではあったが、
「ほう。すると、やっぱり三郎と申す浪人者の仕業のようですな」
と、三十郎はわざとまゆをひそめてみせる。
「うむ。しかし、御聰明な姫君は、昨夜その手にはおのりあそばさなかった」
「と申しますと――」
「それは何者かが謀った偽手紙でな、三郎がよこしたものではない。へたな小細工をいたすものだ」
あまりにも外記が落ち着き払っているので、三十郎はなんとなく不気味になりながら、
「では、御家老、姫君は御無事なのでございましょうな」
と、ついせきこまずにはいられない。
「うむ、御無事でいらせられる」
「どこにおいであそばすのでございましょう」
「三十郎はたしか存じているはずだがな」
なあんだと思った。外記は替え玉を見破られ、しかもその替え玉がこっちのとりこになっているので、苦しまぎれに妥協を申しこんでいるのだろう。それなら手があると三十郎が内心ほくそえんだ時、小侍があわただしく廊下を小走りにきて、
「申し上げます。ただいま築地より若殿紀五郎

さま、お遠乗りの途中、鶴姫さまお見舞いのためお立ち寄りなされましてございます」
と、ひざまずいて取り次いだ。
「ほう、若殿がな」
外記もこれは意外だったとみえ、ちらっと三十郎の顔色を見ているようである。三十郎にしてもこれは不意打ちだったが、外記を窮地に落とすにはちょうどいい機会だととっさに腹をきめて、
「御家老、ともかくもお出迎えいたしましょう」
と、かまわず立ち上がった。
三十郎が先に立って表座敷へ出てきてみると、馬乗りばかまの若殿紀五郎は、供の近習四、五人をしたがえて、もう書院の間へあがり、突っ立ったままいらいらしているところであった。
「これはこれは若君には突然のお運びにて、お出迎えもつかまつらず、失礼いたしましてございます」
外記が恭しくそこへ両手をつかえると、
「外記、鶴姫は偽物だそうだな」
わがまま育ちであまり聡明でない紀五郎は、かんしゃく持ちらしく、いきなり頭からあびせかけてきた。
「これはまた異なことを――。何者がさようなことをお耳に入れましたか」
「昨夜三十郎からそう申してきた。いや、論より証拠、鶴姫に対面しよう。さっそく病間へ案内せよ」
のっぴきならぬ言いつけである。外記がさだめし当惑するだろうと、三十郎はひそかに菊島と目でうなずきあっていると、
「いや、姫君は病間ではございません。幸い今朝はごきげんよくいらせられ、お庭の茶室にまいられております」
と、思いがけない返事だ。
「なに、茶室とな。しかとさようか」
「なにしに外記が偽りを申しましょう」
「よし、すぐに対面しよう。三十郎もいっしょ

に来い」
「はっ」
三十郎はなんとしてもふにおちぬ。本物の鶴姫が突然茶室などへあらわれるはずはない。——そうか、外記は我々を茶室へ遠ざけておいて、その間に腹を切る気か、逃亡でもしようというのか。どっちでもかまわぬ。それならそれでいっそ始末がいいのだ。
そんな気持ちで、紀五郎の後から、泉水のふちをまわって、若葉の林の中にある茶室へいそいだ。枝折り戸から小庭へ入って、ぬれ縁のほうへ進もうとした紀五郎が、あっとそこで棒立ちになる。
つづく三十郎も、ぎょっと息をのんでしまった。そのぬれ縁へ羽織はかまで腰かけ、茶の接待をうけている貴公子は、たしかに昨日の松平千代三郎で、茶室にお照をしたがえ、見るからに明るい顔で行儀よく座っているのは紛れもなく輝くような美貌の鶴姫である。
「三十郎、あれは何者だ」
わがものにとかねてから執心をかけていた鶴姫が、見たこともない貴公子とむつまじげに茶室で語り合っている。かっと嫉妬の炎をあおられた紀五郎が、無作法にも千代三郎を指差して三十郎に聞いた。
「はっ、あれなるは桑名の松平千代三郎と偽って、再三姫君を誘い出そうとたくらんでいる三郎というふらちな素浪人でございます」
そう出るよりほかに引っこみがつかない三十郎である。
「なにっ、素浪人と申すのか」
「はっ」
「不届きなやつ。三十郎、許す。手討ちにせよ」
「はっ」
しかし、三十郎はさすがに立ちかねる。千代三郎の強いのは十分知っているし、口では素浪人呼ばわりしても、本当はまだ半信半疑なのだ。
「おのれ、なぜ立たぬ。いま見れば、鶴姫はこ

うして無事であるに、昨夜はよくも偽者だと予をだましたな」
「はっ、お言葉でございますが、これには少しく子細が――」
「聞かぬ、この偽り者め。その方からまず手討ちにしてくれる」
鬱憤のやり場のない紀五郎は、すっかり逆上気味で、いきなり抜き打ちに三十郎を切り捨てようとした。とたんに、
「えいっ」
千代三郎の手から茶わんが飛んで、はっしと紀五郎の刀の手を打つ。
「あっ」
思わず刀を取り落とした紀五郎は、
「おのれ、素浪人、なにをする」
夢中で落ちた刀をあわてて拾って、こんどは千代三郎に切りかかろうとした。
「およしなさい、紀五郎さん。あなたにはまだわたしは切れぬようだ」
平然としてわらっている千代三郎である。
「うぬっ」
紀五郎は悔しそうにうめいたが、そのゆったりとした相手の底知れぬ気魄にのまれてどうにも足が前へ出ないらしく、
「外記、外記はおらぬか。不届き者が庭へ入りこんでいるぞ。――外記、外記」
と叫び立てながら、走るように枝折り戸から出ていってしまった。あっけに取られて控えていた近習たちが、いそいでそれを追い、いちばん後から青い顔をした三十郎がこそこそとのがれ去ろうとする。
「待て、三十郎」
「はっ」
仕方なくそこへひざまずいたが、顔をあげきれないようだ。
「外記はな、家名の恥になることは何事もできるだけ穏便にすませたいと心を砕いているようだ。わかるか」

「はい」
「お鶴さまもその心でいる。そちも男一匹、よく考えて、北条家一藩がなにを望んでいるか反省してみよ」
千代三郎の声音はあくまでも穏やかである。
「恐れ入りましてございます」
「さようか。わかったらもうよい。行きなさい」
「はっ」
悄然と立ち上がる三十郎だった。

2

無礼なたわけ者たちがみんな立ち去ってしまうと、庭の林ではまた小鳥がさえずり出した。
「千代三郎さまはまことの勇士」
お鶴さまがうれしそうにうっとりと千代三郎の顔を見あげる。
「三郎と呼んでいただきたいな。わしにはそのほうがなつかしい」
千代三郎がそういってにっこりわらう。
「でも、三郎が千代三郎さま、鶴はまだ夢のような気がします」
「わしもゆうべだけはびっくりした」
千代三郎は昨日、日の暮れるのを待って、また屋敷をそっとぬけ出す気でいた。すると、日が暮れてまもなく、生母清泉院さまから迎えの女中がきたのである。
さては、こっちの下心を読んで、それとなく意見されるのかなと思い、覚悟して別殿へ行ってみると、思いがけなくも清泉院さまの相手をしている腰元は鶴姫だった。そして、清泉院さまは、三郎どの、これは鶴姫さまではありません、昨日内蔵介からあずけられたお気の毒な町の天女ですと説明して、うれしそうにわらっていた。
「こんどばかりは老人どもにうまくやられてしまった」
「本当に――。鶴はおとといあの佐倉屋からお方さまのところへ送られた時、もう三郎には来

世でなくては会えないのかと、悲しくて悲しくて、気が遠くなりそうでした。それを、おやさしいお方さまがいろいろとなぐさめてくださり、夜もおそばへやすませてくださいました」

「わしはお方さまに、町の天女のことは話してあったのです。お方さまは三郎のことはお鶴さまに一言も言わなかったのですか」

「ええ。千代三郎さまのことはお話しくださいましたけれど、それが三郎のことだと鶴にはわかりません。なんですか、鶴はこのままその千代三郎さまのお嫁にされてしまいそうなので、鶴は一生懸命に三郎のことをお話ししました。そして、鶴は三郎が好きですからどこへもお輿入れはいたしませんと、はっきり申し上げたのです」

「つまり、下世話にいうと、お鶴さまはお方さまに三郎のことを一生懸命のろけたわけですな」

「恥ずかしい、わたくし」

お鶴さまはいまさらのようにぽっとほおを染めている。

「道理で、ゆうべお鶴さまがわしを見て、まあ三郎とびっくりすると、お方さまはおわらいになって、三郎は天女さまを抱いて部屋を歩いたそうですねと、よく知っていた。そんなことまで話してしまったのですね」

「ごめんなさい。みんな話してしまわなければ、鶴は千代三郎さまのお嫁にされてしまいますもの」

はっきりしている鶴姫のことだから、お方さまはさぞ顔負けしたことだろうと思うと、千代三郎はなにかほほえましくなってくる。

「ゆうべ、三郎がもどってから、お方さまは鶴に、千代三郎さまと三郎とどちらがお好きとお聞きになるのです。鶴は、どちらも大好きでございますと申し上げますと、ではまた抱いておもらいなさいねとおっしゃってくださいました。いいお方さま」

うしろでお照がくすくすとわらっている。

しかし、昨夜かたく外出をいましめられて居間へもどった千代三郎は、こんどは替え玉のお松のことが心配になって妙に落ち着けぬ。

——縁もゆかりもない者を、自分たちのために犠牲にしてはならぬ。

明日はさっそく使いを出してみようと思って、心ならずも寝につくと、今朝早く外記から使者が立って、

「昨夜はおかげを持ちまして万事計画どおりに事が運びました。委細は外記がお目にかかりましてくわしく申し上げますが、今朝五ツ半（九時）までに、鶴姫さま御同道の上、船にて水門口からひそかに茶室へおしのび願わしゅう存じますとのことでございます」

と申し入れてきた。そこで、さっそく屋根船を仕立てさせ、鶴姫をともなってここへくる途中、使者の侍から大体様子を聞いてみると、昨夜は敵のなすにまかせておいて、三十郎一味の人数と動きをいちいち突きとめ、お松は昨夜のうちに蔵から助け出して、見張りの浪人者には金をやって引き取らせた。三十郎一味の罪状は、今朝茶室へ引きつけておいて一挙に暴露することになっているという。

「ただ、御家老の苦労していられますのは、三十郎一味のうしろには表立ってあばくことのできないお方が働いております。あいなるべくは三十郎一味が改心するようにと、切に心痛しておられるようです」

その使者はついでに外記の苦衷をそう告げていた。

それが思いがけなくも若殿紀五郎のふいの来邸となり、これだけは外記にしても、三十郎にしても計算の中に入っていなかったことだろうが、さてこういう結果になってみると、案外このほうが後腐れがなくてよかったのではないか、そんな気もしている千代三郎なのである。

「三郎——」

お鶴さまはうっかり口癖が出て、

「ああ、ごめんなさい、もう千代三郎さまでしたのに」
と、すまなそうに赤くなる。
「いや、三郎でよろしい、どうせわしは婿にくる身分ですからな」
「いいえ、ですから、ごめんなさいとおわび申し上げていますのに」
「よろしい、よろしい。それで、なんです、お鶴さま」
「三十郎は本当に改心してくれますかしら」
「大丈夫でしょう。一藩の者の心がどこにあるか、それを知らない男ではない。しかも、いま自分の目で紀五郎さんのすることを見ていた。一生懸命に忠義をつくしながら、一つ間違えば手討ちにされるところでした。それでもまだ目がさめなければよほどの愚者です。これからはきっとお鶴さまに忠義をつくすようになります」
「それですと鶴もうれしいのですけれど」
「どうやら、これで三郎の役目もすんだようです。いいお天気ですな、今日も」
「町はきっとにぎやかですね」
「どうです、お鶴さま、二人でこれからまたそっと買い物に抜け出しますかな」
千代三郎がわらいながら誘うようにいう。
「両国の水茶屋はとてもきれいでした」
「船で出かければわけはありません」
「でも、鶴はもうお買い物は自分でしないことにきめました」
「どうしてです」
「お方さまも御自分でお買い物はしたことがないと申されていました。そして、大名のお嫁さまというものは、自分でそういうことができるようになると家来が困るものだと教えていただきました」
「まあ、そういうことになりますかな。分に生きる、それが人間のいちばんいい生き方かもしれない。お方さまはわしが茶代に一両つかわしたといったら、それではすくなかったのではあ

りませんかと心配していた。後で聞くと、茶代は銭でいいのだそうです」

「銭と小判とはどう違うのでしょう」

これは千代三郎にもはっきり答えられない。

「そういえば、内蔵介は佐倉屋の旅籠賃を払っておいてくれたかな」

ひょいとそれを思い出す。

「あの、旅籠代は銭でしょうか、小判でしょうか」

「さあ、あの時は五人で泊まったのですからな、小判のほうでしょう」

お照がまたうしろでくすくすとわらっている。

「違うか、お照」

「はい、違いますかもしれません。でも、それは御家老さまがよく御存じでございますから、おすておきになってよろしいかと存じます」

うまい返事をするお照だ。

「そうか、やはり分に生きよかな」

千代三郎は明るくわらって、

「お鶴さま、町の買い物に出るかわりに、少し庭を抱いて歩いてあげよう。これなら、お方さまからおゆるしが出ているのだから、かまわないだろう」

と、つと立って両手を差し出す。

「はい」

鶴姫はうれしそうに立ち上がって、もうするりと掻取りをぬいでいる。

——似た者御夫婦。

どっちも少し変わっているのだからと、お照があっけに取られているうちに、もう千代三郎はお鶴さまを軽々と抱いて庭へ出ていた。

ちょうどそこへ顔を出しかけた外記が、これはこれはというように黙って顔を引っこめたのを、千代三郎もお鶴さまも気がつかない。

のどかな春の朝であった。

のっそりと参上

帝王の星を持つ女

1

高崎の城下から倉ガ野を経て新町まで三里足らず、まだ中食どきには少し間があるが、次の宿場本庄までは二里、ずっと村つづきでろくな休み茶屋もない。

江戸日本橋堀留の材木問屋の女主人お香は、番頭一人、町内の鳶の者一人を供につれて、埼玉屋という中食所へ入り、早目のひるにしていた。

お香は水ぎわ立った江戸前の女っぷりで今年二十四という年増盛り、角屋の一人娘だから、十八の時、同業から婿養子をもらったが、半年とたたないうちに、あなたはどうしてもあたしの性にあわないからと、仲人の前でちゃんと筋道を立て、養子を離縁してしまった変わり種である。

その後、丸髷には結っているが、二十四になる今日まで後家をとおし、父親の利兵衛が死んでからも、女手で立派に角屋の店を切りまわして、うしろ指一つさせない。今日は高崎の御城内へ商用があって出かけての帰りだった。

お香たちの陣取っている前の床几には、旅まわりの易者らしい天神髭の老人が、いま中食を終わって、楊枝を使いながら番茶をのんでいる。旅焼けのした浅黒い顔が、どこか今戸焼のたぬきに似ているのがおもしろい。

そのおなじ床几の端に、旅の若い侍が一人、これは今朝旅籠からもってきたらしい竹の皮包みの握り飯をひらいて、ゆうゆうと食っている。年ごろ二十五、六でもあろうか、身なりは黒木綿の紋つき、小倉の袴、わらじがけ、どう見ても槍一筋の身分とはうけとれないが、がっしり

と上背があって、肩幅もたくましく、なかなかの美丈夫だ。が、よく見ると、顔に少しも鋭さがない。鷹揚といえば鷹揚だが、いかにものっそりとした人のいい勤番者といった感じである。

その向こうの床几にもう一人、旅商人風の三十がらみの男が、きりっとしたうしろ姿を見せて弁当を使っている。

まだ時刻には少し早いから、今のところ店の客はこの三組みだけだった。

「お武家、——握り飯のお武家」

さっきから結びをほおばっている若い侍の顔をじろじろとぶしつけに見ていたたぬき易者が、ふっと声をかけた。

「わしかね」

若侍がもそりと人のいい顔をあげる。

「さよう、御貴殿じゃ」

「なにか用かね」

若侍は半分食いかけた握り飯を左手に持ったまま、ぽかんとたぬき易者の顔を見ている。

「わしはなあ、天運堂真竜という易の名人だが、人相手相のほうもこれで蘊蓄が深い。御貴殿はなかなかいい相を備えている。惜しむらくは、少し人がよすぎるようじゃな」

「うむ、あまり人の悪いほうではないよ」

「そうじゃろう。人もあまりよすぎると損ばかりする。見うけるところ、女難の相があるな。女にちやほやされるばかりが女難の相だと思ってはいかんぞ。どうじゃ、家庭では御貴殿より御家内のほうが強かろう」

「いや、わしはまだひとり者だ」

若侍は気がついたように残りの結びを食い出す。

「だから、女房をもらえばの話じゃ。御貴殿は女に甘い相だから、しりに敷かれんように注意なさい。女房のしりに敷かれるような男は、絶対に出世はせんぞ」

「わしは別に出世などしようと考えたことはないな」

「それはいかん。そんな心がけだから、御貴殿はいつも女房のしりに、いや、女房を持てばしりに敷かれるようになるのじゃ。だいいち、握り飯を食いながら人に人相を見てもらうというのは、はなはだ失礼とは思わんかな」
「それは失礼した。もうおしまいでござる」
若侍はわらいながら竹の皮をくるくると巻いて片付ける。
「どうも御貴殿は侍には向かん男だ」
「そうらしいな。わしは浪人してきたばかりだ」
「原因は女だな。どうだ、当たったろう」
「当たったようだなあ」
「それ見なさい。文をつけたな。御貴殿にはいきなり女をくどくほどの度胸はない」
「いや、どっちかといえば、女のほうにくどかれたことになるな」
「ううむ」
たぬき易者は目をぱちくりさせながら、
「くどいたのは上役の家の下女だな」
と断言する。
「違うな」
「すると、娘か」
「少し違う」
「おちゃっぴいの腰元だな」
「まだ違う」
「わかった。御貴殿は女がおもちゃにするには手ごろな好人物だ。上役のいたずら好きなめかけだろう」
「違うな。これだけは、ちょっと当たりそうもない。やめておくがいい」
若侍は苦笑している。
「そんなばかな話があるか。いやしくも、この道で五十年から苦労しているわしに、どんなことでも当たらぬという法はない。ただ、お前さんは少し人間がけたはずれにできているだけだ」
躍起になってきめつけるたぬきづらがおかしかったので、お香は思わず吹き出しそうになる。
と見て取ったたぬき易者は、

「お内儀、お前さんは御亭主に縁が薄いようだな」

と、すかさずお香のほうを向いた。

はじめからねらいは裕福そうなお香にあったので、ずばりと田舎侍の図星を一つ当てて、関心をこっちへ引きつけておいてからかもにしようと考えていたのが、そううまくはいかず、やっと今きっかけがついたというところなのだろう。

「あたりましたよ、先生」

お香はにっこりとあでやかにわらった。

「病死かな」

「いいえ、追い出したんです」

「ううむ」

たぬき易者はまじまじとお香の顔を見すえながら、

「いや、それはいいことをした。もし、今までいっしょにいると、御亭主は命のないところだった。お内儀には帝王という星があってな、この星を持っている者は、どんな出世でもできる勢い盛んな星だが、女がこれを持っていると、あまり強すぎて亭主が命まで食われてしまうのじゃ。こんど御亭主を持つときは、よく気をつけぬといかん」

と、もっともらしく胸を反らせる。

「いいえ、あたしは二度と亭主を持とうなんて気はないんですから」

お香はあっさり言ってのけて、

「頭、そろそろ出かけようかね」

と、立ちかける。

「いや、待ちなさい。もう一つ教えてあげたいことがありますじゃ。これは大切なことですぞ。お内儀は近く盗難に出あう相があらわれている。その天庭の曇りがそれじゃ。易を立ててみれば、もっとくわしく、その日まで出る。どうじゃな、易を立てて進ぜようか」

「せっかくですが、少し先をいそぎますから。これはほんのお礼のしるし、このお武家さんの

分まで入れておきました」
一朱を手早く紙にくるんでわたし、
「お武家さん、差し出がましいまねをして、ごめんなさい」
と、にっこり会釈をする。
「すまんなあ」
若侍は心からすまなそうにいう。
「どういたしまして——。よろしかったら、そこまでごいっしょにまいりません」
「そうか。まいろうかな」
のっそり立ち上がって、いっしょに土間を出ていくかもたちを、たぬき易者は金包みを握ったまま、ぽかんと見送っていた。

2

街道はからんと空の青い秋日和だった。
「お武家さん、あのたぬき易者さんは、あんまり当たりませんでしたねー」
少し歩いてから、大丸髷をあねさまかむりで包みながら、お香がくすりとわらった。
「うむ、我々のほうが少しけたはずれにできすぎているんだろう。しかし、たぬきとはおもしろいな。あれはたしかにたぬきに似ていた」
あんなにこばかにされながら、この男は少しも腹を立てている様子がない。
「あら、あたしそんなにけたはずれかしら」
「帝王の星を持っているそうだからなあ。やっぱりけたはずれなんだろう」
「そんなことわかるもんですか。でも、たった一つだけ当たっていました」
「そうか。なにが当たっていたな」
「盗難の相が出ているってのは、本当かもしれません。あたしはどろぼうにつけられていそうですわ」
「どろぼう——」
「うしろをむいちゃいけません」
お香はいそいで若侍のそでを引っぱって、
「そら、お武家さんの向こうの床几で、弁当を

使っていた商人風の男がいたでしょう。さっき、柳瀬川の渡し舟の中で気がついたんですけれど、あれはただの旅商人じゃなさそうです」
「そうかなあ。わしはついうっかりしていたが――」
この男とも、いまのたぬき易者とも、その渡し舟でいっしょだったのである。
「お武家さんも、なにか一つぐらいは当たってやしませんでしたか」
「うむ、女のために浪人させられたのは本当だぬけぬけと言ってのけるのだ。
「まあ、お安くないんですねえ」
「しかし、別にちやほやされたわけじゃない。だいいち、わしは女にもてる柄じゃないからな」
「御謙遜で恐れ入ります。江戸ははじめてなんですか」
だんだんおもしろくなってくるお香だ。どうやら、この男は女におもちゃにされるというたぬき易者の見立ても当たっているようである。
「いや、勤番で半年ばかり江戸にいたことがある」
「じゃ、吉原を御存じなんでしょう」
「遊女のいるところだな」
「そうですよ。うちの頭なんか、大好きなところですわ」
「冗談いっちゃいけませんや、おかみさん」
すぐ後から若い番頭と肩をならべてくる頭が、苦わらいをしながら口を出してきた。三十六、七とも見えるちゃきちゃきの江戸っ子である。
「あら、頭は遊女がきらいだったの」
「そりゃまあ、これでも男のはしくれですからね。きらいってわけじゃありませんが」
「そらごらんなさいな」
お香はおもしろそうにわらって、
「お武家さんだって男ですものね。行ったことあるんでしょ」
「わしにはあいにく、そんな金がなかった」

「じゃ、お金があれば行きますか」
「わしは女にもてる柄ではなさそうなんでな」
「うまくお逃げなさる。あたしは日本橋堀留の材木屋で、角屋の香というんですけれど、お武家さんはなんとおっしゃるのかしら」
「浅香八百太郎、八百万の八百と書くんだ」
「うそ八百の八百でございすね」
頭までこの人のいい若侍をからかいたがる。
「いいえ、八百屋の八百ですよ。ねえ、お武家さん」
「うむ、どっちでもいいが、わしはうそだけはいわぬ男だ」
「たのもしいなあ。じゃ、だれに文をつけられて浪人させられたのか、白状なさいまし」
「そうか。貴公、頭がいいなあ。そんなことまでおぼえていたのか」
ちょっと当惑顔をする八百太郎である。
「そりゃ、帝王の星を持って生まれているんですもの。そこらにざらにころがっている女とは少し違います」
お香はわざと胸を張ってみせる。尾をひろげたくじゃくのように、絢爛たる美しさを持っている女だ。
「そうそう、貴公こそどうして御亭主を追い出したんだね。女房を追い出すという話は聞いたことがあるが、亭主を追い出すのは珍しい。ぜひ、後学のために聞いておきたいねえ」
「ずるい、ずるい。あんたのほうが先に話したら、あたしも白状します」
あまり人見知りしないお香は、もう八百太郎を友達あつかいだ。
「そうか。うそはいえんしなあ」
「そうよ。うそ八百なんかならべると、八百万の神さまの罰があたります」
「そのとおり、そのとおり」
うしろで頭が手を打ってよろこんでいる。
「国もとで、暴れ馬が走ってきたんだ」
「へえ。まさか、その暴れ馬が女馬で、文をつ

けたっていうんじゃないでしょうね」
「そうじゃない。非番で用たしに出ていたわしが、その暴れ馬をとめたんだ」
「お強いんですねえ。見ていた人たちがみんな感心したんでしょう」
「お前、少し気が早すぎるなあ。そこはだれも人のいない林つづきの川っぷちだから、だれも人はいなかった」
「あらあら、じゃ、つまらなかったのね」
「うむ、つまらなかった。せっかく馬をとめてやったのに、なんで余計なまねをすると、しかられちまってねえ」
「だれにさ」
「その馬に乗っていた人にだ」
じゃ、暴れ馬でなくて、それ人が乗って走らせてきた馬だったのね」
「当人は後でそういうんだがね、その時は真っ青な顔になっていたから、わしが抱いておろして、そこへ休ませてやったくらいなんだ」
「へえ、その人、ひと休みしてから怒り出したの？　ずいぶん変わった人ねえ」
「やっぱりお前とおなじで、帝王の星を持って生まれているんだな」
「おあいにくさま、あたしはそんな物知らずじゃございません」
お前呼ばわりされていることには、ついうっかりしているお香だ。それほど八百太郎の話は妙に変わっている。
「うむ、お姫さまも後では悪かったと気がついたんだな」
「なんですって――、その馬を飛ばしてきた人は、お姫さまだったの」
「帝王の星というやつは争われんものでな、自分は馬の名人になったつもりで、馬屋からいちばん気の荒い馬を引き出させて、お馬役が強くとめるのもきかず、遠乗りに出たんだ。馬にはどうも帝王の星はわからんとみえて、途中で勝手に走り出した。そして、勝手に川にそってど

んどんのぼりはじめる。一里も走ったかなあ。幸いあまり人の通らないところだから、けが人はなかったようだが、わしはてっきり暴れ馬だと思って、やっとつかまえた。お姫さまが真っ青になって鞍にしがみついている。無理もない。のぼったり下ったり、おそろしくあぶない渓谷の道だから、一つ間違うと、馬もろとも谷へ落ちてしまう。とても助からんだろうなあ」

「それで、どうしてお姫さま怒ったの、助けてもらったくせに」

「お前はだれ——。どうして姫の馬をとめたんですというんだ。谷底へ落ちるとお危のうございますからというと、お黙り、姫はそんなへたではありません。しかし、お顔の色もよろしくなかったし、どうやらお鞍にしがみついていられたようだし。なにを申す、お黙り。姫は少し疲れたから、鞍の上で休んでいたのですと、帝王の星が言わせる負け惜しみなんだな」

「まあ、憎らしい。もう一度その馬にのせて、馬のしりっぺたをひっぱたいてやればよかったのに」

「強いんだねえ、お前は。その気性じゃ、御亭主を追い出すわけだ。御亭主のしりっぺたをひっぱたいて追いだしたのかね」

「なんですって、失礼な。もう一度いってごらんなさい」

「もういいよ。帝王の星はもうこりごりだ」

「ばからしい。あんたって人は、やっぱり女のしりに敷かれるようにできてる男なんだわ」

お香はなにか胸がむしゃくしゃしてきてしようがない。

深夜の客

1

この辺の街道はどこまで行っても田んぼと畑ばかりで、至極退屈である。

お香はこのばからしい男の話にじりじりしながらも、

「それで、その小生意気なお姫、それからどうなったんです」

と、やっぱり気になって、先を聞いてみずにはいられなかった。

「お姫の話は、もういいだろう。それより、お前がしりっぺたをひっぱたいて追い出した御亭主の話のほうがおもしろそうだな」

八百太郎はそんなのんきなことを言い出す。うしろから若い番頭と肩をならべてついてくる鳶の頭がくすくすと笑った。

「頭、なにがおかしいんです」

「いいえ、なんにもおかしかありやせん」

「だって、いま笑ったじゃありませんか」

「なあに、あいにく鼻へごみが飛びこみやしてね、どうもすんません」

「うまく逃げるのねえ」

お香は思わずわらい出しながら、

「さあ、八百さん、あんたはうそを言わない約束でしょ。男らしく、さっさとその先をお話しなさいよ」

と、一度言い出したら後へはひかない意地っぱりである。

「そうか。やっぱり、お姫の話から先に片づけんといかんかな」

「あたりまえじゃありませんか」

「相手がお姫じゃ、なんといわれてもかなわんからな。わしはあやまった」

「なんといってあやまったんです」

「せっかくお馬の上でお休みのところ、無調法つかまつりまして、申し訳ございませんとな」

「そしたら、お姫、なんといったの」

「この度は許す、その馬を引いて供をせよとおっしゃる。さすがに、もう馬へ乗るとはいわなかった」

「やっぱり懲りたんですね」

「そうらしいな。しばらく来ると、家老の息子

が若侍二、三人をつれて、馬で青くなって迎えにきてね、お姫を自分の馬に乗せてつれて帰った。それが、家中の評判になったんだ」
「そうでしょうねえ。とにかく、八百さんはお姫さまを助けたんだから、命の恩人てことになるんですものね。ごほうびいただいたんでしょう」
「違う、違う。評判になったのは、その家老の息子のほうだ」
「あら、どうして――」
「暴れ馬をおさえて、お姫さまを無事に助けてつれて帰った。さすがに馬術の達人だというんだ」
「だって、暴れ馬をとめて、お姫さまにけんつくを食ったのは、あんたなんでしょ」
「うむ、けんつくを食ったのはわしなんだが、暴れ馬をとめたのは家老の息子になっていて、ほうびはもらわなかったが、感心されたのもその息子のほうだった」
「わかった。つまり、その息子が八百さんの手柄を横取りしたんですね」
「別にそんな悪気があったわけでもなかろうが、お姫さまをつれて帰ったのはその息子なんだから、世間ではその息子が暴れ馬をとめたと早合点してしまったんだろうな」
「あんた、それを黙っていたの」
「黙っていたさ。まさか、暴れ馬をとめてけんつくを食ったのは拙者でございとどなって歩いてみたところで、大した自慢にもならんからな」
「そういえばそうだけど、でも、なんだかつまらないじゃありませんか」
どうしてこの男はこう欲がないんだろうと、お香はやっぱり不服である。
「いや、つまらなくはないさ。世間はうっかりしていても、人間には良心というものがある。そこはよくしたもんだ」
「へえ、どんな良心なんです」
「ある日、腰元が、そっとわしに文をわたして

くれた」
「そうそう、その文の話でしたっけね。それで、どうしたんです」
「文といっても、ふところ紙にただ一言、今夜日が暮れたら、中木戸まで人に知れないようにきてくれ、と書いてあるだけだ」
「お安くないのね。行ったんですか」
「うむ、行った。中木戸から奥はお姫さまの御殿だから、男は入れない。中へ入れといわれると困るなと思いながら、そっと木戸をたたくと、腰元が戸をあけてくれて、お姫さまでございますというんだ」
「おや、暴れ馬のお姫さまが出てきたんですか」
「そうなんだ。要するに、この間けんつくを食わしたのが、考えてみると、良心にとがめるんだね。この間は馬をとめてくれてありがとうと、お姫さま澄まして礼をおっしゃる。どういたしまして、そのお言葉では恐れ入りますと申し上げて帰ってきたんだが、その帰りに運悪く夜番につかまってしまったんだ」
「あんたがのそのそとしていたからなんでしょ」
「どうも、そうらしいな。男禁制の奥庭へ忍びこむとは不届きなやつだというんでね。いや、忍びこみはしません、わしはちゃんと木戸の外にいたんだと、一応弁解はしてみたが、相手の名は出せないから、結局、申し訳は立たない、とうとう永のおいとまということになってしまったわけだ」
「ずいぶんつまらないんですねえ。そんなってあるかしら」
「つまり、まわりあわせが悪いんだな」
八百太郎はけろりとしている。
「そんなめにあわされても、ちっとも腹が立たないんですか」
「まあ、なるべく腹は立てないことにしているんだ」
「あんたって人は、よっぽどけたはずれにでき

てるのねえ」

お香はあきれて苦笑しながら、しかし、これではいくらなんでも話がばかばかしすぎる。ことによると、案外この男は芯じまりで、わざと大切なところは伏せているのではないかしら。ふっとそんな気もしてくるのであった。

「どうだね、こんどはそっちの番なんだが」

八百太郎がのんびりと持ちかけてくる。

「あたしの話なんか、ちっともおもしろかありません。もう昔の話だし、ただ気があわないから別れましょうって、よくわけを話して別れただけのことなんです。女は一度亭主を持ったら、それがどんなにおもしろくない男でも、一生我慢して亭主にしておかなくちゃならないってことはありませんからね」

「そりゃまあそうだな」

「それだけの能もないくせに、ただ亭主というだけで、亭主面をしてのほほんとおさまっていられたんじゃ、だれだって虫酸が走ってきます。そんな男が、世の中に案外多いんじゃないかしら」

「ちょいと耳が痛いな」

「いいえ、八百さんなんかは、まだ暴れ馬をおさえて、お姫にけんつくを食うぐらいの甲斐性があるからましですけど、世間にはなんにもできないくせに、不平ばかりいって、毎日あくびをしながら暮らしている退屈な男が、どこにもずいぶんいるようだわ」

「不平をいってあくびしているとはおもしろいなあ。大名屋敷にもそんなのがたくさんいる」

「江戸のお役人の中にも多いのよ」

「御亭主も不平をいってあくびばかりしていたのかえ」

「まあその口ね。能のない人にかぎって、だらしのないあくびをするものよ。虫酸が走ってくる」

「つまり、あくびを追い出したことになるんだな」

「そうなの。それでも世間じゃあたしがずいぶんけたはずれの女に見えたんですね。頭なんかもびっくりして、方々へ触れまわってくれた人なんです。——ねえ、そうなんでしょう、頭」

お香はわざとうしろを振りかえる。

「とんでもござんせん、おかみさんはどうして、お立派な偉物でさ」

「跳ねっかえりで、風変わりのほうへね」

「そりゃ、その当時の町内のうわさなんてものは、まさかあくび婿だとは知りやせんからね、大したじゃじゃ馬だってんで、正直んとこびっくりしたもんでさ。なるほどねえ、今うかがってみりゃ、男なんてものはうっかりあくびもできやせんねえ」

頭はひどく感心したようである。

2

むだ口をたたきながら歩くと、いつの間にか道がはかどる。

本庄の宿でひと休みしたが、後から来るはずのたぬき易者も、怪しい商人風の男も、どうしたのか一向姿を見せなかった。

その日の泊まりは本庄から二里二十五町、深谷宿である。お香はそこから駕籠にするつもりだったが、八百太郎というどこかけたはずれな男をからかって歩くのが面白くて、

「おかみさん、駕籠はよろしいんでございますか」

と、若い番頭の清三が注意してくれた時も、

「ああ、歩こうよ。この日の高さなら、日いっぱいには深谷へ入れるだろうからね」

と、気にもかけなかった。

しかし、いざ歩いてみて、今朝から九里あまりの道は、さすがに女の足にこたえてきて、だんだん足がおそくなり、おまけに日さえ暮れかかってくるので、

「あたし損しちゃった。こんなことなら、やっぱり本庄から駕籠にすればよかった」

と、ついわがままが出てくる。
「あくびはまだ出ないかね」
八百太郎がわらい出す。
「どうしてさ――」
「不平が出て、あくびが出れば、こんどはおかみさんが御亭主にしりっぺたひっぱたかれて、追い出される番だからな」
「おあいにくさま、あたしはそんな亭主なんか持っちゃいないから、安心なもんです」
「そうか。持っていなくて幸いだった。いままで亭主がお前にくっついていると、帝王の星に食われて命がないところだった」
「もうたくさん。あたしくたびれて、歩くのいやになっちまった」
「そんなことといったって、おぶってやらないよ。みんなくたびれているのはおなじだからな」
「薄情ねえ、そんな大きな体をしているくせに」
「そういえば、お姫もそんなことをいったなあ。わしは時々馬に見えるのかもしれない」
「へえ、お姫さま、その時あんたにおぶってくれっていったの」
お香は思わず好奇の目をみはる。
「強情だから、おぶってくれとは言わなかったがね、なにしろ、谷川ぞいに小坂をのぼったり下ったり、一里も歩くんだから、姫君の足じゃ無理だ。姫はくたびれましたといって、道端の石へさっさと腰かけてしまうんだ」
「あんた馬を引いていたんでしょ。乗せてやればよかったのに」
「無論、そうすすめたさ。その馬はきらいですと、さすがに懲りたんだねえ。では、手前が馬になりましょうかといって、背中を向けたら、黙っておぶさってきた」
「あんた、そのお姫に、馬にまでされたの」
「そういうことになるなあ。嫁入り前の高貴な姫君を男がおぶったとなると、たとえ家来でもおだやかでない。しようがないから、馬になったのさ。馬が馬を引いて、馬になるんだから、

どうも大変だった」
「そのお姫さま、おいくつなの」
「十七でいらせられる」
「お美しいの」
「かぐや姫は見たことはないが、それよりもずっとお美しいだろう」
「馬になってうれしかった――？」
「冗談いうなよ、馬になってうれしいやつがあるものか。やっぱり、あくびのできる人間のほうがいいさ」
「あら、馬だって、あくびはするでしょ」
「そうだなあ。しかし、あいつは年中退屈ばかりしている能なしだから、あくびをしだしたらきりがないだろう」
「ばかばっかし――」
とうとう話につられ、深谷の宿へ入ってきた。秋の日はもうとっぷり暮れている。
「あらあら、損しちまったなあ、あたし」
「なにか落とし物でもしたかね」
「まさかそんな間抜けでもないけれど、ここまできてしまっちゃ、もう八百さんに馬になってもらえやしない」
「いや、お前の馬になるのだけは遠慮するよ。亭主のしりっぺたさえ平気でひっぱたくんだから、馬のしりなんか丸太でどやしつけるだろうからな」
そんなばかげた冗談口はきいていても、いざとなると、ちゃんとしまりはあるようだった。どうせ道づれになったんだから、江戸までいっしょに旅籠をとろうと誘うと、
「わしは貧乏侍だから、人の賄いはできない。また人のやっかいになるのも好まぬ。費用自分持ちなら、いっしょに泊まってもいい」
と、そんな律儀なことをいっていた。
その夜、近江屋という深谷でもいちばんいい上旅籠につき、みんなさすがに疲れているから、夜食の銚子も軽くすませ、お香は女だから上の間に一人、八百太郎は芳五郎頭と番頭清三と三

人相部屋で、ふすま一重の次の間に寝ることになった。

「八百さん、お武家さまを次の間に寝かすなんて、女のくせにすみませんね」

礼儀は礼儀だから、お香は寝る前に八百太郎にそうあいさつをすることを忘れなかった。

「その遠慮はいらんさ。どうせわしは、ひょっとすると馬にされるところだったんだからな」

「そういえばそうでしたね。では、ごゆっくりあくびをしてくださいまし」

つい心やすだてに、そんな冗談口が出てしまうお香だ。

——あの男、本当にたのもしい男なのかしら、それとも、おなかの中まで、あのとおり薄っぺらけた男なのかしら。

まくらにつきながら、お香にはどうしても八百太郎の本心がつかめない。

が、決して悪人でないことだけは、澄んだ目の色でわかる。

それと、お香の見てきた男は、今までたいてい自分に対して色気か欲気かを持って、利口ぶろうとこころがけている者が多かった。そんな男心は、芳五郎頭にだって、番頭の清三にだってある。少しこっちが甘い顔をすれば、すぐ図に乗ってくるのだ。

それをまた稼業のほうへも利用して、これまでずいぶんいい商売もしてきている、女としては度胸のいいお香でもあった。

そういう男たちにくらべて、八百太郎には少しもみえもてらいも感じられない。悪くいえば度外れたお人よし、よくいえば天真爛漫とでもいうか、まったく妙な男である。

——けど、まだ油断はできないな。

清三が忠義ぶって、おかみさん、知らない人なんですから、あんまり気を許さないほうがよろしゅうございますと、この旅籠へ着く時も注意していたが、男は男なのだから、決してそんなことはないとも言いきれないと思う。

——ふ、ふ、角屋のお香がだませるものなら、うまくだましてみるがいい。

あたしをだませるくらいのすごい男なら、ちょいとだまされてやっていいくらいのものだ。

お香はそんなおごった心にもなりながら、いつかうとうとと甘い眠りについていた。そのお香が、どのくらいたったころか、ふっと異状な気配に、ぎくりとして目をさました。

「畜生、目がさめやがったか、目ざとい女だ」

座敷のすみの有り明け行燈のほの暗い光の中に、はっきりぬすっとかむりの中の目がぎらぎらと濁って見え、右手の匕首をぴたりとのどへ吸いつけて、総体に黒ずくめの男が、左手で布団の上からいきなり胸をおさえつけてきた。

——あっ、あの昼間の男。

お香はすぐに直感したが、こうなってはうかつに声も立てられない。

どうやらもう真夜中らしく、あたりは水のようにしいんと物音一つしない。

もう一つのもの

1

「お前はだれだえ」

お香は度胸をすえて、相手の顔を下からにらみあげながら、低い声で聞いてみた。

「おい、大きな声を立てると、ずぶりといくぜ」

男はまず脅しつけることを忘れない。

「だから、低い声で聞いているんじゃないか」

負けてはいないお香だ。

「さすがに男まさりだなあ、おかみさん」

ぬすっとはにやりとかぶり物の中でわらう。

こんなことには慣れきったやつらしい。

たしかに、あの渡し舟と、中食所で会った商人風のやつに違いないとは思ったが、うっかりそんなことを口にすると、そう見ぬかれてしまったんではと、本当に殺意を起こさないともか

ぎらないので、
「ほめてくれたって、なんにもやるものはないよ」
と、意地の悪い顔をしてやる。
「なあに、くれなくたって、おれは腕で奪っていくさ。こう見えても、稲妻小僧といやあ、仲間でもちょっと名の売れたぬすっとでね」
さすがのお香もぎくりとした。稲妻小僧というのは、ぬすっとというより、凶悪な強盗として、去年の暮れあたりまで、江戸中を震駭させたやつである。こいつは必ず家人を縛りあげてから金だけをねらい、少しでも反抗しようとする者は、いきなりずぶりとやってしまう。しかも、目についた女は、人妻だろうと娘だろうと必ず手ごめにしていくという残忍非道なやり口で、稲妻のように襲ってきて、稲妻のように消えるところから、稲妻小僧という名がついたといわれている。
いいあんばいに、この春あたりから、そのうわさが人の口にのぼらなくなったと思っていたら、さては上方あたりへ一時ほとぼりをさましに行っていて、木曽街道からまた江戸へ舞いもどろうとするところらしい。
それにしても、大変なやつに見こまれてしまったものである。
「お前、おれの名を聞いたことがあるな。顔色が変わったぜ」
稲妻小僧は鼻の先でわらっている。
「あんまり自慢にはならない名前さ」
「そのとおりだ。だから、おとなしくするんだ。いくらおれだって、そうむやみに人は殺したくねえからな」
左手がお香のまくらの下をさぐると、もう布団の下からすっと重い胴巻きを引き抜いていた。
ふすま一重に大の男が三人も寝ているくせに、眠りこけているとみえて、こうなると空き家に一人で寝ているのとおなじことだ。

稲妻小僧は引き抜いた胴巻きを自分の内ふところへ突っこんでしまうと、その左手をすっと夜着の横から胸のあたりへ滑らせてきた。

「あっ、な、なにをするんだ」

「おい、命が惜しかったら、目をつぶっていろ。もう一つもらっていくものがあるんだ」

濁った目が凶暴な色に燃えて、あっと身をすくめる腕のあたりを、ぐいとわしづかみにする。恐ろしい力だ。

「隣に、隣に人がいるんだよ」

「だから、目をつぶって、黙っていろというんだ」

いくら勝ち気なお香でも、のどへ匕首の切っ先がぴたりと吸いついているので、どうしようもない。全身に冷や汗を感じてきた。

「ふ、ふ、色ざかりだなあ、お前は」

「声を、声を立てるよ」

「いいとも。命が惜しくなかったらな」

腕をつかんだまま、相手がひるんでくるのをじっと待っているようである。なんという残忍凶悪な目の色なのだろう。

すうっと、このとき静かに間のふすまがあいた。ちょうど稲妻小僧の真正面である。

「野郎、女を一突きにするぞ」

それと見た凶賊は、かすかに舌打ちをしながら、しかしあわてた色は少しも見せない。

「静かにするんだ」

入ってきたのは寝まき姿の八百太郎だ、刀も脇差も持っていない。

「なんだと――」

「声を立てると、人が目をさますぞ」

八百太郎は後ろのふすまを静かにしめきって、にっとわらった。

「そばへ寄るな」

びくりと匕首の切っ先が動く。

「そんなにわしが怖いかね」

「なにをぬかしやがる。余計なところへ間抜け面を出しやがって、さっさと消えてなくなりね

えか」
「そうはいかん。金だけは、せっかくお前も命がけでかかった仕事だろうから、やってもいい。しかし、もう一つのものはいかんな。あんまり欲張るんじゃない」
「くそ、消えてなくならねえと、ずぶりとやるぞ」
「痛いのはお香で、おれじゃない」
「なんだと――」
「ずぶりとやれば、こんどはおれがお前に飛びかかるだけの話だ」
八百太郎はけろりとしてわらっている。距離からいっても、六尺とは離れていない。
人質を殺してしまえば、こんどは自分がつかまる番になることは、火を見るより明らかだ。
「畜生、人の足もとへつけこみやがる」
「お前のほうがずぶとすぎるんだ。今夜は金だけであきらめておけ」
「よし、またという時があるからな」
「そのとおりだ、もう一つのものは、人前で盗むもんじゃない」
「おい、お香、おれが消えるまで、少しでも動くと、躍りこむからそう思え」
稲妻小僧は七首を胸もとへ向けながら、すっと立ち上がった。
そのまま横に歩いて、足もとのほうへまわり、そこで一度立ち止まって、こんどは後じさりでひじかけ窓のところまでさがる。
さすがにちゃんと逃げ道は見てあるとみえ、そこの雨戸をあけて飛びおりれば、すぐ裏庭の木戸へ出られるのである。
稲妻小僧がうしろ手で障子をあけ、雨戸を半分あけかけた時、
「小僧――小僧」
と、八百太郎が静かに呼んだ。
「なにを――」
きらっと凶賊の目が光る。
「その金の重さを計ってみたか」

「なにっ」
「昼間、たぬき易者の注意があったんで、本物はおれがあずかっている」
「くそっ」
じいっと八百太郎の顔をにらみつけていた稲妻小僧は、とっさに内ふところへ左手を入れるなり、あっさり胴巻きをつかみ出し、はっしと八百太郎に投げつけた。
八百太郎がそれを両手でうけとめている間に、凶賊の姿はひらりと窓の外へ飛んで消えている。

2

お香は全身から力がぬけてしまったようで、しばらくは声も出ない。
足もとの窓が一枚黒々と口をあけて、さあっという風の音が、耳に近く、なんとも不気味だ。
「やれやれ、ずるいやつだ」
八百太郎は重い胴巻きをお香の寝ている前へ押しやって、つと立っていき、一応窓の外を見まわしてから、雨戸をしめて、桟をおろした。
「八百さん、このお金だけ、やっておいたほうがよかったんじゃないかしら。なんだか、あたし、仕返しが気味が悪い」
お香はやっと床の上へ起きあがって、まゆをひそめた。相手が稲妻小僧だというだけに、一度手に入れた金まで奪いかえしたとなると、ただではすまないような気がするのだ。
「いや、わしも金が取りかえしたくてあんなことをいったわけじゃないんだ」
「じゃ、なんのつもりで、あんなことをいったの」
「ああいえば、つい金に気を取られて、一度は胴巻きを手で計ってみたくなるだろうと思ったのさ。そこを不意に飛びかかって、つかまえてやろうと思ってね」
「まあ」
そんな大胆なことを考えていたのかと、お香

はあきれて八百太郎の顔をながめる。
「敵もさる者だなあ。ちゃんとこっちの気持ちを読んで、金は惜しいが、つかまっちゃ命がないから、それをつぶてにして身をのがれたんだろう。命さえあれば、金はまたということがあるからね」
「いやだなあ。あいつは本当になにをやるかわからない恐ろしいやつだわ」
あの凶悪な目を思い出すと、お香はいまさらのように身ぶるいが出る。
「おかみさん、御無事でなによりでございました」
芳五郎頭がふすまをあけて、おそるおそる顔を出す。
「なんのお役にも立ちませんで、すみませんです」
番頭の清三が、そのうしろで小さくなっている。
「いいえ、なまじ騒いでくれなかったほうがよかった。あの男は本当にずぶりとやりかねないんだから」
そうはいったものの、今夜この二人きりだったら、今ごろどうされているだろうと思うと、内心やっぱりたよりない。なんのための供なのかわかりゃしないと思う。
「おかみさん、帳場へいってやらなくてもようございますかねえ」
芳五郎がもっともらしくいう。
「そうねえ、いま何刻ごろかしら」
あたりは何事もなかったようにしいんとしている。
「さあ、まだ真夜中でございましょうねえ」
「そうかしら。別になんにも取られずにすんだんだし、わざわざ帳場を起こしたって、騒がすだけじゃないでしょうかねえ」
お香は八百太郎のほうへ相談するようにいう。
「うむ、まあ明日の朝でいいだろう。どうせ、あいつはまっすぐここをねらってきたんで、ほか

の客はなにも盗まれてはいないだろうからな」
「だんな、あの野郎はここの家へ泊まっていたんでしょうかねえ。それとも、外から入ってきたんでしょうか」
「たぶん、ここへ泊まっていたんだろう」
「すると、明日の朝、ここんちじゃびっくりするわけですね」
「まあいいだろう。こっちは命がけでびっくりした後だ。万事は明日の朝ということにして、もうひと眠りしておくことにしよう」
八百太郎はわらいながら、もうさっさと自分の寝床へもぐりこんでしまう。
「では、そういうことにしますかなあ」
「頭、気味が悪いから、そこのふすまはあけといてくださいな」
お香は今になって、しきりに怖い。できれば、このままみんなで明日の朝まで起きていたいくらいだ。
「かしこまりました。まさかぬすっとがまた引っかえしてくることもねえでしょうが、用心のためにあけておきやしょう。——おやすみなさって」
芳五郎も清三も、めいめいの寝床へ帰っていく。
お香は胴巻きを元のとおり布団の下へ入れて横になってみたが、どうにも眠れそうもない。顔を次の間のほうへ向けると、敷居の向こうに八百太郎の寝床がある。
「八百さん——」
「なんだね」
八百太郎の顔がくるりとこっちを向いた。
「あんたさっき、変なことをいってましたね、稲妻小僧に」
「そうだったかなあ」
「消えてなくなりねえと、ずぶりとやるぞとあいつがいったら、痛いのはお香で、おれじゃないといったでしょ」
「あはは、そうか。そうだったな」

「薄情な人だと思ったわ。痛いぐらいですみゃいいけれど、こっちはそれっきり冥土行きなんですからね」
「なあに、人質というものは、めったに殺さないものさ。殺してしまえば、こんどは自分の命があぶなくなるからなあ」
「本当は、いつごろから目がさめていてくれたんです」
「あいつが入ってからまもなくだったろうな。なんだか話し声がする。寝言にしちゃおかしいし、だれかいい人が忍んできているにしては声に殺気がある。とたんに、強盗だなと気がついた。しかし、あれは相当ずぶといやつのようだったなあ」
「稲妻小僧だって、自分でいってました。去年あたり、江戸中を荒らしまわっていたやつで、騒げばすぐ殺すし、やたらに女は手ごめにするし、町方でも持てあましていた恐ろしい強盗なんです」
「そうか。つまり、半分は狂人なんだな、ああいうのは。普通の人間にできることじゃない」
「だから、あたし、怖いんです。お金だけでもやっておけばよかった。どこかで仕返しをされるんじゃないかしら」
「そう弱気になったってしようがない。帝王の星を持っているんだから大丈夫さ。こんどきたら、しりっぺたをひっぱたいて追っ払ってやるがいい」
そんなこと、とてもできるもんじゃない。少しぐらいの悪党ならまたなんとでもしようがあるけれど、相手が人殺しをなんとも思っていない狂人みたいなやつでは、あたしだってやっぱり命は惜しいものと、今夜のお香はすっかりおじけづいている。
それにしても、八百太郎と道づれになっておいてよかったと思う。あんな恐ろしいやつを平気で手捕りにしようとするくらいだから、口ではとぼけたことばかり言っていても、この人は

本当に肝がすわっているのだ。

さっきの応対なども、この人があんまり落ち着きすぎているものだから、稲妻小僧も少し怖くなってきたに違いない。

そういえば、この人はこっちへ入ってくるなり、自分のほうから静かにしろと言っていた。あれがもし侍をかさにきて、いきなり刀でも振りあげて出てきたとしたら、あたしの命はなかったかもしれない。

――ちゃんと場所柄は心得ているし、案外たのもしい人なんだ。

お香はひそかにそう感心しながら、

「八百さん――」

と、もう一度呼んでみた。こんどは返事がない。いつの間にか眠ってしまっているのだった。

翌朝――。

番頭を呼んで聞いてみると、たしかに、ゆうべ泊まった客が一人、夜中に裏木戸から逃げ出しているということだった。

「三十がらみの商人風の人でしたが、そうでございましたか。おかみさんの座敷へ盗みに入りましたんで。――すると、どろぼうだったんでございますな。そんな風には少しも見えませんでしたが、それはどうも申し訳のないことをいたしました。手前はこれで、稼業柄、一目見ればたいてい怪しいやつならぴんとくるんでございますがなあ」

番頭はしきりに恐縮しながら小首をかしげていたが、あの稲妻小僧が怪しく見えないくらいでは、稼業柄の勘もなにもあったもんじゃない。あたしは柳瀬の渡しの時から、ぴんときているんだものと、お香は聞いていておかしかった。

今日もよく晴れて、西南の空に富士がきれいに見える秋日和の朝だった。

「あたし、なんだかゆうべのことうそのような気がする」

お香は八百太郎と肩をならべて歩きながら、本当にそんな気がした。

「そうか。じゃ、また気の強いおかみさんにかえったわけだな。結構結構」
「あら、ゆうべだって、あたし、そんなにおくびょうじゃありませんでした」
そんな自信が持ててくるのも、明るい朝になったからだろうか。お香もゆうべ考えていたほど稲妻小僧が怖くなくなっていた。
「おやあ、あそこに妙なやつがいるなあ」
やがて、宿外れへかかってくると、八百太郎がのんびりといった。

女のわがまま

1

深谷の宿を出外れて、両側にからりと畑がひらけてくる並木道の右側に、雨ざらしの石地蔵が立っている。
その前に立って、しきりにこっちを見ているのは、たしかに昨日の天神ひげのたぬき易者だ。
「昨日のたぬきね、あれ」
お香も目ざとく見つけて、くすりとわらった。
「なにか我々を待っているようだな。こっちばかり見ている」
「またあたしたちをかもにする気かしら」
ともかくも、盗難の相というのを、あんまり見事に当てすぎている。悪く取れば、たぬき易者はあの稲妻小僧を知っていたんじゃないかしらと、そんな邪推さえまわしたくなるお香は、油断なくそっちへ近づいていった。
「やあ、おかみさん、待っていましたぞ」
たぬき易者はあいかわらずもっともらしい顔をして、つかつかと往来へ出てきた。
「先生、お早うございます。どうなんでしょう、あたしの盗難の相っての、まだ消えませんかしら」
お香はいきなり顔を前へ出してみせる。
「いや、人の相などというものは、そう昨日の

今日ころりと変わるなんてことはめったにないもんじゃ」

「だって、あたしはもう先生がいったとおり、ゆうべ盗難にかかっちまったんだから、それだけは消えていそうなもんですね。よく見てくださいよ」

「ほう、やっぱり盗難にかかったか。争われんものじゃな。どれどれ」

たぬき易者は急に自分が名人になったような顔をして、あらためて天眼鏡をお香の顔へ向けたが、

「ふうむ、どうもおかしい、まだ盗難の相は消えておらん。ゆうべはなにを取られたな」

と、難しい顔になる。

「お金なんです。けれど、すぐに気がついたんで、取りかえすには取りかえしました」

「つまり、騒がれたんで、そのまくらさがしはあわてて逃げ出したというわけじゃな」

「そうなんです」

「たぶんそれじゃろう。まだそやつの執念が消えておらんのだ。用心せんといかんな」

「剣難の相はありませんかしら」

「いや、それは大丈夫じゃ。相手はこそどろじゃでな。気になるなら、易を立てて見て進ぜようかな」

稲妻小僧をこそどろと見立てるようでは、やっぱりあんまり当てにはならない。

「いいえ、せっかくですけれど、ここは往来だし、あたしいそぎますから」

お香はいそいで一朱出して、紙にくるむ。高い見料だが、今日はこっちから見てくれといったのだから、まあ貧乏易者をよろこばせておこうと考えたのだ。

「天運堂うじ、わしの女難の相はどうだろう。消えていないかね」

八百太郎がわらいながら聞く。

「消えてはおらん。昨日もいったとおり、女のしりにしかれんようにしなさい」

たぬきは八百太郎など相手にしようとしない。

「盗難の相のほうはどうだろう」

「お前さんの胴巻きに聞いてみるほうが早かろう」

ひどいことをいうたぬきである。

「ああ、そうそう、肝心なことを忘れるところじゃった。おかみさんは角屋のお香さんというのかな」

「ええ、そうですよ」

「この手紙をたのまれていたんじゃ。はい、たしかに渡しますぞ」

天運堂はふところから結び文を取り出してお香に手わたす。

「こんなもの、だれにたのまれたんです」

受け取りはしたが、なにか薄気味が悪い。

「いや、つけ文ではないそうじゃ。ゆうべちょっとおじゃまをした者だといえばわかる。急用ができたので、一足先に行くから、これをわたしてくれとたのまれてな」

この世間ずれのしたずるいたぬきが、わざわざこんなところで待っていてくれたのだから、相当いい駄賃をもらっているのだろう。

「どんな男でした、それ」

稲妻小僧だなと、お香はぴんときて、思わずせきこまずにはいられない。

「三十がらみの商人風の男だった。心当たりはないのかな。先方ではちゃんと角屋のおかみさんといっていたが」

「いいえ、ないことはありません。天運堂さんはその男の相を見てやったんですか」

「いや、それがせっかちな男でな、歩きながらの話じゃ。言うだけのことをいって、この手紙をわたすと、もうどんどん熊谷のほうへ行ってしまったのじゃ」

「じゃ、よく顔は見なかったんですね」

「うむ、笠をかぶっていたでな。あごの骨の角ばった、ああいうあごは意地が強い、強情で執

念深いところのあるのが普通だな」
「ありがとうございました。これ、ほんのお礼のしるし」
「これはどうも、度々すまんな。昨日たくさんもらっているので、今日はただでもいいんだが、せっかくだからもらっておこう」
「そうしてください。よく当たったお礼なんですから」
「そうか。わしはあの村をまわっていくでな。では、十分気をつけて、早く江戸へ帰りなされ」
天運堂はおじぎをして、そこから間道へ別れ、向こうの村のほうへひょこひょこ入っていく。
「あいつのいたずらですねえ、きっと」
お香は強い目をちらっと八百太郎に向けてから結び文を解く。
「おれが負けたのだと思うと、当てがはずれるぞ。もらうものはきっともらってみせるから、よくおぼえておくがいい」
ふところ紙にたったそれだけ書いてある。ごつごつした感じの文字が、いかにも怒っているようで、ぞっとさせられる。
お香はそれを黙って八百太郎にわたした。
「ふうむ、あいつのあごのような字だねえ」
八百太郎はそういいながら、それをまたそばで心配している芳五郎頭にわたした。
「畜生、執念深い野郎ですねえ」
芳五郎はいまいましそうにいって、こんどは若い番頭にわたす。
「さあ、行きましょうよ。いつまでこんなところに立っていたってしようがない。お地蔵さま、おじゃまをいたしました」
お香はていねいに石地蔵に頭をさげてから、気を変えたようにさっさと歩き出した。
八百太郎は黙って肩をならべ、清三は手紙を元のとおりに結んでたもとへ入れながら、芳五郎頭といっしょに後につづく。
だれもしばらく口をきかなかった。江戸までは後三日二晩の道中である。その間に、どこか

でもう一度あのすごい稲妻小僧にねらわれるのかと思うと、だれしもあまり気持ちはよくない。
「八百さん、あいつよっぽど悔しかったんですね、ゆうべの失敗が」
しばらく歩いてから、お香がいった。やっぱり金だけはやっておいたほうがよかったかもしれなかったと、お香は金よりも、あんな男にいたずらされるのが怖いのだ。
「しかし、たぬき易者は案外よく当たるな」
八百太郎がいまさらのように感心する。
「当たるもんですか。あいつのことをこそどろだなんていうくらいだもの」
「いや、物は考えようで、あいつはやっぱりこそどろのうちかもしれない。こんなに悔しがるようでは、頭はあまりよくないな。ただやたらにずうずうしいというだけだろう」
「そのずうずうしいのが怖いわ。なにをするかわかりはしない」
「まあ、天運堂を信用しよう。おかみさんには剣難の相はないそうだから、それだけは安心しているがいい」
「のんきねえ、人のことだと思って。どうせ痛い思いをするのはあたしだと思って、安心しているんでしょ」
「そう怒るなよ。わしがついている間は、あんな頭の悪いこそどろなんかに指一本させはしない。金も、もう一つのものも、江戸まできっと無事に守ってやる」
「本当、八百さん」
「わしはうそ八百はいわん男だ」
「じゃ、江戸へ着いたらどうしてくれます」
「江戸へ着けば、もうお前の家じゃないか」
「強盗は家へだって入りますよ。あんた、うちの用心棒になってくれますか」
「むちゃいいなさんな。それでなくてさえ、おれは女のしりにしかれる相があるんだそうだから、まあ道中だけでお役御免にしてもらいたいな」

「そうはいきません。稲妻小僧が獄門首になるまでは、あんたに責任があるんですからね、お役御免にはできません」

お香はきっぱりといって、当分はそういうことにしてもらおうと、自分の腹をきめてしまった。

「おかみさんのおっしゃるとおりでさ。こりゃどうしても浅香さんに責任ってやつがありやすからね」

芳五郎は芳五郎で、せめて道中だけでも八百太郎を用心棒につかまえておかないとこっちが安心できないと胸算用をしているのだろう。

2

深谷から熊谷へ二里二十七町、今朝は少し朝寝をしているから、ちょうど熊谷で中食を取るようになった。

熊谷から鴻ノ巣へ四里八町、女づれだから今夜は鴻ノ巣泊まりになりそうだ。

「おかみさん、ここから駕籠にしたらどうだね」

中食を終えてから、八百太郎がいった。

「あんた、馬にされるかと思って、そんなこというんでしょ」

「うむ、ころばぬ先のつえということがある。くたびれてしまってからでは、どうにもならんからな」

「馬にされぬ先の駕籠ってわけね」

「そのとおりだ」

けろりとしてそんなことをいわれると、そこは女天下で、ふだんわがままをとおしつけているから、

「あたし歩きます」

と、お香はつい意地になりたくなる。

「途中でまたくたびれて、夜道になるとつらいのはおかみさんだぞ」

「あなたさえつらくなけりゃ、それでいいんでしょ」

「帝王の星はやっぱり強情だな」

「しようがありません。強情にしなければ、せっかく帝王の星をくれた天運堂に悪いんだもの」
「そうか。しかし、ことわっておくが、馬をねだってはいかんぜ」
「八百さん、案外頭がいいんですね」
「うむ、おかげで先が見えすぎて困る」
「そうかしら。じゃ、これをあずかっといてください」
お香は、重いからさっき座布団の下へ敷いていた胴巻きを無造作に引き出して、八百太郎の前へおいた。
芳五郎頭と清三がびっくりしている。
「どうしてこれをわしがあずからなくちゃならないんだね」
「頭がよくて、先の見える人が、そんなこと聞いちゃおかしいじゃありませんか」
わざと思わせぶりなことをいってみるお香だ。
重いし、こんな金を持っているから稲妻小僧などにねらわれる。それが本心だが、大金を平気であずけるからには、それだけあなたを信用しているんですよと見せかけて、男をうれしがらせてやりたいいたずら心がたぶんにある。
「そうか。つまり、馬のかわりに、こんどはおれを蔵にしようっていうんだな」
「馬だから鞍をおくのよ」
「やれやれ、その鞍の上へ後で乗ってやろうという算段か。お前はおれより頭がいいようだな」
「帝王の星を持っているんだもの」
「念のために聞いておくが、いくら入っているんだね」
「たった百両よ」
「そうか。頭、これをわしがこのままあずかるから、証人になってくれ」
「かしこまりやした」
芳五郎がうなずいてみせると、八百太郎は中は調べもせず、そのまま自分の胴巻きの中へ押

しこんでしまった。
別にうれしがっているような顔ひとつしない。なんだかそれが物足らないお香だ。
熊谷を出ると、まもなく二十町ばかり熊谷土手がつづく。春は桜の名所だが、今はしきりに落ち葉が散っている。
「八百さん――」
「なんだね」
「あんた、あたしがくたびれても、どうしても馬にはなってくれないつもりなのね」
お香はまたしても八百太郎にからんでみたくなる。
「今からくたびれた時のことまで考えておかなくてもいいよ」
「そうはいきません。あたしは頭がよくて先が見えすぎるんだもの」
「それなら、吹上の立て場から駕籠にするがいい。馬より駕籠のほうが楽だ」
「そうはいきません。あたしはどうしても一度、八百さんにおんぶしてみたいんです」
「お姫のまねなんかしなくてもいいよ」
「したっていいでしょ」
「お前は頭がいいんだから、まあ考えてみろよ。お姫は馬乗り袴をはいていたからまだいいが、女がそのかっこうで男におぶさった姿などというものは、どうかと思うぞ」
それは決して見いい図でないのはきまっている。もともと本当におぶさる気はないのだが、ここまできてはもう意地だ。
「どんなかっこうになったって、大きなお世話じゃありませんか。こっちはくたびれているんだもの」
「人が見てわらってもいいかね」
「いいわ。どうせあたしは跳ねっかえりで、昔から町内のわらいものにされつけているんだから、いまさらおどろきゃしません」
「もっとも、旅の恥はかき捨てということもあるなあ」

「そうよ。だからおんぶしてくれるでしょ」
「頭や番頭うじがわらっているぜ」
どうしてもうむとは言ってくれない八百太郎である。
——憎らしい。
人がこんなに水を向けているのに、どこまでそらっとぼける気なんだろうと、お香はおもしろくない。そして、ふっと気がついた。
——あたしはこの男と火遊びをしたがっているのかしら。
そんなことはないと思う。ただおもしろいからからかっているんだと思う。
が、この男がとぼけていて、ちっともこっちの思うとおりに乗ってきてくれないのが、なんだか歯がゆい。いや、自分ほどの女にただ親切というほかにはなんの関心も持っていないようなのが、ちょいと悔しくもある。
——一度どうしても、お前が好きだといわせてやらなくちゃ。
だんだん心がおごってくるお香だ。
しかし、こういう田舎っぺは、むきになると怖い。変なからかい方をして、本当につかみかかってこられたら、どうしようもないじゃないか。一方ではそんな理性が働く。もうからかうのはよしたほうがいいと思って、それとなく横目で八百太郎を見ると、これはあいかわらずどこを風が吹くかというようなのんきな顔をして、こっちのことなど少しも考えてはいないようだ。
——癪だなあ。
と、ついまたむらむらっとしてくる。
「おかみさん、うしろを見ちゃいけやせんぜ、どうも変なやつがついてくるんですがねえ」
芳五郎頭がふいに言い出した。二十町の熊谷土手をやや半分ほどきたあたりである。

鴻ノ巣の宿

1

うしろを振りかえってみるなといわれると、余計見たくなる。お香は思わず振りかえってしまっていた。

見とおしのきく桜並木の土手道だから、ほかにもちらほらと通行人は見えるが、芳五郎頭がいったのは、一町ほど後からさんど笠を目深にかぶって、紺がすりのまわし合羽、どう見てもやくざ渡世の旅人としか思えない男が、ぶらぶらと歩いてくる、たぶんそれのことだろう。

「頭、あの旅人みたいの男のことかえ」

お香は素早く元の姿勢にかえりながら、うしろへ聞いた。

「へえ、あいつですがね、旅人なんて者は一つはみえもあって、ああ牛みたいにのろくさ歩くもんじゃありやせん。それが、あの野郎は、こっちが土手へかかった時から、いつ見てもこっちの足にあわせて歩いているんでさ」

芳五郎はさすがにうがった見方をしている。

「稲妻小僧かしら」

今朝の手紙があるだけに、お香は薄っ気味が悪い。

「まさか、あいつならあんな風に姿は見せねえと思いやすがねえ」

「じゃ、あいつの相棒かもしれないね」

「いや、そんなことはなかろう」

八百太郎がわらいながら口を出した。

「どうしてさ」

「相棒をこしらえれば分け前がいる。金は山分けにできるが、もう一つのものは山分けというわけにもいくまい」

「いやらしい人――」

お香のしなやかな指が、いきなり並んでいる八百太郎の腕をつねっている。

「痛いなあ。親切に教えてやって、つねられたんではわりにあわん」
「でも、気になるなあ。本当にあたしたちをつけているのかしら」
こんどはだれも返事をしてくれなかった。
——かまやしない。こんなにいい用心棒がついていてくれるんだもの、今夜はいっしょの座敷へ泊まってやろう。
頭や清三の手前は、立派に口実があるんだし、そうだ、二人っきりでこの男を少しからかってみようかしら。ふっとそんないたずらっ気を思いついて、いつになく胸がうずいてくる。
それにしても、得体の知れないやつに跡をつけられていると思うと、あんまり気持ちのいいものではない。
「八百さん、ここでちょいと休んでいきましょう」
吹上の立て場へかかって、お香は目についた掛け茶屋へさっさと入っていった。こっちが休んでいれば、つけてきたやつはどうしても前を通りすぎていかなくてはならないからだ。それとも、ずうずうしくここへ入って休んでいくか。どっちにしても、様子だけは見られるはずである。
「どうだ、今日はやせ我慢をしないで、ここから駕籠にしては」
八百太郎が番茶をすすりながら、またしてもすすめる。
「よしますわ。あたしはやっぱりお馬のほうが安心だもの」
「お馬は虫の居どころが悪いと跳ねるぞ」
「大丈夫です。頭ににんじんを買って持っていってもらいますから」
「なるほど、うまいことを考えるな」
その頭はにこりともしないで、さっきから表のほうばかりにらんでいる。
「遅いなあ。どうしやがったんだろう」
「どこかへかくれてしまったんですかねえ」

若い清三も目を光らせている。
「まあ、そう気にするな。こっちの思いすごしということもあるからな」
八百太郎は平気でわらっている。
「どうせあんたって人はそうなのよ、痛い思いをするのはあたしだと思って」
うらみがましくにらんだ目がひどく色っぽくなっているのを、お香は自分でもちゃんと承知していたが、
「なあに、金はわしの蔵の中におさまっているんだし、こんなにぎやかな表街道で、まさか林の中へかつぎこむこともできなかろう。とにかく、日のあるうちに鴻ノ巣まで行くことだ」
と、こっちの下心など少しも通じないらしく、もうのそりと立ち上がる。
——わざと知らんふりをしているのかしら、憎らしい。
お香はなんとなく興ざめながら、かまやしない、今夜こそ性根を見てやるからと、だんだん意地になってくる。
吹上から鴻ノ巣まではざっと二里の道のりだが、どうしたことか、さんど笠の男はそれっきり姿を見せなかった。
「野郎、こっちが気づいたと見て、姿をかくしやがったな」
見えなければ見えないで、だれしもがそんな不安を感じてくるから、人間なんておかしなものである。
ともかくも一行がその日の旅を終えて、やがて鴻ノ巣の宿へかかったのは、もうたそがれだった。一日歩き疲れて、腹にこたえがなくなってくるし、知らぬ他国を歩いているのだと思うと、旅なれている者にせよ、いない者にせよ、このたそがれどきがいちばん旅愁というやつを感じる。
「八百さん」
お香の声もどうやら鼻声になっていた。
「どうした」

「あたしくたびれちまった」
「そうか。しかし、もう鴻ノ巣だからな。ここまできて、駕籠もお馬もいらなかろう」
「だから、手ぐらい引いてくれたっていいでしょう」
いいも悪いもない、かまわずもう男の手につかまっている。
「いっそ、頭にうしろから腰を押してもらったらどうだ」
「病人じゃあるまいし」
頭に体をさわられるのは、考えただけでもいやだが、八百太郎には自分から平気で肩をもたせかけて、楽だなあと思っている。
——あたしは少し人間が変わってきたんじゃないかしら。
お香は我ながらふしぎな気持ちだった。
宿場のほうから、もう月があかるくなってきた道を、二人の旅支度の侍が、いそぎ足にぐんぐん歩いてくる。
いくらなんでも男によりかかって歩いているところを人に見られるのは気恥ずかしいから、行きすぎるまでそっと肩を離れていると、
「やあ、菊村じゃないか」
すれ違おうとして、八百太郎がこっちからびっくりしたように声をかけた。
「おお、浅香か——。どうしたんだ。なんでこんなところを歩いている」
相手もあきれたように立ち止まる。
「おれはなあ、浪人したんだ」
「なにっ」
「したんじゃなくて、させられたんだな、永のおいとまというやつだ」
八百太郎はのんびりとわらっている。
「そうか。そのわけを聞こう」
相手はいそがしく前後を見まわしながら、うどん屋の掛け行燈を見つけた。
「あそこがいい。先へ行って待っているぞ」
勝手に自分でそうきめると、連れをうながし

て、さっさとそっちへ歩いていく。
「だれなの、八百さん」
お香はあっけに取られながら聞いた。
「江戸の友達だよ。ちょいと行ってくるから、先に宿を取っていてくれ」
「お話、すぐすむんでしょうね」
なんだかお香は心細い。
「うむ、そう長くはかからないだろう」
「御飯たべずに待っていますよ」
「いや、そんなことしなくたっていい。ああ、そうだ」
思い出したように内ふところへ両手を入れたのは、あずかっていた胴巻きをかえしておこうというつもりだろう。
「それ、あずかっといてください。こんなところでおかしい。まさか、このままどこかへ行っちまうんじゃないんでしょう」
お香は思わず男の腕を押さえつけている。
「そうか」
八百太郎はちょっと考えてから、
「よし、じゃ後からでもよかろう。宿はどこにするんだね」
と、あらためて聞く。
「この先に伊勢屋っていう家があります。そこにしますから、なるべく早くきてくださいねえ」
「うむ、話がすみ次第行く。頭、じゃたのむよ」
「かしこまりやした」
芳五郎頭がおじぎをしているうちに、八百太郎はもうそっちへ引きかえしていく。
別にいそぐでもないゆっくりした足どりだが、そのたくましいうしろ姿が去っていく一足ごとに、お香はたまらない心細さを感じてきた。

2

——いっそ、あのうどん屋の前で待っていればよかった。
お香は伊勢屋へ着いて、奥の二間つづきの上座敷へ案内されてからも、まだぼんやりそんな

ことを考えていた。

このまま八百太郎がどこかへ行ってしまいそうで、わけもなく不安なのである。

そういえば、あの菊村という若侍の顔にただならぬ色があった。それに、普通の旅ならば、今夜はこの宿へ泊まるのが本当である。それをあそこまで通り越していったのは、無論、夜旅をかける人たちなのだ。なにかいそぎの大事をひかえている人に違いない。

「浅香、ぜひいっしょに行ってくれ」

もしそんな相談でも持ちかけられたとすれば、あの人はきっとことわりきれなくなるだろう。口のきき方から見ても、そういう仲の友達のようだった。

「すまんが、どうしてもあっちへ行かなくちゃならなくなってねえ——これをかえしにきたよ」

そんなことにでもなったら、あたしはどうしよう。

——いやだ。だれがわかれるもんか。

こっちだって恐ろしいやつにねらわれている体なんだもの、ちゃんと江戸まで送っていってやると、男が一度口に出して約束しているんだし、あたしは承知しない。

そうは思うが、こっちはただの道づれで、あの人たちには同藩の友達という深いきずながあるのだ。侍の義理というものを持ち出されると、どうにもならなくなる。

お香は妙に泣きたくさえなってくるのだ。今までこんなに寂しいと思ったことはない。

稲妻小僧も怖いには怖いが、いざとなればこっちはどうにでも防ぎようがある。そのために八百太郎が必要なのではない。正直にいえば、八百太郎に別れるのがいやなのだ。

——あたしは本当にどうかしてしまった。

いま八百太郎に別れてみて、お香はそれをはっきりと感じてきた。

その自分の心がなにか恐ろしい。いや、それ

にも増して、狂おしいまでに八百太郎が恋しい。
もうしようがないと、お香は思った。
あたしだって女なんだもの、いつかはそんな男にめぐりあうに違いないと、夢のように考えていたことが、とうとう本当になったのだ。まさか、あんなのんびりした男がそれだったとは、自分でもちょっと意外な気はするが、好きになってしまったものはしようがない。
そこまで考えると、お香は少し気持ちが楽になってきた。
——小娘じゃあるまいし、こんな女におもわれたのが因果だとあきらめて、亭主になってくださいと、あたしは正直にいってやろう。
それさえ、うんといってくれれば、たとえここからどこへ友達と行ってこようと、安心して別れられるのだ。
——おかしいなあ。あたしははじめて男が恋しい女になった。
本当かしらと、お香はそんな自分がわらいたくなってくる。
「ああ、頭、あたしにかまわずに、着替えてひとふろ浴びてきたら」
お香はふっと気がついて、次の間へ声をかけた。こっちがまだそのまま黙って座っているものだから、芳五郎も清三も次の間でぼかんとたばこを吸っているのである。
「いいえ、もう来るでしょうから、浅香のだんなを待ちやしょう」
「さあ、どうだか。案外のんきなんだから」
お香はわらいながら、
「いいから、頭、着替えるといい。ひとふろ浴びているうちには、のっそり帰ってくるかもしれない」
自分はそれまでちゃんとこのまま待っているつもりなのだ。
「けど、おかみさん、浅香さんて方はだんだん付き合ってくると値打ちの出てくる男でございますねえ。あんな人が、どうして浪人なすったか

なあ」

まんざら世辞でもなさそうに、芳五郎は小首をかしげている。

「あんなお姫の話なんかして、どこまでが本音だか、ちょいとわからない人だねえ」

それとなくお香は気をひいてみる。芳五郎がどんな風に浅香を見ているか、もっと聞いてみたかった。

「とにかく、いい度胸でさ。おかみさんをやってみろ、こんどはお前の番だとね、あの稲妻を相手にして、けろりといってのけていた。考えれば考えるほど、あっしは憎いなあ」

「ずぶりとやられるのはあたしなんだもの、なんとでも言えますさ」

「それを、あのだんなは、決してやらないと見ぬいている、あれがあっしたちがさつに育った人間にゃできねえ芸でしてね、さすがに侍は違ったもんだと、ゆうべだけはかぶとをぬいでしまいました」

「侍って、やっぱり怖いところはあるねえ」

そうだ、その侍心にあたしはほれこんだのだと、お香は目がさめたような気がする。

「まあ、こういっちゃなんですが、あっしたちだってかっとなりゃ、ずいぶん命がけにもなれる時がありやすがね、平気で火の中へ入っていって、熱い顔ひとつしないで、急所を話しこむ、つまり人間ができているんでしょうね。学問もあるし、腕もできる、それでいて、それをちっともひけらかさねえ、立派なもんでさ」

「べたぼめだね、頭」

「しようがありやせんや。ゆうべは命を助けてもらった、つまり命の恩人なんだから、頭があがりません」

芳五郎が苦わらいをした時、さっとうしろのふすまがあいた。

「久しぶりだなあ、頭」

「あっ」

芳五郎は声も出ない。ぬっと一足中へ入って、

うしろ手に素早く後ろのふすまをしめたのは、お香が六年前に離縁した養子の杉次郎、木場の材木問屋飛騨屋の次男坊である。

しかも、今の杉次郎は左のほおにすごい刀傷があって、五分もすきのないやくざ姿だ。熊谷土手で見かけたさんど笠の旅人は、どうやらこの杉次郎だったに違いない。

「ど、どうしやした、若だんな」

「どうもしねえ、このとおりさ」

にやりとわらった顔にも暗いかげが出て、少しきざではあったが、昔の若だんな育ちの人柄とはまるっきり違っている。

「頭、久しぶりに、昔の女房お香と、さしで話してえことがあるんだ。ちょいと座を外してもらいたいね——。清三、お前は廊下に立っていて、人がきても、こっちの話がすむまで入らないようにしてくれ。わかったな」

頭から押さえつけるように、高飛車に出る杉次郎だ。

「おかみさん——」

どうしたもんでしょうといいたげに、芳五郎が当惑の顔をお香のほうへ向ける。

悪と悪

1

「頭、清三、おれのいうことがすなおにきけないかね。きけなけりゃおれにも考えがあるぜ」

昔のおれとは違うんだぜといいたげな、杉次郎の凶暴そうな目の色だ。

——二人に間違いがあってはならない。

そう思ったのと、いくら悪たれてはいても、昔の知っている相手なのだからと、お香はとっさにそう考えて、

「お前さんたち、いうなりになっておあげよ」

と、二人に声をかけて、しゃっきりと座り直した。

「へえ、じゃ廊下へ出ていやすから」
どうもしようがないというように、芳五郎と清三はおじぎをして、廊下へ出ていった。
「お香、久しぶりだな」
杉次郎はそれを見送ってから、いやみったらしくいって、間のふすまを手早くしめきってしまう。
その下心がはっきりと読めるようで、お香は体中に激しい嫌悪を感じながら、
——変なまねをしたら、あたしは承知しないから。
と、はっきりと憎悪のこもった目で、じっと杉次郎をにらんでいた。
杉次郎は玄治店の切られ与三郎と、蝙蝠安をごっちゃにしたようなふて腐れた面構えで、お香の前へあぐらをかき、たばこ盆を引きよせて、一服つけながら、
「妙な面をしてやあがる。これでも元はお前の亭主だった杉次郎だ。いくらかでもなつかしいって気はしねえかね」
と、探るようにゆがんだうすらわらいをうかべる。
「別れてしまえば他人だもの、そんな気はちっともしませんね」
なつかしいどころか、虫酸が走るほどきらいでたまらない。
「ふん、あいかわらず気の強い女だ。お前、その後ずっとひとり者だってな。そんな不具でもなかったはずだが、——そうか、頭をおさえるやつはいねえし、金はあるしで、好きな役者にでもいれあげてるってわけか」
「お前さんはいまだにそんな根性がぬけきらないとみえる。役者だなんて汚らしい」
「なるほど、そうだったっけな。その汚らしいで、おれは六年前にお前の家を追い出された。あれは寝床の中で、お前の肌を女郎とくらべて話した晩の朝だった」
杉次郎の汚らしい目がなんとなくこっちの体

中をなでまわしているようで、お香は鳥肌立ってくる気持ちである。

あの時もそうだった。ろくに男の取りえもないくせに、閨房でひとを女郎にくらべる、その根性に腹が立つというより、体中がたまらない汚らしさに身ぶるいが出てきた。心底からこの男がいやらしくなって、翌朝さっそく離縁話を持ち出したのだった。それからこっち、男というものは汚らしいものときめているお香なのだ。

「そりゃ、生娘のお前に、おれがうっかり女郎の話をしたのは、若気の至りとはいえ、まったくばかな話だった。婿養子だから追い出されてもしようがねえ。が、追い出されたおれの身にもなってみろ。たった一言の冗談で、あの野郎は女房に振られて追い出された男だと、近所からも、親戚からも、いや、親兄弟からもものわらいの種にされる。二言目にはそれを口に出されて、どう家にしりが落ち着くものか。とうとう家を飛び出して、畜生、おれは一生女をおもちゃにして暮らしてやると、やくざの道へ落ちこみやがった。早いもんだ、あれからもう足かけ六年、まる五年になりやがる。今じゃ木場の杉次郎といやあ、もう一人前の旅人がらすだ」

「惜しいことをしましたねえ、その悔しいを、もっとなんとかいいほうへ生かして、男が五年も苦労をしたら、立派に一軒家が建って、あたしなんかよりもっといいおかみさんが持てたでしょうにねえ」

そんな捨てばちな根性だから、どこまで行ってもこの人は男になれないんだと、お香は内心あさましい。

「他人のお前に、いまさらそんな指図はうけねえよ。おれはこれでも結構、さいころを命の綱にして、一盆目と出りゃ当たった時がある時大名、好きな女をよりどりで絹布の布団の上でおもちゃにしているんだ。堅気の苦労なんかもうまっぴらだ」

「そうですかねえ。そう世界が違ってしまっては話にもなりません。それで、あたしにどんな御用なんです」

「知れたことよ。お前にゃお前の言い分があるだろうが、おれにはおれでまた言い分がある。男一匹をこんなやくざにした小生意気な女、てめえが新しい婿を取ったら、そこへ押しこんでいって、その亭主の前でもう一度てめえに女郎の手くだを教えてやろうとねらっていたんだが、あれっきりひとり者だというんなら、なおおあつらえむきだ。今日熊谷の宿で見かけたのを幸い、なんでも今夜は抱いて寝てやろうと、ずっと跡をつけてきた。一度親兄弟の前で晴れて杯をしてもらった仲だから、だれに気兼ねもいるもんか。また、恥ずかしいって仲でもねえ。お香、もっとこっちへ寄るがいいや」

杉次郎の濁った目が無遠慮にけだものじみて、さっとお香の手をつかみにくる。

「なにをするんです。汚らしい」

「ふん、また汚らしいか。まあいいや。汚らしかったら目をつぶっていろ。変に大きな声なんか立てると、今日は絞め殺してもおもちゃにしていくぞ」

それはただの脅し文句ではなかった。きらわれている、けいべつされていると百も承知で、男の意地が半分、六年ぶりでみるお香のうれた肌に煩悩をおこしてねらってきた杉次郎だから、恥もみえもなく、いきなりけだものになってだっと組みついてきた。

「あっ、頭、——清三」

「黙らねえか」

力いっぱいのしかかるように押し倒して、両手がもうお香ののど輪へかかっている。恐ろしい力だ。

——殺される、あたしは。

恐怖がぞっと背筋を走り、息がつまって声さえ出ず、わずかに両足をばたばたと、それさえなまめかしいすそが乱れるばかりだ。

「わかったか、お香。声を立てると本当に絞め殺すぜ」

杉次郎は少しのどの手をゆるめて、ごくりと一つなまつばをのみこむ。

すっと押入のふすまのあく音がした。

「だれだ」

ぎょっと杉次郎が振り向く。

黒っぽい手ぬぐいでぬすっとかむりをした男が、ぬっとそこへ立ちながら、

「おい、振られ男、やめねえか」

と、低いがどすのきく声だ。

「だれだ、てめえは――」

さすがの杉次郎も、その声の中にある殺気をびんと感じたらしく、素早くお香を放して立ち上がり、そこに置いてある長脇差を取る暇はないから、ふところの匕首に手をかける。

「やぼなことを聞くもんじゃねえ。こんなかっこうで押入の中から出てくりゃ、言わなくてもたいてい察しがつくだろう」

ぬすっとかむりはにやっとわらったようだ。

――あっ、稲妻小僧。

恥ずかしいかっこうから夢中で起きあがったお香は、ぬすっとかむりの男を一目見るなり、がくぜんと目をみはらずにはいられなかった。

2

控えの間を一つ隔てた廊下の外には、芳五郎も清三もいるはずだ。

旅籠は今が夕飯どきで、着く客はあるし、女中も番頭もいちばん忙しい時だ。

そんな家中の活気を外に聞きながら、この座敷の空気だけはまったく別世界のように、なんという不気味な重苦しさだったろう。

「そうか、てめえはぬすっとだな」

うめくように杉次郎がいう。

「やっとわかったようだな」

「ぬすっとなら、この女の胴巻きをくれてやればそれでいいんだろう。さっさと出ていけ」

「ふん、てめえはやっぱり追い出され婿にできてやがる」
「なんだと――」
「どろぼうねこみたいに、そう目ばかり光らせるんじゃねえ。この女の胴巻きは、さっきまで道連れだった鼻の下の長いさんぴんが御苦労にもあずかっているんだ。女は冷えこむと血の道がおこるからな」
稲妻小僧は杉次郎など頭から小僧っ子あつかいのようだ。
「お香、本当か」
杉次郎がお香のほうへ食いつきそうな顔を向ける。
「おい、そうやくなよ。まだもう一つのものはあずけちゃいねえ。今夜あたり、そろそろあずけたがっているような顔色はしているがね」
ぬすっとかむりの目が、お香を見てにやっとわらう。
「じゃ、てめえのねらっているのは――」
「おめえと一つものさ。あいにくこいつは山分けにもできねえ」
「そうか。じゃ、てめえ、もう一度その押入へ入っていろ。おれは一度おもちゃにすれば気がすむんだ。後はてめえにくれてやる」
ぬけぬけと杉次郎がそんなすごいことをいう。
「女の前でのめのめとそんなことをいうから、お前は振られ男になるんだ。といったところで、あのさんぴんに変なやきもちをやくくらいだから、お前も元の女房にまだたっぷり未練はあるんだろう。しようがねえ、表へ出よう」
「やるのか――」
「やるよ。おれも一度ねらった女だ。みすみす手づかずでお前にはやれねえ。外へ出て勝負をして、勝った者がこの女を自分のものにする、それなら文句はあるまい」
「その間に、この女が逃げ出したらどうするんだ」

「甘いことをいうぜ。どこまで逃げたところで、この女にゃ江戸の堀留にちゃんと家があるじゃねえか。追いかけていけば造作はありゃしねえ」
「その間に、あのさんぴんと――」
「またやきもちか。じゃまになるやつはみんな殺す、それでいいんだ」
これはまた恐ろしい執念である。
「よし、表へ出よう」
杉次郎も腹をすえたらしい。
「おかみさん、聞いてのとおりだ。おれはまたすぐ引きかえしてくるからな。――ふん、たまらねえいい顔をしてやがる」
稲妻小僧はずぶとくわらってから、
「おい、こっちから出ようぜ」
杉次郎をうながして、そこの縁側からするりと暗い庭へおりていった。
「お香、待ってろよ」
つづいて、長脇差を引っつかむなり縁側へ出た杉次郎が、ぴしゃりと後ろの障子を閉めきって出ていく。
――どうしよう。
ほっとはしたようなものの、お香はかあっと体中が熱くなってきた。
芳五郎頭や清三を呼んで相談する気にもなれない。そんなことをしたって、あの二人はなんの役にも立ちはしないのだ。いや、杉次郎のことなど、なまじ口にするのも汚らしい。
お香はいそいで鬢のほつれを直し、立って衣紋をつくろい、まだそこいらじゅうについているような気がする杉次郎のいやなにおいを振るい落とすように、やたらにそでや着物の前をばたばたとはたきながら、あいのふすまをあけ放した。
それにしても、なんという恐ろしい男たちだろう。杉次郎のほうも油断はできないが、これはまだなんとか防ぎようがありそうだ。本当に恐ろしいのは、押入の中からふいにへびのように出てきた稲妻小僧だ。今まで少しも姿を見せ

ずにいて、胴巻きのことも、こっちの心の中まで、ちゃんと見すかしているようなことを言っていた。

一体、いつからこの押入の中へ忍びこんでいたのだろう。

目的は無論わかりきっている。みんな寝しずまるのを待って、ゆうべのように七首で脅し、口のきけないようにしておいて、あたしをおもちゃにする気だったのだ。たとえ八百太郎がこの座敷にまくらをならべていたとしても、眠っているところを一刺しにされれば、どうしようもなかったに違いない。

——恐ろしいやつ。

しかも、江戸の家までついてくると放言しているのだ。

「頭、——清三」

お香はいても立ってもいられない気持ちで、とうとう廊下へ呼んでいた。

「はい」

入り口のふすまをあけておろおろと入ってきたのは、清三だけである。

「おや、若だんな、いいえ、杉次郎さんは」

あたりを見まわしながら、急にこっちの体中を見なおすような目つきだ。

「そこからいま出ていったよ」

清三までそんな目をすると思うと、なにかむらむらとしてきて、

「頭はどこへ行ったの」

と、思わずきつい目をせずにはいられない。

「浅香さんを見に行ってくるといいまして、間違いがあっては手前一人ではどうしようもないからと止めたんですが、相手が杉次郎さんじゃおれにも手がつけられないからと、出かけていったんです」

それなら安心できる。八百太郎さえ早く帰ってきてくれれば、なんとかしてくれる。

「それにしても、少しおそすぎはしないかえ」

「はい。手前もいまそう思っていたところなん

です」
「清三、お前行って、見てきておくれ」
もしや、八百太郎は、あのうどん屋にいなかったんじゃないだろうか。そんなことでもあったら、あたしはもう助からないと、お香は胸が寒くなってくる。
「おかみさん、お一人で大丈夫ですか」
「お前がいてくれたって、なんにもならないじゃないか。杉次郎はすぐまた引きかえしてくるかもしれない。いいえ、稲妻小僧がこの押入にかくれていて、杉次郎を表へつれ出したんです」
「えっ、ゆうべの稲妻小僧がですか」
清三が顔色を変える。
「そうなんだよ、二人で今ごろどんな相談をしているかしれやしない。浅香さんでなけりゃどうすることもできません」
「はい。では、すぐ行ってまいります」
決心したように清三は立ち上がったが、
「おかみさん、一人でここへ残っているより、手前といっしょに宿の前へ出ていたほうが安心じゃありませんか」
と、思いついたようにいう。
「それもそうだねえ」
お香はちょいと迷ったが、なるほど、こんなところに一人でいるより、人目のある表のほうがましかもしれない。いや、いっそ自分で八百太郎を探しに行ったほうが、いちばん手っ取り早い。
「清三、じゃいっしょに行ってみよう」
お香は勢いよく立ち上がった。
「ああ、あれはおかみさんのじゃありませんか」
清三が指さしたほうを見ると、床の間の前に、自慢でさしていたほおずき色のさんごの五分玉のかんざしが落ちている。ちょうどそこらあたりを頭にして、杉次郎に押し倒されていたのだ。
——どんなぶざまなかっこうだったか。
それを思うと、顔が赤くなりながら、急にこ

の座敷が恐ろしくなってくる。

月にぬれて

1

芳五郎頭は、宿外れのうどん屋まで七、八町の道を、いやな気持ちで歩いた。はじめは駆け出したのだが、

——夫婦げんかは犬も食わねえ。

ふっとそんな気がしてきて、なにもおれがあわてたってしようがねえと考え直したからである。いや、元は夫婦なんだから、たとえ追い出した亭主でも、会って話しているうちに、お香だってまたどんな気にならないものでもない。そこへあわてて八百太郎をつれていってものわらいになってもつまらないと、戸惑いした気持ちだっ のだ。

それにしても、杉次郎の様子があまりにも変わりすぎている。あれは本当にやくざに成り下がったかっこうだ。あの暗い陰険そうな、妙に底光りのする凶暴な目つきは、凶状持ちになっている証拠と見ていいだろう。

それが、今日途中で、思いがけなくお香の姿を見かけた。もともと自分がいやで別れた女ではない。女のほうから難癖をつけられて、追い出されているのだ。あのころから見ればずっと年増盛りになって、顔にも、体つきにも、他人でさえこぼれるような色っぽさを感ずる元の女房を見て、今はどんな亭主を持っているのかと、急に腹立たしくなる。畜生、どうしてくれようと跡をつけてきた。

さっきの杉次郎の様子は、たしかにそれだった。

「さしで話がしてえ。遠慮してくれ」

そう頭から出た下心は、金をゆすった上、あわよくばという欲望が露骨に顔に出ていた。となると、ほうってもおけない気がする芳五郎な

のである。

——とにかく、相手が相手だけに、元を知っているおれの手にゃおえねえ。

芳五郎は当惑しながら、宿外れのほうへいそいでいた。そして、やっと例のうどん屋の前へ出た時、そこの油障子をあけて、のっそりと浅香八百太郎が出てきたのである。

「あっ、だんな——」

「なんだ、頭じゃないか。どうしたんだね」

「それがどうも、とんだことが持ちあがってしまいやしてねえ。——まあ、歩きながら話しやしょう」

芳五郎は今来た道へせかせかと引きかえしながら、

「だんなはもう御用はすんだんですか」

と、それが気になり出す。

「うむ、すんだ」

「お友達さんのようでござんしたね」

「同藩の者だ。国もとへ飛脚の使者だそうで、うどんを一杯食っただけで別れた」

「じゃ、もう江戸までずっといっしょに行っていただけるんですか」

「うむ、行ってもいい」

「ありがてえ。それを聞いて一安心です」

心からほっとする芳五郎だ。

「それで、とんだことというと、また稲妻小僧でも出たのかね」

「そうじゃないんで。まさか宵の口から稲妻も出やせんが、そら、熊谷土手からつけていたやくざね、あれが大変なやつだったんでさ」

「ふうむ、どう大変なんだ」

「五年前におかみさんに追い出された養子の、杉次郎さんだったんです」

「なるほど、あくびをしてきらわれた婿だといっていたな」

「ところが、今はあくびどころか、すごい渡世人になっているようで、顔に刀傷までありやしてね、つまり六年ぶりにおかみさんを見かけた、

さしで話してえことがあるから、お前たち廊下へ遠慮していてくれって、あたまから高飛車なんです」
「そうか。おもしろいな」
「おもしろい――？」
「もうあくびはしないから、元のとおり夫婦になる気はないかと相談しようというんだろう。うまく話がまとまれば、こんなめでたいことはない」
「本気ですか、だんな」
芳五郎は八百太郎の顔を見ずにはいられない。
「一度夫婦になったら添いとげる、あたりまえの話じゃあるが、それが男にも女にもいちばん幸せなことなんだ」
「なるほど、それはまあそのとおりでござんすがね、――そうはいかねえでしょう。だいいち、おかみさんがうんと言いそうもありません。苦い顔をしていやしたからね」
「それは人の前だし、またあくびをするんではないかと、そんな心配はあっただろうからな」
八百太郎はのんびりとわらっている。正直にいって、その顔にも、声音にも、嫉妬を感じている風はみじんもない。
――おかみさんのほうにゃ、この人に十分色気があるのになあ。
芳五郎はふしぎな気がしてくる。手をのばせばとどく、そういうすばらしい花を目の前において、それを今ほかの男が横から折りにきているのに、この男は少しも惜しいとは思わないのだろうか。おれでさえあんまりいい気持ちはしないのにと、本音を吐けばそれなのだ。
「だんな、そいつだけは見当違いだ。杉次郎って男は、根性までもうすっかりやくざになり下がって、いいところで前の女房を見かけた、相手にいま亭主があろうがなかろうがかまわねえ、金持ちなんだから金をゆすった上、ついでに体をちょいとおもちゃにしてと、そんな根性が鼻

の先にぶらさがっている。おかみさんがそんなことをうんというもんじゃありやせん」

つい芳五郎は躍起になってくる。

「しかしなあ、頭、ともかくも一度は夫婦だった男と女なのだ、他人にはわからぬものが、そこにないとはかぎらぬぞ」

「そいつはあっしも考えやしたがね、そんならなにも頭から、さしで話してえ、お前たちは廊下へ出ていろと、そんなあいさつはねえでしょう。まるっきり知らない顔じゃなし、あっしたちのいる前でも立派に話はできるはずです。いくら前の亭主だからって、自分がやぶれかぶれで人の幸せをぶちこわす、そんなのは見ちゃいられやせんからね」

「うむ、人の幸せをぶちこわしてはいかんな」

「だから、だんなに話をつけてもらおうと思いやしてね、乱暴されちまってからでは間にあわない。あっしや番頭さんじゃ元が元だから仲へ入りにくいし、こうしていそいでだんなを迎えにきたってわけなんです」

「そうか。まとまる話ならまとめてやってもいいな」

「そうでござんすとも。なにも、あっしだって、はじめからぶちこわしにかかっているんじゃありやせん」

月のあかるい道で、宵もややたけてきたから、もう人通りもとだえがちだった。伊勢屋の掛け行燈がやがて向こうに見え出すあたりまでくると、そこの右手の大きな寺の土塀のかげから、ぬっと往来へ出てきたやつがある。

「おう、頭、――芳五郎」

「おや、杉次郎さんでござんすね」

芳五郎は、一足遅かったかと、ぎょっとした。

「お前のその連れは、たしか浅香八百太郎さんて人だな」

「そうですよ」

芳五郎がうなずいてみせると、

「浅香さん、おれはお香の前の亭主の杉次郎っ

て者だが、お前さんにちょいと掛け合いてえことがある。そこまで顔を貸してもらいたいね」

と、杉次郎はずぶとい顔を八百太郎に向ける。

「承知した」

「頭、お前は先に帰っていいぜ」

杉次郎はそう言い捨てるなり、さっさと土塀の横町へ入っていく。

2

八百太郎は芳五郎に、お香を見てやるようにと伊勢屋のほうへ目くばせしておいてから、杉次郎の後につづいた。

杉次郎の面構えは、頭が言っていたように、おそろしく凶悪で、なるほどすっかりやくざに成り下がっているようだ。しかも、横柄で、けんか腰で、第一印象はまことによくない。

長い土塀がつきると、道は雑木林の中へ入り、それをぬけると視界がからっとひらける畑地へ出てきた。

「この辺でいいだろう」

杉次郎はそこへ立ち止まって、くるりとこっちを向く。

「おう、浅香さん、お前は昨日からお香の連れになっていっしょに歩いてるって話だが、ただの道づれかね。それとも、お香の胴巻きをあずかっているくらいだから、もうおつな仲になっているのか、正直なところを聞かせてもらいてえな」

そんなあさましいことをぬけぬけと口にしながら、その濁った目にはっきりと嫉妬の色をうかべている。

「なんでそんなことをわしに聞きたがるんだね」

「だからよう、おれはお香の前の亭主だと、ちゃんと名乗っているじゃねえか」

「さよう、前の亭主なら、今は赤の他人だな」

「おや、お前変な口をきくな。おれが赤の他人だから、お香はお前のものだって言いてえのか」

「そうではない。前の亭主だったことを理由にして、わしにそんな口をきくのはおかしいと言っているのだ。もっと率直にいえば、お香とわしがたとえどんな仲になろうと、それはお香とわしとの自由で、あくびをして六年前に離縁になったお前の口出しはいらぬことだと申しているのだ」
「そうか。じゃ、てめえたちはもうただの仲じゃねえんだな」
「いや、明日のことはわからんが、いまはただの仲だ」
「きっとそうか」
「念には及ばぬ」
「じゃ、お前、そのあずかっているお香の胴巻きをおれに渡して、どこへでもさっさと行っちまってくれ」
「わからん男だな。わしがお前にそんな指図をうける理由はないではないか」
「そっちにはなくても、こっちにはちゃんと理由があるんだ。お香と別れねえと言い張るんならしようがねえ、ここで命をもらうぜ」
「それはどういうわけだ」
「よし、黙って命を取るのも罪だから、わけを話してやろう。おれは今夜お香の体をわがものにする気で、座敷へ押しかけていった。いやもおうもねえ、それが、お香に追い出されてこんな男に成り下がったおれの執念なんだ。いきなり首を絞めあげているところへ、押入の中にかくれていたもう一人の執念男が出てきて、こいつばかりは山分けにはできねえ、表へ出て勝負をしろ、勝ったほうがお香を取ろう、どうだというから、よし、やろうと表へ出た。そこで、その野郎がいうには、お香にはもう一人浅香という男がついている、勝負はこのじゃま者を追っ払ったほうを勝ちときめよう、それならおれが先にやると、話がきまったんだ。わかったか、唐変木。わかったら刀を抜け」
杉次郎は自分の言葉に興奮してきたらしく、

いきなり長脇差の柄に手をかけて詰めよってくる。

「相手の男はどうした」

「どこかその林の中で見ているだろう」

ばかなやつだと八百太郎は思った。相手はゆうべの稲妻小僧に違いあるまい。杉次郎を自分に切らせておいて、たとえばこっちが切られればなお幸い、一人でお香をねらおうというのだろう。悪党にかけては、やっぱり稲妻小僧のほうが一枚も二枚も上らしい。

「お前はやっぱりあくびをする男だ」

「なんだと――」

「そう人間が甘くできていては、とてもお香の気には入るまい。あきらめたほうがいい」

「くそっ、たたっ切ってやる」

「人殺しのけいこなら、わしのほうが子供のころから修業というものをしている。お前にはわしは切れぬ」

「うぬっ」

杉次郎は目を血走らせて、長脇差を引き抜くなり両手で柄頭を胸もとへ引きつけ、だっと体ごとたたきつけてきた。この手一つで、いつもけんかに勝ってきたのだろう。死に身でなければとてもできぬ荒っぽいけんか剣術だが、心得のある八百太郎には通用せぬ。

さっと左へ飛びのきながら、右足で敵の脛をすくったから、

「あっ、畜生」

杉次郎は自分の出る力で、たわいもなくしたたか前へつんのめっていき、柄頭でみぞおちでも突きあげたのだろう、ぐうっといったきり、急には起きあがれないようだ。

こんどは稲妻小僧の番だがと、油断なく雑木林の中を目でさぐってみたが、ずるいやつだからかなわぬと見て出てこないのか、それともこっちは杉次郎にまかせておいて、自分はお香のほうへかかっているのか、どこにも姿は見あたらぬ。

——しかし、押入の中へかくれていたとは、執念深いやつだなあ。

その執念男と、あくび男が、一つ女をねらってはち合わせをした図を考えると、なにか大津絵でも見るようなおかしさを感じる。

八百太郎は手前勝手に悪たれて気絶しているやつにはかまわず、ゆっくりと街道のほうへ歩き出した。手前勝手なやつには、少しも同情できないのだからしようがない。

寺の角まで引きかえしてくると、意外にもそこにお香が芳五郎と清三と三人で立って、しきりにこっちを見ている風だったが、

「あっ、だんな、どうしやした。いまそっちへ行ってみようかと、相談していたところなんです」

と、芳五郎がほっとしたように声をかけてきた。

「いや、話はもうついた」

八百太郎はわらいながら答えて、そっちへ近づいていくと、月にぬれて立っていたお香が、黙って肩をならべてきた。

「わざわざ心配して出てこなくてもよかったのに」

「いいえね、あっしが伊勢屋の前まで行くと、おかみさんは表に立っていて、怖くて家にいられないっていうんでさ」

「なるほど、家の中のほうがかえって物騒かな。大変なやつらだからな」

伊勢屋のほうへ歩きながら、お香はまだ一言も口をきかず、黙って八百太郎の腕をつかんでいる。

「で、だんな、どう話がついたんです」

うしろから清三といっしょについてくる芳五郎頭は、それが気になってしようがないらしい。

「つまり、杉次郎はもう一人の男と賭けをしたんだ。わしをうまく追っ払ったほうが勝ちで、勝ったほうがこのおかみさんを自分のものにしようとね」

「野郎、押入の中にいたんですってね。いまおかみさんにその話を聞いて、ぞっとしていたところです。あいつらはとてもあっしたちの力にゃおえやせん」

「そうだなあ。どっちもどっちで、やっぱりだいぶけたが外れているほうだからな。正直なところ、わしは杉次郎って男がもう少しおらしい人間なら、なんとか話に乗ってやってもいいと考えていた。しかし、あれはやっぱり、いまだにあくびばかりしている男らしい。——お香うじ、気を悪くしてはいかんぜ」

返事のかわりに、お香は思いきりつかんでいた腕に力を入れてくる。

「そう邪険につかんでは痛い」

「あなたが、あなたがあたしをおいて、うどん屋へなんか寄り道をするから悪いんじゃありませんか。もう放さないからいい」

むきになって自分のほうへ男を引きつけ、正気のさたとは思えない。

「これこれ、そんなまねをするから、前の御亭主が、いや、いまは赤の他人だが、杉次郎がやきもちをやくのだ」

「あたしの知ったことではございません」

お香はいきなり八百太郎の腕を自分の胸の中へ抱きしめてしまう。自分で自分の感情が制しきれないといったかっこうだ。

雇われ浪人

1

翌日は朝から曇り空になって、時々思い出したように薄日はもれるが、終日気の重い道中になりそうだった。

「どうだ、今日はここから駕籠にしては」

連れ立って旅籠を出て、まだ鴻ノ巣の宿も出きらないのに、八百太郎は肩をならべているお香にいった。

「どうして、八百さん」
「顔色がよくない。ゆうべ寝不足だったんだろう」
「あなたはとても寝つきがいいのね」
「おかげで、わしは虫っ気がないほうなんでね」
「あれでどろぼうの番になるかしらと思って、あたしとても心細かった」
うらみがましくいって、お香はもう八百太郎をすっかり自分の用心棒ときめてしまっている。
そんな失礼な言い分を、八百太郎は別に気にもとめず、
「いや、寝つきのいい人間は、案外また目ざといもんだ」
と、人のいい返事をする。
「さあ、どうかしら」
口ではいったが、お香はふっと面はゆい気がしてきた。
ゆうべは本当に心細かった。宵のことがあるから、押入の戸も間のふすまもあけっ放しにしておいてもらい、
「八百さん、今夜はあたしの隣へ寝てくださいね」
とたのんで、こっちの座敷へまくらをならべて寝てもらった。芳五郎頭や清三がなんと思おうとも、そんなことはかまっていられない。番頭がのべていってくれた床を、自分でまた八百太郎のほうへぴったりと引きつけるようなことさえ平気でやってのけたのである。
まずその八百太郎がいちばん先に軽い寝息をたてはじめ、まもなく頭も清三もいびきをかきはじめた。
お香はどうしても寝つかれない。どこかから、いまにもぬっとあの杉次郎か稲妻小僧が入ってきそうな気がしてしようがないのだ。ぽかんと目の前に口をあけている押入さえ、そうなると不気味になってくる。
——あさましい。

杉次郎のことは思い出すのも汚かった。稲妻小僧だっておなじである。八百太郎がいてくれたから本当に助かったのだ。

——親切で、うれしい人。

けど、こんなにみんなぐっすり寝こんでしまって、これであたしが眠ったところへいきなり七首を突きつけられたらどうなるんだろう。いや、稲妻小僧なら煙のように入ってきて、まず八百太郎を一突きにする。それから頭と清三を突き殺してしまえば、結局、後はあたし一人になってしまうではないか。

——怖い。

お香はぞっと背筋が寒くなってきて、

「八百さん——」

思わず手をのばして、八百太郎の肩のあたりを揺り起こしていた。

「ううむ」

八百太郎は一声で渋い目をあけ、こっちを見て、

「どうした。眠れないのか」

と、つい鼻の先にある邪気のない顔が子供のような微笑をうかべる。

「怖いから手を貸して」

「そうか。そら」

たくましい手を少しもためらわず、ぬっとこっちへ出してくれた。

その手をつかんで、いそいで自分の布団の中へ入れ、

——なんだか、誘っているみたい。

と思うと、お香はさすがに胸がときめいてきた。

頭や清三に聞かれやしなかったかと、そっちへ耳を澄ますと、幸い二人ともいびきをかいている。

——知らぬは仏。

安心はしたものの、こんなまねをして、もしこの人があたしの手を引っぱったらどうしようと、心ではまだ戸惑いしている。そのくせ、竹

刀だこのある大きな男の手を、しっかりとつかんで、放したくないのだ。

こっちが一人でわくわくしているうちに、八百太郎はまたすぐ寝息を立てはじめた。

——たぬきかしら。

そんな気がしないでもない。が、安らかな寝息はいつまでたっても規則正しかった。

——憎らしい。

と、こんどは思った。本当は引っぱってくれてもいいと、ひとがこんなにわくわくしているのに、この金仏さまはそんなこと一向に考えてもいないのである。

でも、こうして手を貸してくれるくらいだから、一度はあんな亭主を持ったあたしを、別に汚い女だとは思っていないのだ。

——あたし好きだ、この人。

お香はじいんと胸が熱くなってきて、大胆にも男の手を乳房の上へ持っていって、そっと抱きしめてやる。目をさましたってかまやしないと思った。

間のふすまのあけっ放したのが、なんだか悔しい。しめてあれば、黙ってこっちから向こうへ行ってやるのにと思う。

「一人じゃとても怖くて眠れないんだもの」

そういってしまえばそれまでの話なのだ。体中がうっとりとほてってくるような気持ちで、いつか男の手を抱いたまま、ぐっすりと眠ってしまったらしい。

その手は、朝目をさました時には、もうあっちへ帰っていった。起きてからも、八百太郎はそんなことはけろりと忘れているような顔をしていた。本当に、ゆうべは夢うつつでおぼえていないのか、それともちゃんと知っていて知らん顔をしているのか、お香にはいまだに判断がつかない。

まさか、頭や清三の前では、口に出して聞けもしないことなのだ。

「今夜は浦和泊まりかしら」

また手を借りて寝てやろうと、お香は胸がうずくようにたのしくなってくる。
「浦和まで六里足らずかな」
「そのくらいでしょうね」
「明日はあかるいうちに江戸へ入れるわけだな」
「八百さんは家へわらじをぬいでくれる約束でしたね」
「そうだったかなあ」
「忘れちまっちゃいやです。稲妻はあたしの家までついていくって、ゆうべはあたしの目の前で言っているんですからね」
「すると、わしは、稲妻が御用になるまで、お香うじの用心棒をつとめるのかね」
「そうです」
「しかし、お香うじはこれまで、自分のものは自分でまもってきたんだろう。別に用心棒を雇ってまもってもらっていたわけじゃないんだろう」
「あたりまえじゃありませんか、いやな人ね」
「だから、家へついたら自分のものは自分でまもるほうがいいんだ」
「じゃ、八百さんはあたしが稲妻にどうされたってかまわないっていうんですか。そんなに薄情な人だったの、あなたは」
「まあ考えてみろよ、道中は物騒だからってこともあるが、家へ帰ってまで用心棒と一つ部屋へまくらをならべて寝れば、世間ではもうわしを用心棒とは見ない。御亭主と間違える」
「世間なんてかまいません。どうせろくなことは言わないんですから」
「いっそ、こうしてはどうだ。自分のものが自分でまもりきれないんなら、江戸へついたらすぐ好きな御亭主を見つけて、その御亭主に自分のものをあずけてしまうんだ。それなら安心だろう」
「あずけた御亭主が、稲妻に殺されちまったらどうします。稲妻はじゃまなやつは殺すといっ

てました」
「だから、岩見重太郎のような御亭主を持つんだ」
「好きになれますかしら、きらいな人にあたしのものやりたくない」
「ぜいたくをいっちゃいかんな」
「浅香八百太郎と岩見重太郎と、どっちが強いかしら」
「そりゃ岩見重太郎のほうが強いな、ひひ退治をやっているからな」
「稲妻ひひと浅香八百太郎じゃ、どっちが強い」
「いくらか浅香のほうが強いかな。なんといっても、浅香は人間だし、稲妻ひひはけだものだからな」
「じゃ、あたし浅香八百太郎にします」
「浅香八百太郎をどうしようっていうんだね」
「御亭主にするんです」
「やめとくほうがいいな。あの男は時々あくびをする。せいぜい、用心棒か馬の役にしか立たないよ」
　するりと逃げてしまう八百太郎だ。
「わかったわ。よくわかりました」
「わかったね」
「わかりましたとも。浅香って人は、ゆうべのお友達となにかたくらんでいるんです。いいえ、お姫になにかたのまれているんでしょ」
　図星だったらしく、八百太郎は返事をしない。
「おかしいと思った。お姫がただで浅香を夜のお庭へ呼びこむはずはないもの」
　だいいち、これほどの男がただで主家を浪人するはずはないと思うと、急に八百太郎が自分の手のとどかない遠いところへ行ってしまったような気がして、体中の力が抜けてくる。
　――いやだ。あたしがせっかく見つけた宝、だれが離すものか。
　お香はかっと全身の血をたぎらせながら、黙って八百太郎の手につかまっていく。それは、ゆうべ一晩中、自分の胸乳の上において寝たな

つかしい男の手なのだ。

2

鴻ノ巣から桶川へ一里三十町、桶川から上尾へ三十町、その日は上尾の宿で中食をとった。

上尾の宿を出外れると、まもなく上尾ノ原が二十町もつづく。草っ原と雑木林ばかりの奥深い荒涼たる原で、夜はよくきつねが出て人を化かすところだ。おまけに、今日は曇り空だから、余計寂しい。

「大丈夫かしら、八百さん」

「なにが」

「稲妻小僧が出やしないかしら」

「出るかもしれないな」

「いやだ、脅しちゃ」

「そんなにぶら下がっては歩きにくい」

「怖いんですもの」

「心配するな、出るまでは出ない」

「いっそお馬になっていただこうかしら」

「まあ、もう少し我慢して歩け。お馬になると、いざというとき手がきかないからな」

「それもそうね」

頭や清三がうしろから見ていることなど、お香はもう気にもしなかった。体中で八百太郎にまつわりつきながら、そうしていさえすればなんだか安心で、小娘のようにたのしい。

——これで、明日江戸へ入るなり、もしさようならといわれたらどうしよう。

またしてもそれが心配になってくる。

「八百さん——」

「なんだ」

「本当にうちへわらじをぬいでくださいねえ」

「そうだだをこねるなよ」

「いいえ、本気なんです。でも、八百さんはあたしがきらいかしら。なんだか泣きたくなってくる」

「これこれ、女がそうあけっ放しなことを男にいうもんじゃない。不用心だからな」

「いいんです。あたしもう黙っていられないんですもの。ほら、この胸の動悸」
男の手をいきなり自分の左の乳の下へ持っていって押さえつけてやる。
頭や清三は別として、あたりに人目のない雑木林道だからかまやしないと思ったのだが、そうはいかなかった。
「おい、ふざけて歩くのもいい加減にしろ。真っ昼間だぞ」
ぬっと無精ひげの浪人者らしいやつが、そこの庚申堂のかげから出てきて、行く手へ仁王立ちになった。大きな男で、いかにも悪のきく面構えである。
「そら、見ろ。お前があんまり甘ったれるからいかんのだ」
八百太郎は真顔でお香をたしなめてから、
「お目ざわりで恐縮、以後気をつけます。お見のがし願いたい」
と、わびるように会釈をした。
「ばかっ。女の手を放したらどうだ」
「はあ。——なにか我々に御用でも」
八百太郎はお香の手を放そうとしたが、お香のほうが放そうとしなかった。
「用があるから、ここで待っていたんだ」
「なるほど——。どんな用ですな」
「貴公の持っている胴巻きがもらいたい」
ぐいとにらみつけながら柄に手をかける。
「これは、はっきりしていますな。念のためにおうかがいいたすが、胴巻きだけでいいのでしょうな。中身はいらんのでしょうな」
「なんだと——」
「中身までほしいとなると、貴公は追いはぎと見なければなりませんからな」
けろりとして言ってのける八百太郎だ。たのもしいと、お香はうれしくなる。
「わらったな、女」
「ええ、うちの人、たのもしくて」
だれがお前なんか怖がってやるもんかと、お

香はわざと八百太郎にしなだれかかる。
「男のそばを離れろ、ばか」
「離れたくございませんの。好きで好きで」
「よし、それならいっしょにたたっ切ってやる。おれは追いはぎだ」
「お香、ちょっと後ろへどいていろ。この仁は本当に追いはぎらしい」
八百太郎はお香を背にかばうようにして、
「追いはぎうじの御姓名をうけたまわりたい」
と、正面を切る。
「冥土の土産に聞いておけ。根来五郎左衛門だ」
「金主がおありのようだな」
「なにっ――」
「ごろごろというと雷だ。金主は稲妻かな」
「貴様、正気か」
「ほう、稲妻が通じないとすると、木場の杉次郎というあくびやくざかな」
「貴様、人の女房を寝取るだけあって、わりに悪知恵は働くほうだな」
やっぱり杉次郎に雇われてきたやつらしい。すると、どこかに杉次郎がかくれてお香をねらっているはずだ。おそらく、一人ではあるまい。
「いや、あっちはあくびをしてお香に六年前に追い出されたばか婿でな、もう赤の他人です。だからといって、わしはまだお香を寝取るほど行儀の悪い男ではない。これでも武士ですからな」
「うそをつけ。それなら、なぜ今のようにべたべたとふざけ散らして歩く」
「ふざけてはいません。ただ寂しいというから、手を取って歩いてやった。これは武士の親切です」
「白々しいことをいうな。ただの親切だけで、女が自分の乳などおもちゃにさせるものか。白昼あきれたふざけ方だ」
「悪いところを見られましたな」
八百太郎は苦わらいをして、
「おかみさん、これからは歩いている時は、動

悸などさわらせんことだ。人が誤解をするでな。
——頭、おかみさんをたのむよ」
実はそれが言っておきたかったのだ。
「おい、間男、もう一度だけいう。あり金ごとおとなしく胴巻きをおれに渡して、ついでに杉次郎に女房をかえしてやるか、どうだ。はっきり返事をしろ」
「金は話によってはやってもいいが、お香はだめだろう。あくび男には心から愛想をつかしているからなあ」
八百太郎は平気で答える。

お馬の上で

1

「よし、いくぞ」
根来五郎左衛門はさっと抜刀した。
ひらりと飛びさがった八百太郎が、同時に抜きあわせる。
大丈夫かしら。
お香は芳五郎頭と清三のそばへどいて、さすがに胸がきいんと寒くなってきた。侍の真剣勝負など見るのははじめてである。
八百太郎はどのくらい強いのか。いや、いくら強くても、相手がそれより強ければ切られてしまう。
——死んじゃいやだ、殺したくない。
そう考えると、目の前が真っ暗になって、くらくらとめまいがしそうになる。
芳五郎頭も清三も、そばで歯を食いしばっているようだ。
曇り空の下で相対峙する青眼の太刀は、氷のようにさえ光ったまま動かない。
「えいっ」
根来がほえるようにわめきながら、ぐいと一足前へ踏みこんできた。必死の形相というのだろうか、つりあがった目が燃えるように血走っ

ている。

八百太郎は無言で動かない。

根来はすっと元の位置へさがった。八百太郎の構えに乗じるすきがなく、ひょっとすると逆にいつ攻勢にかわるかもしれない、そういう危険を感じたから、さがらざるをえなかったのだ。

——こいつ強い。

根来は明らかにそう感じたらしい。

「おうっ」

その弱みを見せまいとして、またしてもほえわめいたが、こんどは前へ出ようとはしなかった。無理をしてもだめだ、機会をつかむほかはないと思い直したのだろう。

「あれえ、八百さん」

お香が突然金切り声をあげた。真剣勝負のほうへばかり気を取られているうしろから、いきなりだれかに羽がいじめにされたのだ。

「あっ、野郎、なにをしやがる」

芳五郎頭が憤然とわめいた時には、

「くたばれ、畜生」

「たたき伏せろ」

ふいに林の中から躍り出してきたぬすっとかむりの暴漢数人に、頭も清三も棒でしたたか脳天、肩を乱打され、くずれるようにそこへ気を失っていた。

と見る間に、一人が棒を捨て、羽がいじめにされてばたばたと身もがきしているお香の両足をすくいあげるように抱えこみ、もう一人が腰のあたりへ飛びついて、さっと林の中へかつぎこむ。

「助けてえ」

お香はもう一度叫ぼうとしたが、あまりのことにその声さえ出ない。

それは八百太郎の背後で起こったほんの一瞬の乱闘だったが、

——やったな。

それと知った八百太郎の構えが、みるみる激しい気魄にあふれてきた。できれば人は切りた

くない、敵もかなわぬとわかれば逃げるだろうとゆっくり相手になっていたのだが、今はこやつを片づけなければ、お香を助けてやることができないのだ。

もともと悪いを承知で金で雇われたやつ、雇ったやつも、雇われたやつも、こんな無道を働くからには、もう許さぬと思った。

「切るぞ」

「くそっ」

「おうっ」

八百太郎の一刀が、ぐいと踏み込んで上段にかわった。

一気に切って出ようとしたとたん、その火のような気魄に圧倒された根来は、

「まいった。——あやまった」

ぱっと飛びさがっておじぎをする。

「なにっ」

「貴公は強いなあ。まいった、あやまる」

「本心か——？」

「本心だ。たった一両で命まで売ってはあわんからなあ」

にたりとわらいながら、さっさと刀を鞘におさめてしまうのだ。

「よし、行きたまえ」

「そうか。貴公は話のわかる男のようだ。じゃ、失礼」

まったく人を食ったやつである。根来はもう一度うやうやしく頭をさげて、くるりときびすをかえし、もうゆうゆうと大宮のほうへ歩き出す。

つまり、一両だけの役割は果たしたつもりなのだろう。

——あきれたやつだなあ。

八百太郎はちょっと拍子抜けがして、ぽかんとそのうしろ姿をながめていたが、はっと気がついて刀を鞘におさめ、芳五郎たちのほうへ走り寄った。

芳五郎はいまやっと気がついて、頭をおさえ

ながら、ふらふらっと立ち上がったところである。清三はまだうつぶせて倒れたきりだ。

「頭、どうだ。しっかりしろ」

「あっ、浅香さん、面目ねえ。早く、早くおかみさんを見てあげておくんなさい」

「大丈夫か、貴公は」

「なあに、あっしはもう大丈夫でさ。番頭さんはあっしが見やす。おかみさんを、早く、おかみさんを――」

「そうか。じゃ、後をたのんだぞ」

ぐずぐずしてはいられないので、八百太郎はすぐに林の中へ分け入っていった。あいにく篠竹がいっぱい生い茂っている上に、地形に起伏があり、街道から入ったところはしばらく次第に上りになっている。

――うまく見つかってくれるかな。

八百太郎は耳を澄まして進みながら、こんどはそれが心配になってきた。

2

「お香、変に声を立ててみろ、ずぶりといくぞ」

杉次郎に匕首を突きつけられて、お香はこんどこそもうだめかもしれないと思った。

ここは街道からそう離れたところではなく、一丘のぼりきって下りになる土手のかげのくぼ地で、たき火の跡があるところを見ると、だれかが野宿をしたこともあるのだろう、前は深い草むらだから、こっちが立ちでもしないかぎり、ちょっと外からの見とおしはきかない。

金で杉次郎に雇われたやくざ三人は、八百太郎が百両の胴巻きを持っていると聞かされているらしく、お香をここへ運びこむと、いそいで街道のほうへ引きかえしていった。

――八百さんだって、今ごろどうなったか。

芳五郎頭と清三がたたきのめされたのは見てきているから、とてもたのみにはならないし、たとえ八百太郎が敵を倒して跡を追ってくれた

にしても、すぐにここがわかってくれるかどうか、お香はまったく絶望せずにはいられない。

しかし、杉次郎もここはあけっ放しの野天だから、さすがに人の気配をうかがっているらしく、昨日のようにすぐにいどみかかってはこなかった。

「お香、お前うらめしそうな顔だな」

杉次郎が鼻の先でわらう。

お香はそのけだものじみた顔を虫酸の走る思いでにらみつけていた。

「お前、あの浅香って野郎と、まだ本当になんでもねえのか」

杉次郎はまたしてもじろじろと体中を目で探ってくる。

あねさまかむりにしていた手ぬぐいは、どこへ吹っ飛んでしまったか、丸髷の根がくりと落ちて、横座りにかたく身をまもってはいても、くずれた衣紋はなおしきれず、まだ肩のあたりで息をはずませているお香の姿は、男心をそそらずにはおかないものがある。

「なんとか言えよ、お香。お前、浅香って野郎がまんざらきらいでもねえんだろう。べたべたと引っついて歩きながら、乳なんかいじらせていやがった」

杉次郎の濁った目に、かっと嫉妬の色が露骨になってきた。

「お前はおかしな女さ。亭主だったおれにさえ胸をさわらせるのはいやがっていたくせに。——もっとも、あの時分はまだ本当の色のわかる年ごろにゃなっていなかったが、お前はやっぱりはじめからおれが好きじゃなかったんだろう。ふ、ふ、好きでも、きらいでも、おれはちゃんとお前の肌を知っている男なんだからおもしろいや」

ばか、汚らしいと、お香は身がすくんでくる。どうしてこんないやらしい男を、一度でも亭主にする気になったんだろうと、いまさら自分が情けない。

「おい、かくさずに言ってみろよ、お前の肌は年増盛りになって、男をほしがっているんだ。往来中で浅香に乳をいじらせるくらいだから、もうただの仲じゃねえんだろう。おれに恥ずかしがることはねえやな。浅香ののろけをいってみろよ」

「それほど知っているなら、なにもあたしの口からあらためて聞くこともないでしょ。汚らしい」

お香はとうとうありったけの憎悪をこめて、たたきつけてしまった。

「汚らしい――？」

勝ち誇っていた杉次郎は、さすがに男の自尊心を傷つけられたらしく、

「くそっ、もう勘弁しねえ」

いきなり匕首をそこへほうり出すなり、おおかみのように躍りかかってきた。

「あっ」

しまったと思ったが、もう遅い。杉次郎は昨日とおなじように、凶暴にお香をそこへ押し倒すなり、のしかかるようにして両手でのどを絞めつけているのだ。

「畜生め、今日こそ散々おもちゃにして、思い知らせてくれるぞ」

「おい、振られ男、そいつは約束が違いやしねえか」

がさがさと草むらの中へ立って、くぼ地へおりてきたやつがある。

「あっ、てめえは稲妻――」

ぎょっとお香を放して立ち上がりながら、杉次郎がまたかというような顔をした。

「まだお前とは男の勝負がついていねえ、一人で勝手なまねをしちゃいけねえな」

「うぬっ、勝負をつけてやる」

杉次郎は悪鬼のようになって、だっと稲妻小僧に体ごとぶつかっていった。

「あっ、くそっ」

いくぶん杉次郎を甘く見ていた稲妻小僧は、

とっさに杉次郎の腕をつかみとめながら、どすんと仰向けにひっくりかえり、
「野郎っ」
「なにをしやがる」
「これでもか」
二つの体は火が出るようにもみあいながら、くるっくるっと、こまのように回転し出した。どっちも野獣のようなうめき声をあげながら、死にもの狂いである。
——今だ、逃げるのは。
お香はふらふらっと立ち上がった。足がすくんでいて、思うように歩けない。土手につかまるようにして、一方からやっとくぼ地をはい上がった。
夢中で草の中を少しはって、よろよろっと立ち上がると、ぐいとその腕をつかんで支えてくれた者がある。
「あ、八百さん」
飛び立つほどうれしかった。やっと助かったと思ったとたん、気が遠くなってきて、
「それ、しっかりつかまるんだ。落ちるぞ」
大きく一つ体をゆすられて、はっと我にかえった時には、もう八百太郎の背中にしっかりとおぶわれていた。
「八百さん、——八百さんですね」
それでも、一度はたしかめずにはいられない。
「うむ、お馬だよ」
八百太郎馬は、ざあっ、ざあっと腰のあたりまでの草を分けて、大股に歩いていく。

3

「どうだ、もう歩けるだろう」
八百太郎が背中へ聞いたのは、やがて間道へ出てからだった。
「あたし、歩けるかしら」
まだ背中をおりたくないお香である。
「じゃ、街道へ出たら歩くんだぜ。またべたべたしているってしかられるからな」

「あの二人、どうなったでしょうね」
こっちが草むらへはいあがった時は、まだ不気味なかみあいが猛烈につづいていたようだった。
「どっちかが負けて、どっちかが勝つだろうよ」
「負けたほうは、殺されますわね、きっと」
「やっぱり気になるか、お香うじ」
「いやっ、そんなことおっしゃっては」
しっかりとたくましい肩にしがみつきながら、しかし、たぶん負けるのは杉次郎のほうだろうと思うと、さすがに胸が重い。
「助けてやって真人間になれる者なら、助けてやろうかとも思った。しかし、どっちも、世の中の迷惑にはなっても、役には立ちそうもない連中だ。裁きは天にまかせようと思った。わしの考え方はいけなかったかね」
「いいえ、あたしもそれよりしようがないと思います」
お香はそう答えてから、
「八百さん、もう杉次郎のことはいわないで。あたし、やっぱり悲しくなる」
と、我にもなく涙が流れてきた。
決して好きな男ではなかった。今の杉次郎はむしろ恐ろしい。が、悪いことをしないで、どこかに生きていてくれたほうが、やっぱり安心していられたのにと思う。
「あの追いはぎ浪人、どうしました」
お香は気を変えるように聞いてみた。
「降参したから、逃がしてやったよ」
「まあ、降参したんですか」
「一両で命まで売っては割にあわないといっていた」
「じゃ、一両もらって、あんなまねをしたんですね」
「そうらしいな」
「頭や清三は大丈夫だったかしら」
「命にかかわるようなことはなかろうと思う。それよりお香うじのほうを見てくれって頭がい

うんで、わしはすぐ林の中へ飛びこんだんだが、まさかあんなところにあんないい場所があろうとは、ちょいと気がつかなかった。うっかり通りすぎようとして、ちらっと稲妻小僧の姿が目についたんだ」
「あの男、きっと江戸まであたしをねらうわ。怖い」
その稲妻小僧のおかげで、二度まで杉次郎の毒牙はのがれたようなものの、かえってその執念が恐ろしいのだ。
「なあに、その心配はいらんだろう」
「どうして――」
「お香うじは帝王の星を持っている女だ。だから、三度まで災難をのがれた。悪党の力ではどうすることもできないさ」
「三度とも災難をのがれたのは、八百さんのおかげです。帝王の星のおかげなんかじゃありません」
「すると、わしはお香うじの命の恩人かな」
「ありがたいと思っていますわ」
「ところが、その恩人がとうとうお馬になっている。お香うじはやっぱり帝王の星を持って生まれてきた女なんだね」
「あたしもう歩きます。おろして――」
「遠慮しなくてもいいよ、約束だから、街道へ出るまで背中にいなさい」
「でも、あたし怖くなりました」
「なにが――」
「帝王の星なんか、もうかえしてしまおうと思います」
「どうしてだね」
「御亭主を食ってしまうような星、あたしきらいです」
「なるほど。案外お香うじにも女らしいところがあるんだな。杉次郎のために涙をこぼしてやったり、次の御亭主のために帝王の星を辞退したがったり」
「あら、じゃ、八百さんは今まで、あたしをちっ

とも女だと思っていてくれなかったんですか」
急にうらめしい気がしてくるお香である。

ねだりたいもの

1

「お香うじ、もうおんりにしろ。また変なやつが出てきた」
お香をおぶって、やがて街道へ出ようとするあたりまできて、八百太郎はふっと立ち止まった。
さっきの雇われやくざども四人が、またぬすっとかむりのまま、ふらりとその街道口へ姿を見せたのだ。たぶん根来用心棒の百両を当てにしてさがしまわったのだが、ついに見つからないので、ぼんやり引きかえしてきたところなのだろう。こっちを見ると、四人ともしめたというように顔を見あわせて、庚申堂の横手へ立ち止まっている。
「大丈夫、八百さん」
素早く背中をすべりおりたお香は、またしてもどきりとせずにはいられなかった。
「まあ、無事には通してくれないだろうな」
「怖いなあ、あたし」
「あの連中は色気と欲気の両方だから、ちょっとすごいかもしれぬ」
「あなたがそんなことといっちゃ、あたし余計心細くなるじゃありませんか」
お香はしっかりと八百太郎の腕につかまって歩きながら、でもこの人がついていてくれるんだからと、心のどこかで安心している。
「ねえ、お金ですむんだったら、すませてくださいねえ」
「うむ、そうしよう」
とうとう四人の前まできてしまった。四つのぬすっとかむりが道いっぱいに立ちはだかって、みんなじろじろとお香の体中を見まわして

いる。
「これこれ、少し道をあけてくれぬか。そう往来のじゃまをしてはいかん」
八百太郎はまずおだやかに出てみる。
「ふざけるねえ。おれたちをなんだと思ってやがるんだ」
いちばん兄貴株らしいやつが、ぎろりとにらみつけながらすごんできた。
「お前たちはさっきの根来五郎左衛門の仲間らしいな。違うかな」
「そうだといったら、どうする気だ」
「では、木場の杉次郎から、もう一両ずつもらっているんだろう」
「大きなお世話だ」
「そうか。お前たちはどうも欲が深そうだな。どうだ、わしが一分ずつやるが、それでがまんせぬか」
「たった一分だと——。わらわせるねえ、てめえの胴巻きの中には、たしかに百両入っているはずだ。命が惜しかったら、それをそっくりここへ出してしまえ」
「それは追いはぎ強盗のいうことだ。お前たちは追いはぎ強盗か」
「なにをぬかしやがる、出せといったら黙って出せ」
「胴巻きを出せば、おとなしくここを通してくれるかね」
「お前だけは通してやる」
「それはいかん。このおかみさんはな、なるべく金ですむなら金ですますようにという心でいるのだ。どうだ、金だけですませておかぬか」
「ならねえ。一度見かけた宝の山だ、金も女もおいていけ」
「そう欲張るものではない。お前たちには、親兄弟、妻子はないのか」
「なんだと——」
「獄門首になると、親や妻子が泣く。悪事はせぬものだ」

「こんちくしょう、いやなことをぬかしやがる。たたっ切るぞ」

さすがに獄門首はありがたくないものとみえて、なんとなく目の色が気ちがいじみてきたようだ。

「これ、乱暴はよせ。刀を抜けば、わしのほうが強いにきまっている。侍はやせても枯れても一通り敵を切るけいこをさせられているんだ。命を粗末にしてはいかん」

そう言いながらも、八百太郎は危ないからお香を背にかばって、じりじりと後ろへさがりはじめる。

「逃げる気か、野郎」

「わしは逃げはせぬ。やめなさい。刀を抜いてはいかん」

こっちはできるだけ抜かせまいとして余計な口をきいているのだが、後ろへさがるのは弱いと勘違いしたらしいやくざどもは、いい気になって殺気立ってくるようだ。

「野郎、どうしても胴巻きを出さねえか」

「追いはぎはいかん。一分ずつなら酒手につかわす。それでがまんしておけ」

「くそっ」

調子に乗った兄貴やくざは、切ってしまえばこっちのものと考えたか、いきなり長脇差を抜いて、だっと切りこんできた。

が、どう強くても相手はたかが度胸一つのけんか剣術、敵が抜いたのと、八百太郎が同時に踏んごんで、

「えいっ」

抜き打ちに胴を払ったのと、こっちのほうがわずかに早く、

「わあっ」

そいつは長脇差を振りかぶったまま、大きくのけぞっていた。

「あっ、野郎」

ひと足おくれていた二人目のやつが、うろたえて刀を引き抜いたが、八百太郎の返す二の太

刀が、
「とうっ」
あざやかにそいつの高股を横なぎにして、
「ううっ」
どすんとそいつはそこへしりもちをつく。
「いけねえ」
「逃げろ」
いざ刀を抜いたとなると、まったく危なげのない正確さで、一瞬の間に二人ともやられている。残る二人はぎょっと棒立ちになり、まるで死に神にでもぶつかったような顔をして、たちまち林の中へ逃げこんでいった。
「だから、いわぬことじゃない」
八百太郎はもそりとそんなことを言いながら、刀をぬぐって鞘におさめ、
「さあ行こう、おかみさん」
もうさっさと街道へ出ていく。
お香はその後を追って、しっかりとたもとにつかまりながら、ともかくも人二人が倒れているのを見ていたのだ、さすがに青くなって、しばらくは口もきけなかった。
気がついてみると、どこにかくれて待っていたのか、芳五郎頭と清三がこれもさえない顔色をして、ぼんやり後からついてきている。申し訳がなくて、どうにもそばへは寄ってこられないといったかっこうだ。
——お前さんたちが役に立たないんじゃない、相手が無法すぎるんだもの。
お香はなにか気の毒になりながら、それにしてもあたしはまたこの人に助けられたと思うと、急に胸がいっぱいになってきた。

2

その日は浦和泊まりのつもりだったが、思いがけない上尾ノ原の騒動でみんな疲れている。と、あいにく夕方近く、とうとう雨が降り出したので、一駅手前の大宮泊まりということにした。

まだ早い夕方だったので、お香もひとふろ浴びて、今日はみんな命びろいをしたのだから、縁起直しに膳に一本ずつ銚子をつけてくれるようにたのんでおいた。

「お香うじ、今夜は酒をのんでもいいのか」

膳が出ると、八百太郎が無邪気に聞いた。

「ええ、今日は清め酒。けど、一本きりですよ。まだ油断はできませんからね」

お香はそうことわってから、八百太郎に酌をしてやった。

「浅香のだんな、今日は本当にありがとうございました」

酒を口にする前に、芳五郎があらためてあいさつをする。

「なあに、とんだ災難だったな、頭」

「そう言われると顔から火が出ます。おかみさん、こんどの道中だけはからきしお役に立たねえで、申し訳ありやせん」

「いいんですよ、頭。頭が役に立たないんじゃなくて、出てくるやつも出てくるやつも、相手があんまり無法すぎるんです。考えてみると、こんどばかりは本当にとんだ道中でしたね」

「まったくでさ。これで浅香さんにお目にかかっていなかったら、どんなことになっているのかと思うと、正直にいってあっしはぞっとしやす」

「やっぱり、縁とでもいうのでしょうかねえ」

お香はまたしても八百太郎に酌をしてやりながら、しみじみとその顔を見ずにはいられない。縁あればこそという思いが、しきりに胸にあふれてくる。

「お香うじはのまぬのか」

「あたしは遠慮します。まだ旅先ですから」

「そうか、慎み深いんだな」

「八百さんはお酒強いんですか」

「いや、そう強くはない。すぐ眠くなるほうだ」

「あらあら、大丈夫かしら。少し心配になってきました」

「用心棒のほうか」
「ええ、ぐっすり眠ってしまうと怖い」
「大丈夫です。浅香のだんなぐらいになりゃ、くつわの音で目をさますほうです。強いなあ、だんなは」
芳五郎頭が一人で引きうけてくれる。
「頭、買いかぶってはいかん。弱い相手には強いが、岩見重太郎にはまだかなわぬ」
「かまいません。あたしは稲妻ひひさえ退治してもらえばいいんですから」
「そういえば、杉次郎さんどうしたかなあ」
つい芳五郎の口からそれが出る。大体の話は道々聞いているから、元の姿を知っているだけに、そこは人情で、やっぱり気になるのだろう。
折から宵の雨がざあっと軒をうっていた。行燈の灯さえなんとなく暗い感じで、お香はどうにも顔があげていられない。
「すんません。つまらねえことを口にしてしまいやした」
はっと気がついて、芳五郎頭も杯をおいてしまう。
「お香うじ――」
八百太郎が静かに呼んだ。
「はい」
「杉次郎がどうなったかは、我々にはわからぬ。しかし、人間はだれでも一度は死ぬものだ。その死に方はその人間の生きてきた心柄によるところで、これはしようがない。ただ、人間は死んで仏になれば、とにかくその罪は消えるものだ。わかるか」
「はい」
「あんた杉次郎のことが気になったら、杉次郎にかわって世の中へ善根を積んでやる、それでいいのだ。生きていても、死んでいても、杉次郎はそれで救われる」
「はい」
「わしもさっき、やくざを二人切った。切らなければ切られる、やむをえない場合だったが、

しかし、人を切るということは決していいことではない。わしはそういう自分のまわりあわせを悲しむ。あの二人も致命傷ではあるまいと思うが、わしはそのつぐないとして、二人のためにできるだけの善根を積む覚悟でいる。万一、わしが道を誤るようなことがあったら、いつでも人に切られて、その人をうらむまい、そう決心している。どうだね、いくらか気持ちが楽になりはせんかね」

「あたし、あたしよくわかったような気がします。きっと、あたし、これから善根を積むように心がけます」

お香はそんなすなおな気持ちになれて、ぽろぽろと涙があふれてきた。

雨は一晩中降ったが、明け方にやんで、翌朝はうそのような秋日和になった。

大宮から江戸日本橋へ七里四町、今日は最後の道中である。ゆうべはぐっすり眠れたせいか、お香の気持ちも今日はからりと晴れていた。

——あたしはもう、杉次郎のことも、稲妻小僧のことも、余計なことは気にしないことにしよう。善根さえ積めばいいのだ。

ゆうべからお香はそう腹をきめている。

無論、ゆうべもお香は間のふすまをあけ放しておいて、八百太郎にまくらをならべて寝てもらった。八百太郎は自分で言っていたとおり、酒気があるせいか、まくらにつくとすぐ高いびきかいて眠ってしまった。

「あれえ、だんなはうそをいわねえな」

芳五郎頭が感心すると、

「あれで、くつわの音で目がさめるかなあ」

と、珍しく清三までそんな冗談口をきいていた。

が、その二人もまもなくいびきをかきはじめて、雨の音だけがわびしく耳につく。

——どうしようかなあ。

お香はその雨の音を聞きながらしばらくためらっていた。もう稲妻小僧も杉次郎もそう怖い

とは思わない。もしふいに殺されるようなことがあっても、それは自分の生きてきた生き方に誤りがあったのだと、あきらめがつくような気がする。

それでいて、なんとなく八百太郎の手がほしくてしようがないのだ。とうとうがまんできなくなって、黙って手をさぐりにいってみた。

「ううむ、どうした」

ぴたりといびきがやんで、こっちを向いたので、しかられるかなとひやりとしたが、なんだ手かというように、八百太郎は手をくれたまま、またすぐいびきをかき出していた。

——仏さまみたいな人。

お香は安心して、その手を胸に抱きながら、自分もぐっすり眠ってしまったのである。

今朝はなんだかその話がしてみたい。なんといわれても、お香はもう八百太郎を離さないつもりになっているのだから、それもはっきりと言っておきたい。

「八百さん——」

「なんだ」

「いいお天気になりましたねえ」

我ながら小娘のようなはしゃいだ声になっている。

「そうだなあ、天高く馬肥ゆる秋日和だ。もっとも、お馬はまだ早いぜ、お香うじ」

「あたしはいくら早くてもいいんですけれど——」

「いや、朝っぱらからまた根来用心棒などに飛び出されてはやっかいだからな」

「大丈夫よ。あの用心棒さんなら、一両やればそっぽを向いてくれます」

「そう人を甘く見てはいかんなあ」

「だって、お馬も善根のうちじゃないかしら」

「善根はねだるもんじゃない。ほどこすもんだ」

「あたしはねだるほうが好きなんです」

「とにかく、お馬はまだ早いよ」

「ほかにもねだるものがあるんですけど」

「なんだ。お馬のほかにねだりたいものっていうと、——ああ、お手々か」
「あら、ゆうべあたしが寝てからお手々を拝借したの御存じ？」
「知らんなあ」
「本当ですか」
「眠っている間は仏さまだからな」
「いやだな。それじゃあたしがまるで黙って盗んだみたいになります」
「まあいいだろう。善根をほどこしたことにしておこう」
「なら、ついでにもう一つおねだりしたいものがあります」
「ほかにそんなものがあるかなあ。後は足ぐらいのもんだぜ」
「その足をあたしにください」
「冗談いうなよ。この足をやってしまったら、それこそわしがこんどお馬をねだらなけりゃならん」
「お駕籠だっていいでしょう」
「きつねが馬に乗るってことはあるが、お馬が駕籠に乗れるかな」
「あら、あそこに待ってるの、たぬきじゃありませんかしら」
「なあるほど——」
大宮の宿を出外れて、松並木道へかかる松の木の下に、例の天運堂たぬき天神が突っ立って、こっちを見ているのである。
「どうやらわしたちを待っているようだな」
たしかにそんなかっこうだ。

いやがらせの裏は

1

「先生、またお目にかかってしまいましたねえ」
お香は、たぬき易者の前へ行くと、今日はきげんがいいから、自分のほうから愛想よく声を

かけた。
「なあに、またお目にかかったんじゃなくて、わしのほうで待っていたんじゃよ。ともかくもお早う。いいお天気じゃな、おかみさん」
たぬき易者も今朝はきげんの悪いほうではないようだ。もっとも、これはまた後で一朱になるという役得を計算のうちに入れているからだろう。
「あのねえ、先生、ちょっとおうかがいしたいことがあるんですけれど」
「どんなことかな、いうてみなさい」
「実は、あたし、帝王の星ってのを返してしまいたいんですけれど、どうすれば消えるでしょうねえ」
「そりゃいかん。そりゃおかみさん、不心得ですぞ。帝王の星などという立派な星を持って生まれてくる幸せ者は、千人に一人、万人に一人もまれなことじゃ。そんないい星を、なにも無理に消すことはなかろ。もったいない話じゃ」
天運堂は目を丸くして説き立てる。
「いいえ、せっかくなんですけれど、御亭主を食ってしまう星だなんて、どんないい星でも怖いんです。やっぱり女ですから、貧乏はしても人並みに御亭主を持って、仲よく暮らしたいと思うんです」
案外真剣なお香の顔を見ると、
「なるほど――」
こんどはたぬき易者も言葉に詰まって目を白黒させている。
「帝王の星というのは、どうしても御亭主を負かしてしまうんでしょう」
「それはじゃな、そのう、どうしても星がよすぎるでな、お前さんより星の弱い男を御亭主にして、その御亭主がお前さんに逆らおうとすると、御亭主はお前さんに食われることになる。だから、いっそ弱い星なら、うんと弱くて、なんでもお前さんのいうことをはいはいときいてくれるようなおとなしい御亭主を持つか、それ

でなければ、お前さんより強い、つまり大帝王の星を持った男を御亭主にすれば、きっとうまくいきますじゃ」
「そんな、大帝王の星を持った人なんてのが世の中にいるんでしょうか」
「そりゃいるとも。天下は広大じゃ。シナでいえば玄徳帝のような人、本朝では豊太閤、東照公のようなお方がそれじゃ」
「あんなおじいさん、御亭主に持とうとは思いませんけれど、じゃ淀君さんなんかもやっぱり帝王の星を持っていたんですね」
「どうしてじゃな」
「だって、散々秀吉さんにだだをこねて、ずいぶん困らせたっていうじゃありませんか」
「なるほど、おかみさんはなかなか学があるな」
「あたし、いくら大帝王の星を持った人でも、秀吉さんや家康さんのような女好きの御亭主は汚らしい」
「これこれ、そんな大きな声で家康さんの悪口をいってはいかん」
「大丈夫です。あたしは帝王の星を持っている女なんですもの、もし家康さんが怒ったら、あなたこそ後家いじりはおよしなさいって意見してやります」
「いかんな、お前さんはそのとおり御亭主を食ってしまう強い女に生まれているんじゃ」
「あら、困ったわ、あたし」
お香は自分でもはっと気がついて苦笑しながら、
「ねえ、先生、あたしはやっぱり星の弱い人を御亭主にしようと思います。この人となら、うまくいくんじゃありませんかしら」
と、思いきってうしろに立っている八百太郎を前へ引っぱり出す。
「ふうむ、この仁をな」
天運堂はいささかあきれたらしい。
「大名人うじ、どうやらわしの女難の相はなかなか消えんようだな」

のんびりとわらっている八百太郎だ。
「よかろう。この仁で間にあわせておく気なら、まず間違いはない。この仁の相は、女のしりに敷かれても怒らぬ相で、星でいえばくず星、うっかりすれば流れ星になってお軽く消えてしまう。まず、毒にも薬にもならん御亭主になるだろう」
「怒りますよ、先生」
あんまり悪くいわれると、やっぱりおもしろくない。
「いくら星はくず星でも、どこか一つぐらいいいところがありやしません？　ようくもう一度見てくださいまし」
「さようさな、どこか一ついいところといえば、めったに怒らないところかな」
「うれしいわ。がまん強いたちなんですね、木村重成みたいに」
「いや、木村重成のは本当の勇士のがまんじゃが、この仁のは生来怒ることを忘れてきているんじゃ。そこが、つまり、くず星というんだろうな」
天運堂は八百太郎の顔を見ると、なんとなく敵意を感じてくるらしい。いわゆる相性が悪いとでもいうやつなのだろう。
「もうたくさん。——はい、見料」
お香はむっとしながら、手早く一朱、紙にくるんで突き出す。
「そうそう、肝心なことを忘れるところじゃった」
たぬき易者ははっと思い出したようにふところから結び文を取り出して、
「これをな、それ、一昨日の仁から、またことづかっていましたのじゃ。たしかにわたしましたぞ」
と、それを金包みと取りかえっこをして、
「まいどすまんな」
ぴょこりと人を食ったようなおじぎを一つすると、さっさと大宮のほうへ歩き出した。

「憎らしいな、本当に」
お香はそのうしろ姿をにらみつけたが、それよりいま受け取った結び文は、たしかにまた稲妻小僧からに違いない。そして、稲妻小僧が生きているとすれば、無論杉次郎は殺されているに違いないから、開いてみるのが恐ろしい。といって、見ずに捨てるのはなお気になるし、思いきって開いてみた。
「杉はたすけてやった。もうお前のことはあきらめるといっている。こんどこそ、お前の亭主はおれだぞ。忘れるなよ」
へたくそな字だが、お香にはその字が躍っているように見えた。
——ああよかった。
杉次郎が生きていてくれたのがなによりもうれしい。これで安心してこの人と夫婦になることもできると思いながら、黙ってそれを八百太郎の手にわたした。
「よかったなあ、お香うじ」
八百太郎はそれを読んで芳五郎頭にわたす。
「杉次郎より稲妻小僧のほうが、どうしても一枚上ってことになるんですかねえ、だんな」
芳五郎はそういいながら、それを若い番頭にわたしていた。

2

「八百さん、稲妻小僧はとうとう江戸まであたしにつきまとう気なんですね」
しばらく歩いてから、お香はそれがまただんだん不気味になり出してきた。
「そうだなあ。さっきの手紙は、わざわざ恩に着せているようなところがあったな」
「でも、あたし、もう安心です。あなたって御亭主がこうしてそばについていてくれるんですから」
お香は高飛車に出て、それが本音なのだから、こんどこそ大っぴらに八百太郎の手をつかみにいく。

「たぬき易者はあれでなかなか観相のほうは名人らしい」
「わかるもんですか、与太ばっかし」
「しかし、わしはあってもなくてもいいくず星で、女難の相があって、お馬にされても怒れない性分だというあたり、なかなかおもしろい見方だ。いまにお軽く流れ星になって消えてしまうかもしれないな」
「違いますっていうのに——。あなたは大帝王の星を持っている男の中の男なんです」
「あれえ、お香うじは途方もなくわしを買いかぶってくれたぞ」
「だって、帝王の星を持っているあたしがこんなに夢中にされてしまう男なんですもの、それに違いないんです」
お香はわれながらうまいことをいったと、自分でうれしくなる。
「さあ、それはどうかなあ。子供は好きなおもちゃに夢中になる。お香うじはわしをおもちゃだと思っているんじゃないのか」
「どうしてそんな意地の悪いことをいうんでしょう。人がせっかく大帝王の星にしてあげたのに、なにも自分からおもちゃになることはないじゃありませんか。だいいち、そんな大きなおもちゃ、あたしの力じゃどうにもなりゃしません」
「いや、お馬のおもちゃだから、小さくては役に立たない」
「つねるから——」
そのつねる手で男の手をつかんでいるのだから、つねるかわりにどすんと肩をぶつけてやる。あまりよろけようともしないたくましい肩だ。
「ねえ、今日はきっとうちへわらじをぬいでくださいね」
こっちは御亭主ときめていても、相手はちっともはっきりしてくれない。お香はなんだか胸が切なくなってきた。
「そうだなあ、家までは送ってあげよう。途中

で流れ星になって、急に消えてしまわなければならないような事件が持ちあがらないかぎりはな」

「あら、まだそんな事件が持ちあがりそうなんですか」

「それはわからんな。人生一寸先はやみというし、お香うじのような美人で金持ちの果報者には、とかく事件のほうでぶっつかってきたがる。少しも油断ができん」

「怖いなあ、あたし」

「怖いとも。早い話が、稲妻小僧は杉次郎との間に話がついて、お香の亭主はもうおれだときめている。一足先に家のほうへ先まわりをして、長火ばちの前へ座って、お香、いま帰ったかというようなことがないともかぎらない」

「いやだ、おどかしちゃ」

「いや、おどかすわけじゃない。杉次郎だって、あきらめたとはいっても、その実まだお香うじに執念を残しているかもしれん」

「だから、八百さんがあたしの御亭主になってくれればいいんですわ。八百さんはどうしてもあたしが好きになれないのかしら」

お香がはかなげな声を出す。

「やれやれ、やぶへびだったか」

「なんですって――」

「いや、よろしいよろしい。口は災いの門といってな、ものいえばくちびる寒しと、芭蕉さんも嘆じている。だいいち、お馬が口をきくのは少しおかしい」

「いやだ、あたし。八百さんはどうしてもあたしがきらいなんですか。死んじまうからいい」

「冗談いうなよ。好ききらいということになれば、ちゃんとこうやってお手々を貸して歩いているじゃないか」

「うれしい。本当ですね、八百さん」

お香はかっと体中の血が甘く燃えてくるようで、思わず男の腕を両手で胸へ抱きしめる。だれも見ていない畑つづきの街道だから、かまや

しないと安心していた。
が、人生の一寸先は八百太郎がいうようにまったくやみだった。だれもいないと思ったその目の前へ、ついそこの道端の茶の木のひとむらの根方からすっと立ち上がったやつがいる。しかも、それが人もあろうに昨日の用心棒根来五郎左衛門だったのである。
もう少しのところで、八百太郎の口から御亭主になってやろうという言葉が聞けたのにと、お香は世にもうんざりしてしまった。いや、月にむら雲花に風、そう思うと腹さえ立ってくる。
「やあ、貴公、あいかわらずやっているなあ」
根来は八百太郎とお香の顔を見くらべながらにやりとわらった。
「いや、わしは別になにもやってはおらん。昨日のつづきで、ただ歩いているだけだ」
「さよう、美人の胸にたわむれながらな。貴公は果報者だ」
「なにか用かね」
「うむ、大した用というわけでもないが、用があるにはある」
「ねえ、大した用でなければ、さようならをしましょうよ」
お香はかまわず、八百太郎の腕を引っ張ってぐんぐん歩き出す。
「そうだ、歩きながら話してもいいことだ」
根来はずうずうしく八百太郎のあっち側へ肩をならべてしまう。
「用というのを聞こうかな」
黙っていればいいのにと思うのに、人のいい八百太郎はそんな口をきいてしまう。
「浅香八百太郎うじといったな」
「さよう」
「昨日は失礼した。おなじ浪人でも貴公などは大名浪人、わしはこのとおり尾羽打ち枯らしたやせ浪人、つい辻切り強盗もやりたくなる。悪く思わんでくれ」
「別に悪くは思わんが、今日はまさか辻切り強

盗のつもりではなかろうな」
「それがな、ひょっと気がかわると、どうなるか自分でもわからんのだ」
けろりとしてそんな物騒なことを口にする。
「しかし、貴公は、杉次郎からもらった昨日の一両がまだふところにあるんだろう」
「そりゃある。しかし、そういう貴公は、ふところに百両も持っているんだからなあ」
「いや、これは、本当のことをいえば、このおかみさんからあずかっている金で、わしのではない」
「うむ、それも杉次郎から聞いている。貴公、もう一つあずかっているものがありゃしないのか」
「もう一つ――？」
「そうそらっとぼけなくてもよろしい。どうせ久しく空いているんだし、後家どののほうから往来で乳までいじらせているくらいだ、ちゃんとわかっている」
お香はがまんができなくなって、
「もしそうだったら、どうだとおっしゃるんです、用心棒さん」
と、こっちから食ってかからずにはいられない。
「さよう、まあおたのしみでござろうな」
「いやらしい、そんな浅香さんじゃありません」
「さよう、どんな浅香さんか深香さんか知らんが、いまにわかるて。女はとかくたぬきになりやすいでな」
「大きなお世話でございます」
むしろ、早くそうなりたいお香なのだから、こんどは黙って八百太郎の手を握りしめている。
「どうだ、貴公、後家どのはあのとおりあっさりかぶとをぬいでおる。貴公はまだもう一つのものはあずかっておらんと白をきる気かな」
「貴公はよほど苦労性のようだな」
八百太郎は苦わらいをしている。
「そう逃げてはいかん。男は男らしく、こうい

うことははっきりしておかんと、あとで後家どのが泣くようなことになるぞ」
「いや、別に泣きもすまい」
「ふうむ。すると、貴公いよいよ後家のうちへはいこむことにきめたのか」
「貴公は、それをたしかめてきてくれと、だれかにたのまれたのかね」
あっとお香は息をのむ。根来用心棒の口のきき方は、いやがらせたっぷりで、はじめから八百太郎を怒らせるようにかかっていると、やっと気がついたのだ。その裏に稲妻小僧か杉次郎の息がかかっているに違いない。
「どうだ、貴公、もう一つのものをうまくやっているんなら、このやせ浪人にふところの百両をくれぬか。どうせ後家どのは金持ちなんだ。幸運は人にもわけるもんだぞ」
根来はそろそろ地金を出しそうである。

手切れ金百両

1

その日の中食は、蕨の宿でとるようになった。
根来用心棒はずぶとくかまえて、なんとしても二人のそばを離れようとしない。お香は悔しいし情けないし、腹が立ってたまらないが、案外八百太郎が平気でいるので、どうしようもなく、よし、それならかまうものか、うんと仲のいいところを見せつけてやろうと、度胸をすえてしまった。
それに、今日一日の旅だし、今のうちに是が非でも八百太郎をうむといわせておかなくては、江戸へ入ってから、いつさようならをされてしまうかもしれない。もう人前など考えていられなくもなっていたのだ。
だから、休み茶屋の床几に掛けて、旅籠屋か

らもらってきた握り飯をたべる時も、まるでぴったりと体をくっつけて、少しも離れようとしなかった。

「お香うじ、その床几はまだあいているぞ。もう少し離れたほうが、浅香うじも楽だろうにな あ」

根来はわざと二人の前の床几に陣取って、これは昨日杉次郎からせしめた大枚一両の金があるから気が大きいのだろう、中食のかわりに茶わん酒を一杯取って、ちびりちびりと貧乏のみにたのしみながら、そんなお節介をやく。お香うじだなどと、八百太郎の口まねをはじめたのからして小憎らしい。

お香は相手にもせず、

「あなた、これ一つ召し上がってくださらない」

と、二つのうち一つ残った自分の竹の皮の握り飯を八百太郎のほうへ出してみた。大きな握り飯で、お香には二つは食べきれないのだ。

「お香うじは一つでいいのか」

「だって、こんなに大きいんですもの」

「そうか、じゃもらおうかな」

八百太郎は無造作にそれを取って、すぐ口へ持っていく。お香はうれしくなってしまって、そのかわり八百太郎のあごについている飯粒を一つ、

「いやですねえ、子供みたい」

と、指でつまんでわらいながら、自分の口へ入れていた。

芳五郎頭と清三は見ないふりをしていたが、根来はたちまち見とがめて、

「おいおい、そう見せつけるなよ」

と、目をむいてきた。

「あっちを向いていてくださいまし」

「しかし、そんなことが平気でできる仲だとすると、たしかにもう口をなめあっている仲なんだな」

「どうなと御勝手に――」

「そうだろうとも。間男ってのはまた格別の味

だっていうからな。なあ、貴公」
「なんですって、根来さん」
いやがらせとはわかっていても八百太郎がいやな気になりはしないかと、やっぱりそれが心配になるお香なのだ。
「いや、これはわしがいうんじゃない。亭主の杉次郎がそういうのだから間違いはなかろう。あの女房はおかしなやつで、おれにはいっしょに寝ていても決して乳はいじらせなかった。それを、往来を歩きながら、あの男には平気でいじらせているんだから、間男ってやつはきっといいものに違いなかろうとな」
「星が違うんだからしようがありません」
「星ってなんだね」
「この人は帝王の星を持って生まれているんですし、あっちの人はやくざ星しか持っていないんですからね」
「その帝王の星ってのは、どんなことをいうんだね」
「どんな望みでもかなう星、乱世なら太閤さまになれるような、そういう万人に一人あるかなしの位を、この人は持って生まれてきているんです」
そうだ、あたしの帝王の星は、いっそ八百さんにやってしまおうと、お香はいいことを思いつく。
「ふうむ、本当か、浅香うじ」
根来は意外だったらしく、ちょっとうらやましそうな顔をしたが、
「なるほど、乱世なら太閤星ってところだが、あいにく天下は泰平なんで、それがたらし星にしか通用しないというわけか」
と、またしてもけちをつけてくる。
「なんのこと、そのたらし星というのは」
「後家たらし星さ。一名間男星ともいってな、まあ、そんなことでもやらないと千星になるやつだ」
「ほ、ほ、根来さんのようにお上の目こ星で、

棒をふりまわしながらやっと千星にならないで生きている方よりましかもしれませんね」
「なんだ、棒をふりまわすとは――」
「用心棒、大べら棒、どろ棒なんてのは、みんなお上のお目こぼしで生きているんでございましょう」
「二本棒が女に握り飯をもらって食っているのとおなじだ。しかし、男は天下を取っても、人の女房は取るもんじゃない。罪だからな」
じろりと八百太郎の顔を横目にかける根来だ。
その八百太郎は、どこを風が吹くかというような顔をして、いまゆうゆうとお香の握り飯を平らげたところである。
「あなた、お茶わんをお出しなさいまし」
お香はわざと八百太郎のひざの前から手をのばして、男の茶わんを取り、のみ残しの冷えた茶をさっと根来の足もとへぶちまけて、新しい茶をつぎ、
「はい、召し上がれ」
と、八百太郎にわたす。
「やあ、ありがとう。ここから板橋へ二里、それから日本橋へ二里だから、今日はいそがぬとやっぱり日が暮れるな、お香うじ」
「そうですねえ。そろそろ出かけましょうか」
「うむ、そうしよう」
八百太郎は茶をのみ終わるとあっさり立ち上がって、お香が茶代をおいている間に、ゆっくりと街道へ出ていく。
お香はいそいで後を追って肩をならべたが、まだ酒が残っているらしい根来は、すぐには後を追ってこなかった。
「八百さん、あんなやつのいうこと、気にしないでくださいねえ」
「そんな心配はしなくてもいい」
「あたし、あなたが怒り出しゃしないかと思って、はらはらしちまう」
「わしはあまり怒ったことのない男だ」

「やっぱり、帝王の星を持っているからだわ」
ここではっきりと、お香は帝王の星を八百太郎にやってしまうことにする。
「いや、生来ぐずで、怒ることができない男かもしれないよ」
「違います。ぐずはなんでもないことにもすぐむっと腹を立てながら、思いきって怒れないんだけれど、八百さんのは怒ったってつまらないから怒らないだけなんです。ぐずとはまるっきり違います。やっぱり、大帝王の星を持っているからなんですもの」
八百太郎は黙ってわらっている。
「ねえ、あいつは杉次郎にたのまれて、あんないやがらせばかりいうんでしょうか」
「いや、稲妻小僧だろう」
「どうして――」
「杉次郎は、お香うじに振られたことなど、人にはなるべくいいたくない男だ。負け惜しみがあるからね。稲妻小僧は、わしを辱めて、わしが怒ってお香うじのそばを離れるのを待っているんだな」
「いやっ、いやっ、あたしは死んだって放さない」
お香はあわてて八百太郎の手をつかんでしまった。

2

根来は、案の定、戸田の渡しにかかるころ、赤い顔をして追いついてきて、渡し舟の中であくどくからみ出した。
「どうだ、浅香うじ、この渡しをわたると、もう江戸は近い。そろそろ話をつけようじゃないか」
あいかわらずぴったりとくっついて舷(ふなべり)へ並んで腰掛けている八百太郎とお香は、お香が水ぎわだった年増(としま)だけに、それでなくてさえ乗り合いの目につくので、その前へぬっと立ちはだかって、まるでけんかでも吹っかけるように根来

がわめき出したのだから、みんなびっくりしてこっちを見ている。

そこがまた、悪たれ根来のつけ目でもあるのだろう。

「お香、なんでそうわしをにらむ。お前はそんな大きな面のできる女ではないぞ。だいいち、人前でそう間男のそばへくっついていてはみっともない。もう少し離れてはどうだ。そうれ、赤くなったろう」

「根来さん、あんまり変なことをいうと、あたし本当に承知しませんよ」

相手になるまいと思っても、お香はどうにも胸にすえかねてくるのである。

「承知しないと。こりゃおもしろい。なにを承知しないんだな。かぶり振り振り子ができたと論語にもあるたとえで、承知しない承知しないと口でいいながら、間男に口をなめさせたり、乳をいじらせたり、さようなふらちは世間さまのほうがよっぽど承知できぬぞ」

「まるでのぞいて見ていたようなことをいうな、根来うじ」

八百太郎は平気でわらっている。

「うむ、たしかにのぞいてみていた。貴公、おなじ浪人でも、まったく果報な男だ。泊まり泊まりの旅寝の宿で、つい手がさわり、足がさわり、こんなすばらしい後家どのの床の中へ、忍びこんだか引っぱりこまれたかは知らんが、朝になるとちゃんと一つ床の中にまくらを並べていたというわけだ。なあ、そうだろう、お香」

「お人柄にさわりますよ、根来さん」

八百太郎さえ怒らなければ、お香はいくらでも我慢できる。むしろ、そんな仲だということを人前でぶちまけられて平気でいてくれる八百太郎の心の底が、お香にはうれしい。いやだと思う女なら、怒り出すに違いないからだ。

「冗談いうな。わしはまだお人柄にさわるような間男などという罪なまねは、こう見えてもしたことはない」

「ほ、ほ、なさりたくても根来さんでは相手がねえ」
「なんだと――」
乗り合いの者がにやにやと笑い出す。
「まあいい、できてしまったことは、いまさらなんといってもしようがない。拙者もやぼなことはもういうまい。そこでな、浅香うじ、貴公はどうせ二本棒という幸せな棒を持っている男だから、このままずるずるべったりに後家の家へ入りこむ気なんだろう。結構な話だ。貴公はそれで結構だが、かわいそうなのはお香の前の亭主の杉次郎だ。どうだな、そのふところにあずかっているお香の百両、結構な身分の貴公から、きのどくな前の亭主の杉次郎に、手切れ金としてやってくれぬか。そのかわり、今後一切、杉次郎には亭主面をさせぬことにする。それならいいだろう」
「根来うじ、その杉次郎はどこで待っているんだね」
「それはいかん。それはいえぬ。それをいうと、貴公は杉次郎を切るかもしれんからな」
「いや、わしは人を切ることは好まぬ。たとえにいうなあ。なんとやら、金と力はなかりけりとな」
「ところが、貴公はおなじ色男でも、金と力を両方持ち合わせているんだからすごい」
「根来さん、帝王の星を持っている人と、持っていない人の違いが、これではっきりおわかりになったでしょう」
お香はちょいとうれしくなってくる。
「こらっ、あだし男を前において、そんなに目じりを下げるやつがあるか」
根来はお香をぐいとにらんでおいて、
「どうだ、浅香うじ、色男の返事を聞こうじゃないか。間男代金百両、出すのかね、出さないのかね」
と、八百太郎のほうへ手を出す。
「もう舟が着く。その返事は舟をおりてからに

しよう」

にっとわらってみせる八百太郎だ。

「なにっ、舟をおりてからだと――」

わめいたとたんに、舟がとんと岸の桟橋へ当たったので、根来は思わずよろよろとよろける。にらみのきかないことおびただしい。

「こらっ、船頭、舟を黙って着けるやつがあるか」

てれかくしに船頭をどなりつけている。

その間に、乗り合いの者はみんなぞろぞろと舟をおりていく。

戸田の渡しをわたると、そこから志村まで二十町ばかりの草っ原道がつづく。荒涼たる荒地で、志村へ入るまで人家は一軒もない。

時刻はすでに八ツ（二時）下がり、秋の日はまだ明るいが、草っ原を鳴らしてわたる風は冷えびえとして、からあんとした不気味さがある。

いっしょに渡しをわたった人たちは、どこへ散ったか、もう一人も姿は見えず、草っ原道へかかったのは、八百太郎とお香、その一足後を根来浪人、その後から芳五郎頭と清三の五人だけだった。

根来浪人はこんどは八百太郎と肩をならべようとはせず、六尺ほど離れて黙ってついてくる。

「ねえ、あいつ急におとなしくなっちまいましたねえ。うしろからふいに切りかかる気じゃないかしら」

お香がぴったりと肩を寄せてささやく。

「そうだなあ、仲間が出てくるとすれば、この辺だねえ」

「いやだ、おどかしちゃ。仲間って、稲妻小僧なんでしょう」

「そういうことになるな」

この辺に待ち伏せがありはしないかと、はじめから見当をつけている八百太郎だった。

「根来うじ、どうした、さっきの返事は聞かなくてもいいのかね」

八百太郎がひょいとうしろを振りむいて声を

かける。
根来はびくっとなりながら、思わず柄に手をかけて、
「なんだ、おどかしちゃいかん」
と、てれかくしに苦わらいをする。
どうやら、そのかっこうは、こっちの不意打ちを極度に警戒して恐れているというようにも見える。
——おかしいなあ、あの男には別に殺意もなさそうだが。
すると、ここへくるまでにお香と別々にしてやろうと、あんな毒舌をろうしたのか。とにかく、なにか目的がなくては、わざわざあんなに骨を折っていやがらせをいうわけはない。
「根来うじ——」
八百太郎はもう一度振りかえってみた。
「はあ」
びくっとして、また柄に手をかける。
「さっきの返事は、本当にもういいのかね」
「いや、いいことはない。しかし、決して無理というわけではないんだ」
「しかし、この辺で杉次郎が待っているんじゃないかね」
「いや、そんなわけじゃない。ただ、ちょいといってみただけの話だ。百両は悪くはないからなあ」
びくびくしながらも、なにか物ほしそうな顔色だ。
「もういいから、八百さん」
お香はぐいと八百太郎の手を引っぱって、自分の話し相手になってもらいたそうだ。
「貴公、浅香うじ——」
しばらく歩いてから根来が呼ぶ。
「なんだね」
「たった一言だけ忠告しておく。気を悪くしちゃ困るが、その後家どのの家へだけは入りこまんほうがいいぞ」
「なんですって、根来さん」

思わずかっとなってくるお香だ。
「まあいい、まあいい」
こんどは八百太郎がなだめるようにいってお香の腕を引っぱる。
「いやだ、あたし。承知できない」
「まあいい、そう気にするな。——はてな」
八百太郎はじっと向こうへ目をみはる。
はるか行く手の一本松のあたりに、どうやら侍らしい人影が四、五人かたまっているのが小さく目についたからだ。

江戸の頼光組

1

「根来うじ、あの連中は貴公の仲間かね」
この辺はちょうど草っ原道の中ほどで、どっちへ逃げても人家に遠いし、少しぐらい泣きわめいても人が駆けつける心配はまずない。その一本松のあたりに浪人者らしいやつが五人も立ち止まってこっちを見ているとすれば、いずれただごとではあるまいと思ったので、八百太郎は後ろからついてくる五郎左衛門を振りかえって聞いた。
「いや、違う。拙者にあんな仲間はない」
根来はまたしてもびくっとしたようにいそいで答える。渡し舟の中ではあんなにあくどく毒づいていたのに、この草っ原道へかかると、急に八百太郎を怖がるようにびくびくばかりしている根来だ。
「すると、ただの追いはぎかな」
八百太郎はのんびりとそんなことをつぶやく。
「おどかしちゃいやだっていうのに」
お香もなにか不気味なものを感じて、じっと八百太郎の手につかまっていた。
「おや、あれは本所割り下水の頼光組らしいわ」
と、思わず目をみはった。

「知っているのか、お香うじ」
「いいえ、知っているってほどじゃありませんけど、この夏あいつらに十両貸してやったことがあるんです」
「ふうむ」
「あの中に朱鞘をさしているやつがいるでしょう。あいつは赤倉主水といって、本所割り下水で三百石取りの旗本なんですが、どうやけになったものか、腕の立つのをいいことに、自分から家は弟にゆずって若隠居をしてしまい、押し借り、ゆすり、たかり、悪いことならなんでもやるという江戸中の悪玉になってしまったんです」
「よく公儀で黙っているなあ」
「そりゃいずれ目はつけられているんでしょうが、ひどく悪知恵の働くやつですから、なかなかこれというしっぽをつかませないんでしょう。まあ、ねらわれたほうでも、変に訴え出たりして仇をされるより、金ですむならそれですましておいたほうが、大難が小難ですみますからね」
「すると、お香うじもその小難のほうですましたというわけだな」
「そうなんです。いきなりあの五人づれで店先へ座りこんで、大将の赤倉が口をきくんじゃないんです、あの取り巻きの四天王ってやつが、かわるがわるねちねちと悪たれるんです。あたしはこんな跳ねっかえりな性分ですから、大番頭がおよしなさいと止めるのを、かまわず出ていって、どんな御用なんですって聞いてやりました。坂田の金平というやつが、本所割り下水の殿さまだ、存じているだろうなっていうから、いいえ存じませんというと、変な顔をして、それから長々と赤倉主水のちょうちんを並べはじめるんです。あらあら、もう来ちまった。後でゆっくり話してあげる」
一本松はもうそこで、なるほど、水色羽二重の紋服をぞろりと着流している苦み走った三十がらみの男が赤倉主水というやつだろう、朱鞘

の大小を帯して真ん中に立ち、左右に二人ずつそれぞれにすごみのきく面構えの浪人者が家来といったかっこうでついて、じっとこっちの近づくのを待ちかまえている。
「知らん顔をして通りすぎてみましょうよ」
「うむ」
お香はわざと八百太郎の手をたもとでかくすようにしてつかんで、そっちは見ないように一本松の前を通りすぎようとする。
「おい、おい、堀留のおかみさん」
つかつかと往来へ出てきてその前へ立ちふさがったのは、色は浅黒いが、顔も体も丸っこい出来のよくない金時といったかっこうの浪人者だ。
「おや、どなたさまでござんしたろう」
お香は白々しくそらっとぼけながら聞く。
「なんだ、まだそんなにもうろくする年でもあるめえに、おれたちを忘れたのか、お香」
「ごめんなさい。どこかで一度お目にかかったような気はするんですけれど」
「この夏、お前の店へ十両借りに行った本所割り下水の殿さまじゃねえか。おれはその時の坂田の金平、おれはまあいいが、殿さまにあいさつをしねえで通るなあ失礼だ。ちょいとこっちへ来て、おじぎをしていくがいいや」
金平は赤倉主水のほうをあごでしゃくってみせる。
「あ、思い出しました。あの時の坂田さんでしたね、失礼いたしました。今日は少し先をいそぎますので、あなたから殿さまによろしく申し上げてくださいまし」
お香はにっこりと笑顔を作って、そのまま八百太郎の手をひき、さっさと歩き出そうとする。
「待て、お香。お前、まさかおれたち頼光組をばかにする気じゃねえだろうな」
「あら、どうしてです」
「殿さまは、今日あたりお前が高崎から江戸へ着くころだとお聞きになって、わざわざここま

で出迎えにきていなさるんだ。それを一言のあいさつもなく、先をいそぎますからなんていいぐさがあるか」
「おや、わざわざあたしを出迎えにきてくだすったんですか、こんな寂しい草っ原道まで」
「そうよ。その親切なんてものは、あだやおろそかなもんじゃねえ」
「それで、なにかあたしに御用なんですか」
「なんだと――」
「わざわざだなんて、なんだかあたし少し気味が悪い」
お世辞にもありがたいなんとは思えない連中なのだから、お香ははっきりとまゆをひそめてみせる。
その様子がおかしかったので、八百太郎は思わずにこりと人のいい微笑をうかべた。
「おい、なにがおかしい」
金平がたちまちかみついてきた。
「これは失礼――」
「その手を放さないか。人前で女の手を握っているやつがあるか」
「いや、ごらんのとおり、わしの手をつかんで放さないのは、このおかみさんのほうでしてな」
「そんなことをうれしがっているやつがあるか、ばか。一体、貴様は何者なんだ」
「浅香八百太郎、浪人者です」
「名前なんか聞いているんじゃない。貴様はこの女のなんにあたるんだと聞いているんだ。だれに断ってお香の手をひいているんだ」
「すると、だれかにことわらないと、このおかみさんの手をひいてはいけないということになりそうですな」
「あたりまえだ。このお香には、本所割り下水の赤倉主水さまの息がかかっているんだぞ」
「まあ、汚らしい。坂田さん、あたしは赤倉さんなんかに息をかけられたおぼえはありませんよ。いいかげんなことはいわないでください。迷惑ですから」

お香がそばからびしゃりと一本きめつける。
「お香、お前には後でゆっくりわけを話して聞かせる。まずこの田舎浪人から片付けるから、しばらく待っていろ」
金平はそんな横柄な口をきく。
「そうですか。そんなら待ちもいたしますが、この人はあたしの御亭主ときまった人なんですから、そのおつもりで片付けてくださいまし」
お香はこれ見よがしに、八百太郎の手を胸へ持っていって両手で抱きしめてみせる。
「なんだと――」
金平は目を丸くして、
「この田舎者がお前の亭主だと――。そりゃいかん。けしからん話だ。絶対にいかん」
と、力みかえってわめき出す。

2

「おや、絶対にいかんだなんて、なにがいけないんです」
お香は聞きとがめてやりかえした。
「いかん、いかん。殿さまがわざわざ今日ここまでお前を迎えにきたのは、ぜひお前を御愛妾にして角屋の後見をしてやろうというありがたい親切からなんだ。今をときめく江戸一番の伊達男、泣く子も黙る赤倉主水さまに御寵愛をうけるのは女の果報、だいいち角屋の身代がたちまち十倍に太る。お前の後家運が向いてきたんだ。こんないい話をよそに、なにも好きこのんでそんな田舎浪人をあわてて亭主に持つことはあるまい。よく考えてみろ、お香、ここが分別のしどころだぞ」
「ほ、ほ、考えるまでもございません。せっかくですが、おことわり申し上げます、汚らしい」
「なに、汚らしい」
「お気にさわったらごめんなさい。あたしは虫のせいで、男はみんな汚らしく見えてしようがないんです。ちっとも汚らしくないのはこの人だけ。悪く思わないでくださいまし」

「正気か、お香」
「ええ、正気です。あたしこの人が好きで好きで、できれば食べちまいたいくらい」
「おい、割り下水の殿さまに変な眉をつくとんだことになるぞ。わかっているだろうな」
ぎろりと目をむいてみせる金平だ。
「こんどは脅しですか、金平さん。それではちょっとお約束が違うようですね」
「なにっ」
「この前十両お貸しした時、どんな約束でしたっけね。なにか抵当がなければ、いくら割り下水の赤倉さまでもお金は貸せませんと申し上げたら、よし、一度だけお前の難儀をきっと助けてやろう、それを抵当にするから十両貸せとおっしゃる。そのお言葉がおもしろいと思ったから、それを抵当に、あのとき十両お貸ししました。まさかお忘れじゃないでしょうねえ」
「いいや、忘れちゃいねえ。だからこそ、こうしてわざわざ迎えにきているんだ」
「なんですって――」
「殿さまがおっしゃるには、たった一度だけ難儀を助けたってなんにもならない。あの女はなかなか色っぽい年増だから、いっそめかけにして一生面倒を見てやることにしようとおっしゃってな」
金平はぬけぬけといってのける。ここで腹を立ててしまってはこっちの負けになるので、
「ほ、ほ、まあそんなところでしょうね、昔は悪党にも悪党の意地があって男を立てたと聞いていますが、当節は悪党まで下落して、女郎の腐ったのみたいにいいかげんなことばかりいって歩く。まるで魂ってものがないんだから、鼻持ちがなりません。おお汚らしい」
と、そでで鼻をおおってみせる。
「いったな、お香」
「いいましたとも。頼光組が聞いてあきれる。今日からかったい組とでも名前を変えるんですね」

「うぬっ」
さすがに金平が顔色を変えた時、
「坂田、ちょいとどけ。おれがかわる」
と、骨組たくましい六尺豊かなやつがのっしのっしと前へ出てきた。
「やあ、卜部か。しっかりやれ」
腕力はこのほうが上とみえて、金平は一足後へさがる。
——さあ、大丈夫かしら。
売り言葉に買い言葉でついぽんぽんやりかえしてしまったようなものの、考えてみると相手は五人、こっちのたよりは八百太郎一人なのだから、お香はひやりとせずにはいられない。
「おい、その田舎浪人——」
「わしかな」
「お前だ。拙者は頼光組四天王の一人、卜部の季蔵という者だ。見知りおけ」
「強そうですな」
「強い。力は人の五人力ある」
そんな自慢をするようでは、頭はあまりよくはなさそうだ。
「わしになにか用ですか、豪傑」
「うむ、用だ。貴様はその女の亭主だそうだが、今日かぎり離縁する」
「命令ですな」
「命令だ。さっさとどこへでも行ってしまえ」
「わし一人でですか。お香をつれていってはいかんのですか」
「ばか、たったいま離縁したといったばかりじゃないか」
「なるほど——わしが一人でどこかへ行ってしまうと、後はどうなるんです」
「余計なことは聞かなくてもいい」
「しかし、心配になりますからな。お香は帝王の星を持っている女です。なかなかあなたがたのいうなりにはなりませんぞ」
「いうことをきかなければ、この原っぱの奥へかつぎこんでいって料理してしまうまでだ」

「どう料理するんですな」
「まず主水さまのいうことをきかせる」
「それから――」
「ばか、むだ口をたたくな」
「承知しました」
「さっさと消えてなくなれ」
「お香うじ、どうする」
八百太郎はわらいながらお香に聞く。
「あたしもいっしょに行きます」
「そうか。――ト部うじ」
「なんだ」
「おかみさんもわしといっしょに行きたいと申しているが」
「ならん、貴様はいま離縁されたばかりじゃないか」
「いや、まだ離縁されるような深い仲にはなっておらんのです」
「だから、どうだと申すのだ」
「だから、いっしょに歩いてもかまわんでしょう」
「こやつ、わしを嘲弄する気だな」
「あなたがたは江戸の頼光組だといいましたな」
「そうだ」
「源頼光は女をさらいません。夜な夜な都に出て、美しい姫をさらっていったのは大江山の鬼です。頼光組が鬼のまねをしてはいけません。みっともないですからな」
「うぬっ、ぬかしたな」
「ぬかしました」
「前へ出ろ。もう承知できん」
「五人力あるそうですな」
「なにっ」
「わしはこう見えても、十人力ぐらいありますかな」
「この野郎っ」
ト部の季蔵は左手でむずと八百太郎の胸倉を引っつかみ、ぐいと引きつけて右のこぶしを握

りあげた。
とたんに、八百太郎の右手が、胸倉にかかった卜部の太い腕をきゅっと引っつかむ。
「ううっ」
ただ引っつかんだのではない、急所を心得ていて、腕の筋肉を逆にしごくように絞めつけたのだ。
激痛がじいんと全身に走って、びりびりと脳天へ突きあげてくるから、卜部の五人力はたちまちなえしぼみ、苦痛に顔をゆがめながら、思わず上半身をのけぞらせてうめく。
「卜部さん、これで五人力ありますかな。わしにはそう思えないがなあ」
八百太郎はにやにやわらっている。
「くそっ、許さん」
「それ、もう一息、——がんばって」
「ううっ、痛い」
八百太郎も身の丈五尺七、八寸はある。大の男が往来の真ん中で渾身の力を振りしぼっての力くらべは、たしかに壮観だった。いや、六尺豊かな卜部のほうが、身をもがきながら苦痛のうめき声をあげはじめたのだから、顔色を失ったのは頼光組である。
いずれも刀の柄に手をかけたが、とっさにはどうしようもない。
「まいった。痛い。降参した」
卜部がついに悲鳴をあげはじめる。
「降参ですかな」
「うむ、放してくれ。痛い。——たのむ」
「よろしい。——そら」
八百太郎が手を放すと、卜部はたわいもなくそこへへたへたと両ひざをついてしまった。真っ青な顔だ。

堀留の家

1

「卜部、さがっておれ。だらしのないやつだ」

憤然としたように出てきて季蔵をしかりつけたのは、四天王のうちでもいちばん兄貴株らしい、体つきのがっしりとした、いかにも剣客くずれといったかっこうの男である。

「おい、おれは頼光組の渡辺の綱吉だ。貴様、田舎っぺにしては、ちょいと味をやるな」

「いや、おほめにあずかるほどでもありません」

けろりとしてわらっている八百太郎だ。

「よし、貴様のそのくそ力が勝つか、おれの一刀流が勝つか、草っ原へ行って一騎討ちの勝負をしてやる。来い」

渡辺は目を怒らせながら八百太郎を原の中へ誘いこもうとする。

「それには及ばんです。貴公は相当頭がいいようですな」

「なにっ」

「わしたちを原っぱへ誘いこんでおいて、頼光組が一度に大江山の鬼に早変わりをする。計略としてはなかなかうまい」

「黙れっ、原っぱがいやならここでやる。抜け」

「よしましょう。けがをするといけない」

「心配するな。けがをしないようにたたっ切ってやる」

「そう人を脅迫してはいけません。こんな寂しいところで刀など抜くと、あなたがたは追いはぎと間違えられる。立派な悪党というものは、食い詰め浪人のようなけちなまねをやるもんじゃない。お歴々が五人もそろっているんだ、江戸の真ん中で堂々とみえを切ったほうが、おなじ悪党にしても後世名が残る。なにもこんな片田舎でこそこそと死んでからすの餌になることはないでしょう。どうですな」

ゆうゆうと落ち着き払って言ってのけるのだ。その頭から敵をのんでいる不敵な面魂に、なにか底知れぬものがある。

——立派だなあ、この人。

お香は敵の前も忘れて、ほれぼれと八百太郎の顔をながめてしまった。

渡辺の綱吉も、現に卜部が目の前で子供あつかいにされているのを見ているから、口では強そうなことをいっても、うっかり一人では刀が抜ききれない。

「殿さま、どうしますかなあ、この田舎っぺは、どうせ切られるなら、後世名が残るように、江戸のひのき舞台で切られたいという。ちょいとおもしろいことをいうやつだ。今日のところは見のがして、望みどおりにしてやりますかなあ」

渡辺は主水のほうへ相談をかける。

主水もここで無理をして味方からけが人を出してもつまらないと見たのだろう、黙って鷹揚にうなずいてみせた。

「おい、田吾作、殿さまのお許しが出た。望みどおり、後世名が残るように、江戸で切ってやる。今日は通れ」

「ありがたいですな。さすがに話のわかるお歴歴だ」

「お香、二、三日うちに殿さまがさっきの返事を聞きにお前の店へ行く。ちゃんと座敷を掃除して、いつでも御意にしたがえるように体を清めておくがいい」

「ほ、ほ、やり手ばばあまでおつとめなさる。器用な大部屋さんだこと」

お香はもうまじめには相手にならず、

「八百さん、出かけましょう。この花道まだ長いんだから」

と、八百太郎の手を取ってさっさと歩き出す。

「浅香うじ——浅香うじ」

しばらく歩いてから、根来五郎左衛門がうしろから呼んだ。

「なんだ、根来うじ」

「貴公はまったく驚いた男だ。大したもんだなあ」
「ひやかしてはいかん」
「いや、ひやかすんではない。貴公はたしかに大帝王の星を持っているんだな。どうだ、今日からわしを家来にしてくれぬか。根来五郎左衛門、必ず犬馬の労をつくしますぞ」
まんざらうそでもなさそうな声音である。
「間違えてはいかんぞ、根来うじ。わしのこのふところにある百両は、このおかみさんからあずかっている金なんだ。わしはあいにく家来が養えるほど裕福ではないんでなあ」
「金などはいらん。また、祿をくれともいわん。わしは貴公の男にほれたんじゃ。ぜひ、家来にしてくれ。約束いたしたぞ」
「根来さん、根来さん――」
お香がおさえつけるように呼ぶ。
「なんだな、お香うじ」
「あなたそんなうまいことをいって、この人の寝首をかく気なんでしょ」
「違う、違う。こんどはわしも本気だ」
「だっておかしいわ。さっき渡し舟の中までは、あんなにこの人に悪態をついていたくせに」
「それをいわれると面目ないが、あれはやっぱり稼業のうちでな、少し人からたのまれたことがあった。しかし、そっちはもう断ることにする。わしは浅香うじの家来になって、今日から愉快な人生を送ることにする。そのほうがたのしい」
「一人できめたって、そうはいきません」
「どうしてかな」
「この人にはあたしという女房がちゃんとあるんです。あたしが承知しない以上、家来にはしません」
お香がぴしゃりと一本きめつける。
「そういうお香うじも、まだ独りぎめじゃないのか」
根来が痛い揚げ足を取ってくる。

「違いますったら。あたしはもうちゃんとこの人の女房なんです。ゆうべだって、あたしはこの人の手を――、ねえ、八百さん、なんとか言ってやってくださいよ。あたしがばかにされるじゃありませんか。あたしがきらいじゃないって、八百さんたしかに言いましたね。きらいなものなら手なんか貸しはしないって」

「これこれ、往来中でそう夢中にならなくてもよろしい」

「いいえ、あたしはもう夢中なんです。――根来さん」

「なんですな」

「おわかりになったでしょう。わかったとおっしゃい」

「わかったとおっしゃると、どうなるんですな」

「望みどおり、今日からこの人の家来にしてあげます」

「ありがたき幸せ」

「そのかわり、今日からあたしのことを御新造さまとお呼びなさい」

「承知しました。まあそう呼ぶことにしましょう」

「あたしにも犬馬の労をつくしますね」

「わしは御主人次第です」

根来はにやにやわらっている。

「なにがおかしいの、根来さん」

「いや、わしでさえ浅香うじにはほれこむんだから、御新造が夢中になりたくなるのも無理はないと思ってな」

「ほ、ほ、押しかけ女房に押しかけ家来、どっちが先にこの人を射落とすかしら」

お香もわらい出しながら、あたしは負けるもんかと、胸が熱くなってくる。

2

その日、一行が堀留の角屋へ無事に帰りついたのは、もう灯ともしごろだった。

角屋は堀を裏に控えて、店の横に広い材木置

き場を持った大きな材木問屋で、番頭が五人、小僧、中僧を七人使って、先代からの大番頭の喜兵衛老人が店のたばねをあずかって切りまわしている老舗である。

浅香八百太郎は、無論お香を門口まで送っておいて別れるつもりだったが、家へあがってくれなくてはあずかった百両をうけとらないとお香はだだをこねるし、お香に素早く耳うちをされた喜兵衛老人も、ぜひ今夜はお泊まりを願いますと、たって引きとめる。

芳五郎頭は芳五郎頭で、

「浅香さん、たとえ脅しにもせよ、頼光組はあんなことをいってるんでさ。それに、稲妻小僧の一件もありますしね、江戸へ帰ったからもういいだろうでは、あんまり情がこわすぎやす」

と、うまい口ぞえをする。

「根来うじ、どうするな」

「手前は御主人次第、どこで犬馬の労をつくすのもおなじだが、あなたは旅籠屋泊まりかな、それとも江戸にたずねる知り合いでもおありか」

「いや、当分は旅籠屋泊まりのつもりだった」

「しからば、ここを旅籠屋だと思ってわらじをぬぎましょう。なあに、あつかいが悪くなったら、これは迷惑なんだと察して、そのとき宿をかえればよろしい。この身代では、十日や二十日食いつぶしても、米櫃にひびく心配はありますまい」

根来もそんな人を食ったことを言ってすすめるので、

「では、ともかくも一晩やっかいになることにいたそう」

と、やっと承知してわらじをぬぐことになった。

ともかくも、この三晩四日の道中は、なかなか多難の旅であった。こうして一同が顔をそろえて無事に帰れたのが不思議なくらいのものである。だから、その夜の祝宴は、あの話この話

に花が咲いて、いつ果てるともなく、聞き役の大番頭をはじめ、中番頭、女中たちはことごとに目をみはるばかりだった。

「あっしは何度でもいうねえ、ああ、大きな声で威張っていいやすとも。だれがなんたって、この浅香のだんなは命の恩人です。そういうあっしだって、清三さんだって、浅香のだんながいてくれなかったら、こんどばかりは生きて江戸へ帰ってこられなかった。ねえ、清三さん」

芳五郎頭はまたしてもそれをくりかえす。今夜は酔いつぶれてもかまわない酒なんだから、いい気持ちに酔ってきたのだ。

「その命の恩人をさ、ここのおかみさんときた日にゃ、やれお馬になってくれなけりゃもう歩かないの、手を貸してくれなけりゃ眠れないのと、小突いたりつねったり、あのたぬき易者じゃないが、たしかにおかみさんは帝王の星ってのを持って生まれてきたに違いねえ」

「あら、頭、あたしがこの人に手を借りて寝たのまで頭は見ていたの。恥ずかしいな。それだけは内緒にしておこうと思ったのに」

そういうお香は、ちゃんとはじめから八百太郎の隣へ座って、少し酔ってくると目も体もとろんとうれゆるんだようにいよいよなまめかしくなりながら、そのなまめかしさを人前もなく八百太郎にばかり投げかけて、恥ずかしいどころか、さっきからともすれば八百太郎を小突いたりつねったり、杯を口まで持っていって無理にのませてみたり、だれが見てもただの仲とは思えない大胆さなのである。

八百太郎は例によって行儀よく座り、なにをされてもただにこにこしているばかりだから、こんなお人よしな男のどこにそんな強さと度胸がひそんでいるのかと、知らない者はどうにも本当にできないといった顔つきだった。

「しかし、頭、あの杉次郎さんがそんなすごいようなやくざになっているとは、思いもかけないなあ」

喜兵衛老人があらためてまゆをひそめる。
「あっしもまったくおどろ木桃の木さんしょの木でしてね、大番頭さんの前だが、鴻ノ巣の旅籠であいにく浅香のだんなはいないし、おい、お前たち廊下へ出ていろ、おれはお香と差しで話があるんだ、いやだというんならおれにも考えがあるぞ、とやられた時には、すごいというより、なんていやらしい男になりさがったんだろう、こいつは差しでおくとおかみさんの体があぶねえと思いやしてね」
「いまだに未練があるんだな」
「ありやすとも。だから、上尾ノ原じゃこの根来だんなまで金で雇って――」
「頭、その話はもう勘弁しろ。今となってはいささか恥ずかしい」
さすがに五郎左衛門が頭をかく。
「いいやね、根来さん、いわば善人になったざんげ話だ、話しちまったほうがかえってさっぱりする。一体、根来さんはあの杉次郎に、なんといってあの役をたのまれなすったんだね」
「さよう、杉次郎とは二、三度賭場で顔見知りでな、先生、ちょうどいいところで会った、いまおれの女房を横取りした田舎侍が、往来中もかまわずふざけ散らしてここへ来る、一両奮発するから、その侍にけんかを吹っかけて、切るにも及ばねえ、追っ払ってもらやいいんだから、とたのまれてな」
「なるほど。つまり、姦夫姦婦っていう触れこみだったんだね」
「うむ。しかし、拙者もおどろいたなあ。あの時、御新造どのは、たしかに浅香うじの手をつかんで、乳をいじらせながら歩いていた」
「根来さん、なんです。家来のくせに御新造さまに恥をかかせる人がありますか。あれはお乳をいじらせていたのではありません。こんなに胸の動悸がすると、ここへ手を持っていったんじゃありませんか」
お香は八百太郎の手をつかんで、臆面もなく

その時のかっこうをしてみせる。
「おかみさん、大宮の泊まりの時も、浅香のだんなの手はそこでござんしたか」
芳五郎頭がわらいながら聞く。
「頭、お出入りをとめますよ」
「ようござんすとも。あっしはおかみさんのために危うく上尾ノ原じゃ清三さんといっしょに殴り殺されるところだった。鴻ノ巣で浅香のだんなを迎えに突っ走ったのもこの芳五郎でさ。こんなに命がけで働いて、それでお出入りをとめられるんなら、そんな薄情なおかみさんなら、あっしにも考えが――」
「もうたくさん。もうようござんす。本当はねえ、頭、あたしがこの人にどんなまねをしても、見ないふりをしていてくれた、なんというさばけた頭なんだろうと、とても感心しているんです。出入りなんかとめるもんですか」
「うまいなあ、おかみさんは。やっぱり、帝王の星を持って生まれた人は違いやすねえ」
いってみれば、みんなそれぞれに命がけの苦労をしてきた仲だから、その夜の祝宴は始終実になごやかだった。
宴果てて、すっかり酔っぱらった芳五郎頭が番頭に送られて家へ帰ったのは、もう四ツ（十時）すぎだった。
客の八百太郎と根来は、いつもはお香が使っている離れの座敷のほうへ寝かせ、お香は今夜は茶の間の次の座敷へ寝床を取らせた。
まくらもとをびょうぶでかこって、久しぶりで寝るわが家だったが、
――つまらないなあ。
と、お香はなにか肌寂しい。
ゆうべはちゃんとすぐ隣に八百太郎がまくらを並べていて、黙ってそのたくましい手をこっちへ持ってきて胸へ抱いて寝たのだ。
今夜はその八百太郎を根来に取りあげられてしまったのである。
――そんな話ってないわ。ここは自分の家で、

あたしの八百さんだのに。

黙って離れへ押しかけていってやろうかしら。根来さえいなければそれができるのだ。あの人はきっと怒りゃしない。根来を別の座敷へ寝かせればよかった。

いつまでもそんなことを考えながら、疲れているのになかなか寝つかれない。酒気にゆるみとけた体中が甘ったるく、ため息をついては寝がえりをうち、わが乳房をおさえては八百太郎の手を思いうかべ、

——でも、あの人はのんきなんだから、こっちの気持ちも知らないで、もう高いびきをかいているに違いない。

と、お香は一人でしみじみと世の中が味気なくさえなってくる。

そのうちに、いつかぐっすりと眠ってしまったらしい。

座敷のすみの有り明け行燈がほのかにあかりをただよわせて、大丸髷ゆたかに熟睡したお香の寝顔は、赤いくちびるを少しあけて、やすらかなうちにもまゆのあたり淡いなやましさがただよう。

何刻ごろか、しいんと寝しずまった廊下の障子が音もなく二寸ばかりするりとあいた。お香は身うごきひとつしない。

朝の目ざめ

1

あっとお香が目をさました時はもうおそかった。ぬすっとかむりの男が布団の上からのしかかるようにして、七首の切っ先をぴたりとのどもとへ突きつけている。

——稲妻小僧。

お香は頭から水をあびせられたような気持ちで、ぞっとしながら身動きひとつできない。

「おい、声を立てると命がねえぞ」

濁った目をぎらぎらと血走らせながら、低い声で脅しつける。

「あたしを、どうしようっていうんです」

考えてみると、そこの廊下をかぎ形に曲がった離れ座敷に、八百太郎というたのもしい男が寝ていてくれるのだ。けがをするのはいやだけれど、すきを見て声さえ立てればいつでも助けにきてくれるのだと気がつくと、お香はいくらか落ち着いてきた。

「お香、お前はおれのものだ」

「だれがそんなことをきめたんです」

「稲妻小僧をみそこなっちゃいけねえ。おれのいうことをよく聞いておけ。第一に、明日になったらあの離れの二人を家から追い出す。第二に、明日の晩、四ツ（十時）を合図に裏の材木置き場へ出てくるんだ。一人で怖かったら清三をつれてこい。そこでちゃんと話をつけてやる」

「どう話をつけようっていうんです」

「その時になりゃわかる。お香、おれの目はいつもお前のそばに光っているんだ。変な小細工をすると、けが人が出るばかりだぞ。わかったな」

お香は答えない。黙って稲妻小僧の目を見あげている。

「わかったといわねえか」

稲妻小僧はぐいと匕首の切っ先をのどへ近づけてくる。身動きひとつしても、その切っ先はひやりとのどへふれてきそうだ。

「わかったから、もう早く帰っておくれ」

「きっと約束したぞ」

「しようがないわ」

悔しいが、今はどうすることもできないのである。

「よし、今夜はこのまま帰ってやる。声を立てるなよ。むだだからな」

そう念を押しておいて、稲妻小僧はすっとのしかかっていた身をひいた。そして、片ひざ立ちのまま、まだ用心深く匕首でじっとのどをね

らっていたが、長い間の必死のにらみ合いにお香の気分がやや疲れてきたのを見てとると、ひょいと立って廊下へ出ていったようだ。

それっきり、こととも物音を立てない。

お香はほっとしたとたん、急にがっくりとなって、全身に冷や汗を感じ、しばらくはなにをする力もなかった。家の中はしいんと寝しずまったままだ。

なんだかまだ障子の外に稲妻小僧が立っているような気さえする。

突然、わんわんわんと、材木置き場のほうで犬がけたたましくほえだした。

——あいつが出ていったんだ。

やっと安心すると、お香はふらふらっと立ち上がり、夢中で障子をあけて、離れの廊下へ泳いでいった。

「助けて、八百さん」

ひざががくがくして思うようにならず、座敷の障子をあけるなり、そこへころげこんでいく。

「どうした、お香うじ」

八百太郎は例によって目ざとく、もうむくりと起きあがってきて、助け起こしてくれる。

「いま、いま、稲妻小僧が、あたしの寝ているところへ——」

「なにっ」

「怖いっ」

お香は八百太郎のひざへしがみついていきながら胴ぶるいがやまない。

「よし、拙者が行ってみる」

八百太郎とまくらを並べていた五郎左衛門が、刀を取るなり出ていった。

「稲妻小僧はまだいるのかね」

「いいえ、声を立てるなといって、出ていくには出ていったんです」

「ふうむ」

「あたし、もう一人じゃ怖い。もう少しで、あたし、あたし、殺されたかもしれない」

「まあ落ち着こう。夢じゃないだろうね」

「なんですって――」
ひとがこんなに怖い思いをしているのにと、お香がかっとなって顔をあげた時、
「浅香うじ、どろぼうは茶の間の廊下から逃げたらしいな。そこの雨戸が一寸ばかりあいているんだ」
と、根来がもどってきて告げた。
「そうか。――たしかに稲妻小僧だったのかね、お香うじ」
「そうなんです。いきなりまた匕首をあたしののどへつきつけて、あたしが目をさますと、声を立てると殺すぞというんです」
「うむ、それで――」
「ここに今夜あなたたちが泊まっているのをちゃんと知っていて、だから今夜は変なまねができなかったらしく、明日になったらきっと二人に出ていってもらえ、それから晩の四ツにそっと材木置き場まで出てこい。一人で怖ければ清三をつれてきてもいい。そこでちゃんと話をつけようっていうんです」
「話をつける――？」
「どんな話をつけるんですって聞いてやると、それはその時でいい、おれの目はいつもお前のそばに光っているから、変な小細工をすると、けが人が出るばかりだぞと、あたしに約束をさせて出ていったんです」
「なるほど――」
八百太郎の深いまなざしが、じっとこっちの目を見すえている。
「疑っちゃいやだ、あたし」
「いや、なにも疑ってはいないよ」
「いや、いやっ、あたしの顔ばかり見て」
お香は根来の前もかまわず、身もだえしながら男の胸へすがりついていく。
「浅香うじ、店の者を起こさなくていいかな」
根来がそれどころじゃあるまいと言いたげな顔をして聞く。
「まあ待て。――一通り奥の戸じまりを調べて

みよう。お香うじ、手燭を貸してくれ」

八百太郎はお香を胸から放して立ち上がった。

八畳と六畳の離れ二間は、南から東へ回り縁になっているが、ここの雨戸はべつに変わりはない。

東の廊下を茶の間のほうへ曲がらずにまっすぐ行くと、右手がお香の寝ていた座敷で左手に内蔵があり、廊下を突き当たったところに明かり取りの三尺窓があるが、ここは外に鉄格子が入れてあるし、戸じまりもちゃんとしている。

そこからお香の寝ていた八畳の座敷へ入り、賊が出ていったという障子をあけて廊下へ出てみた。この廊下は南に面して、次の間の茶の間の前までつづき、そこの戸袋際の雨戸が一寸ほどあいていたのだという。

廊下はその戸袋の前から左へ折れて中廊下になり、まっすぐ行けば内玄関へ突き当たるし、この中廊下をへだてて茶の間と広い台所が向かいあい、そこに女中たちの寝ている部屋がある。

内玄関も台所も、出入り口は北向きで、台所の東へ並んで店があり、番頭も小僧もみんな店の二階に寝ているという。

つまり、中廊下からこっちの、離れ二間と、茶の間と、次の八畳の座敷の四間が、角屋では奥と呼ばれているところだ。

八百太郎は根来といっしょに、お香に案内されて、台所まで戸じまりを調べてまわったが、どこにも別条はなく、賊は足跡一つ残していないのである。

「すると、茶の間の廊下の戸袋口の雨戸をあけて入り、そこから出ていったと見るほかはないな」

八百太郎は元の離れの座敷へ帰ってきてから二人にいった。

「しかし、あの戸じまりが少しも音をさせないで外からあけられるかな」

根来が小首をかしげる。

「そこが、稲妻小僧の怖いところじゃないのかしら。それに、あたし、今夜は疲れてぐっすり眠っていたし」

あの男なら、どんなに戸じまりがしてあったって、煙のように入ってきて、煙のように出ていくだろう。だから怖いと、お香はいまさらのように青くならずにはいられなかった。

「あの戸袋口から出ると、たしか木戸があって、その外がずっと材木置き場になっているんだろう」

「ええ」

材木置き場にはぐるりと柵がめぐらせてあるが、別に番人はいないのだから、乗り越えようと思えばわけなく忍びこめるのだ。

「とにかく、稲妻小僧がここまで押しかけてきて、そんな大胆なまねをしたとなると、考えものだなあ」

珍しく八百太郎が真剣な顔をしている。

「だから、あたし、あなたに泊まってください って、あんなにたのんだんです。あたしもう怖くて、とても一人では寝られやしない」

お香はまたしても怖そうに八百太郎のほうへいざりよっていく。

「しかし、明日は我々二人を追い出せと、お香うじはそやつに言いつけられているんじゃないかね」

ちょっとからかい顔の根来だ。

「根来さん、稲妻小僧が怖かったら、どうぞ御遠慮なく。この人はもううちの人なんですもの、どこへもやりません」

それをいいことに、お香はとうとう八百太郎の肩へぴったり肩を寄せてしまう。

「お香うじ、稲妻小僧の目はいつもどこかから貴公に光っているんだぞ。そんなところを見せつけると、こんどこそ命がないかもしれないな」

「いいんです。この人となら、死なばもろともなんですから」

こうして八百太郎のそばにくっついていさえ

すれば、なんにも怖くなくなってくるのだから、お香は我ながら不思議な気がしてくるのだった。

2

その晩、お香はいい口実ができたので、とうとう寝床を八百太郎の隣へ運んできてしまった。これで根来さえ自分の寝ていた座敷へ行ってくれればもっとうれしいんだけれどと思ったが、まさかそこまでは口にしかねる。

「なあ、浅香うじ、稲妻小僧というやつは、本当に明日の晩材木置き場へ出てくる気かな」

三人まくらをならべて床についてから、あっち側の根来がそんなことを言い出す。

「わからんなあ。来るような気もするし、来ないような気もする」

八百太郎の返事ははなはだこころもとない。

その八百太郎の手を、お香はもうそっとさぐりに行って、ちゃんと自分のものにしているのだ。

「わしはなあ、浅香うじ、今だから白状するが、今朝大宮の宿外れで出会ったやつが、どうもその稲妻小僧という男じゃないかという気がしてきたんだ」

あっとお香は聞き耳を立てながら、思わず借りている八百太郎の手を乳の上で抱きしめる。

「その男は、町家のだんなといった身なりじゃなかったかね」

「うむ、そんな身なりだったが、笠をかぶっていて、少しも顔は見せようとしない。すっとうしろから肩を並べてきて、だんな、あっしは杉次郎の友達だが、たのみがあるというんだ」

「なるほど」

「杉次郎ならわしも知っている、どんなたのみだと聞くと、杉次郎がかわいそうだから、つまり浅香うじをお香うじから引き離してくれ、失礼だがお前さんにゃ腕ずくでとたのんでも無理のようだから、そんな無理はしてもらわなくて

もいいんだ。ただ、あくどくいやがらせをやってもらえば、あの男は正直そうだから、怒ってお香から離れるかもしれないと、なんでも承知しているようだ」

「いくらで引きうけたんだね」

八百太郎の声はわらっている。

「それがな、先方もなかなか勘定高い。お前さんは杉次郎からいくらかもらっているんだろうから、手つけはいらないだろう。この仕事がうまくいったら、必ずおれのほうから金五両、お前さんにとどけるというんでな」

「気の毒だったなあ、当てが外れて」

「まさか、浅香うじが帝王の星というのを持っていて、決して怒らない男だとは気がつかなかったもんでなあ」

「いや、帝王の星を持っているのは、ここのおかみさんのほうでな」

あんなことを——。せっかく人が帝王の星はやったつもりでいるのに、とお香は思ったが、今はそれを口に出したくないので、黙って借りている腕をかるくつねってやる。

「いたずらをしてはいかん」

八百太郎はいそいで腕を引っこめようとする。そうはさせないお香だ。

「いや、いたずらではない。あの時は本気で毒づいていたんだ」

根来がかわって、のんびりと答えながら、

「しかし、その男が稲妻小僧だとすると、浅香うじも拙者もただではすまんことになるな」

と、考えこんでいるようである。

「あれはなかなか執念深そうだからな」

「だから、わしはことによると明日の晩本当にやってくるんじゃないかと思う」

「そうかなあ」

「敵は清三をつれてきてもいいといっている。それが我々の耳へ入れば、必ず我々が材木置き場へ待ち伏せをかけると、ちゃんと計算に入れているんだ」

「つまり、我々をおびき出して、なにか手を打つと見るのかね」
「そのくらいのことはやりかねないやつだ」
「さあ、あの男にそこまでの度胸があるかどうか」
八百太郎はそれを信じないような口ぶりである。
「すると、浅香うじは来ないと見るのか」
「いや、それは来るかもしれない。しかし、あの男は、いざという時の仕事は、一人でやる主義のようだ。決して人だのみはしない。人をたのむ時は、自分は姿を見せない」
「なるほど――、明日はそのどっちだろう」
「明日にならなければわからんな」
「そんなのんきなことをいっていて大丈夫か、浅香うじ」
「うむ、まあ考えてみよう」
八百太郎の声はだんだん眠そうになってくる。それがたぬきでないことは、胸へ借りてきている手の重みで、お香にははっきりとわかる。
「貴公、とにかく論外の御仁じゃ」
根来もあきれたような、感心したようなことをつぶやいて、あくびを一つすると、それっきり黙ってしまった。
八百太郎はもう軽い寝息を立てている。稲妻小僧も気にならないかわりに、自分のこの女盛りの乳房にもなんの魅力も感じてくれないのだろうか。
――たよりない、この人。
お香はなんとなくうらめしい。とはいえ、こうして男の手を抱いている安心さ、それは一人で向こうの座敷へ寝ていた時の気持ちとはまるっきり違うものがあるのだ。
――あたしはどうしてもこの人をあたしのものにしてみせる。
お香もいつか稲妻小僧の恐ろしさを忘れて、ただ男恋しさに胸をわくわくさせながら、うつらうつらと眠ってしまった。

どのくらい眠ったものか、ふっと目がさめると、もう朝になっていて、有り明け行燈の光より外のあかりのほうが座敷をほのあかるくしていた。すずめの声が耳につく。

——あら。

見ると、八百太郎の寝床は空だった。

その向こうに根来がまだぐっすりと眠りこけている。

——とうとう行っちまったのかしら、あの人。

お香はぎょっと魂も凍る思いに、青くなって起きあがっていた。

約束の時刻

1

お香は寝巻きのままそっと廊下へぬけ出す。いま日がのぼったばかりのようだが、店も台所ももう起きているので、女中に聞けばなにかわかると思ったのだ。

秋も終わりに近いから、素足に廊下が冷たかった。

——あたしに黙っていってしまうなんて。

お香は激しい絶望感に足もとさえおぼつかなく、まるで泳ぐようなかっこうで茶の間のほうの廊下へ曲がると、戸袋ぎわの雨戸が一枚あいている。

はてなと思いながら、夢中でそこへ走りよってみると、ちょうど八百太郎がいま庭木戸をあけて、材木置き場のほうから帰ってくるところだった。

「八百さん——」

なんだ、材木置き場を調べに行ってくれたのかと思い当たったとたん、お香はへたへたとそこへたわいもなくひざをついてしまう。

「お早う。どうした、お香うじ」

明るい朝日の中を、八百太郎はのんびりとした微笑をうかべながら大股に近づいてくる。

「ああ、よかった、あたし」
「なにが――」
「いやだ、あなたは。黙ってぬけ出すもんだから、あたしてっきり黙って逃げ出してしまったんだと思って、――ごらんなさいよ、この動悸」
お香はいきなり男の手を両手でつかんで左の乳の下へ押しつけてやる。
「あわてちゃいかん。まあ上がろう」
「お願いだから、お願いだから、あたしに黙ってどこかへ行ってしまっちゃいやですよ」
「よろしい。出ていく時はちゃんとことわっていく」
「あら、じゃやっぱりあたしを置いてここを出ていく気でいるんですか」
「これこれ、朝っぱらからそうからんではいかん。こんなところでふざけていると、稲妻小僧が怖いからなあ」
「いいんです。あたしはあなたさえそばにいてくれれば安心なんですから」
男の手にほおずりしながら、本当によかったと涙さえ出そうになるお香だった。
「お香うじ、だれも見ていないから、お馬になって少し庭を歩いてやろうか」
こっちをなぐさめてくれるつもりか、八百太郎がそんなのんきなことを言い出す。
「いやだ、こんな寝巻きのまんま」
「少し寒いかな」
「寒くはないけれど――」
実は、おぶさって思いきり甘ったれてみたい気もする。
「よし、じゃ来い」
八百太郎はわらいながら背中を向けてくれる。こっちは廊下の上にいるのだから、人目はないし、
「いやだなあ」
と、口ではいいながら、いい気になってしがみつくようにおぶさっていくと、
「お半長右衛門というところだな」

八百太郎は軽々と庭のほうへ歩き出す。
上尾ノ原で一度おぶってもらったことがあるし、今夜は寝巻きのままで身軽だから、なつかしい背中へかまわずぴったりとからみついて、
「お半はあのとき身重だったんでしょう」
と、男のほおへほおをよせて、我ながら胸が甘ったるくうずき出す。
「うむ、つい手がさわり足がさわり」
「あたしは毎晩お手々を借りているのに、まだ身重になれませんの」
「お馬をくどいちゃいかんな」
「八百さん、本当のことをいって——。あたしをきっとおかみさんにしてくれますね」
「ひん、ひん」
「ふざけちゃいやだ。八百さんはあたしがきらいなの」
そんなはずはないと思う。きらいなら、自分からこうしておぶってやろうだなんていわないはずだ。
「ねえ、きらいじゃありませんね」
「まあ、好きなほうかな」
「じゃ、御新造さまにしてもらえると思っていてようございますね」
いま約束しておかなくては、またいつまでも心配しなければならないと思うから、お香はつい躍起にならずにはいられない。
「よかろう。わしのほうの仕事が無事にすんだらな」
「仕事——」
「うむ、わしにはちょいと仕事があるんだ」
「それ、どんな仕事なんです」
これは聞き捨てにできない。
「まあいい。それは後でゆっくり話す。その仕事の前に、実はもう一つ仕事があるんだ」
「いやだなあ、そんな。その仕事、みんないつごろすむの」
「そうあわてるな。まあ、一つずつ片づけよう」
いつか庭の南の外れへきている。そこの黒板(くろいた)

塀の外は堀だ。くるりと振りかえってみると、庭木越しにまだしめたままの雨戸が書き割りのように見える。

「お香うじ、わしは今日朝飯がすむと根来をつれて江戸見物に出る」

「わたしも行くわ」

「まあ、黙って聞きなさい。我々を朝になったら追い出せと言いつけたのは稲妻小僧だ。今日はひとつ向こうのいうとおりになってみようと思う。いいかね、もし稲妻小僧が自分でいうとおり、いつもお香うじの身辺で目を光らせているというのが本当なら、わしたちさえ留守にすれば、今夜もたぶんここへ姿をあらわすはずだ」

「怖い、あたし」

お香ははっとそれを思い出して、こんどこそ本当に男の肩へしがみついていく。八百太郎はかまわずつづけるのだ。

「そこでな、今夜は大番頭と芳五郎頭に茶の間へ泊まってもらって、材木置き場のことをいうと心配するからそれは伏せておき、その時刻がきたら清三を呼んで、黙ってあの庭木戸から出てみるんだ」

「あなたは、あなたはどうするの」

「わしにはわしで考えがある。お香うじの命はきっと引きうけるから、今夜は思いきってわしのいうとおりにやってみるんだ」

「怖いなあ、あたし。もし、稲妻小僧が本当に出たらどうするんです」

「だから、それはきっとわしが引きうける。あの男がゆうべここへまで押し込んできてそんなことをいったとすると、もう捨ててはおけない。お香うじのためにも、今のうちに退治しておかないと、どんなまねをするかわからない。しかし、わしが今日こんな計画を立てたとあっちへわかると、ずるいやつだから、用心して今夜は出ないかもしれぬ。この話は自分の胸にだけたたみこんでおいて、だれにもいわぬことだ。わかったね」

それが言っておきたくて、八百太郎はわざとお香をおぶい、用心深くこんな庭のすみのほうへつれてきたのだろう。

お香にしても、あんな不気味な稲妻小僧などにねらわれていては、安心してなにもできないのだ。

「あたし、思いきってやってみます」

「それがいい。虎穴に入らずんばということもあるからな」

「そのかわりね、八百さん、さっきの約束だけは本当にしていてようございますね」

お香はもう一度念を押す。

「うむ、わしは自分が一度口にしたことはきっと責任を持つ男だ」

「うれしいわ」

やっと思いがかなったと思うと、お香は天にものぼる気持ちで、かっと体中が熱くなりながら、もう離れじとぴったりほおを男のほおへ押しつけていく。

「そんなまねをすると、お馬くさくなるぞ。さあ、家へ入るかな」

八百太郎はわらいながら、大股に家のほうへ歩き出した。

2

朝飯がすむと、八百太郎は根来をつれて、打ち合わせどおり江戸見物に出かけていった。

そういう約束なのだからしようがないけれど、お香はやっぱり寂しくてたまらない。が、考えてみると、もう昨日までの自分とは違うのだ。ちゃんと八百太郎というきまった夫ができて、その八百太郎はたとえどこへ行っても、きっと家へ帰ってきてくれる男なのである。

——でも、本当かしら。

女をだますような人ではないけれど、あんまり幸せすぎて、つい心配になってくる。それに、いよいよ夫ときまってみると、あの人は江戸へなにをしに出てきたのか、自分で仕事があるの

だといっているだけに、どんな仕事だろうと、こんどはそれが気になってくる。

——あれほどの男なのだもの、ただで主家を浪人するはずはない。

やっぱり、姫君になにか大切なことをたのまれてきているのだ。たぶん、命がけの仕事に違いない。

——心配だなあ。もしそんなことで命でも落とすようなことになったら、あたしはどうなるんだろう。

お香は考えただけでも胸がきりきりとしてくる。いや、それはまだ先の話として、今夜は稲妻小僧が自分をねらいにくるのである。

——でも、こっちはあたしの八百さんがついていてくれるんだから。

その点はなんとなく安心していられるお香だ。

「おかみさん、ゆうべ奥になにかあったそうですな」

いつも五ツ半（九時）までには家から店へ通ってくる大番頭の喜兵衛が、奥へあいさつにきて、女中たちの口からでも耳へ入ったか、まゆを寄せながら聞いた。

「いいえ。気のせいか、あたし、なんだか稲妻小僧が家のまわりをうろついているような気がして、心配だから奥の二人を起こして、一通り奥の戸締まりを見てまわったんです」

晩の計画があるから、だれにもうっかりしたことはいえないのである。

「そうでしたか。それは用心するに越したことはございません。備えのあるところへは、いくら稲妻小僧でも入りにくいでしょうからな」

「それからね、大番頭さん、今が今ってわけじゃありませんが、ゆうべもいったように、あたしは浅香さんと一緒になるつもりでいるんですから、含んでおいてくださいね」

さすがにほんのりとほおが赤らむおもいのお香である。

「かしこまりました。浅香さんはお人柄もようございますし、おかみさんさえその気なら結構だと思います。御浪人さんでございますな」

「ええ、なにかわけがあるようだけれど、あたしを泣かせるような人じゃないと思います」

「それはそうでしょうが、とかく優れた男というものは女房には気苦労なものだそうで、つまり世間が無事にほうっておかない、なんのかんのと難しい仕事に引っぱり出そうとする。おかみさんもその覚悟だけはしておきませんとな」

老人は老人らしい心配をしてくれる。

「そういえばそうねえ」

お香は思いあたることがあるだけに、神妙にうなずいているほかはなかった。

昼間はそれでも店が忙しいから、なにかと気がまぎれていた。

が、夜になって、約束だから八百太郎たちは帰ってこないし、次第に四ツが近づいてくると、相手が魔物のような稲妻小僧だけに、お香はなんとなく気が気ではなくなってきた。

無論、八百太郎にいわれたとおり、今夜は喜兵衛にもいてもらい、芳五郎頭にもきてもらっている。その二人はなんにも知らないから、ただ八百太郎たちの帰りを待ちうけ、

「おかみさん、なんかの都合で今夜は浅香さん帰ってこられないんじゃありませんかねえ」

と、頭がそんなことを言い出す。

「そうだな、出た先でどんな用ができないものでもないから、そうしたら、おかみさん、頭に泊まってもらって、番頭を一人こっちへよこしましょう」

大番頭までがそういい出すと、絶対にないとはいえないことだし、こっちには清三と材木置き場へ出ていくという大役があるのだから、間にあわなかった日には大変なことになる。そんな心配まで出てくるのだ。

「けど、おかみさん、心配した日にゃきりがありませんよ。なあに、こっちには幸い浅香のだ

んなが当分泊まってくれるんだし、いくら稲妻小僧だって、まさかここへまで押し込めやせんや」

押し込めないどころか、現にその稲妻小僧がちゃんと忍びこんできて匕首を突きつけているんだから、考えれば考えるほど恐ろしい。

「あたしもあの人といっしょに出かければよかった」

「御冗談で――。いくら稲妻小僧が怖いからって、まさかそうどこへでも浅香のだんなについていってもらうわけにもいかねえでしょうね」

「本当は、頭、あたしはゆうべもあの人の隣へ寝床を持っていってしまったんです。なんだか気味が悪くてしょうがないんですもの」

「へえ、じゃまたお手々を借りて寝たんですか」

「そうなの。あたしすっかりおくびょうになってしまったのね」

「また、あのだんなとくると、たのみになる男でござんすからねえ」

芳五郎はそういうところを散々見せつけられてきたのだから、ただにやにやわらっている。

「少し風が出てきたようだな、頭」

「木枯らしというやつでしょうね。これからまた江戸は火事っ早くなりまさ」

やがて、四ツに近い時刻である。

「大番頭さん、清三をちょっとここへ呼んでください」

いよいよその時がきたのだ。お香は度胸をすえるよりほかはない。

「承知しました。じゃ、今夜は清三を頭といっしょにこっちへ寝かしましょう」

喜兵衛はそんなことを言いながら、すぐに立っていってくれた。

「お呼びですか、おかみさん」

いつも無口な清三が、むっつりと茶の間へ入ってきて、芳五郎を見ると黙ってそっちへおじぎをする。

「清三、大番頭さんは――」

「いまお店の戸じまりを見てまわっています」
「そう――。お前、ちょっとあたしと来ておくれ」
お香はなにげなくいって、長火ばちの前を立つ。
「どこへおいでなさるんです、おかみさん」
芳五郎が変な顔をする。
「いいえ、ちょっと見ておきたいところがあるんです。すぐ帰ってくるから――」
お香は廊下へ出て、戸袋ぎわの雨戸を一枚あけた。月の出は九ツすぎだから、外は暗い星月夜で、木枯らしがざあっと庭木を鳴らしている。
「ちょうちんはいらないんですか」
清三がぶっきらぼうに聞く。
「いりません。ちょっと出てみるだけなんだから。清三、そこはしめておいておくれ」
清三に後ろの雨戸をしめさせて、二人で暗い庭へ出た。お香はさっさと木戸のほうへ進みながら、
「材木置き場へ出てみるんだから、そこをあけておくれ」
と、そっと言いつける。
「なにかあるんですか、おかみさん」
「稲妻小僧がきているかもしれないのさ。怖いかえ、清三」
清三は黙って木戸をあけて、材木置き場のほうをすかしてみてから、
「だれもいないようです」
と、自分から先に木戸を出る。
――いよいよ勝負だ。
お香は大きく一つ息を吸ってから、腹をすえて清三の後を追う。

悪いやつ

1

材木置き場は百坪ばかりの片すみに木挽小屋

があって、材木の山がいくつにも分けて積んであるから、どこにでも隠れ場所がある。しかも暗夜だから、どこから稲妻小僧が飛び出してくるかわからない。

「一体、どうしたんです、おかみさん」

清三はいつも慣れている場所だから、ぶらぶらと平気で木挽小屋のほうへ歩きながら聞いた。

「稲妻小僧が今夜ここへきているかもしれないんだよ」

約束どおりここまで出てきたんだから、お香はもう声をひそめる必要はないと思い、あたりまえの声でいった。一つには、八百太郎に自分のいるところを知らせておきたい腹があるのだ。

「そんなばかな」

「いいえ、それが決してばかな話じゃありません。ゆうべ、稲妻小僧はあたしの寝ている座敷へ忍びこんできて、ちゃんとそういって帰ったんです」

お香は一通りゆうべの話を清三にして聞かせる。

「どうして、おかみさん、そんなことをお上へ訴え出なかったんです」

清三は裏の堀留の荷揚げ場まで行って、そこへ立ち止まりながら、とがめるようにいう。十三の時から奉公にきてもう十二年あまり、無口でちょっと陰気なところはあるが、しっかり者でそろばんは達者だし、小力もある。喜兵衛もいい大番頭の跡つぎになるとたのみにしているくらいだから、こんども高岡まで供をさせたので、自分もその気があるからこっちの身を心配してくれるのだろう。

「そんなことをいったって、うっかりしたまねをして殺されるのはいやだもの」

「奥のお客さまたちはどこへ出かけたんです」

「江戸見物でしょう」

「ゆうべの話、しなかったんですか」

「しません。今夜とにかく稲妻小僧に会ってみ

てからと思って、その話はまだだれにもしないでいるんです」
「もし、もし今夜おかみさんがいたずらされちまったら、どうするんです」
清三は別の材木の間をぬけて、木挽小屋のほうへ歩きながら、むっつりという。
「その用心に、お前をつれてきたんです。向こうだって、一人で怖ければお前をつれてこいというくらいだから、今夜はそんないたずらはしない気だとあたしは思う」
聞いているのかいないのか、清三はいちいち物陰をのぞきこんで歩きながら暗い木挽小屋へ入っていく。そこはただ雨をしのぐ簡単な屋根だけがかかっている四坪ほどの仕事場になっているところだ。
「まだだれもきていないようです」
「そうだね。でも、油断はできないよ」
怪しいと思うところは、ずっと一通りまわってきた。稲妻小僧はさることながら、どこにも人がかくれている気配は感じられなかった。
——あの人、やっぱりなにかの都合で来られなかったのかしら。
お香はなによりもそれが気になる。八百太郎がきていてくれないとすると、もういつまでもこんなところにいては危険である。
「清三、家へ入りましょう。おくれるほうが悪いんだから、待っていることなんかありゃあしない」
「そりゃそうです。——おかみさん」
「なあに」
「奥のお客さんたちは、家におかないほうがいいと、おれは思います」
「どうして——」
「浅香さんはいい人だけれど、お侍です。商いの道はわかりません」
「ああ、あの人といっしょになっちゃいけないって、お前はいいたいの」
「そうです。この角屋のためになる人じゃあり

ません」
「清三、お前はあたしに指図をしようっていうのかえ」
奉公人のくせに生意気なと、勝ち気なお香はむっとせずにはいられない。
「おかみさん、おれ、おかみさんが好きです」
ふいに、清三は大胆にもお香の肩へ両手をかけてきた。
「おれ、おかみさんのためになら死んでもいい」
「ばかっ、いいかげんにおし」
かっとなってその胸を突きのけようとするより早く、清三は若い力でぐいとお香を引きよせ、右手が素早く口をおさえている。
「大きな、大きな声を立てないでください。おれ、おかみさんのためになら、どんなことでもする。一生懸命働く。おかみさん、たのむから、おれのものになってくれ」
ばかっ、ばかっと、お香がその手の中からのがれようと激しく身もがきすると、
「だめか、——どうしてもだめか」
清三は悲しげにうめいて、凶暴にもいきなりお香ののどを絞めつけて、そこの手ごろな材木の山の上へ押し倒していく。
「おれ、殺しても思いをとげる。一度思いをとげてから死ぬ」
男の一念とでもいうか、恐ろしい力だ。息が苦しくなって、お香は宙に浮いた両足をばたばたさせながら、もうだめだと思った。
ざあっと木枯らしの吹きすぎていくのが耳につき、目でのしかかってくる清三の醜悪な顔をはっきりと見ながら、次第に気が遠くなってくる。
「あっ、だ、だれだ」
愕然(がくぜん)として清三はお香を放した。いや、放したのではなく、放さざるをえなかったのだ。うしろから不意に、自分ののどへからみついた鉄のような腕があって、ぐいと引きおこされたのである。

「小僧、味なまねをするなあ」
「あ、稲妻――」
が、それはもう声にはならなかった。
「ばかめ。おれの名をかたって、おれのまねなんかしようと思うから、罰が当たるんだ。ふ、ふ、どうせそこまで忍びこんだんなら、なんだってゆうべその場で思いをとげておかなかったんだ。甘い野郎だ」
畜生、せっかく九分どおり手に入っていたものを、と、清三はじだんだを踏みたい気持ちだったが、それよりも鉄のような腕力で絞めあげられたのどはどうしようもなく、みるみる目の前が真っ暗になっていく。
――稲妻小僧。
あやうく息をついて、くずれるように地へ滑り落ちたお香は、どうにか正気を取りもどしてきたが、全身から力がぬけて、急には立つこともできない。肩であらしのような息をつきながら、目の前で絞めおとされていく清三をぼんやりと見ているだけだ。
――そうだ、早く逃げなくちゃ、怖い。
うしろ手でしっかりと材木の山につかまり、どうにかやっと立つには立ったが、その時はもうおそかった。稲妻小僧がぐったりとなった清三をどさりとそこへぼろ布のように投げ出して、のっそり前へきて立ったのである。
「お香、逃げようたってむだだ。いいかげんにあきらめろ」
ぬすっとかむりの中の目をぎろりと光らせながら、
「お前もいま聞いていたろう、ゆうべのはおれじゃねえ。たぶん、この若い番頭が、おれのまねをしてお前をおどかし、今夜ここへ連れ出して、ゆっくり思いをとげてやろうとたくらんだんだろう。あぶなく若僧にうまく先を越されるところだったが、あいにく虫が知らせたか、おれも今夜こそお前をものにしてやる気で、さっきからここにかくれて、夜中になるのを待って

いたのよ。お前のほうからここへつれ出されてくるなんて、やっぱりよっぽど縁があるんだろう。そうおっかながってばかりいねえで、もうおとなしくおれのいうことをききねえ」

今夜は別に匕首を抜こうともしない。そんな物で脅さなくても、今夜はのがさぬという自信が十分あるのだろう。

あ、そうだったかと、清三の思いもかけないたくらみを耳では聞きながら、今はそれに驚いているひまはない。その清三などより十倍も恐ろしい稲妻小僧が、すぐ手のとどくところに残忍な目を光らせているのだ。

「杉次郎を、杉次郎を殺さなかったって、本当なんだろうね」

とっさにそんなことが口に出たのは、なにかいわなければすぐにも飛びかかってきそうな気配だからだ。

「それでも、お前、あんなやつのことがいくらかでも気になるのか」

「そりゃ、一度は縁のあった男ですからね」

「殊勝なことをいうぜ。命だけは助けてやった。もうお前の跡は追わねえからと、土下座したんでな。あいつはやっぱり女房に追い出される意気地なしにできているんだ」

「あたしは、あたしの体は、もう八百さんのものなんですからね」

だれがお前なんかにと、お香はやっとそれだけの気力がついてくる。

「うそをつけ。いくら清三がずうずうしくても、二人で寝ているところへ忍びこめるもんか。まあいいや。お前がそんなにあの野郎にのぼせているんなら、おれが今夜そののぼせを下げてやらあ」

稲妻小僧はやにわに躍りかかって、清三などよりはるかに敏捷に、とっさに口をふさいでしまう。あっといったきり、お香はもう声さえ立てられなかった。

2

「おいおい、貴様も執念深いやつだな」

そこの材木のかげから、ぬっと立ち上がって、静かに声をかけたのは八百太郎だった。

「あっ、野郎――」

稲妻小僧はぎょっとお香を突っ放すなりくるっとこっちを向いた時には、もう七首を抜いて豹のように身構えていた。

「根来、清三に活を入れてやってくれ。まだ大丈夫だろう」

八百太郎はじっと稲妻小僧から目を放さず、平気で五郎左衛門を呼ぶ。

「心得た」

つかつかと出てきた根来は、こっちへは目もくれず、そこに倒れていた清三をずるずると少し離れたところへ引きずっていって、ぐいと抱き起こす。

「ばかなやつだ。十何年もまじめに奉公をして、こんなことで死んじまっちゃつまらないだろうにな。しっかりするんだ」

根来はしきりに清三の胸をなでているようである。

「お香、早く水を持ってきてやれ」

「はい」

と、返事はしたが、お香はひざがくがくして急には立てない。

「おい、お前も生きている間に少しでも人間らしいことをしておいてはどうだ」

八百太郎の声にも態度にも、いささかの敵意も見えない。といって、油断をしているのではなく、相手の攻撃には十分備えて、ゆうゆうと出方を待っている。いってみれば子供あつかいにしているのだ。

「なにをっ」

稲妻小僧は歯がみをしてにらんでいるが、ぶつかっていけば抜き打ちがあるから、うっかりかかってはいけない。

「どうせお前はつかまれば獄門首だろうが、一つでも人間らしいことをしておくと、そのとき安心して死ねるぞ。お前だって生まれた時は無邪気な赤ん坊だったんだろうからな」

「やめろ、よまいごとは聞きたくねえ」

「迷っているのはお前だ。わきの下へ冷や汗をかきながら威張ってみてもはじまるまい。いいかげんに消えてなくなったらどうだ」

「くそっ。くたばれ」

だっと体ごとぶつかってきたのは、あながち勝てるすきをつかんだというのではなく、そうしなければ納まりがつかないやけなみえからだったに違いない。

ひょいと八百太郎が身をかわすと、空を突いて小屋の外まで泳いでいき、そこで踏みとまると、くるりと振りかえって、

「野郎。おぼえてろ」

それがせめてもの捨てぜりふで、さっと材木のかげへ身をかくしてしまった。

「えいっ。——こら、しっかりしろ」

とたんに、根来が清三に活を入れて、気つけがわりにぴしゃりと一つ横っ面をひっぱたく音がした。

「ううっ」

びくっとして、どうやら清三は息を吹きかえしたようだ。

「根来、後はまかせる」

「よろしい、引きうけた」

二人きりにしておくほうがいいと思ったので、八百太郎はぽかんとそこに立っているお香の手をつかみ、ゆっくりと庭木戸へ引っぱっていく。

お香はいまさらのようにがたがたと身ぶるいをしながら、思うように歩けないようだ。

「よし、お馬に乗れ」

「すみません」

八百太郎は肩へしがみついてくるお香をおぶって、木戸から庭へ入った。

「あの男、逃がして大丈夫かしら」
「大丈夫だろう。あれでも杉次郎だけは助けてやったようだ。もう一度だけ見のがしてやるがいい」
「清三は、清三はどうするの」
「あれは出来心だ。出来心にしては、少し度が強いようだが、恋は人間をめくらにするからな」
「ゆうべのは本当に清三だったのかしら」
「稲妻小僧なら雨戸をちゃんとしめていく。しめるひまがなければあけ放して逃げる。しかし、お前はやっぱり稲妻小僧だったと考えておくほうがいい」
がらりと内から雨戸があいて、
「おかみさんですか」
と、芳五郎頭が顔を突き出した。うしろに喜兵衛も立っている。
「おや、浅香さんじゃありませんか。どうしたんです、おかみさん」
「なあに、ちょいとお馬に乗ってみたくなっただけだ」
どっこいしょと、八百太郎はお香を廊下へおろしてやる。髷はがっくり根が落ちているし、乱れた衣紋もただごとではない。
「清三さんはどうしやした。あんまりおそいんで、いま出てみようと思ったところなんでして――」
「まあ、上がって話そう」
八百太郎が茶の間へ通ると、お香は黙って奥へ着物をなおしに行く。八百太郎は二人に、ゆうべからの稲妻小僧の話をはじめて打ち明けたが、清三のことは材木置き場でいま稲妻小僧に絞め落とされたのだとだけしか話さなかった。
しかし、清三はその夜とうとう店へはもどってこなかった。大番頭に芳五郎がくれぐれも後のことをたのんで帰っていった後で、根来は八百太郎とお香にいった。
「あれもさすがに男だ。人には許されることと許されないことがある。わたしは二度とおかみ

さんに顔が合わされない。何年かたっておわびのできる体になったら、あらためておわびに出ますというんだ」

「そうか。あれは一度稲妻小僧に殺された男なのだから、邪念さえ去ればわしは許してやるべきだと思ったんだが、当人がその気ならそれでもよかろう」

八百太郎も清三のことについては多くはいわなかった。お香に呼ばれて材木置き場に出る前に、清三は一度材木置き場にだれかかくれていないかと、用心深くひとまわりしている。それほどにたくらんでかかった執念だから、尋常なことではあきらめきれまい。ただ、このまま野放しになって、悪の道に落ちてくれなければいいがと、それを心配するだけである。

「もしあなたに会えなかったら、あたしは帰りの道中で清三にもあぶなかったんですね」

お香はそういって、いまさらのように身ぶるいをしていた。

美しい朝

1

翌朝。——

お香は眠り足りて目がさめるとすぐ、胸にあふれるような甘いうずきを感じて、我にもなくそっとそばに寝ている八百太郎の腕を抱いていた。

八百太郎はまだぐっすりと正体もなく眠っている。

——とうとう、あたしはこの人と、本当の御夫婦になってしまった。

そう思うと、それが当然なような、ふしぎなような、お香はうれしくてたまらなくなってくる。そして、今朝はもう稲妻小僧のことも杉次郎のことも、少しも怖いとは思わなくなっていた。

——あたしの体は、もう一生この人のものになってしまったのだし、なにがあったってちゃんとこの人がまもってくれるんだもの。

しあわせだなあと、お香はいまさらのように天に感謝せずにはいられない。

「そうだ、根来さんにも少しは感謝してやらなくちゃ」

お香はふっとゆうべのことを思い出す。

いよいよ床をのべる段になって、根来はゆうべ、

「お香うじ、わしは今夜はこっちで宿直をしよう」

と、まじめな顔をしていい出した。

「あら、そんな御遠慮には及びませんのよ」

まさか、ああそうですかともいえないので、軽くそう言いかえすと、

「いや、わしはこっちのほうがいい。浅香うじと違って、わしはあまり目ざとくないほうだから、間違って稲妻小僧にずぶりとやられては、ちょっとありがたくない」

と、そんな口実をつける。

「だって、一人でいちゃなおあぶなくないかしら」

「いや、一人のところへ間違えて入ってくるほど間抜けな稲妻小僧でもあるまい。それに、わしがそばにいようがいまいが、お香うじは平気で浅香うじの手を借りるんだから、そばでもう手を借りたかなと余計な心配をしているより、こっちへ一人で寝たほうが安眠ができる」

どうやらそれが本音らしいので、

「ごめんなさい、根来さん。あたしもう癖になってしまったもんですから」

と、こっちも正直にぶちまけて、根来の床は当人の希望どおり茶の間の隣座敷へのべさせたのである。

さて、奥の八畳へまくらびょうぶを立てて、床を二つ並べ、びょうぶの外で寝まきに着替え、鏡台に向かって髪のものを取っているうちに、

お香は急に胸がときめき出したのである。

——ちゃんと約束はすんでいるのに、つまりゃしない。

今夜は幸いあぶないところを助けてもらったから、怖いおもいをしただけですんだようなものの、一つ間違えばすんでのことに、この人のものになる前に取りかえしのつかない体にされていたのだ。

——そうなったら、死んだって死にきれやしないのに。

鏡の中の、我ながら熱ぼったい顔を見つめながら、お香はとうとう腹をすえて、思いきってそばの行燈を吹き消してしまった。

濃いやみの中を手さぐりで、自分の床へは入らず、もう半分眠りかけている男の床の横から静かにするりとすべりこむ。おおげさにいえば、こんな恥ずかしいまねをして、もししかられたら黙って死ぬ覚悟だった。一瞬身も凍るおもいである。

はっと目をさましたらしい男は、

「なんだ、今夜はお手々だけじゃいけないのかえ」

と、微笑しているような声音だ。

「いや、もうあたし」

お香はほっとしたとたん、体中の血がかっと燃え狂ってきた感じで、だだっ子のように男の胸へしがみついていた。

一度踏みこえてしまえば、男と女の間のかきねなどというものはたわいのないものである。

お香はもう自分の血の中に男の血がまじってしまった甘い余韻をはっきりとかみしめながら、

「ねえ、こんどこそ、本当の御夫婦になれたのね」

と自分にも言い聞かせ、男にも念を押さずにはいられなかった。

「うむ、少し早すぎたが、まあしようがないだろう」

のんびりした口つきだが、男の手はまだしっかりと肩を抱いていてくれた。
「あら、しようがないって、それどういう意味なの」
「おれには仕事が一つ残っているんだ。それがすんでからと考えていたんだが、——ことによると、お前、おれの子を女手一つで育てなければならなくなるかもしれないよ」
ああそうだっけと、さすがにお香はどきりとはしたが、
「いいんです。その時は、あたし、立派にあなたの子を育てあげてみせます」
と、きっぱりと答えた。
「そうか、それならいい。お香にはそれができそうだから、おれは安心だ」
「たった一つだけ、聞かせて」
「なんだ」
「あなたはあたしが本当にかわいいの？」
「冗談いうなよ。おれは出来心で女に子供を生ませるようなことはしない男だ」
聞かなくても、それだけは信じていればこそ、自分から身を投げ出していったのである。
「ふ、ふ、わかってはいても、女って男の口から、お前がかわいいっていってもらいたいものなのよ」
「そうか。わしはお前が本当にかわいい」
「もっとぎゅっと抱きしめてくれなくちゃ」
「こうか」
「あのねえ、なるべく生きていてくれなくちゃいやだ、あたし」
「心配するな。おれはこれで案外しぶとい」
「それに、こんどこそ、あたしの帝王の星、あなたにあげてしまったんだから」
「ありがとう」
この人に、いや、今は大切な自分の夫に、どんな命がけの仕事があるのか、それは聞くまい。聞かなくても、話していい時がくればきっと話してくれる。あたしはただ夫を信じ、貞節な妻

として一生そいとげられれば、それで満足なのだ。

お香はそんなことを考えながら、たくましい夫の胸に抱かれて、いつか安心して眠ってしまったのである。

——女は御亭主に寝顔を見せるものじゃないっていうから。

お香が八百太郎を起こさないように、そっと床をすべり出ると、目の前にゆうべはついに空だった自分の寝床がきちんとしたままのべてある。

——あらあら、まるであたしをわらっているみたい。

思わずほおが赤らんでくるのも、甘くたのしい今朝のお香だった。

2

「お香うじ、ゆうべはあれから稲妻小僧は出なかったようだな」

茶の間で朝茶をいれている時、根来がわざとお香の明るい顔を見ながら聞いた。

「ええ、おかげさまで」

「そのかわりな、根来うじ、浅香小僧が出たらしいぞ」

差し向かいの長火ばちの前で、八百太郎がわらいながらそんな正直なことをいう。

「本当か、お香うじ」

根来が目を丸くした。

「さあ、どうなんでしょう。あたくしはぐっすり眠っていたものですから」

年だけにそんな澄まし方もできるお香だ。

見た目に、ぬれぬれとした大丸髷（おおまるまげ）が、急になまめかしく見えてくる。

「ふうむ。どうも今朝のお香うじの顔色はひどく明るいと思った。そうか、ゆうべはお手々だけではすまなかったのか」

「はい、根来さん、粗茶でございますけれど——」

お香は五郎左衛門の前へ茶をすすめる。
「ありがとう。御新造、おめでとうござる」
「あのねえ、根来さん、あたし浅香小僧には帝王の星をあげてしまいましたの。ですから、根来さんには胴巻きの百両をさしあげます」
「いや、杉次郎の手切れ金ならもういいんだ。あれはほんの出来心から出た口から出まかせでな、今となっては面目ない」
根来は正直に頭をかく。
「いいえ、手切れ金じゃござんせん。なんといいますか、あたしがいい御亭主を持ったほんの心祝い——。ねえ、あなた」
「そうだな。根来うじ、わしも遠慮せんことにしたんだから、貴公も遠慮せんことにしてはどうだ」
八百太郎も人のいい顔をしてすすめる。
「浅香うじは御新造をもらう気か、それとも当家の婿になる気か、どっちだね」
根来が妙なことを聞く。
「なるほど、やがてはそれをはっきりせんといかん時がくるな」
「それ、あなたのお仕事がすんでからでいいじゃありませんか。あたしはどっちでもあなた次第なんですから」
お香は本当にそう考えているのだ。
「そうか。では、それはわしの仕事が片付いてからにしよう」
「御祝言だって、それからのほうがいいんでしょう」
「お前はそれじゃ具合いが悪いか」
「いいえ、かまいませんわ。どうせあたしは変わりもので通ってきたんですから、世間の口など平気です」
「そうか、お前がその気なら、わしもそれでかまわない」
「そっちはそれでいいだろうが、わしはどういうことになるかなあ」
根来が横から口を出す。すこぶる真剣な顔つ

きだ。
「それはどういう意味だね」
「つまりだな、わしは浅香うじと二人でここの居候になった。その浅香うじがここの御亭主ということになると、居候はわし一人だ。しかも、わしはここの家になんの関係もない人間だ。今日かぎりさよならをしたほうがいいんじゃないのか」
「義理のかたいことをいうな」
八百太郎はわらいながら、
「じゃ聞くが、貴公のこれからの目的はなんだ。一体、なんで身を立てるつもりなんだ」
「それがおかしい。恥ずかしい話だが、たった今まで、そんなことは少しも考えていなかった。わしは昨日まで世の中を悪たれて食っていた人間なんでな、おそらく浅香うじに会っていなかったら、一生ごろんぼ用心棒で、それこそあたら人生を棒に振っていたろう」
寂しそうな顔になる根来だ。
「根来さん、あなたうちの人の家来になるお約束でしたね」
「うむ、わしは浅香うじといっしょだと人生がたのしい。しかし、御新造のじゃまになってはいかんからな」
「その御遠慮には及びません。家来というものは、たとえ主人夫婦がどんなに仲のいいところを見せつけても、我慢してみないふりをしているのが忠義なんでしょう」
「それはそうだ」
「なら、何事も忠義のためと我慢して、今までどおり家にいて、この人に犬馬の労をつくしたらいいじゃありませんか」
「本当にそれでいいか」
「ようござんすとも。うちのだんなさまは、これでも帝王の星を持っているんですからね。いまに根来さんがどうしたら身が立つか、きっと道を立ててくれます。ねえ、あなた」
「よかろう。根来うじ、そうしろ」

「かたじけない。根来五郎左衛門、必ず犬馬の労をつくす。このとおりだ」

根来はそこへ両手をついて大きなおじぎをする。

——本気なのかしら。

お香はふっとそんな疑問がおこらないでもなかったが、自分でさえほれぬいて、どうしても亭主にしなければ気のすまなかった八百太郎なのである。たしかにこの人にはそれだけの値打ちがそなわっているのだと思うと、そこはほれた欲目で、急に八百太郎の体中から後光がさしてくるように思えてくるから正直なものである。

食後、お香はその後光のさすだんなさまを供につれて、京橋の白木屋へ買い物に出かけることにした。無論、根来はまたそのだんなさまの供をしなければならない。お香はこの二人の冬支度を一通りこしらえてやらなければならないのである。

お香には後光のさすだんなさまに見えても、他人には八百太郎は田舎侍、根来はごろんぼ用心棒にしか見えないのだろう。街へ出ると、水ぎわだった若い町家の内儀が、大きな田舎侍と風体のあまりよくないごろんぼ用心棒を供につれて歩いているので、みんな好奇の目をみはり、中には振りかえっていく者さえある。

「ねえ、御夫婦に見えるかしら」

お香は八百太郎によりそいながら、一人でうれしくてたまらない。

「さあ、どうかなあ」

八百太郎は気のない返事をする。

「だって、みんなこっちを見ていくじゃありませんか。こうして仲よく歩いていれば、だれが見たって他人じゃありません」

「そうかなあ。食い逃げをしそこなった田舎侍が、そこの内儀をお馬に引っぱって歩いている、まずそんなところだろう」

「どうしてあなたはそんな変なことをいうんで

しょうねえ」
「しかもだな、お馬は客が逃げられないようにちゃんとたもとをつかんで歩いている」
「怒りますよ、あたし」
ぷっとふくれたお香は、一度放しかけた八百太郎のたもとをまたしてもぎゅっと握りしめてしまった。
やがて日本橋へかかるところで、向こうから例の頼光組が、赤倉主水を先頭にしてずらり五人、大道狭しと濶歩してくるのが目についたからである。
いつもにぎやかな人通りが、相手悪しと見て、たちまち二つに割れて道をよけて通りすぎていく。八百太郎とは、
「花のお江戸で勝負をつけよう」
一昨日そういって別れてきたばかりの因縁つきの間柄なのだ。
——どうするだろう、この人。
お香は八百太郎のたもとをしっかりとつかみながら、じっとりとわきの下へ冷や汗を感じてきた。
が、八百太郎は一向平気で、すたすたと日本橋へかかっていく。
——おや。
赤倉主水は知らんふりをして、こっちを見ようともしない。まったく敵ながらあっぱれな空っとぼけ方だ。
先方がおとなしく通りすぎるのに、無論こっちからわざわざ突っかかっていくような八百太郎ではない。
双方事もなくすれ違って、こっちは日本橋をわたりきる。
「ねえ、どうしたのかしら、あの連中」
「そうだなあ。鳥目にでもなったかな」
「鳥目は夜でしょう」
「じゃ、みみずく目かな」
「ばかばっかし——」
お香はほっとしながら、思い出したようにう

しろを振りかえって、
「ねえ、根来さん、この人の体から後光がさしていませんか」
と、聞いてみる。
「なるほど、だんなはゆうべ帝王の星を盗んでいるからなあ」
にっとわらってみせる根来の顔にも、内心安堵の色をかくしきれないものがあった。
——すばらしいあたしのだんなさま。
お香はじいんと目頭が熱くなってくるのをどうすることもできなかった。

江戸の狭き門

江戸っ子はどこで文字を覚えたか

だれしもが驚くのは、江戸時代の人々の手紙や書類――しかも、世に知られた学者や書家が書き残したというならともかく、まったく無名の庶民の書いたそれらが、えらく流麗達筆にしたためてあることであろう。

現代人には、よしんば大学で国文学を専攻したと称する人たちでも、おいそれとは簡単に判読できるものではない。ほとんど、未知の外国語ほどに難解なのである。一体、このような達筆の文字を書く江戸時代の人々は、小学校・中学校の制度もなかったはずなのに、どこでどういうふうに読み書きを習得したのであろうか。不思議といえばこれほど不思議なことはない。

まず、最初は手習いのお師匠さんに弟子入りした。つまり、これが普通いうところの「寺子屋」であるが、実は寺子屋といったのは京坂に限ってのことで、江戸では「手習いの師匠」とか「書道指南」といった。

弟子入りするのに格別規則があるわけでないが、大抵、七歳を迎えた春、それも慣例によって二月の初午の日、母親に伴われて師匠のもとを訪れた。父親が同伴することはない。母親が亡いとか、当日都合が悪いといった場合は、親戚か近隣の女に頼むのが習わしとされていた。

江戸での師匠は、浪人や御家人の内職にはじまり、大身の旗本の暇つぶし、儒者・浪人の本職などとり混ぜて、およそ千人ほどもいたといわれるが、ちゃんと門戸を張って弟子を募集したのは、そのうち三百人ほどであった。

「束脩」――すなわち礼金は、一朱もしくは二

朱で、よっぽど裕福な町家でもないと一分を持参することはなかった。しかし、門戸を張った師匠ならば、一軒で弟子が少なくて五十人から百人、多いところになると二、三百人もいたというから、職業として成り立ったものと思われる。「束脩」というのは、月謝ではないのだ。弟子入りの際に納めるもので、あとは盆暮れの二回ぐらい、弟子それぞれの分に応じて、金品を師匠に進呈するという極めてあやふやな慣例に頼っているのである。おそらくは中国風をまねたものなのであろうが、これを現代風に毎月きちんと納入させる月謝制にした濫觴は、福沢諭吉の慶応義塾であった。合理主義者の福沢が月謝制にしたら、江戸中の評判になったという。

お師匠さんは何を教えたか

師匠のもとに弟子入りした子供たちは、まず「いろは」、つぎに「一二三」の算用数字を教わり、つぎは『江戸方角』を覚えさせられる。

『江戸方角』というのは手習いの本だが、たとえば、「御城外、東者和田倉、八代洲河岸、龍之口、呉服橋、日本橋、堺町、杉森稲荷、鎧渡、霊岸島、新田島、永代八幡、三十三間堂、洲崎弁天、深川霊厳寺、南本所、小名木川、五百羅漢、辰巳之方日比谷御門、鍛冶橋、八丁堀、木挽町、正一位稲荷、鉄砲洲……」

といったように、江戸城を中心に東西南北に分けられた江戸地名を、文字を習いながら覚えるよう仕組まれてあるのであった。おのれの一生住む土地の名を、まず頭にたたき込まれるなど、なかなかどうして大した配慮ではないか。これで子供たちは奉公に出ても、さっそく役に立つことになるのである。

奉公に出ても役に立つといえば『江戸方角』を習い覚えたつぎには、一年十二カ月の文例を納めた『庭訓往来』だ。これで手紙の書き方を覚え、これが仕上がると、こんどは日本全国の国名を集めた『日本国づくし』や『東海道往来』

にとりかかることになる。これは、

「都路は五十路余りに三の宿、時得て咲くや江戸の花、波静かなる品川や、頓て越え来る川崎の、軒端並ぶる神奈川は、はや程ケ谷にほどもなく、暮れて戸塚に宿るらん。紫匂う藤沢の、野のせに続く平塚も、元の哀れに大磯の、蛙なくなる小田原は、箱根を越えて伊豆の海……」

といった具合いに、東海道五十三次の地理をしるした手習本であり、最後の仕上げに、『商売往来』にとりかかる。商売上に必要な員数・日記・証文・注文・請け取り・質入れ・算用帳・目録・仕切りなどのいっさいに関して書かれたこれは、子供たちの生きていく上に貴重な財産となったにちがいない。

このころには、すでに三、四年ほどがたっており、子供たちも十歳ぐらいになっているので、そろそろ奉公に巣立つ者も出てくるのである。

ともあれ、このような「手習いの師匠」あるいは「寺子屋」の普及によって、幕末期における日本人の読み書きの能力は、男子が四三パーセント、女子が一五パーセントに達していたそうな。もっとも、これだけでは教育水準が高いのか低いのか判断に苦しむが、これは同時代のヨーロッパにおいて、最高水準を自誇した大英帝国のそれをしのぐ高率なそうだ。江戸時代人たる者、大いに鼻を高くしてよいわけである。とはいっても、右のパーセンテージは日本人全体のもの。まったく文字が読み書きできず、大家のご隠居に万事おまかせの八つぁん、熊さん的江戸っ子がゴマンといたことも事実である。

なぜ向学心に燃えたか

初等教育機関ともいうべき「手習いの師匠」、あるいは「寺子屋」を卒業し、なおも勉学したい者は漢学・国学、幕末には洋学・医学などの専門塾に進学した。

江戸時代にあっては、士農工商の階級制度がカッキリと定まっている。親が武士なら子も武

士、親が百姓なら子もまた百姓というふうに、この世に生をうけるとから、まずは生涯が決定していたようなものだ。そのきびしい枠組みから抜け出すのは容易でなく、最高階級の武家に生まれた者であっても、決して安心というわけには参らない。長男なら家禄を継げるからよいが、次三男以下にでも生まれ合わせたら問題だ。養子の口でもあれば幸運の方で、下手をすると一生部屋住みとして、厄介者扱いをされ、嫁すらもらえずに世を終えるという惨憺たる憂き目にもあいかねない。

武士ですらそうで、これが百姓町人ともなれば、さらにひどいことになる。俗に「駕籠に乗る人かつぐ人、そのまた草鞋を作る人」というが、草鞋作り・飴売り・太鼓売りに風鈴売りといったはかない商売で生活の糧を得、人生を下積みのままに終わらなければならぬだろう。

しかし、脱出の道がないではない。学問に励み、名の通った学者にでもなれば、武家の子なら人材登用の網にすくい上げられ、幕府役人となりうる機会にも恵まれるだろうし、それは百姓町人の出身者でも同様で、塾を開いて弟子をとることにより、武家の子弟の師と仰がれることもできるし、運が強い者なら大名家のお抱え学者となって、万石取りの諸侯と対等につき合うことも夢ではなくなるのである。

たとえば『慶安太平記』における由比正雪など、その好例というべきかもしれない。一介の紺屋の小伜だったといわれる正雪が、楠流軍学などという怪しげな学問の大家となり得たことから、三千人の門弟を擁し、十万石の大名にひとしい門戸を張るまでに立身した。

この正雪、備前岡山三十一万五千石の大守、池田新太郎光政から俸禄五千石をもって藩儒となるよう求められ、これをあっさりとけっている。たいそうな見識というほかない。

この仲介に立った熊沢蕃山もまた、近江の在にいたころは、朝夕粥や雑炊をすすり、貧窮の

限りをなめつくした者だが、その彼も今では、池田家に儒者として仕えて俸祿三千石、知行地をもち、大勢の奉公人にかしずかれる身にまで立身している。

これらの先例があるのだ。現在の境遇からの脱出を願う連中が、競って学問に励んだのも無理はない。が、むろん、通り一遍の勉強では、とても立身出世などおぼつかない。寒夜に眠けをおぼえると水をかぶり、ふたたび読書をつづけたという新井白石、夏に蚊帳なく、冬に布団もないという貧窮の中で、蘭和辞書五十八巻の筆写本を二部完成、一部を売って金にしたという若き日の勝海舟の例など、近ごろの教育ママなら聞いただけで卒倒せんばかりのすさまじい勉学に耐え抜けた者のみの頭上に、幸運の女神が微笑したことであった。

白石も海舟も、ほとんど宿命的ともいうべき境遇から抜け出るためには、文字どおり、命がけで勉学せざるを得なかったのである。

江戸に大学はあったか

手習いのお師匠さんについて普通教育課程を終了した上、いよいよ高等教育たる専門塾に進学した連中が、いちだんと専攻課程に精励したこと、先にのべた勝海舟によっても、そのおよそが推察できようというものであろう。

これがたとえば医師希望というなら、内科ならば京都（のちには江戸）、外科ならば長崎ということになろうが、文科系ならまずは幕府創設になる昌平坂学問所――ひとくちに「昌平黌」と呼ばれる官立学校が、当時におけるわが国の最高学府とされた。

この昌平黌には、書生寮と寄宿寮の別があって、書生寮には全国諸藩から選抜された留学生が、寄宿寮には直参旗本の子弟が収容された。諸藩からの留学生は、国元の儒者から推薦されてきた連中だから、すでに学問も相当にでき上がっていたし、かなり年輩も上であった。これ

に反して、寄宿生の方は年少の者が多くいて、中には家来を二人も連れてきているというまことにもって貴族的学生もいるといったふうで、まったく両者の気風は対照的であった。

書生寮は、佐賀藩から抜擢されて幕府の御儒者となった古賀精里が、諸国から優秀な学生を集める目的で創設されたと伝えられるだけあって、諸藩の秀才が留学していた。むろん、官立の名に恥じぬ教授陣が顔をそろえており、直参旗本中の学者はじめ、江戸市中や諸藩から優秀な学者を選抜登用した。諸藩では人材をとどめておきたいから、古賀精里の場合など、藩を離れるときに槍で追いかけられたというエピソードすら残っている。それでもなお古賀は江戸に出たところをみると、やはり当時最高の学府の教授たることは、学者にとって余程に魅力的であったにちがいない。

昌平黌の定員は、寄宿寮・書生寮とも、それぞれ四十八名。すなわち計九十六名であった。日本唯一の官立学府の定員としては意外なほど少なく、まずは狭き門といってよかろう。しかも寄宿寮生の場合、ここを無事に卒業しさえすれば——といっても、厳密には甲・乙・丙に分けられた卒業成績のうち、甲と乙のみの話だが、甲は文句なく、乙も大半は幕府の役人に登用という特典に浴することができるのである。問題なのは丙であった。丙は卒業を証明する書付け一枚、ただそれだけが与えられ、なんらの特典にもありつけない。学生が必死に勉強するわけである。

この卒業試験で、丙をもらった者に、なんと榎本武揚がいる。後日、長崎海軍伝習所を経てオランダに留学、維新時には幕府艦隊副指令長官、箱館戦争の主謀者、海軍中将兼特命全権公使、海軍卿、子爵と変転栄光の人生を送った人物だ。学校を優秀な成績でストレートに卒業するなんて、しょせん大したことではなさそうである。

（永岡慶之助）

山手樹一郎長編時代小説全集 37

若殿ばんざい 他一編

発行——一九七九年八月二五日初版第一刷

著者——山手樹一郎©

装画——国貞（静嘉堂文庫提供）

装丁——玉井ヒロテル

発行者——和田欣之介

発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三—四—一六
〒一〇三 ☎東京二七一—〇〇五一 振替東京〇—一六一七

印刷製本——城北印刷製本センター

◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします

春陽堂